全国歴史教育研究協議会 60 周年記念誌編集に当たって

全歴研 60 周年記念誌編集委員長
金澤　利明
（東京都立杉並高等学校長）

全国歴史教育研究協議会は、1960（昭和 35）年８月に、東京上野の東京国立博物館で第１回大会を開催して以来、今夏で 60 回の記念大会を迎えます。これまで全歴研では、Ｂ５版の版型で「全歴研十五年のあゆみ」、「全歴研二十五年のあゆみ」、「全歴研三十五年のあゆみ」を刊行してきました。2009（平成 21）年の第 50 回記念大会では、版型を現行のＡ４版に改めて「全歴研５０年のあゆみ」を発行しました。そして本大会に合わせて「全歴研六十年のあゆみ」をまとめました。この記念誌では「５０年のあゆみ」の顰に倣って現在の都立高校の生徒の作品を表紙などに掲げました。

「十五年」、「二十五年」、「三十五年」の記念誌と、「５０年」の記念誌ではその体裁、内容についての連続性があまりありません。また、以前は研究大会の内容をまとめた全歴研紀要では巻末に「全歴研のあゆみ」として年表状のものが作成されていましたが、それもいつしか作成されなくなってしまいました。そこで全歴研の正史として、60 年分の総目録、総目次を作ること、統一した形式での年表の「全歴研のあゆみ」を 60 年分作成することをねらいとしてこの「六十年のあゆみ」を刊行することとしました。本記念誌は、以下の内容を中心に編集しました。

第１回から第 60 回までの大会の記録を以下の項目等でまとめてデータベースを作る

期日、会場（開催地及び会場）、大会実行委員長、大会主題、シンポジウムテーマ（コーディネーター及びパネリスト）、分科会主題、及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導・助言者、司会、記録者の氏名（所属）、記念講演者（講演主題）、史跡見学地（コース及び報告者（所属））、参加人数、海外研修報告（コース及び報告者（所属））

実際の作業としては、まず「編年体」として年表を 10 年程度の固まりで、担当を決めて作成しました。60 年分の年表ができたら、次に主題ごとに「紀伝体」として 60 年の流れを現在の視点からまとめていくこととしました。このことは、2019（平成 30）年３月に、高等学校の新たな学習指導要領が告示され、とりわけ旧社会科、地理歴史科・公民科にとって大きな科目変更がなされます。これまでの指導方法、指導内容を大きく変えていく必要性があります。本記念誌が、60 年の歴史教育の振り返りと、これからの歴史教育を担当する人のために資するものになることをねらいとしているからです。

しかし、すでに資料は散佚していたり、毎年発行される全歴研紀要においても記録の不備などがあり、できる限り様々な資料等から記録の復元を試みましたが、参加人数や史跡見学の場所などが不明であったりして、完全な「正史」、「定本」となることが出来なかったことをお詫びいたします。このことは、学校現場で歴史を担当し、史・資料の重要性を理解している者で構成される協議会であっても、わずか 60 年の記録もきちんと保管、継承出来ていなかったことについて反省し、次代にこの禍根を遺さないことを伝えていかねばならないと考えます。

結びに、この記念誌刊行に当たって、本誌に寄稿していただいた歴代会長、実行委員長の先生方、１年間編集作業を担当していただいた編集委員の先生方に深く感謝いたします。

戦後歴史教育と全歴研のあゆみ

全歴研前史　－戦後歴史教育のあゆみ－（『全歴研二十五年のあゆみ』より転載）

昭和 20 年～昭和 34 年

全国歴史教育研究協議会、略して全歴研が発足したのは 1960（昭和 35）年であった。すでにその数年前から“もはや戦後は終った”という声があがり、この年は日米安全保障条約の改定をめぐって国内が大きく渦巻いていた。あきらかに、歴史は重大な転換期をむかえていた。以来四半世紀がすぎた。いま、全歴研が第 25 回大会を記念してささやかな記念誌をつくろうとする。この四半世紀のあゆみは、毎年の全国大会を中心にその足跡をたどることができる。しかし、この四半世紀のあゆみも、全歴研が発足するまでの戦後 15 年の歴史と切りはなして考えられないのは当然である。ここに、全歴研の前史として、戦後の歴史教育のあゆみをふりかえり、教育課程・教科書の内容の変化とその背景をさぐってみたい。

Ⅰ　新教育制度と社会科の成立　－新制高校発足まで－（1945～1948 年）

戦後画期的な学制改革が行なわれ、教育課程も一新し、歴史教育は、社会科教育の一環として成立した。以後の 15 年のあゆみをふりかえるにあたり、４つの時期区分を考えた。第１期を敗戦より新制高校発足まで（1945～48＜昭和 20～23＞）、第２期を高校歴史指導要領の成立まで（1948～51＜昭和 23～26＞）、第３期を指導要領改訂まで（1951～56＜昭和 26～31＞）、第４期を全歴研成立の前年まで（1956～59＜昭和 31～34＞）とし、まず１期から述べていくことにする。

１．敗戦の衝撃

1945（昭和 20）年８月 15 日の真昼、国民は、天皇のいわゆる「玉音放送」によって、「大東亜戦争」が敗北をもって終了したことを知った。国民の多くは、呆然自失の中で、解放感と、かつて経験したことのない外国の軍隊の占領への恐怖感とのミックスに困惑した。

戦局の悪化により、この年の４月から国民学校初等科以外の学校授業は停止されていたが、敗戦は、学制開始いらい早くも明治 20 年代なかばに確立され、その基本構造を不変のまま持続させてきた国民教化体制としての公教育制度への最後の一撃となった。

疎開先から、あるいは動員された軍需工場から、児童・生徒はなつかしい母校に戻ることになったが、大都会では、アメリカ空軍の無差別爆撃によって帰るべき校舎もなかった。国民教化の尖兵の役割をになわされてきた教師たちの価値体系の崩壊もまた深刻であった。ひたすら「皇国民の錬成」に努めてきた戦時下の教師たちの意識改革の作業は、かならずしも容易ではなかった。

戦時中「国体の本義」や「臣民の道」を編さんし、「皇国民の錬成と強化」に努めてきた文部省が、敗戦をいかに受けとめ、いかなる展望をもったかは、1945 年９月 15 日に出した「新日本建設ノ基本方針」にうかがうことができる。そこでは、「今後、教育ハ益々国体護持ニ努ムルト共ニ軍国的思想及施策ヲ払拭シ、平和国家ノ建設ヲ目途トシテ」行われるべきであると説く。国体護持の教育を大前提としていることからして、戦前いらいの教育体系を支える価値原理の根本的転換を、敗戦直後の時点ではなんら意図していなかったことはあきらかである。もちろん、当時省内にあった勝田守一氏の回想にあるように、文部省の上層官僚の守旧的な姿勢にたいして、下級職員の不満は強く、教育の体系や内容の転換を求める動きも生まれないではなかった。（勝田守一『現代教育学』第 12 巻、「戦後における社会科の出発」39～40 頁。岩波書店）したがって、占領軍教育担当の指導（guide）が、教育改革をめぐる省内下級職員のヘゲモニーを容易にしたのであった。

２．修身・歴史・地理授業の停止

占領軍は、９月 22 日付で「民間情報教育局」（ＣＩＥ）を設立した。その任務の一つに「軍国主義と超国家主義を除去し、民主的理想と原理を普及する使命を達成するに必要な、教育課程における教授の新しいコースの包含を確実にするための勧告の作成」という長い項目がある。ＣＩＥは、従来の日本の

教育の体質を根本的に規定しているのは教科書中心主義の授業であると洞察した。文部省のほうでも、９月 20 日暫定的に国民学校後期用国語教科書について、不適当な記述の削除を指示したが、ＣＩＥは、10 月 22 日、指令を発して、この教科書修正と削除の強化を要求してきた。こうして、全国津々浦々の児童・生徒は、先生に命じられた個所を、つぎつぎに墨で消していく作業をいっせいに行なうこととなったのである。

つづいて、12 月 31 日、ＣＩＥは、修身、日本歴史および地理の授業停止を指令した。そのなかで、「日本政府ガ軍国主義的及ビ極端ナ国家主義的観念ヲ或ル種ノ教科書ニ執ヨウニ織込ンデ生徒ニ課シ、カカル観念ヲ生徒ノ頭脳ニ植込マンガ為メニ教育ヲ利用セルニ鑑ミ」とのべて、指令部の許可があるまで授業の再開はできないこと、教科書・教師用参考書の回収などの５点を命じた。（占領軍による教科書検閲は、1952 年度使用教科書までつづく）「教科書で教える」というよりは「教科書を教える」という、近代日本の教育における教科書の特有の機能ゆえに、戦後の教育改革の最も主要な問題が教科書におかれたこと、そして、「家永教科書裁判」として今日もなお、教育問題が教科書、なかんずく歴史教科書をめぐる係争に集約されていることを、あらためて想起すべきであろう。

３．敗戦直後の学校・生徒・教師

敗戦と占領軍によるあいつぐ教育改革の指令の効力がもたらすものを、生徒や教師がどう感じたかは、やがて全歴研に参加した多くの教師の、教師として、あるいは生徒としての戦後体験として脳裏に今もなお焼きつけられていることであろう。生徒の教師・学校不信はもはや隠しえなかった。そこから、生徒・学生による学校改革・民主化運動が、同盟休校や学校管理事件となって現われた。45 年 10 月ひと月で、新聞に報道されたものは 50 校におよんだ。筆者がぞくした旧制高校も、フアシスト教授追放の同盟休校を実行した。45 年秋から翌年春にかけて、全国の中学・女学校から高等・専門学校・大学にいたるまで、同種の事件は頻発した。

教師のなかにも、敗戦までの教育を根本から反省し、自主カリキュラムづくりをめざすものも少なくなかった。ある教師は、「『だからこうするのだ』と、歩みを進める方向は分らぬ。とにかく、今まで教えられてきたことは嘘があると感じ、騙されていた自分に憤りを覚えて居ても立ってもいられぬ苛立たしい気持ちのまま、年末（45 年）を迎えようとしていた」と書く。（勝田守一編『戦後教員物語』（１）倉賀野直胤「自分たちの手でカリキュラムを作ろう」39～40 頁、三一書房）また、ある教師は「復員して来て、なんとかもう一度子どもにぶつかろうとしたら、タブロイド版の教科書になっているではありませんか。その上に墨であっちもこっちも消してある古い教科書です。こんな教科書には子どもを育てるものはないと感覚的に感じました。そういう変るものを鵜のみにすることはできない。これは生きた生の子どもの生活にとりくんでそれを変えていかなければならない。とにかく子どもが暮しそのものを問題にしなければならない、そう痛感したのです」と述べる。（馬場四郎・久保田浩編『日常生活課程』310 頁、誠文堂新光社）

生きた子どもの暮しの中から教育を考える－これは、すでに戦前にも、北方性教育運動・生活綴り方運動などの中で提起され、官憲の弾圧・投獄に封じられてきた理念であり、それのよみがえりであった。社会科教育を底辺において迎え、受けとめ、発展させていくものは、これらの教師たちであった。

４．歴史教育の再出発

戦前、歴史教育は修身・国語とともに天皇制強化のための中核的教科であった。とくに日露戦争後の 1907 年、小学校令で日本歴史は必須科目となり、尋常小学校５・６年で履習することになり、国定教科書『尋常小学日本歴史』も編さんされた。1925（大正 14）年に「日本歴史」は「国史」となった。昭和に入ってから、33 年、38 年、43 年と小学校の施行細則はしばしば改訂される。とくに太平洋戦争に入る 41 年４月から、小学校は国民学校となり、国史は修身・国語・地理とともに「国民科」に統合され、超国家主義はいよいよ強化され、そのまま敗戦を迎えた。

旧制中学校は、1886 年の中学校令にもとづき、歴史は１、２年各１時間、３年２時間、４・５年各１時間ずつ、日本と外国の歴史を教えることとなり、これは敗戦までつづく。ここでも、目標は「我国ノ

発達ヲ詳ニシ国体ノ特異ナル所以ヲ明ニスル」（1901 年中学校令施行細則）ことにあったが、1943（昭和 18）年には小学校と同じく「国民科」に吸収され、その指導要目では「国体ノ精華ト東亜及世界ノ推移トシテ国民精神ヲ涵養シ、皇国ノ歴史的使命ヲ自覚セシメ実践ニ培フモノトス」と、より目標を侵略戦争に即応するものとした。

敗戦後は、さきの「新日本建設ノ教育方針」のように、文部省はたくみな作文的転換を計るのだが、歴史教育については 11 月 17 日、省議によって「国史教育ノ方針」が定められた。７項のうち、その第２項では「独善偏狭、史観ヲ払拭シ、広大ナル視野ニ立チ、史実ヲ客観的ニ取扱ヒ事実ノ歪曲ト隠蔽トヲ避ケ、歴史ノ発展ヲ総合的ニ会得セシメ、ソノ間ニ自ラ国史ノ特色ヲ明ニス」と、戦前には一度も表現されることのなかった、歴史学としてはまったく常識にぞくすることが示されるようになった。これは一大進歩というべきであろうが、第５項では、「我ガ国社会ノ発展力、皇室ヲ中心トスル一大家族形成ノ過程タル史実ヲ明カニス」と、いぜん明治以来の天皇制家族国家思想を踏襲していることも見のがせない。

12 月の授業停止ののち、文部省担当官（中心は豊田武氏）により『暫定初等科国史上案（厳秘）』（謄写版刷り）が書かれた。石器時代から書き出されたものの、「第二、大和朝廷」では、客観的史実とそのまま認めがたい『記紀』の説話が長々と書かれており、司令部はこれをご破算にした。そして、文部省以外の学者を編集委員として、新教科書の作製が命じられた。その１人は家永三郎氏であり、46 年 10 月、尋常小学校用国定教科書として『くにのあゆみ』、中学校用に『日本の歴史』、師範学校用『日本歴史』があいついで完成、授業も再開されたのである。

５．社会科の成立

1941 年以後小学校、ついで中学校でも修身・歴史・地理は「国民科」という教科に統合された科目となっていた。これがただちに戦後の「社会科」につながったのではないが、構想の伏線的役割を果たしたことはいなめない。はじめ文部省は、修身科を公民科に変える構想をもち、戸田貞三・大河内一男・和辻哲郎ら各分野の学者を集めて公民教育刷新委員会を設置した。委員会は 12 月末に答申案を作成、修身と公民を統合する公民科の確立をうちだした。修身の授業停止により、その再開までに新科目が決定されなければならない。来日したアメリカ教育使節団の報告書は翌 46 年４月発表されたが、ここには社会科創設の勧告はない。しかしこのころ、教育研究者や文部省内の勝田守一氏らは、アメリカの社会科の性格と教材編成についての研究をはじめだし、ＣＩＥのなかにも、従来の修身・地理・歴史の３教科を社会科として再出発させようとする動きが高まってきた。そして、46 年 10 月ごろ省内には社会科委員会がうまれ、初等・中等の２グループに分かれて討議がすすみ、12 月、社会科をふくむカリキュラム計画が決定した。

このような動きと並行して、社会科の自主プランが生まれた。海後宗臣氏を代表とする東京の中央教育研究所は、梅根悟氏（川口市助役）らの参加する川口市教育懇談会と合同して戦災で壊滅した川口市の産業の復興という課題を、生活総合学習の中心にすえて社会科プランを作成、12 月同市で全国研究集会を開き、市内すべての小学校で公開授業を行なった。社会科発足以前に実施されたこの社会科の実践は、かずかずの批判をうけたとしても、地域と教育の結合にかけた熱情と全国的刺激の点で長く記憶されてよいであろう。

６．新学制と学習指導要領

1947（昭和 22）年４月、新学制が施行され、国民学校はふたたび小学校となり、新制中学校も発足した。これに先だち３月『学習指導要領　一般篇（試案）』が発表された。担当者の青木誠四郎氏は、この学習指導要領は、教育基本法の目的を基礎として考えられたものであり、「学習の指導をして行く場合の問題となる点を明らかにして、実際指導にあたっての参考たらんとしたもの」（傍点引用者）だと述べている。小学校用の「社会科篇Ⅰ」は５月、中学校用の「社会科篇Ⅱ」は６月末完成、社会科の実施は９月から始まった。文部省はいそいで国定教科書の編さんにかかり、紙のわるい、うすい小学校用社会教科書が１学年１、２点ずつポツリ、ポツリと生徒の手に渡っていった。

この最初の『指導要領』に示された「社会科の目標」は、「社会生活が常に発展するものであることを知り、過去の実践を背景として現代の特質を理解し、将来の方向を見わたす能力を養うこと」とおき、歴史はこの社会科の一分野として、社会科教育の一貫として進められることになったのである。また、同年９月、義務教育でも教科書は検定制に切換えられた。

Ⅱ　新制高校発足のころ（1948～1950 年）

１．歴史は、東洋史・西洋史だけで、日本史はなかった

1948（昭和 23）年４月１日新制高校が発足した。前年の新制中学に続く、新学校制度の発足とはいえ、実情はほとんど凡てが旧制中学・高女の衣がえであったため、男女別学・複線型の学校から、男女共学・単線型（総合制・地域制）をたてまえとする学校に変貌する過程で、他の時期には見られぬさまざまな問題をかかえていた。

たとえば、過渡期のこととて、この年は旧制中学の５年、４年、３年、２年（前年新制中学ができたので、その年から旧制中学への新入生はなくなった）の生徒が、新制高校の３年、２年、１年、そして併設中学校の３年に進級し、その学校としては“卒業生なき年”になったわけである。また、このときの高校３年生は、旧制中学４年・５年で２回旧制高校を受験し、新制高校３年で新制大学を受験できたという。現役受験のチャンスが３回連続で与えられた空前絶後の生徒たちであった。（今の１浪、２浪の連中が聞けば、どんなにうらやましがることであろう。）

やがて、旧制女学校に男子高校生、旧中学校に女子高校生が数人ずつ入学してきて、上級生がうらやましがったけれども、体育科・家庭科の授業や、便所の不足などにかなりの混乱が起きてきたのである。そのような混乱はやや外面的なものであるが、教育内容が大幅にかわった教科目の混乱は、内面的・本質的なものと言うべきであった。加えて大幅な選択制がとり入れられ、必修の国語・一般社会・体育を含めて 85 単位以上学習すれば卒業できることになったので、かなりの空き時間のある生徒も出て、型にはまった旧制度とは違う、自由の空気の中で、新制高校が発足したのである。

新制高校課程のうち、社会科についてみると、文部省から前年出された学習指導要領（試案）によれば、１年で一般社会が必修、２・３年で東洋史・西洋史・人文地理・時事問題が選択学習されることになっていて、自国の歴史（日本史）が全く学ばれないという体制の中で、新制度が発足したのである。

このような新制高校揺籃期のてんやわんやに対処するため、中央講習会をはじめ各地で、現職教員のための再教育講習会が開かれた。例えば社会科についての中央講習会講義案には、Ⅰ．社会科の目的について、Ⅱ．単元の構成について、（一）単元とは何か　（二）われわれはどのように単元を構成すべきか。（三）各学習単元はどのように組織さるべきか。Ⅲ．社会科の目標（社会科教科書検定基準）Ⅳ．評価方法の参考（一）社会科の学力検査（二）問題範例などがもりこまれていた。そのうち歴史の問題例としては、「年代順の理解　次に挙げた事実（各々のアルファベットを以て代表する）をその起った年代順に下の空欄に配列しなさい（アルファベットを数字の下の空欄に書き入れればよい）、ａ．ポルトガルが始めて日本に来た。ｂ．国都が奈良に建てられた。ｃ．大化の改新がなされた。ｄ．ペルリが日本に来た。ｅ．鎌倉幕府が出来た」（原文のまま）という問題があげられていた。当時を知る者にとっても、知らぬ者にとっても、今昔の感慨を免れ難いであろう。しかし当時は、かわききった砂地に水がしみこむように、この講習は日本の教育界に滲透していったのである。

２．高校における世界史と日本史の誕生

新制高校の西洋史・東洋史が発足する以前から、Ｃ・Ｉ・Ｅ（連合国軍民間情報教育局）の中に、「日本では西洋史と東洋史に分けているが、アメリカのように World history としてまとめる必要がないか。」という声があったが、そういう状況をふまえた文部省は、48 年 10 月西洋史と東洋史を合わせて「世界史」とすることを発表した。

また 1948 年度を通じて、新制高校で日本史教育を実施するための運動が、日本史学会や日本史教育界の多数の人々によって行われた結果、1949 年４月から新制高校社会科の一科目として、日本史と世界史が新発足することになった。しかし、新たに発足した日本史・世界史には学習指導要領も、教科書も

なく、戦後の社会科の諸科目のどれと比べてもひけをとらない、典型的な早生児であった。わずかに「高等学校社会科日本史・世界史の学習指導について」という文部省通牒が出されただけである。その本文には、日本史及び世界史授業の留意事項として、

「一、それぞれの学習指導要領は目下作成中であり完成は昭和二十四年度末の予定であるが、概要はそれ以前に発表する予定である。現行の学習指導要領東洋史篇・西洋史篇はそれまで一応参考として使用してもさしつかえない。

一、指導にあたっては左記に掲げる社会科歴史学習の目標達成に留意すること。例えば

（イ）社会科の一般目標に合致すること。

（ロ）現代文化の歴史的背景を理解することにより現代社会の諸問題の意義を認識すること。

（ハ）歴史の発展の必然性を理解させること。

（ニ）現代社会の生活文化を総合的・発展的に理解すること。

（ホ）歴史が進歩への発展であることを理解することにより社会発展に対する自己の責任と情熱とをいだかしむること。

（ヘ）歴史の時代概念を理解させること。

（ト）各時代・各社会に共通する人間性の把握につとめること。

（チ）事実を合理的・批判的に取り扱う態度と技能を育てること。

（リ）史実の理解を通じ、現代の社会並びに経済・政治の問題解決に必要な能力を発達させること。全体を通じ戦争・王朝・政治・事件の年代史であってはならない。

一、学習形態は一般社会科に準拠すること。従って生徒の自主的学習活動を刺戟するよう単元学習たることが望ましく、概説の学習におちいらぬように留意されたい。

一、教科書として現在刊行されているのは西洋の歴史（上）のみであるから、他は教授者によって適当に考慮されたい。　以上」

とあった。これを見てもわかる通り、世界史で言うならば学習指導要領は「東洋史篇」「西洋史篇」しかなく、教科書は「西洋の歴史上」しかないのだから、現場では結局世界史というより西洋史プラス東洋史の授業の行われた例が多かったのである。例えばある高校では、教科書「西洋の歴史上」を２年生に３単位で学ばせ、翌年世界史の教科書ができた時３年生に２単位東洋史を学ばせ、合計５単位にしてお茶をにごそうとしう計画がたてられていた。

ただし、混乱は高校の現場だけではなかった。文部省の講習会で、主催側が「例えば封建制を扱う場合、日本の封建制とヨーロッパの封建制を比較するのだ。」というので、参加したある高校の先生が「中国の封建制というのは何時代なのか」と質問したら、その係官が黙ってしまったそうだし、従来東洋史と西洋史が全くと言って良いほど別々に進んできた学界も、世界史に対する責任ある発言はできなかったのである。そういう中で、西洋史学者・東洋史学者・高校の世界史教師に加えて、日本史学者・地理学者・哲学者が集まって、「世界史の可能性」という本が発行された。「世界史」が実証史学の成果の上にではなく、教育の現場の中から生まれ、その出生あたって、“世界史の可能性”が多くの研究者によって論じられたことは、まさに当時の西洋史プラス東洋史にほかならない世界史の姿を象徴するのみならず、その後の世界史教育者の中に、東洋史と西洋史のつぎはぎをくり返す者だけではなく、真剣に世界史の可能性を追い求める人たちが出現するよすがにもなったのである。

また日本史について見れば、教科書も学習指導要領もないままに、かつて皇国史観の信奉者であった教師たちが新しい日本史像を模索しつつ、どのような歴史教育を始めたかは興味深いものがあるが、ソシアルスタディの線にもとづいて独創的な授業を試みる方もおられたようで、中には一寸一般には通用し難い独走（ママ）的な教育をなさった方もいたそうである。

３．国定教科書・検定教科書併用の時代

文部省は、すでに 1947（昭和 22）年９月義務教育学校での検定移行を発表し、12 月には検定制度について審議するための諮問機関たる教科用図書委員会を発足させた。この委員会が翌年１月から２月に

かけて行なった検定基準・検定手続・検定処理機関などに関する審議に基いて、文部省は48年２月３日「教科用図書検定要領」を発表した。それによると、教科書検定は（１）内容面（学習指導要領に準拠しているか、その構成は？）（２）体裁面（印刷、ページ数、用紙、定価など）の両面から行なわれることになっていた。戦前にも中学校における検定制度はあったが、この時から小学校を含む戦後の検定制度が始まるのである。その後文部省は４月に「教科書検定に関する解説」を公表している。

この結果、５月には教科用図書検定調査会が生まれたが、その委員長及び副委員長には日教組の役員が選ばれた。社会党が当時の芦田内閣の与党であったとはいえ、すでに世界的な冷たい戦争のただ中で、文部省と日教組が蜜月の時代をもっていたことは、現在のわれわれにとっては、遠い昔の夢を見ているような感じである。

６月から検定受付が始まり、７月には教科書発行臨時措置法が成立し、戦後検定制度が発足することになった。当時の検定制度では、提出された教科書原稿に全文の英訳がつけられ、調査員が合格点を与えたものについて、Ｃ・Ｉ・Ｅ（民間情報教育局）が検閲し、これをパスした図書を検定委員会が許可するという手続きをとっていたのである。1949年度用は、594冊が申請され、教科書調査員の検定に合格したもの423冊、Ｃ・Ｉ・Ｅの検閲をパスしたもの180冊であった。（なおＣ・Ｉ・Ｅの検閲は、1951年のサンフランシスコ講和条約まで続いた。）

こうして検定･検閲を通過した教科書は､見本本が作られ､1948年８月に第１回の展示会が開かれた。しかし敗戦後の物資欠乏・技術水準低下の時代に、検定をパスしてから短日月の間に教科書原稿からあわてて見本本にするので、ミスプリなども目立ち、検定教科書がそろわないために並行して使われていた国定本の方が、いかにも教科書らしく整然とした感じであった。またいかにも物不足の時代らしく、教科書がかわると兄弟で使えないという理由などもあげて、検定制度を批判する声もあった。

しかしながら、まだ検定教科書が少なくて採択の幅が狭かったとはいえ、それまで金科玉条として拳々服膺すべきものとされていた教科書の権威が、試案としての学習指導要領と、検定教科書とによってうち破られ、教科書を教えるのではなく、教科書で教える、あるいは教科書でも教えるという考え方が出てきたことは、戦後教育史のきわめて大きい成果であったということができるだろう。

ただし、検定制度第１年目には、Ｇ・Ｈ・Ｑ（連合国軍総司令部）や文部省の思惑があってか、日本史の教科書は検定段階に入る前に受付で門前払いをされてしまった。また、世界史を含めた社会科の他の教科書は、学習内容がまだ十分に研究されていないので、「いずれも不適当」として、小学校から高校まで１冊も検定をパスせず、49年度用教科書は国定教科書（例えば「民主主義」など）だけが使用され、社会科の検定教科書は50年度から採択が始まったのである。

なお、文部省から発表された「社会科教科書検定基準」（49年４月）の「第二節　中学校高等学校社会科の検定基準＝必要条件　(2) 国史の教科書の要件」には「(ハ) 原始時代の社会と文化を含めた日本民族の成立、原始時代の生活と古代国家の成立、封建社会の成立と発展、封建時代の生活、諸外国との交渉、近代社会の発展、現代日本の社会の発展と諸問題などについて、国民の政治的・社会的・経済的・文化的生活の歴史的発展を、世界史的立場において明らかにしなければならない。」とあるが、これが日本史教育の時代区分として、「原始・古代・封建・近代・現代」が公表された最初のことであった。（1948年の中学用教科書「日本の歴史」改訂のときも、原始・古代・封建・近代が採用された。）

Ⅲ　戦後教育改革の修訂（1951～1955年）

1951（昭和26）年、さきの学習指導要領（昭和22年度）が改訂された。本節では、この改訂指導要領を中心として述べ、1951年から1955（昭和30）年までの時期（小・中学校社会科学習指導要領改訂実施、高等学校学習指導要領改訂の前まで）を対象として記す。

１．内外情勢の推移

戦後、東西両陣営の対立はアジアにおいても深まり、とくに1950（昭和25）年６月の朝鮮動乱勃発を契機として激化した。これに伴なってアメリカの対日政策も変化し、同国は、日本が自由陣営の一員として議会制民主主義に立ち、経済的自立を達成し、自衛力を保有し、反共の防壁となることを期待し

て早期対日講和（多数講和）の実現をはかり、1951 年９月にはサンフランシスコ講和会議を開催して対日平和条約ならびに日米安全保障条約を成立させた。講和条約は翌 1952（昭和 27）年４月に発効し、ここに占領時代は終了した。

２．教育界の動向

上述のような内外情勢の変遷は教育界にも反映し、それは 1950 年８月来日した第２次アメリカ教育使節団の報告書（９月発表）に次のように述べられているところにもうかがわれる。

「成人教育計画は、あらゆる部門において、民主的市民の育成に絶えず重点をおくべきである。……極東において共産主義に対抗する最大の武器の一つは、日本の啓発された選挙民である。現代の改革が次の世代のために真実なものであるかどうかを決定するものは国民であり、また結局かれらの子どもたちがいかなる教育を受けるべきかを決定するのも国民である。」（五、社会教育）

また、同年 11 月に天野貞祐文相は全国教育長会議で修身科復活・国民実践要領の必要を表明した。翌 1951（昭和 26）年には、教育課程審議会の「道徳教育に関する答申」を受けて、文部省は「道徳教育振興の方策」を発表し（２月）、ついで４月「道徳教育手引書要綱」（小学校）、翌５月「道徳教育の手引」（中学校）を発表した。そして７月に改訂学習指導要領一般篇が発表された。

３．昭和 26 年改訂学習指導要領

さきの昭和 22 年度版学習指導要領では、児童・生徒の現実生活の経験をもとに、その自発的な活動による問題解決学習が強調され、その学習過程での所要の知識・理解を得させ、能力・態度を養わせようとする立場が見られた。しかし、その経験主義に対しては、児童・生徒がその生活経験のなかでの問題解決学習を通じてよく所要の知識理解を得ていないのではないかとする批判がおこり（いわゆる学力低下の問題）、また道徳教育についての要望も現われてきていた。

さて、26 年版指導要領は、教師が学校において指導計画を立て教育課程を展開する場合に参考とすべき重要事項について、教師に示唆を与えるものとして編修され、教師はこれを手引きとし、地域社会・児童生徒の生活・学校設備の状態に照して適切な教育を進める創意・工夫がたいせつであると述べ〔学習指導要領一般篇（試案）昭和 26 年（1951）改訂版〕、ひきつづき昭和 22 年度版指導要領の問題解決学習の基本を保持しつつ、いちめん社会科の歴史学習においては、歴史の系統的・全体構造的・発展的な知識・認識の形成という課題にも応え得るよう配慮するところがうかがわれた。

歴史の科目について、同要領社会科編Ⅲの「まえがき（高等学校社会科における歴史教育）」の記述の一部を紹介すると、

「社会科における歴史教育は、現代社会の理解のために、常に現実の社会生活に立脚しながら、過去の社会にさかのぼり、そこに展開された人間関係・社会生活・人間性を知り、これを基礎として、正しい民主的生活のあり方を理解し、さらに、民主的社会の進展に寄与する有能な社会人を育成しようとするものである。」とし、社会科歴史の学習は、歴史的思考力養成の方向において工夫すべきであり、その目的達成のためには、「生徒自身が、自分を含めた社会の中に存在する問題を、みずからの力によって、理解し、解決する能力を育成するための学習でなければならず、そのためには、生徒の自主的活動を、じゅうぶんに取り入れるべきである」

と述べている。そして「歴史学習は、単に歴史学そのものではなく、どこまでも、教科としての社会科歴史の学習であり、したがって、生徒の経験領域をもとにして、現実に立脚し、世界的視野をもって、自主的に学習させ、その結果として、現代社会の歴史的位置を発見させ、もって将来の社会建設に働きうる知識と能力と態度を兼ねた、有為の民主的市民の形成を目的とした歴史教育でなければならない」と要約している。

そして、同要領では、歴史の科目について、－それらが社会科のなかに含まれる科目として社会科の一般目標の達成をはかることはもちろんである－とするとともに中学校日本史、高等学校日本史・世界史の≪特殊目標≫をそれぞれ次のように示している。

≪中学校日本史の特殊目標≫

１．日本の社会は概括的にみて、原始社会・古代社会・封建社会を経て近代社会へと発展し、それぞ

れの社会は本質的に相違することを理解すること。
2．それぞれの社会における人々の生活、生活上の問題解決を理解することを通じて、今日のわれわれの問題解決に資すること。
3．それぞれの社会における政治・経済・文化生活は、たがいに密接な関係をもっていることを理解し、これを総合して考える能力を育てること。
4．日本の社会の発展を常に世界史の背景のもとに理解するとともに、日本の特殊性を考え、現在の社会問題を世界史的にはあくする能力を養うこと。
5．生徒の身近かな生活環境の中に存する歴史の姿を通じて、日本社会発展の姿を理解すること。
（6・7・8・略）

〔 中学校 高等学校　学習指導要領　社会科編Ⅰ〕

≪高等学校日本史の特殊目標≫
1．日本歴史の発展を科学的・合理的に理解するとともにその時代観念を明確にする能力を養うこと。
2．現代社会の諸課題の歴史的理解を深め、その問題解決に必要な能力を発達させること。
3．歴史発展における普遍性と同時に地域による特殊性を認識すること。
4．現代社会の生活文化を総合的・発展的に理解すること。
5．歴史が人間の努力によって進歩発展することを理解することにより、社会進展に対する自己の責任感と情熱とを養うこと。
6．日本の各時代・各社会に共通する人間性の把握に努めること。
7．日本歴史における史実を合理的・批判的に取り扱う態度と技能とを育てること。
8．日本の社会の発展を常に世界史的に把握し、現代日本の世界史的地位を認識する能力を養うこと。
（9・10・11・略）

〔 同　上　　社会科編　Ⅲ（a）〕

≪高等学校世界史の特殊目標≫
1．世界史的な広い視野に立って、国際協力を推し進める精神を育て、世界平和への努力を惜しまない人類愛を養うこと。
2．世界史の発展と動向とを、くりかえし理解することによって、歴史的思考力を訓練し、現代社会の諸問題を理性的に批判し、正確に判断する能力を養うこと。
3．世界史における時代概念を適確に理解することによって、現代社会の歴史的地位を把握し、正しい社会観と、健康な常識とを育成すること。
（4・5・6・略）

〔 同　上　　社会科編　Ⅲ（b）〕

4．「社会科改善」の動き

上記の指導要領改訂に前後して、社会科に対する議論がしきりとなった。歴史教育については、歴史的発展の総合的・体系的な学習を通して科学的な歴史把握・歴史的思考力を養うべきであるという主張が起こり、問題解決学習か系統学習かの論争をひき起こした。また、さまざまな立場からの地歴独立論も現われたが、これに対しては、社会科の解体につながるとする反批判も述べられた。

そうした議論の間に、1952（昭和27）年６月「中央教育審議会令」が公布され（文部大臣の諮問機関として、中教審が設置されることになる）、さらに、教育課程審議会に対して「社会科の改善、特に道徳教育、地理・歴史教育について」の諮問が出された（12月）。

いっぽう、同年秋の衆議院総選挙（占領終了後、初の総選挙）に際し、自由党（政府与党）の政策のうちに「国民教育の充実」が掲げられていた。1953（昭和28）年６月「山口日記事件」が起こり、翌７月文部省は「教育の中立性維持」を通達した。８月には学校教育法改正により小・中・高校教科書の検定権が文部大臣の権限となった。同月、教育課程審議会から社会科の改善に関する答申を得て、文部省は「社会科の改善に関する方策」を発表した。

このような社会科改訂の動きに対し、有志の学者・民間団体等は社会科問題協議会を結成した。協議

会は、文部省が「自主的・民主的・批判的な精神を育てる社会科を、反動的な地理・歴史・修身にすりかえようとしている」として反対声明を出し、日教組も社会科改定(ママ)反対闘争を展開した。他方、10 月には池田・ロバートソン会談に関する報道において「日本政府は教育および広報によって日本に愛国心と自衛のための自発的精神が成長するような空気を助長することに第一の責任をもつ」ことを認めた旨伝えられた（朝日新聞 10 月 25 日付）

1954（昭和 29）年１月「教育の中立性維持」に関して中教審の答申が出され、２月には義務教育諸学校における教育の政治的中立確保に関する法案と教育公務員特例法改正案の、いわゆる教育二法案が国会に提出された。これに対して教職員組合・教育関係団体等々が反対を表明し、教育二法案反対運動が推し進められた。３月、文部省は「偏向教育」事例を衆議院文部委員会に提出し、いっぽう日教組は反証資料を配布するなど、教育二法をめぐる激しい対立が見られたが、５月に同二法案は成立し公布された（６月初め)。この間、文部省は改訂社会科学習指導要領の大綱―小学校高学年に地歴学習を導入、中学校に道徳倫理の単元を設置など―を発表し（４月末)、翌 1955（昭和 30）年２月には小・中学校社会科の改訂を発表した。(これらの社会科改訂推進に対して、社会科問題協議会はくり返し反対声明を行なった。）そして、同年 12 月には新「高等学校学習指導要領一般編」が発表された。これら小・中・高校の指導要領の性格・内容については、次節で述べる。

５．教科書問題

この間、日本民主党（鳩山内閣与党）政務調査会は、教科書の「民編国管」の要を検討し（３月)、ついで８月には同党から「うれうべき教科書の問題」第１集が刊行された(同年中に第２・第３集刊行)。これに対し、日教組代表は民主党に質問書を提出し、教科書編著者らが反論を発表し、学術会議においてもこれに批判を示し、また史学会・歴研・大塚史学会等の歴史研究団体も批判声明を出すなど、教科書をめぐる議論が喧しくなり、歴史教育もさらに教科書検定問題との関わりにおいて険しい局面を迎えることになる。

Ⅳ　教育政策の転換－第２次教育課程の改訂まで－（1956～1959 年）

この時期（1956～59＜昭和 31～34＞）は「教育三法案」の国会上程とそれをめぐる反対運動、勤務評定問題をめぐる文部省対日教組の対立、教育課程の改訂など教育政策の転換をめぐり教育の現場がともすれば政治的な嵐にみまわれがちであった。このため着実な教育実践がやや稀薄であったといえるかもしれない。

１．教育三法

1955（昭和 30）年の社会党の統一と保守合同とにより二大政党を中心に第 24 国会が同年末に開催された。いわゆる教育三法は 1956（昭和 31）年に入りつぎつぎと国会に上程された。「臨時教育制度審議会設置法案」・「地方教育行政の組織及び運営に関する法案」・「教科書法案」がそれで、これらは教育の理念・制度・内容の全般にわたって、戦後の民主主義的教育政策の転換をなすものとして相互に関連していた。

(1)　臨時教育制度審議会設置法案

内閣に二年間有効の審議会を設け、①教育基本法の改正、②道徳の基準の検討、③教育制度の再検討、④教育にたいする国の責任と監督の検討を諮問することを目的とするものであったが 1956（昭和 31）年３月 13 日衆院を通過したけれども、結局審議未了廃案となった。

(2)　地方教育行政の組織及び運営に関する法案

本法の骨子は、①都道府県、市町村のすべてに教育委員会を置く。②委員は直接公選を改め、地方公共団体の長が議会の同意を得て任命する。③都道府県教育長は文部大臣の、市町村教育長は都道府県教育委員会の承認を得て、それぞれの教育委員会が任命する。④教育財産の取得、処分等は地方公共団体の長の権限とする。⑤県費負担教職員の任免権は、市町村教育委員会の内申を待って都道府県教育委員会が行使する。⑥文部大臣は都道府県、市町村に対し、都道府県教育委員会は市町村に対し、教育事務の適正な処理を図るため必要な指導、助言を行ない、また文部大臣は地方公

共団体の長または教育委員会の教育事務の処理が違法または著しく不適切な場合には必要な是正措置を要求できる、とするものであった。

法案は３月８日に衆議院に上程され、４月 20 日可決、参議院では選挙が迫っているため会期延長が困難で、政府が「本法を他の重要法案に優先して先議させ成立を図る」方針をとり、自民党が「成立には強硬手段も辞さない」とし、社会党は「あくまで阻止する」としたため６月１日夜の乱闘、２日未明の警官導入のうちに夕刻可決成立された。

この間、この法案が戦後教育行政民主化の三原則とされた「民衆による教育統制」、「教育の地方分権化」、「地方の自主性の確保」を否定し、教育の国家統制を復活するものであるとして広範な反対運動が展開された。全国都道府県教育委員会委員協議会、全国地方教育委員会連絡協議会の反対声明をはじめ、小・中校長会、日教組、教育団体など国民的大反対運動がみられ、国会請願署名は 725 万をこえ、国会史上の最高を記録した。この反対運動も力にたよる政府・自民党によって無視され、任命制法案は 10 月１日施行された。

さらにこの新法に基づいて「学校管理規則」が全国的に制定され、職員会議の諮問機関化、教頭の任命制、教材副読本の地教委への届出承認制などが定められた。

(3)　教科書法案

前記二法案とともに教育内容の国家による統制を強めようと企図した法案とされたもので、その内容は　①教科用図書検定審議会の拡充強化、常勤専任調査官の設置、②郡市単位などの統一採択、③教育委員会による採択、④発行者に欠格条件を設け、登録制度にするなどで、国定化への布石を試みたとされているものである。３月 13 日に上程され、５月 24 日衆議院で可決されたが、６月３日審議未了で廃案となった。

この法案は(2)とともに激しい反対運動が展開され、４月５日にはいわゆるＦ項パージ問題がクローズ・アップされた。1955（昭和 30）年から 56（昭和 31）年にかけて実施された昭和 32 年用教科書の検定でとくに社会科教科書の８種類が教科書調査員の評点が合格基準に達しているにもかかわらず審議会の一部の意見により「偏向」の名で不合格とされた。５名１組の教科書調査員は氏名は公表されず、Ａ～Ｅのサインを用い、不合格とされた教科書の「偏向性」はすべて５人以外のところでなされたので「Ｆ項パージ」といわれ、教科書内容の国家統制化の具体的問題として注目されたものであった。不合格教科書の編集者には日教組講師団の人のものが多いだけでなく、Ｆ項の意見が検定の本質を示しているものであった。

法案は廃案となったものの、結局文部省は教科書調査官制度の設置、教科書検定審議会委員の大巾増員などが同年秋にすすめ、翌年教科書の採択権は教育委員会にあるとし、検定、採択の面においても大きく政策変更の実を挙げた。

２．小・中学校教育課程の改正

1958（昭和 33）年３月 15 日教育課程審議会は教育課程の抜本的改訂を内容とする答申を行なった。この答申は「最近における文化・科学・産業などの急速な進展に即応して国民生活の向上を図り、かつ、独立国家として国際社会に新しい地歩を確保するためには、国民の教育水準を一段と高めなければならない」という立場に立ち、「道徳教育の徹底、基礎学力の充実および科学技術教育の向上」を基本方針としていた。この答申を基に文部省は教育課程の大改正を行ない、９月１日から学校教育法施行規則の一部改正（教科・道徳・特活・学校行事の４領域で教育課程を構成）を施行、10 月１日「小・中学校学習指導要領」を文部省公示として官報に掲載、「小学校の教育課程については、この節に定めるもののほか、教育課程の基準として文部大臣が別に公示する学習指導要領によるものとする」と明示し、法律と同様に拘束力をもつものとされた。学習指導要領の国家基準化がはかられたのであった。

この小・中学校の改正の重点は、①道徳教育の徹底、②基礎学力の充実、③科学技術教育の向上、④地理・歴史教育の改善・充実、⑤情操の陶冶、身体の健康・安全指導の充実、⑥中学校における生徒の進路、特性に応ずる教育、⑦小・中間の義務教育としての一貫性、⑧各教科の目標・内容の精選、基本的事項に重点をおく、⑨教育課程の最低基準の呈示などに置かれていた。小・中学校の教育課程の全面

的改正の特色は何といっても道徳時間の特設による道徳教育の徹底にあり、本答申に先行して昭和 32 年 11 月 9 日に結論を出し、昭和 33 年３月 15 日の本答申に基づき昭和 33 年度から小学校では「教科以外の活動」、中学校では「特別教育活動」の時間のうちに特設され、毎週１時間学級担任の指導のもとに実施されることになった。この間、勤評問題とも重なり日教組を中心とする教育課程改正反対の闘争が展開され、とくに道徳教育指導者講習をめぐって混乱がみられた。

３．高校教育課程の改正

小・中学校教育課程改正との一貫性をはかる必要からとして 1959（昭和 34）年７月 28 日教育課程審議会に諮問された。諮問理由要旨は、①能力・適正・進路の多様性と国家社会の要請の複雑性とに応ずるため、各課程ごとに特色を明確にすること、②道徳教育を充実徹底すること、③一般教養、基礎学力の向上をはかること、④科学技術教育を重視することなどにあった。教課審では類型の単純化、現代国語の新設、第一外国語の必修化、履修学年の指定などがあきらかにされ、小・中学校の道徳の時間の特設にみあって高校では社会科の一般社会・時事問題を解体して代わりに倫理・社会、政治・経済の科目を設ける方向がとられた。

答申は 1960（昭和 35）年３月 31 日に行われ、高等学校は実質複線型となった。それにより昭和 31 年改正の必修単位増加の方針がさらに進められ、A類型はゼネラルな内容を、B類型はやゝアカデミックな内容を扱うものとなった。Aは主に職業課程で、Bは主に全日制普通課程で用いられることとなった。A類型では男子 68 単位、女子 70 単位、社会・理科の全科目、芸術と外国語の一科目以上、女子の家庭科などが必修となり、B類型男子では 93 単位、すなわち国語・社会・数学・理科・外国語各 15 単位、体育 11、芸術４、ホーム・ルーム３の計 93 単位が別表で示され、単位制は有名無実となった、といえよう。

また、この改正により高校教育課程も小・中学校と同様学習指導要領の法的拘束力が制度化された。「学習指導要領は、教育課程の基準を示すものであって、単なる文部大臣の指導・助言ではなく、高等学校教育において守らなければならないものである。このように学習指導要領が基準性ないし法的拘束力をもっているということは、従前のそれが図書の形で刊行されており、今回は文部省告示の形で定められているというちがいにかかわらず、何ら変わるところはないのである。ただ、基準性の強弱や弾力性については、学習指導要領の表現そのものに即して判断されなけばならない。たとえば、学習指導要領のうちには、『～しなければならない。』『～ものとする。』、というような表現のほかに『～を原則とする。』とか『～が望ましい。』というような各種の表現があり、それぞれの場合に応じてその拘束性にも若干の差異のあることを示しているのである」（総則編）とあるのがそれであった。試案の段階と比較してみるとここでもまた教育政策が変換されていることがわかる。

４．歴史教育上の問題

この時期の歴史教育上の問題は別記のように 1958（昭和 33）年の小・中学校学習指導要領の改定および 1960（昭和 35）年の高校学習指導要領の改定をめぐって多くが論ぜられたのが特徴である。それは戦後の文教政策の変更を示すあいつぐ教育関連法案の国会上程があり、それをめぐる文部省対日教組の対立にも反映していたといえよう。とくにこの一連の学習指導要領の改定により官報に告示され法的拘束力をもつものとされ、その内容は最低の基準を示すものであって、教材の一部を除いたり、他の教材といれかえたりすることはできないとされた点が最大の問題点とされたのであった。また、この改定の内容をめぐり教育界からはさまざまな歴史教材批判がなされた。

その一つは「日清、日露の戦争や条約改正を経て、わが国の国際的地位は向上」（小学校）という点をめぐるものであった。この点は中学校のには「日清戦争、日露戦争、条約改正などの学習を通して、（中略）わが国の地位がどのように向上していったか」とあり、小・中ほぼ同様の内容が定められたことになる。「国際的地位の向上」すなわち近現代史の学習はいかにあるべきかが問題とされたのであった。とくに教科書内容の規制とからんで戦争肯定的歴史観に連なるとした批判が多く論じられたのであった。批判の側に立つ場合、「世界史的視野」に立って近代・現代史の学習を通じて生徒の歴史認識・歴史意識を平和と民主主義を育てる観点からどうするかを問題とし、実践上で法的拘束性をもつ要領内

容に対抗しようということが提起された。その内容は日本史を外国の歴史と比較させ、法則性を把握させること、つまり外国の歴史と関連させて日本史の背景を正しく把握させることを強調した点が注目された。外国の歴史という場合、アジアの中で日本をどうとらえるか、の観点を欠落させてはならないとするものであった、といえよう。世界史的観点に立った日本史の正しい教育が、現実に定められた教育課程の中でいかに展開されるべきかが学校教育を現場でたずさわる歴史教育者に問われたのであった。“世界史と日本史の統一的把握”を試みようとする実践が注目されたのであった。

また、「政治史や社会経済史に片寄ることなく、総合的な学習ができるように配慮することが必要である。(中略)文化の高度な内容や、複雑な社会構造などの学習に深入りしないように留意する」という点も多くの批判の対象となった。それはもちろん社会史・経済史を重視する立場からのものが中心であった。しかし、これを受けて改めて単純に社会発展の法則を把握させ、かつ社会を変革する人間をつくるための歴史教育を検討しなおそうという意見が出されていた点にも注目したい。この立場に立つ人々は決して民主的教育を批判するものではなく、むしろ着実な実践をふまえての反省として提起したものであった。それは時代と時代に生きた人々を感覚的に印象ずけ、時代と時代のちがいを比べてみる中で社会の発展をいきいきと認識させるために人物中心の物語歴史を考えて実践している、というものであった。歴史の発展の正しい跡づけを行い、その推進力としての民衆の動きを把握・認識させることが科学的な歴史認識の態度を育てることになる、という点で重要な試みであったといえよう。

1961（昭和 36）年から使用される教科書の検定が進められたのもこの時期の問題点といえる。それは改定要領に示された歴史観と法的拘束力がからんで訂正要求の文部省指示がいちじるしく多くなり、不合格本も出た。検定批判と検定内容をめぐる論争が多く試みられ、それらを通じて国民教育の復活をのぞむ反動文教政策の意図や道徳教育の一環として歴史教育を役立てようとする考えが露骨に現れる中でいかにして科学的な歴史教育がなされうるかという問題とそれへの取り組みの必要性がクローズアップされたのであった。

1960（昭和 35）年以降の歴史教育をめぐる動向－学習指導要領と全歴研との関連に注目して－

１．1960（昭和 35）年告示の学習指導要領と第１回全歴研大会

前項で述べられたように、1960（昭和 35）年告示の学習指導要領から文部省告示の形で示されたことにより、法的拘束力が制度化された。歴史教育を含め、系統的な学力の重視、道徳の時間の特設など、学校教育をめぐる議論喧しい中、全歴研第１回大会が開催された。初代事務局長の人見春雄は、全歴研組織の立ち上げに際し、「あたかも教育課程改訂に当り、歴史教育への風当たりがよくないといわれ、歴史教育の危機の時期で、そのための全歴研結成であり、一刻の猶予も許されない事情にあった。」と当時を回想している（『全歴研二十五年のあゆみ』）。第１回大会では４つの分科会が設置され、第４分科会では「新教育課程と歴史教育の諸問題」と題して、成田喜英全歴研初代会長の提案が行われた。歴史教育の岐路にあたる年に全歴研が出発したのであった。

２．第２回大会以降の全歴研

全歴研発足以降、第１回（1960 年）大会から第 10 回（1969 年）大会に至るこの時期は、新学習指導要領への対応及び小・中・高（あるいは中・高）の関連を問う報告が目立った。第２回（1961 年）大会では、中学校社会科において「指導要領・教科書が網羅的になりすぎている点」が、高校日本史では「標準３単位という時数は、（中略）きわめて不十分」、日本史の「目標」が従来と比べて「抽象的観念的に描かれているのは何故か」が、高校世界史では「世界史教育が世界史学の不成立のうちにもかかわらず、現実的要請から生みおとされた点に、世界史教育の難点や矛盾が今日にも引きつがれている」、近現代史の取扱いについて「時間数の不足と技術的な制約に対する悩み、ことに歴史観の相違からくる問題をどうするか」などの報告がなされた。このように、学習指導要領の問題点も積極的に指摘し、議論された点は興味深い。第３回（1962 年）大会では、「大会を有機的に関連づけ、さらに分科会で発展させたい」との趣旨から、「小・中・高における『明治維新』の発展的取扱い」と題する全体討議（シンポジウム）が開催されたが、小・中・高における歴史学習の一貫性や関連性、差異についての関心が高かっ

たことがわかる。

第４回（1963 年）大会は奈良県での開催であり、前年の東大寺中門・廻廊の修理工事完工、文教費による平城宮跡土地買収費の計上などを受け、全歴研として「文化財の保護に関する決議」がなされた。

第５回（1964 年）大会は日本史と世界史の関連について中学校、高等学校それぞれの分科会で報告されるとともに、記念講演に駐日アメリカ大使のライシャワーを招くなど、提案主題と記念講演とを関連づけていた意図を看取できる。

以降、小中学校における歴史教育の課題や日本史と世界史との関連（第６回）、小・中における学習内容の精選化（第７回）、中・高における歴史教育の一貫性（第８回）など、新学習指導要領の下で、校種間の連携、国際的な視点からの歴史学習など、現在でも散見される歴史教育の論点が検討された。

1968（昭和 43）年の小学校学習指導要領改訂、翌年の中学校学習指導要領改訂を受け、第９回（1968 年）、第 10 回（1969 年）大会では、新学習指導要領における小・中学校の歴史教育上の課題や実践が報告された。このように、発足した全歴研は、学習指導要領改訂の問題点を指摘しつつ、現代にも通ずる歴史教育の重要課題について、校種を超えて探究されたのである。

1970（昭和 45）年以降の歴史教育をめぐる動向－学習指導要領と全歴研との関連に注目して－

１．1970（昭和 45）年改訂の学習指導要領

高度経済成長のもと、「教育内容の現代化と高度化」の潮流を背景に、これまでの学習指導要領の中でも、最も学習量の多いものとなり、「詰め込み教育」などの問題が議論されるようになった。

この学習指導要領を反映した全歴研における主題やテーマとしては、第 15 回（1974 年）大会「限られた時間数の中で、日本史（世界史）学習はどのような視点で精選を行って進めたらよいか」、「精選を行う反面、日本史（世界史）に関してどのように内容を深めた指導を行ったらよいか」、第 16 回（1975 年）大会「学習内容の精選と深化をふまえ、日本史学習における生徒の興味・関心をおこさせるには、どのようにしたらよいか」「限られた時間の中で世界史の学習はどのように進めるか」、第 17 回（1976 年）大会「改訂教育課程において小中高の関連を考慮しながら、社会科における歴史分野をどう位置づけるか」、「日本史（世界史）の学習指導の深化のために、資料（史料・体験学習・視聴覚教材など）をどう扱うか」などがあり、「精選」がキーワードの一つとして議論されていたことが窺える。

２．1978（昭和 53）年改訂の学習指導要領

高等学校進学率の上昇に伴い、多様化した生徒に対応して、ゆとりある充実した学校生活が送れること、多様な教育課程の編成が行われること、などを骨子とした高等学校学習指導要領が 1978（昭和 53）年に告示された。この学習指導要領により、高等学校社会科では、それまで「倫理・社会(2)、政治経済(2) のほか、日本史(3)、世界史(3)、地理Ａ(3)、地理Ｂ(3)のうちから２科目」が必修だったのに対して、必修科目は「現代社会(4)」のみとなった。

この学習指導要領を反映した全歴研の主題やテーマとしては、第 20 回（1979 年）大会「新しい歴史教育を目指して」、「新教育課程と歴史教育」、第 21 回（1980 年）大会「新教育課程と歴史教育」、第 22 回（1981 年）大会「生徒の多様化に対応する日本史教育はどうあればいいか」、第 23 回大会（1982 年）「文化交流の取扱いをめぐる『現代社会』と歴史教育との関連」、第 25 回（1984 年）大会「新教育課程における歴史教育のあり方」が挙げられる。第 21 回、22 回大会のシンポジウムテーマに「大学入試」とある点は興味深い。「ゆとり」をめぐる学力問題、受験競争激化の話題などがその背景にあるものと考えられる。

なお、この時期に「文化財学習」「地域学習」「地域素材」「地域社会の歴史と文化」といった内容の主題や発表が多いことは、学習指導要領に新たに記された (7)地域社会の歴史と文化 の「内容の取扱い」における「地域の範囲は、学校所在地を中心とする日常の生活圏（中略）など、学習指導上の観点に立って適宜に設定すること。（中略）史跡その他の遺跡、遺物、風俗、伝承などの文化遺産を取り上げて、それらについての理解と尊重の態度を育てるようにすること。」の影響をうかがわせる。

（ 文責　武藤 正人 ）

1985（昭和 60）年以降の歴史教育をめぐる諸問題（『全歴研三十五年のあゆみ』より転載）

１．1988（昭和 63）年の学習指導要領の改訂について

臨時教育審議会（昭和 59～昭和 62）の答申と提言に基づき、教育課程審議会は教育課程の基準の改善と改訂を図り、このもとに学習指導要領の全面的改訂が行われることとなった。

こうしたなかで、高等学校においては各教科・科目の編成の見直しが進められ、ことに社会科の再編成を軸に社会科の改善ならびに地理歴史科の設置が決められた。

こうした文部省の方針に対し、戦後に発足した社会科の解体という事態をどうとらえるか、また歴史教育のあり方にもかかわり論議を呼んだ。

①　教育課程審議会における社会科改善の基本方針

教育課程審議会における答申において、小学校においては生活科という新教科の設置にともない、社会科は生活科との関連を考慮するとともに国際化や産業構造の変化などの社会の変化に対応しての改善を図ることが打ち出された。

中学校においても、ことに国際化に焦点が当てられ、日本の文化と伝統及び世界と日本とのかかわりについて理解を深め、世界のなかの日本人としての自覚と責任感とを育てるよう配慮することが求められた。

高等学校においても、小学校・中学校の流れを受けるなか、国際社会に生きる日本人としての必要な資質を養うことが強く打ち出された。

社会の大きな変化としての、国際化の進展と情報化社会のより一層の発達を踏まえての社会科教育のあり方が鮮明に打ち出されたといえる。

このこととかかわるなかで、学校の儀式的行事などにおいて国旗の掲揚や国歌の斉唱を求められ、指導要領の改訂にともない、教育現場において激しい論議が巻き起こるとともにその実施をめぐり教育現場での混乱が広がった。

さて、社会科改善の基本方針に基づき、具体的に改善の内容が示されることとなったが、ことに高等学校社会科は、地理歴史科と公民科に分割される方向となり、歴史・地理学習を重視し、日本及び世界の各時代や各地域の風土、生活様式や文化、人々の生き方や考え方などの学習が求められることとなった。

そして、科目構成においても、地理歴史の各科目をＡ・Ｂの二つの科目に分け、ことに世界史と日本史におけるＡ科目は、近代・現代に重点を置くことが打ち出された。

この背景には、日本の高度な経済発展をもとに国際社会における国際的地位の向上、それにアジア近隣諸国との関係の重視など、日本のかかえる政治的・経済的な要因があるとみなされる。

②　学習指導要領の改訂の方針と社会科

教育課程審議会の答申を受けて、学習指導要領の全面的改訂が行われることとなったが、ことに高等学校においては社会科の分割解体という事態を迎え、教育現場での動きはどうであったであろうか。

前回の学習指導要領の改訂において、社会科の中に新たに設けられた「現代社会」に対しては激しい論議がおこり、教育現場においてはかなりの混乱さえ生じた。

しかし、今回の改訂に当たっては社会科の解体という事態にたいして、それほど基本的なところでの論議はなされず、社会科を象徴するひとつの言葉としてよく言われるように「科目あって教科なし」の状況にあったのではないかとみなされる。

論議はむしろ各科目におけるＡ・Ｂ科目の設置と、その内容構成について向けられていったと言えるのではなかろうか。

学習指導要領改訂の方針は、地理歴史科を設け、教科をそれぞれＡ・Ｂの科目に分け、日本史と世界史におけるＡ科目においては近代ならびに現代に重点を置くことを決めるとともに、学習指導要領の総則において地理歴史科において世界史を必履修科目と位置づけ、日本史と地理から一科目を選択必修科目とすることであった。

このような点が、前回の改訂と大きく異なり、地理歴史科の目標は以下のように定められた。

「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う。」

この目標のもと、地理歴史科のＡ科目の標準単位は２単位、Ｂ科目は４単位と定められた。

２．社会科分割と世界史・日本史Ａ科目をめぐる諸問題

地理歴史科の設置により、高等学校においては社会科は地理歴史科と公民科とに分割され、戦後に成立した社会科はその果たした役割を閉じることとなった。

しかし、先にも触れたように教育現場においては、それほどの混乱も見られず今日にいたっているといえる。

現在の教育改革の進行のなかで論議されようとしている教科・科目の見直しと合科ならびに総合化の方向と、この社会科解体とはどのような整合性があるのかは今後の論議に待ちたいところである。

さて、世界史が必修科目となったことについては、国際化が進むなか大きな論議もおこることなく世に受け入れられたのではなかろうか。また、中学校と(ママ)の歴史学習との関連ならびに系統性からいって当然ともいえよう。

ただし、教育現場においては地理歴史科の各科目の配置については、Ａ・Ｂ科目の設置によりさまざまな問題が生じた。

必履修科目として世界史をＡにすべきかＢが望ましいか、また選択必修科目として日本史・地理のうちどちらがよいか、またＡ・Ｂをどう考えるかという問題である。

この問題は、生徒の実態ならびに教員配置、それに大学入試の動向とも絡む問題であり、それぞれの学校の教育課程の編成においてかなりの論議があったところではないかと考えられる。

また、Ａ・Ｂ科目の性格の違いにかかわり、その内容構成をどうするかの問題も大きいものがある。

世界史Ａは、世界の歴史の大きな流れを近現代史を中心に理解させる科目であるが、このＡを必履修科目とした際に、前近代史の取り扱いをどのように工夫したらよいのか、さらにどの学年に配置したらよいのかなどといった問題がある。

Ｂの学習のうえに、Ａを学習するといった履修形態が望ましくなるが、学校によれば生徒の実態などからＡのみの履修しかできないとなれば、世界史学習の目標の達成はかなり不十分なものになろう。

こうした問題は、日本史Ａにおいても言えることであるが、中学校との関連からすればより困難度はうすいと言える。

３．内容の取り扱いにかかわる諸課題

学習指導要領の改訂において、世界史・日本史の内容構成も内容の精選が図られるとともに、ことに内容の取り扱いにおいて大きな改善が加えられた。

歴史研究の動向とも絡み、世界史においてはアナール学派の影響が強く見られるとともに、文化圏学習と主題学習が重視され、日本史においても生活・文化の学習と世界史と同じく主題学習とが重視されているのが特色といえる。

こうした内容構成と内容の取り扱いは、歴史教育のねらいならびに歴史研究の動向とも絡み、さまざまな意見のあるところであるが、社会の変化に対応しての新しい歴史教育のあり方として一石を投じたものといえる。

しかし、問題なのは教科書のかかえる問題であろう、(ママ)それは教科書の内容構成と編集のあり方はあまり従来と大きく変わっていないことである。

膨大な情報が詰め込まれ、教科書のスリム化には程遠いものがある。その一方において新しい情報も盛り込められているのも事実であるが、概して保守的傾向にあるのはいなめない。

この背景には、大学入試の問題があると考えられ、教育現場も入試を考えるとどうしても保守的にならざるを得ない現実がある。

学習指導要領の改訂にともない、歴史教育のあり方についてあたらしい方針や提言や実践報告がなされる一方において、依然として時代を追っての系統的学習が万能という根強い対応があるのも事実である。

現在、時代や社会が大きく激動して行くなか、中央教育審議会において「社会の変化に対応する教育」をテーマに審議がおこなわれ、1996（平成８）年６月に審議のまとめが発表されたが、まもなく教育課程審議会も発足することと予想される。

２１世紀を生きる生徒に対し、歴史教育の必要性とその教育のあり方ならびに内容などについての論議が進むことと考えられるが、このことに対しどう対応して行くかは大きな課題である。

学校のスリム化や週五日制の完全実施といった教育をめぐる環境の変化、国際化の一層の進展・高度情報社会の進行、それに環境問題をはじめとするさまざまな現代的課題の解決、こうしたなかで歴史教育のあり方はどうあるべきか、マルチメディアの発達のなかで歴史の学習指導法のあり方、さらにはどのような学力観に基づいての教育を進めたらよいのか、こうした問題や課題に対し大いに論議し提言して行くことが急務となっている。

この 10 年間を顧みるなか、時代の変化はまさに経験のないほど激しいものがある、（ママ）こうした事態に対し、課題の解決能力を育成する歴史教育がまさに求められているのではなかろうか。

（ 文責　河上一雄 ）

1995（平成７）年以降の歴史教育をめぐる諸問題－学習指導要領の改訂を通して－

（『全歴研５０年のあゆみ』より転載。一部省略したり、字句の訂正を行ったりした。）

１．1989（平成元）年改訂の学習指導要領の実施について

1989（平成元）年改訂の学習指導要領は、高等学校においては 1994（平成６）年から年次進行で実施され、従来の社会科は、地歴科と公民科に再編成されることになった。

新たに設けられた地歴科は、世界史Ａ・Ｂ、日本史Ａ・Ｂ、地理Ａ・Ｂの６科目で、公民科は現代社会、政治・経済、倫理の３科目で構成された。地歴科に関して言えば、世界史ＡまたはＢが必履修科目となり、日本史Ａ・Ｂ、地理Ａ・Ｂから１科目が必履修科目となった。（中略）

各学校現場では、従来の世界史、日本史に相当するＢ科目を設置する、または近現代史を重視するＡ科目を設置する、あるいはＡ、Ｂ科目を並置するという形で教育課程を編成して歴史教育を推進し、多様な取り組みを展開してきた。それらの一端は全歴研の大会などで報告され、裨益すること大なるものがあった。さりながら一方で大学入試における科目指定などが歴史教育の在り方に対する足枷となっていることも否定できないことである。

２．1999（平成 11）年の学習指導要領の改訂とその特質

学習指導要領の改訂に際して、中教審答申は、完全学校週５日制の下、「ゆとり」の中で「生きる力」を育むことが基本的な方向であるとした。（1996（平成８）年７月）

そして中教審答申を受けて示された教育課程審議会答申では、教育課程の基準の改善の方向として、①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること、②自ら学び、自ら考える力を育成すること、③ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること、④各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること、の４つを示した。これに基づいて学習指導要領の改訂が進められ、高等学校の学習指導要領は 1999（平成 11）年に告示され、2003（平成 15）年から年次進行で実施された。地理歴史科については、目標や科目構成は変わらないものの、内容面で大幅に改訂された。

世界史Ａでは、前近代の内容を一層精選し、16 世紀以降の世界の一体化の過程を重視したことが改訂の特質であった。すなわち「(1) 諸地域世界と交流圏」は、近現代史学習の導入的な位置づけとし、諸地域世界の特質を構造的視野から把握させるとともに、交流圏については、８世紀から 15 世紀の間にユーラシアの内陸ないし海域世界に成立した主要な交流圏を例示し、その中から２つ程度を選択して、交流の具体的様相を把握させることとした。そして「(2) 世界の一体化」のための諸条件がユーラシア交流圏の成熟を背景に整ったという視点から取り扱うこととなった。

また、(3) 現代の世界と日本 では、オ 地域紛争と国際社会　カ 科学技術と現代文明　については、生徒の追究を促すような適切な主題を設定して学習を進めさせることとしている。

世界史Ｂでは、主題学習のための大項目として「(1) 世界史への扉」が新設された。そこでは、人々の時間意識や空間意識の変遷について考える項目、日常生活の身近なものから世界史を考える項目及び日本の歴史と世界の歴史とのつながりを考える項目から、二つ程度の主題を設定し世界史学習の導入として追究させることとしている。また、「(5) 地球世界の形成」の「エ 国際対立と国際協調」、「オ 科学技術の発達と現代文明」、「カ これからの世界と日本」も主題学習の項目として位置付けられ、生徒の主体的な追究を促すこととしている。

日本史Ａでは、「(1) 歴史と生活」を大項目として、中項目として設けた　ア 衣食住の変化　イ 交通・通信の変化　ウ 現代に残る風習と民間信仰　エ 産業技術の発達と生活　オ 地域社会の変化　の中から二つ又は三つを選択して、さらに具体的な主題を設定し、追究的な学習を行わせることにした点である。そのことで歴史的な見方や考え方の深化が期待できるのである。また選択した項目のうちの一つは、この科目の導入として扱うこととしている。さらに近世前半以前の部分を削除して、近現代史を中心とした学習という性格を一層明確にした点である。

日本史Ｂでは、内容構成の大きな変更として「(1) 歴史の考察」を設けたことである。この大項目は「ア 歴史と資料」、「イ 歴史の追究」、「ウ 地域社会の歴史と文化」から構成されている。特に「イ 歴史の追究」では、歴史的思考力を深めさせるため、（ア）日本人の生活と信仰　（イ）日本列島の地域的差異　（ウ）技術や情報の発達と教育の普及　（エ）世界の中の日本　（オ）法制の変化と社会　の中から二つ程度を選択して主題を設定し、適切な時間に実施することとされた。このいわゆる主題学習は従前も「適切な主題を設けて行う学習」として位置づけられていたが、今回の改訂では「時代ごとに区切らない主題を設定し追究する学習」とし、また従前は「内容の取扱い」で「実施するよう配慮するものとする」とされていたものを、今回の改訂では「内容」に位置づけられたことに大きな特質がある。また、「ウ 地域社会の歴史と文化」については、従前も設定されていたが、今回の改訂では、歴史的な見方や考え方を身につけさせることをより明確にする趣旨から中項目に位置付けられた。

以上のような改訂は、歴史に対する生徒の興味・関心を喚起し、主体的な追究を促す中で歴史的思考力を培い、公正な判断力を育成することにその主要なねらいがある。（以下略）

３．2009（平成 21）年の学習指導要領の改訂について

平成 25 年度から年次進行で実施される高等学校学習指導要領では、地理歴史科の科目構成は現行通りであるが、各科目の内容構成には改善点があり、主な点を略記する。

世界史Ａでは、大項目として「(1) 世界史へのいざない」を、中項目として、ア 自然環境と歴史　イ 日本列島の中の世界史　を設けていることは現行と比べ大きな改善点である。

世界史Ｂでは、最初に「(1) 世界史への扉」を設けているのは現行通りであるが、中項目に、ア 自然環境と人類のかかわり　イ 日本の歴史と世界の歴史のつながり　ウ 日常生活にみる世界の歴史　を設けるなど、中項目の例示に改善点が覗われる。

日本史Ａでは、最初に「(1) 私たちの時代と歴史」を設け、近現代の歴史的事象と現在との結びつきを考える活動を行うなど、近現代史を中心とした科目の性格を一層明確にしている。

日本史Ｂでは、現行の「歴史の考察」をやめ、内容の大項目の最初に「歴史と資料」や「歴史の解釈」「歴史の説明」を置いている点が大きな改善点である。

総じて、「歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」という目標は共通しており、そのための歴史教育を行うことが重要である。（文責　磯山　進）

2010（平成 22）年以降の歴史教育をめぐる動向－学習指導要領の改訂と全歴研との関わりに注目して－

１．学習指導要領改訂までの動き

2014（平成 26）年 11 月、文部科学大臣によって学習指導要領改訂についての諮問が中央教育審議会（以下、中教審）に対して行われた。その際に使用された「アクティブ・ラーニング」という言葉をめぐり、以後、学校種、教科、科目を問わず、様々な議論が展開された。

この諮問に対する中教審答申が、2016（平成 28）年 12 月に公開された。本答申の特徴は、大学教育改革や大学入学者選抜改革との一体化の側面が重視された点にあり、「次期改訂は、高大接続改革という、高等学校教育を含む初等中等教育改革と、大学教育改革、そして両者をつなぐ大学入学者選抜改革の一体的改革や、キャリア教育の視点で学校と社会の接続を目指す中で実施されるものであり、特に高等学校にとって、これまでの改訂以上に大きな意義を持つものであると言える」と述べているように、高等学校教育への踏み込んだ内容を伴うものであった。大学入試改革の一つとして、大学入学センター試験にかわり、2020 年度から大学入学共通テストを実施することとなり、2017 年度以来、試行調査が実施・公開されている。共通テストでは、歴史用語を用いずに概念理解を問う問題など、思考力・判断力を重視した入試問題へのシフトが模索されている。

２．新学習指導要領（地理歴史・公民）の特徴

上記の答申を受け、2018（平成 30）年３月に高等学校学習指導要領（以下、新学習指導要領）が公示された。新学習指導要領では、(1) 教育課程全体を通して育成する「資質・能力」の明確化、(2)「主体的・対話的で深い学び」の実現、(3)カリキュラム・マネジメントの推進、などの方針が示された。これまで話題となった「アクティブ・ラーニング」の用語はフェードアウトし、「主体的・対話的で深い学び」という表現に統一された。同年７月には、新学習指導要領の解説（以下、「解説」）も公表された。高等学校の新教育課程は、移行期間を経て、2022（平成 34）年４月から完全実施される。

新学習指導要領では、下図のように、地理歴史・公民科の科目構成も大幅に変更された。

【 科目構成の比較 】

平成 21 年３月公示（現行学習指導要領）		
教科等	科目	標準単位数
地理歴史	世界史Ａ	２
	世界史Ｂ	４
	日本史Ａ	２
	日本史Ｂ	４
	地理Ａ	２
	地理Ｂ	４
公民	現代社会	２
	倫理	２
	政治・経済	２

⇒

平成 30 年３月公示（新学習指導要領）		
教科等	科目	標準単位数
地理歴史	地理総合	２＊
	地理探究	３
	歴史総合	２＊
	日本史探究	３
	世界史探究	３
公民	公共	２＊
	倫理	２
	政治・経済	２

（「新学習指導要領」より。＊は必履修科目）

必履修科目について、現行学習指導要領では、地理歴史のうち世界史Ａ、世界史Ｂから１科目、並びに日本史Ａ、日本史Ｂ、地理Ａ、地理Ｂから１科目、公民のうち現代社会又は倫理、政治・経済とされていたのに対し、新学習指導要領では、地理総合、歴史総合、公共の３科目を必履修科目とした。

新学習指導要領においては、各教科科目の目標が大きく変更された点も注目される。現行学習指導要領では、「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め，国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う」とされていた地理歴史科の目標が、新学習指導要領では、以下のように示された。

社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 現代世界の地域的特色と日本及び世界の歴史の展開に関して理解するとともに，調査や諸資料から様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

(2) 地理や歴史に関わる事象の意味や意義，特色や相互の関連を，概念などを活用して多面的・多角的に考察したり，社会に見られる課題の解決に向けて構想したりする力や，考察，構想したことを効果的に説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。

(3) 地理や歴史に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚，我が国の国土や歴史に対する愛情，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。（「新学習指導要領」より）

このように、柱書と(1)～(3)で示された資質・能力（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力」、「学びに向かう力」）からなる目標構造は、教育課程全体を通して統一され、定型化されている。

３．歴史総合、日本史探究、世界史探究の新設

新設科目のうち、歴史教育に関するものは、歴史総合、日本史探究、世界史探究の３科目である。

歴史総合は、「近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉え、資料を活用しながら歴史の学び方を習得し、現代的な諸課題の形成にかかわる近現代の歴史を考察、構想する科目」であり、「A　歴史の扉」、「B　近代化と私たち」、「C　国際秩序の変化や大衆化と私たち」、「D　グローバル化と私たち」の四つの大項目によって構成される。

日本史探究は、「『歴史総合』の学習によって身に付けた資質・能力を基に、我が国の歴史の展開に関わる諸事象について、（中略）歴史的経緯を踏まえて、現代の日本の課題を探究する科目」であり、「A　原始・古代の日本と東アジア」、「B　中世の日本と世界」、「C　近世の日本と世界」、「D　近現代の地域・日本と世界」の四つの大項目によって構成される。

世界史探究は、「『歴史総合』の学習によって身に付けた資質・能力を基に、世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、（中略）歴史的経緯を踏まえて、地球世界の課題を探究する科目」であり、「A　世界史へのまなざし」、「B　諸地域の歴史的特質の形成」、「C　諸地域の交流・再編」、「D　諸地域の結合・変容」、「E　地球世界の課題」の五つの大項目によって構成される。

４．新設科目の特徴

新設された歴史総合、日本史探究、世界史探究に共通する特徴を何点か指摘したい。

一つ目は、いずれの科目も柱書（下記）の目標が共通していることである。

社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

この柱書は小学校・中学校社会科の新学習指導要領（平成 29 年告示）ともほぼ同文であり、「初等中等教育の一貫した学びの充実」が示されている。また、学習内容の表記について、現行学習指導要領では、「考察させる」「気付かせる」「着目させる」など、記述の主体が教授者（教員）におかれていたのに対し、新学習指導要領では、「理解する」「身に付ける」「表現する」のように、主体が学習者（生徒）となっている。このように、「学習者主体」の表記となっている点も、新学習指導要領の特徴の一つと見ることができる。

二つ目は、科目や項目ごとの学習の順序が指定されていることである。日本史探究、世界史探究は、歴史総合を学習した後に履修することとされている。また、各科目の上記大項目（A～DまたはE）についても、「この順序で扱うこと」と記されている。これまで、例えば世界史Bや日本史Bの学習で近現代を先に学習する事もあったが、新学習指導要領では、それは認められない構成となっている。さらに、歴史総合と世界史探究では、「A、B及びC並びにD（E）の(1)から(3)までの学習をすることに

より、D（E）の(4)の学習が充実するように年間指導計画を作成すること」、と記され、全項目を確実に学習することが強調されている。なお、項目D（E）の(4)は、「現代的な諸課題の形成と展望（歴史総合)」、「地球世界の課題の探究（世界史探究)」である。現代的な課題を追究するこれらの項目を扱う際には、公民科との関係についても問われることとなろう。

三つ目は、「主題」や「問い」を中心に構成する学習が重視されていることである。「解説」では、それぞれの科目において、「時系列に関わる問い」、「諸事象の推移（比較）に関わる問い」などが例示され、学習展開例までが示されている。「あなたは、中国の開港と日本の開国が国際社会に与えた影響のうち、注目すべき点は何だと考えるか、それはなぜか（歴史総合)」などの「問い」の例や学習展開例など、これまでの「解説」等には見られなかった、踏み込んだ記述となっている。

さらに、「問い」の中には、「『時代を通観する問い』を生徒自身が『表現』できるような指導を工夫すること（日本史探究)」などのように、生徒自身が表現するものも含まれている。

この他にも、今回の学習指導要領改訂は多岐に及ぶため、今後、校種や教科を超えて、具体的な分析が進んでいくものと思われる。それらを注視しつつ、目の前の生徒と向き合いながら、「平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」を育成するための創意工夫が、歴史教育に携わる全ての者に求められることとなろう。

５．全歴研の主題、テーマとの関わり

この間における全歴研の主題、テーマや発表について、先述した新学習指導要領に至る経緯との関わりに着目すると、興味深い傾向が見られる。

第 57 回（2016 年)、58 回（2017 年）大会ではアクティブラーニングを冠する発表が行われ、第 58 回（2017 年）大会では「歴史教育の今後の在り方を考える」という大会主題のもと、「新学習指導要領と歴史総合に期待するもの」というテーマのシンポジウムが催された。第 59 回（2018 年）大会では、新科目にむけた実践報告が各分科会の主題となるなど、より具体的な発表が見られた。このように、新学習指導要領のインパクトは、全歴研にも広く深く及んでいる。

一方で、現行学習指導要領の総括も問われてこよう。例えば、第 50 回（2009 年）大会「国際社会に主体的に生きる自覚と資質をどう培うか」、第 56 回（2015 年）大会「国際社会に生きる資質を養う歴史教育を求めて」、第 57 回（2016 年）大会「歴史的思考力をどう育成するか」など、現行の学習指導要領を見据えた知見を振り返ることも、未来を見通すための手がかりとなり得るのではないだろうか。

（ 文責　武藤 正人 ）

回想（『全歴研二十五年のあゆみ』より転載）

全歴研結成の思い出

初代会長　成田 喜英

昭和 35 年８月３～４日、上野国立博物館講堂を会場として、全歴研の創立総会が開催されてから 15 年目になる。当時都立青山高校長だった私が初代会長となり、事務局は青山高校に置かれ、事務局長は人見教諭が担当することになった。前年３月、都歴研初代委員長杉山文雄氏（都立小松川高校長）の退職後、６月の都歴研総会で、私が委員長に選ばれ、事務局が青山高校に移され、人見教諭が事務局責任者になっていた。そこで青山高校（特に歴史科）の負担が倍増することになった。

私は、戦前歴史教師の為の各種集会に必ず出席し、役員をしたこともあるので、戦後占領軍の支配下で、歴史教育が極端な制圧を受け、当時の小中学校の歴史授業で国史（日本史）部分の再開が許可されず、多くの歴史学者等が大学等から追放された状態で、それに対処するため中女学校の教員が結束して歴史教育の団体を組織することになった時、その発起人に加わり、昭和 21 年 10 月、都歴研創立総会の進行係をした。その際、代表者（委員長）に先輩の杉山氏を選出した。その後都歴研は、日本史授業の再開、歴史教育内容の改定等に努力を重ね、貢献をした。ところが、私は組合運動発足の際、無党派の教全連の創設者の１人として書記長となり、全教協と合体して日教組が結成されると、その書記次長・副委員長となった。日教組役員を退いてから、都高教組委員長に選ばれ、メーデー事件等の解決に努力した。昭和 27 年 10 月、突然都立板橋高校長に任命され、未解決諸問題の処理に対処した。昭和 31 年 11 月、都立青山高校長に転任した。ここには校地校舎問題・人事問題等が山積していたので、その解決に努力した。従って以上の期間は、殆ど都歴研の事業に関与できなかったのである。幸い青山高校の校地を確保し、新校舎を完成し、教員の意欲も高まった頃、私が都歴研委員長に選ばれたのである。私が委員長就任後、直ちに歴史教育団体の全国組織結成を提唱したのは、他の教育研究団体に比して、団体の構成が複雑で統合困難な為、著しく遅れており、高校教育課程・学習指導要領改定（ママ）の時期に際会し、全国歴史教師の意向をそれに反映させる必要があったからである。まず、全国組織結成について、都歴研で会合を重ね、各道府県研究会に賛否を問い、34 年 11 月末、全国組織結成準備打合せ会を、都歴研側と地方代表・中学代表と共に開催し、会名も予めきめた。そして最初の会報を年末に発行して、地方に発送した。その頃文部省で、高校教育課程・学習指導要領改定の基本方針を発表したのに対し、歴史の時間数や指導要領内容につき早急に対策を立てる為、数回対策委員会を開催、なお社会科全体問題として、社会・地理の研究会との三社（ママ）協議会も数回開催した。35 年１月早々、都歴研と全歴研結成準備会の名で、日本史・世界史共現行を最低とし、５単位履修を要望する文書を文部省に提出。２月半ば、三社（ママ）協議会に関係全国組織を加え、社会科全科目必修、必修 17 単位以上必要の要望書を教育課程審議会に提出。その後文部省に数回陳情。３月末、教育課程審議会答申案発表後、４～６月、大学教授や教材等調査委員と会談。文部省に数回陳情。６月末、世界史指導要領草案の４単位削減・分配配当の修正要求の要望書提出。なお、６月初め、全歴研結成準備会開催、規約草案決定。さて結果として 10 月、高校新教育課程・学習指導要領が決定公布されたので、36 年２月に、三社（ママ）教の名で、社会科各科目担当者に専門科目以外は担当させない、改定指導要領の移行過程で特別予算措置をする等の要望書を作り、当局に提出した。問題は残ったが、都歴研・全歴研の主張による陳情要請は一応終了したのである。その後全歴研の実績が認められ、38 年から教育研究団体国庫補助金支給団体に指定された。以上、当時の記録類を見ながら漸く執筆することができました。（昭和 49 年記す）

全歴研創設時代

二代会長　井上 速雄

全国歴史教育研究協議会の大会も、第 15 回を迎えるのかというのが、現在の私の心境である。

15 年前の状況を懐古し、思い出すまゝに述べて見ます。

昭和 35 年、全歴研（略称）の発足する前迄は社会科の歴史以外の科目は全国的な組織が出来て、大いに活動していた。ただ歴史だけが、そのような研究会がなく、取り残されていた。しかも社会科の中では教員数は一番多かったのである。そんなことで東京都歴史教育研究会（略称都歴研）に全国的研究団体を東京が中心となって作ることの要望が数多くよせられたのであった。それについて応えるのに非常に幸いであったのは当時都歴研の会長は成田喜英先生であった。全国高等学校長協会で重要なポストにおられ、全国的に活躍され、その名前が広く知られていたのであった。

なお、都歴研の会員の中にも数々の有能な方が多かったのも好都合であった。成田先生の呼掛け時には、すぐ立ち上り、直ちに仕事を始めることができたのであった。

かくて、第一回の全国大会は上野公園の国立博物館で開いたのである。当時はまだまだ戦後の事情のよくなかった時代であったが、研究熱は起こりつゝあったように思われる。とにかく困難な時にもかゝわらず大会には多数の研究の同志が全国から集まって来た。どうなることかと心配していた関係者一同、愁眉を開き非常に喜んだ次第である。当時全歴研の事務局は会長校の都立青山高等学校にあった。全歴研の設立事務、大会開会の計画は、青山高校の歴史科の教員であった人見・新甫・水間・臺の先生方がやられた。全歴研の大会のすべりだしが順調であり、盛会であったことの大の功労者はこの四人の先生方の縁の下の努力一つによると云つても良いと思う。実際紙一枚もない状態から始まって、すべてが始めてのことばかりで、しかも授業をやりながら、準備されたのである。大会関係の印刷物の原稿書き、封筒の表書き発送、大会の分科会・発表者・司会者、印刷物の用意等々大変なものであり、良くなされたと感心した記憶がある。

それに会長を中心とした四人のチームワークの良さ、何れも人柄の良い方々であるのでうまく行ったとも云える。青山高校事務局時代に第一回大会・第二回大会は東京で開かれ第三回大会は福岡で開かれた。地方の研究会と提携して地方大会をもつことは連絡等が困難であり、これも大変なことであった。青山高校の事務局が地方大会の先鞭をつけられたのである。地方大会は全国歴史教育研究協議会の名においても是非やらなければならないことであったが、研究会発足してやっと二年にしては容易なことではなかったと思う。青山高校事務局時代後、新宿高校、九段高校、西高校、戸山高校と会長校の移動によって事務局は変って行った。当然それらにも、また地方大会のことにふれたいのであるが、紙数の制限もあり次の機会にゆずることにして、この度は創設時代のことに限りたい。（昭和 49 年記す）

日本史分科会の提案主題の変遷

日本史分科会の提案主題をたどると、その時代ごとの学習指導要領や時代背景等から影響を受けていることが分かった。第１回大会から現代までを当時の学習指導要領や時代背景等を踏まえながら見ていく。

１． 1960（昭和 35）年の第 1 回大会～1969（昭和 44）年の第 10 回大会

日米安全保障条約調印や国民所得倍増計画発表の年に第１回大会が行われた。同年、高校の新学習指導要領が告示され、小中高の教育課程に一貫性をもつこととされた。第１回（1960 年）の日本史分科会のテーマは「大学入試及び高校進学学力検査の諸問題」、第２回大会（1961 年）は昭和 38 年度に実施される新学習指導要領を意識した研究発表「新学習指導要領における日本史の取扱いについて」であった。

昭和 38 年実施の学習指導要領の中での日本史は、「日本の文化の流れを政治や社会との関係において考察させることに重点をおくものとすること」とされており、その考えを踏まえ、第３回（1962 年）・第４回（1963 年）・第６回（1965 年）・第８回（1967 年）大会は文化史に関する分科会であった。

1964（昭和 39）年は東海道新幹線開通，東京オリンピック開催された年であった。第５回（1964 年）・第６回（1965 年）はその影響があったのか、「日本史における世界史との関連-主として、幕末、維新期の取扱い方について-」・「日本史と世界史との関連-幕末・明治期における西洋文化の消化について-」のテーマで世界史との関連を意識した分科会であった。

第７回（1966 年）・第９回（1968 年）・第 10 回（1969 年）では「日本史における戦後史のとりあつかいについて」・「明治史のとりあつかいについて」・「日本近代史像の再構成」というように近現代史をテーマにしている。

２． 1970（昭和 45）年の第 11 回大会～1988（昭和 63）年の第 29 回大会

第 11 回（1970 年）大会の前年９月、1973（昭和 48）年実施予定の新学習指導要領について答申が行われた。全体としての流れとして「教育内容の現代化」であり、最も学習量の多いものとなったのが特徴である。その時の日本史に関する内容は「わが国の歴史を広い視野に立って正しく理解させ、特に日本の文化を時代的背景や歴史の流れと関連させながら総合的に考察させて、国民としての自覚を育てるように配慮すること。また，身近な資料を活用して具体的に学習させること、および主題を設けて学習させることができるようにすること。」であった。第 11 回（1970 年）・第 12 回（1971 年）・第 13 回（1972 年）・第 14 回（1973 年）の分科会テーマは「新しい歴史像の構成―伝統と進歩―」・「古代史の学習のなかで「文化の形成と発展」をどう指導するかー郷土資料の活用を重視してー」・「幕藩体制の展開をどう教えるか―地方史を歴史の流れに位置づける」・「文化を総合的に学習させるには、どのようにしたらよいか―身近な資料の活用と学習指導案の作成―」であり、地方史など身近な歴史や資料の活用を目指す内容であった。

第 15 回（1974 年）大会より「学習内容の精選と深化」へと方向転換し始めた。この時代背景として前 1973 年に石油ショックがはじまり、高度経済成長が終焉を迎え、日本全体として転換期を迎えていた。第 15 回（1974 年）大会では「限られた時間数の中で、日本史学習はどのような視点で精選を行なって進めたらよいか」・「精選を行なう反面、日本史に関してどのように内容を深めた指導を行なったらよいか」、第 16 回（1975 年）大会では「学習内容の精選と深化をふまえ、日本史学習における生徒の興味・関心をおこさせるには、どのようにしたらよいか」・「学習内容の精選と深化をふまえ、日本史学習の中で近現代史をどのように取り扱ったらよいか」、第 17 回（1976 年）大会では「関連教科との連携を考慮しながら、日本史の学習指導の内容をどのように精選するか」・「日本史の学習指導の深化のために、資料（史料・体験学習・視聴覚教材など）をどう扱うか」が分科会テーマであり、「精選と深化」が数年継続して分科会で協議された。時代背景として、詰め込み教育などが社会問題として議論されて

いた時期でもあった。

1977～78 年に学習指導要領が改定され、ゆとりある充実した学校生活の実現＝学習負担の適正化となり、高等学校は 1978 年に改定された。第 15 回（1974 年）大会から掲げられた内容の精選は当時の詰め込み学習に対する社会問題があり、そのことが学習指導要領の改訂につながっていると読み取ることができる。そのような社会的背景の中で第 18 回（1977 年）大会より分科会の研究テーマが変化している。1976（昭和 51）年 12 月 18 日教育課程審議会答申「小学校，中学校及び高等学校の教育課程の基準について」の改善の具体的な方針として、「日本史」では「現行の目標及び内容を基盤にしながら、日本の文化の創造・発展・伝播・影響などを当時の社会との関連のもとに総合的に考察する学習が一層充実できるよう内容の構成に工夫を加える。なお、地方の文化の学習や適切な主題による学習（主題学習）などを充実し、生徒の学習活動が活発に展開できるよう配慮する。」と答申された。その頃の分科会のテーマを眺めてみると、第 18 回（1977 年）大会では「日本文化の総合学習を一層充実するために、日本史の内容構成をどうするか」・「日本史の指導において、地方の文化の学習を充実するにはどうしたらよいか」、第 19 回（1978 年）大会では「日本史における主題学習について - テーマとその展開 - 」・「地方史の研究成果の活用について - 日本史学習を深めるために - 」、第 20 回（1979 年）大会では「日本史教育における文化の綜合的学習を充実させるためにはどのようにしたらよいか。」・「日本史教育において、地域社会の歴史と文化の学習をどのように取り入れ、発展させていったらよいか。」とある。新学習指導要領を踏まえた主題学習や総合学習に着目された分科会テーマであった。

第 22 回（1981 年）大会より分科会テーマの中に国際化という言葉が見えてくる。この時の社会的背景として日中平和友好条約調印やサミットを東京で開催する等がある。第 22 回（1981）大会では生徒の多様化に対応する日本史教育はどうあればよいか。」、第 23 回（1982 年）大会では、「日本文化の国際交流をどう取扱うか。」・「日本国内における文化交流をどう取扱うか。」がテーマであった。

また、地域史学習についても引き続き協議されており、第 22 回（1981 年）大会では「日本史の指導において、地域学習及び生活文化をどう扱ったらよいか。」、第 24 回（1983 年）大会では「地域学習を通して生徒の主体的な学習活動をどう育てるか。」、第 25 回（1984 年）大会では「地域学習を通して生徒の歴史に対する興味・関心をどう高めるか。」とあり、その後も継続して地域史を用いた研究協議が現在にまで継続されていく。当時の学習指導要領のなかに地域社会の歴史と文化について記されており、その影響を受け、日本史分科会２つのうち、１つは地域史を設定することが現在にまで続く傾向がみられる。

1982 年は教科書検定が外交問題化し、日本国内外において歴史認識を意識し始めるきっかけとなった。その影響の中で分科会のテーマも近隣諸国との関係に重点を置かれるようになった。渦中の第 24 回（1983 年）大会では,「近代史において近隣諸国との関係をどう取扱うか。」とあり、続く第 25 回（1984 年）大会では「近現代史の学習を通して生徒の歴史認識をどう育てるか。」、第 26 回（1985 年）大会では「日本史の授業で東アジア文化圏の中の日本文化をどのように指導するか。」、第 27 回（1986 年）大会では「日本史の授業において東アジア文化圏の中の日本文化をどのように指導するか。-日本と世界-」，第 28 回（1987 年）大会では「国際社会における近現代史をどのように扱うか」、第 29 回（1988 年）大会では「日本史学習を通じて国際認識をどう育てるか」と数年続く傾向がみられる。

３． 1989（平成元）年の第 30 回大会～1998（平成 10）年の第 39 回大会

1991 年、世界が大きく変動した。ソ連の崩壊である。ソ連崩壊の数年前から世界は転換期を迎えていた。1989 年には中国で天安門事件や東欧で民主化が進み、1990 年には東西ドイツの統一，1991 年には湾岸戦争、ソ連の崩壊と続いた。この激動の中で世界のパワーバランスが大きく変化し、世界は大きく変化した。日本国内も昭和天皇が崩御され、昭和が終わり平成へと変わった時でもあった。日本国内も世界と同様転換期を迎えていた。

1989（平成元）年に改定された学習指導要領も社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間性の育成となり、社会科では我が国の文化と伝統及び世界と日本とのかかわりについての理解を深め、世界の中の

日本人としての自覚と責任感を涵養するよう配慮することが盛り込まれた。この改定より高等学校の社会科は地理歴史科と公民科へと再編成された。日本史も日本史Ａと日本史Ｂの科目が設けられた。日本史Ａは、現代日本の形成の歴史的過程を世界史的視野に立って理解させ、特に我が国の近・現代の歴史を我が国を取り巻く国際環境などと関連付けて考察させるよう内容を構成し、日本史Ｂは、我が国の歴史の展開を世界史的視野に立って総合的に理解させ、歴史的思考力を培うとともに、我が国の文化と伝統の特色についての認識を深めさせるよう内容が構成された。

そのような社会的背景の中、第 30 回（1989 年）大会では「時代の転換期の学習を通じて歴史意識をどう育てるか」、第 31 回（1990 年）大会では「時代の転換期の学習を通じて歴史意識をどう育てるか」と分科会テーマが設定されている。

第 32 回（1991 年）大会では「自国理解を一層すすめる生活文化学習をどう展開するか」・「世界史的視野にたって日本史学習をどう進めるか」、第 33 回（1992 年）大会では「多様な生徒の興味関心を高める指導法は、どうあるべきか」・「教育活動に近現代史をどう位置づけるか」とあり、引き続き国際化する日本の中でどのような日本史教育を行うべきかという意識がみえてくる。

1994（平成６）年に高等学校において前述した学習指導要領が実施された。その中で新科目である日本史Ａを意識したテーマが出現してくる。日本史Ａ等の新たに設定されたＡ科目に対する扱いをどうしていくのかが現場で混乱していた時期でもあった。第 36 回（1995 年）大会では「日本史Ａにおける内容の構成とその実践をどのようにすすめるか」、第 37 回（1996 年）大会では「日本近現代史の授業実践と課題」、第 38 回（1997 年）大会では「日本史Ａの学習において、近現代史をどう取り扱うか」「戦後史学習の実態とその学習をいかにすすめるか」が分科会のテーマとして協議されている。手探りの中で研究開発されていることが読み取れる。

４． 1999（平成 11）年の第 40 回大会～2008（平成 20）年の第 49 回大会

1998（平成 10）年・1999（平成 11 ）年、基礎・基本を確実に身につけさせ、自ら学び自ら考える力などの生きる力の育成が掲げられ、教育内容が厳選化された学習指導要領の改訂が行われた。この時の改善方針として日本史Ａでは、近現代史を一層重視し、我が国の近代社会の成立と発展の過程を、我が国を取り巻く国際関係や地理的条件と関連付けて考察できるようにし、日本史Ｂでは、我が国の歴史に対する認識を深め、歴史的思考力を培うことを一層重視し、我が国の歴史の展開を世界史的視野に立って学習できるようにした。その方針を受けて日本史分科会のテーマも関連してきている。第 40 回（1999 年）大会では「歴史的な見方・考え方を育成する主題学習をいかに実践するか」・「多様化する生徒にいかに歴史的思考力を持たせるか」が設定され，歴史的思考力に関するテーマが設定された。第 41 回（2000 年）大会では「地域史からみた日本の歴史-地域教材の活用-」・「身近な生活から見た日本史学習-生活文化史からのアプローチ-」、第 42 回（2001 年）大会では「地域に『学ぶ』－小学校・中学校の教育実践から－」・「地域学習における多文化共生－西洋文明との出会いを介して－」が設定された。

この頃より、「歴史的思考力」・「多面的・多角的」・「見方・考え方」という現在にもつながるキーワードが登場し始めた。自ら学び自ら考える力の育成を目指した学習指導要領の改訂の影響を受けたものである。第 43 回（2002 年）大会では「歴史的思考力を育む地域史学習の新たな試み」・「国際環境の変化を捉えて歴史的な見方・考え方をいかに育むか」、第 44 回（2003 年）大会では「多面的・多角的視野にたった主題学習の展開」・「グローバルな視野にたった近現代史学習の展開」、第 46 回（2004 年）大会では「歴史の見方・考え方をより深く身につけるための主題学習の展開」、第 47 回（2006 年）大会では「歴史的見方を引き出す授業づくり」、第 48 回（2007 年）大会では「生徒の自発性を促す授業展開と評価の工夫」、第 49 回（2008 年）大会では「生徒が歴史的見方・考え方を身に付けたり主体的な学習を行ったりする主題学習の展開」と続く。そのさなかで 2008（平成 20）年の学習指導要領改善の答申へとつながる。

５． 2009（平成 21）年の第 50 回大会～2019（令和元）年の第 60 回大会

2006（平成 18）年には改正教育基本法が成立し、2008（平成 20）年に幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）が出された。この答申内で日本史は様々な資料を活用し、地理的条件や世界の歴史と関連させながら課題を追究させる学習を行い、歴史的思考力を培うことが打ち出された。そのことを踏まえ、第 50 回（2009 年）大会よりその視点が分科会の研究に取り入れられるように変化している。出発点となる第 50 回（2009 年）大会では「様々な資料を活用して世界の中の日本の視点を生かした近現代史の学習指導」「資料を活用して世界の中の日本の視点を生かした近現代史学習の進め方」が設定され、その後も続いている。

第 52 回（2011 年）大会より、生徒の主体的な学習の視点が加わってくる。第 52 回（2011 年）大会では「生徒が主体的に知を創造するための授業実践」、第 53 回（2012 年）大会では「生徒が歴史的な見方・考え方を身につけたり、主体的な学習を行ったりする主題学習の展開」、第 54 回（2013 年）大会では「生徒の思考力・判断力をどのように育てるか」、第 55 回（2015 年）大会では「『世界の中の日本』について多面的・多角的に研究する」、第 56 回（2016 年）大会では「生徒の主体的な学習活動を通していかに歴史的思考力を育成するか」が設定されている。

ますます国際化していく中で必要となるグローバルな視点もさらに進化し、第 53 回（2012）大会では「世界の中の日本の視点を生かした近現代史学習の進め方」、第 55 回（2014 年）大会では「開かれる歴史風景 - 教科・科目の壁を越えて」・「つなげ合う教育の在り方 - 異校種の生徒に対する教師の眼差し - 」、第 56 回（2015 年）大会では「近現代の日本について国際環境と関連づけて考察する」・「『世界の中の日本』について多面的・多角的に研究する」が設定された。

2016（平成 28）年に新学習指導要領の審議がまとまり，答申が打ち出された。2017（平成 29）年には小中学校、2018（平成 30）年には高等学校の新学習指導要領が告示された。高等学校では令和 4 年度より年次進行で実施される。日本史と世界史が融合された新科目歴史総合、日本史Ｂから日本史探究へと科目が大きく変更される。その際、主体的・対話的で深い学びの視点が重要となってくる。その視点の始まりとして、第 57 回（2016 年）大会では「生徒の主体的な学習活動を通していかに歴史的思考力を育成するか」・「（日世合同）多面的・多角的アプローチから歴史的思考力を育てる歴史学習」、第 58 回（2017 年）大会では「新たな手法で行う歴史授業」が設定され、アクティブラーニングの言葉が研究発表の中でも見られるようになった。

第 59 回（2018 年）大会では 2018（平成 30）年３月に告示された新学習指導要領に則って、「歴史総合へ向けた実践」、「日本史探究へ向けた実践」が分科会で協議され、新たな歴史教育への出発となった。

これまでを振り返ると，新学習指導要領と時代背景の影響が相互に関係しあって日本史分科会に及ぼしていることを読み取ることができた。現在、日本における歴史教育の転換期である。新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」を行うことが求められている。この「主体的・対話的で深い学び」を基に新たな歴史教育に向けて高校世界史教育と連携しながら今後も現場の教員の模索は続く。

（文責　赤迫さやか）

世界史分科会の提案主題の変遷

世界史分科会の提案主題をたどって見ると、その時代ごとの学習指導要領から影響を受けていることが分かる。第１回大会から現在までの変遷を、第１回（1960 年）大会から第 10 回（1969 年）大会まで、第 11 回（1970 年）大会から第 29 回（1988 年）大会まで、第 30 回（1989 年）大会から第 39 回（1998 年）大会まで、第 40 回（1999 年）大会から第 49 回（2008 年）大会まで、第 50 回（2009 年）大会から第 60 回（2019 年）大会までの５つの時期に分けて見ていく。

１．1960（昭和 35）年の第１回大会～1969（昭和 44）年の第 10 回大会

1960(昭和 35)年、U-2 撃墜事件によって「雪どけ」から一転、東西両陣営の対立が再び強まった年に全歴研の第１回（1960 年）大会が行われた。同年に高等学校学習指導要領が改定された。それまでの学習指導要領と異なり「告示」形式となったため、小・中学校と同様に法的拘束力が明確化され系統的な学習が重視されることになった。記念すべき初会の提案主題は「新教育課程と歴史教育の諸問題」であり、続く第２回（1961 年）大会でも「新学習指導要領における世界史の取扱いについて」と学習指導要領との向き合い方について議論された。

第１回（1960 年）大会の「文化史・近代史の取り扱いについて」、第４回（1963 年）大会の「第一次世界大戦の扱いかた」、第７回（1966 年）大会の「世界史における戦後史のとりあつかいについて」、第８回（1967 年）大会の「世界史におけるアジア史の位置づけ」、第９回（1968 年）大会の「世界史Ｂにおけるアジア近代史の取りあつかい方について」、第 10 回（1969 年）大会の「ヨーロッパ近代史の再検討」、第 11 回（1970 年）大会の「近・現代史におけるナショナリズムの諸問題」、第 12 回（1971 年）大会の「アジアの近代化をどのように考えるか」、第 13 回（1972 年）大会の「近代から現代への移行期をどう教えるか」のようにこの時期の提案主題には「アジア」や「近現代」の語句が目立つ。これは、1955(昭和 30)年のアジア＝アフリカ会議や 1961(昭和 36)年の第１回非同盟諸国首脳会議などの影響もあったのか、当時アジアやアフリカが強調されながらも授業時間数が不足して近現代史を十分にあつかう時間が無いという課題に直面していたからである。今日的でもある課題について当時から活発に協議されていたことを第２回の提案要旨からうかがうことができた。

また、第３回（1962 年）大会の「世界史における主題とその展開について」、第５回（1964 年）大会の「世界史Ｂにおける主題学習について - 特に第一次世界大戦後を選ぶ場合 - 」、第６回（1965 年）大会の「世界史における主題学習－とくに東西文化交流を事例として－」などのように「主題学習」が何度も登場するのもこの時期の特徴である。生徒の主体性をひきだすための主題の設定方法や、深い学びになるよう自主学習と講義を繰り返す教授方法などが提案された。こちらにおいても当時と今日における課題は同一であると気づかされる。

２．1970（昭和 45）年の第 11 回大会～1988（昭和 63）年の第 29 回大会

この時期の提案主題には、1970（昭和 45）年告示の高等学校学習指導要領でうたわれた「教育内容の現代化と高度化」の影響が色濃く出ている。この時期に教育内容や授業時数がともにピークとなり教員の負担は相当なものであった。第 15 回（1974 年）大会において「限られた時間数の中で、世界史の指導はどのような視点で精選を行なって進めたらよいか」、「精選を行なう反面、世界史に関してどのように内容を深めた指導を行なったらよいか」が提案主題となっており、当時の学習指導要領に対応すべくアメリカの授業形態を参考にするなど具体的な精選の方法や内容に対する協議が行われた。それ以降も立て続けに第 16 回（1975 年）大会の「限られた時間数の中で世界史の学習はどのように進めるか」、第 17 回（1976 年）大会の「関連教科との連携を考慮しながら、世界史の学習指導

の内容をどのように精選するか」、第 19 回（1978 年）大会の「世界史における史料の精選と活用について－歴史的思考力の育成をはかるために－」といったように「限られた」や「精選」といった語句が提案主題に多く登場し、教員だけでなく生徒にとって負担の大きな授業をできるだけコンパクトかつ中身のあるものにしようと試行錯誤を繰り返していたことが見えてくる。

また、授業内容の精選が余儀なくされるも上辺だけの学習とならないよう第 17 回（1976 年）大会の「世界史の学習指導の深化のために、資料（史料・体験学習・視聴覚教材など）をどう取扱うか」、第 22 回（1981 年）大会の「世界史指導における資料の選択および活用はどうあればよいか」のように史資料を用いて知識の獲得にとどまらず生徒の思考力を育てるための工夫が重ねられていたこともこの時期の特徴である。2018（平成 30）年 3 月に告示された新学習指導要領でも重視されている「調査や諸資料から様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能」についてこの時期から既に視線が向けられていたことは大変興味深い。

高度経済成長期から上昇を続けていた日本における高校進学率は 1970 年代半ば頃に 9 割以上となった。それに伴い、70 年代終わり頃から 80 年代にかけて校内暴力の多発や受験戦争の過熱化が社会問題となる。1978（昭和 53）年に告示された高等学校学習指導要領では前学習指導要領の反省を受け、また上記のように多様化した生徒に対応すべく「ゆとりと充実」が目指され、授業時数も 1 割削減された。新科目である現代社会が登場するのもこの時である。この時期の主題を見てみると第 20 回（1979 年）大会の「新しい世界史教育法、特に方法論について」のように生徒への対応に特化した実践が報告されている。また、第 18 回（1977 年）大会の「現代社会の形成の歴史的過程の理解を容易にするため、世界史の学習内容をどう理解したらよいか」、第 19 回（1978 年）大会の「文化圏学習の効果的取り扱いについて－現代世界形成との関連において－」、第 21 回（1980 年）大会の「世界史教育における宗教の扱い方」のように世界史と新教科との関連を考察するものが散見される。これは両科目の指導内容を明確にすることで精選を目指す試みでもあった。

他にも、第 14 回（1973 年）大会の「文化圏学習をどのように指導すればよいか」や第 18 回（1977 年）大会の「世界史の指導において、文化圏学習を充実するにはどうしたらよいか」のように以前から注目されていた文化圏学習に関する議論が盛んになるのもこの時期である。第 20 回（1979 年）大会の「世界史教育において，文化圏学習をどのようにすすめていったらよいか」、第 23 回（1982 年）大会の「世界史の学習において『文化の交流』をどう取扱うか」、第 26 回（1985 年）大会の「世界史における文化圏学習をどのように指導するか」、第 27 回（1986 年）大会の「世界史の授業で近代史以前の同時代史をどのように構成するか」、第 29 回（1988 年）大会の「同時代の文化圏学習の指導内容をどのように構成するか」、平成元年となる第 30 回（1989 年）大会と第 31 回（1990 年）大会の「同時代の諸地域の学習を通じて歴史意識をどう育てるか」、第 32 回（1991）大会の「諸地域の特性をふまえ世界史学習をどう展開するか」、「同時代史上の諸問題をふまえ世界史学習をどう進めるか」など、「文化」や「同時代史」、「地域」といった語句が多くの大会で取り上げられている。この時期には同時代史的に歴史をとらえなおすことで従来のヨーロッパ中心主義の克服をめざす試みや、世界史離れが叫ばれるなかで生徒が興味関心をもてるよう多種多様な実践が報告された。

３．1989（平成元）年の第 30 回大会～1998（平成 10）年の第 39 回大会

1989（平成元）年には「新しい学力観」がテーマとされた高等学校学習指導要領が告示された。また、この学習指導要領では高校の社会科が地理歴史科と公民科に分割され世界史が必修化とされた。いわゆる「社会科解体」である。この学習指導要領の解説には、地理歴史科新設の理由、世界史必修の理由が記されており、そのすべてに「国際化」、「国際社会」という語句が登場する。そのため近現代史が重要視されることになり、世界史が 1960（昭和 35）年以来再びＡ科目とＢ科目に分化した。それに伴い、文字通り第 36 回（1995 年）大会の「世界史Ａにおける内容の構成とその実践をどのよ

うにすすめるか」、「新しい世界史像をめざす教材開発と授業実践」、第 37 回（1996 年）大会の「新しい世界史像をめざす授業実践」、第 38 回（1997 年）大会の「世界史Ａの学習において、国際的視野の育成をいかにすすめるか」、第 40 回（1999 年）大会の「21 世紀の新しい世界史像をどのように構成するか」、第 43 回（2002 年）大会の「シラバス・授業進度表の作成と活用－新しい世界史Ａ・Ｂの視点を取り入れた授業の取り組み－」など新科目に関する主題が多く見受けられる。

他にも注目すべき点がある。かねてより全歴研では第 25 回(1984 年)大会において「世界の一体化の学習を通して生徒の国際的歴史認識をどう育てるか」を提案主題とするなど、いち早く国際化に関する協議を行ってきた。この時期になると第 28 回（1987 年）大会の「国際理解のために人物をどのように教材化するか」、第 33 回（1992 年）大会の「国際理解教育・平和教育の世界史（現代史）にどう生かすか」、第 35 回（1994 年）大会の「世界史教育を通じて国際的歴史認識をどのように育成するか」、第 39 回（1998 年）大会の「近現代史で国際平和・国際理解の授業をどう実践したか」のように国際理解に関する主題が目立つ。ある人物をテーマにして多面的・多角的に歴史を認識する実践などを通じて、新たな時代に向けて国際理解の重要性が訴えられた。

４．1999（平成 11）年の第 40 回大会～2008（平成 20）年の第 49 回大会

新世紀を直前にひかえた 1999（平成 11）年告示の高等学校学習指導要領では「生きる力」がキーワードとなる。完全週５日制に合わせて標準授業時数が削減され教育内容が厳選されつつも、基礎学力を身につけたうえで自ら学び自ら考える力を育成することが求められるようになった。また、世界史Ａでは「（３）現代の世界と日本」において地域紛争や国際社会などについて生徒の追究を促すような適切な主題を設定して学習を進めさせることとしている。世界史Ｂにおいても同様の意図で「（１）世界史の扉」が新設されている。

それに伴い主題には第 44 回（2003 年）大会の「新しい世界史教育の視点」、第 45 回（2004 年）大会の「生徒の主体的な学習を推進する指導法の工夫 - 生徒による授業活用を通して - 」、第 46 回（2005 年）大会の「多様な指導法を取り入れた授業展開」、第 47 回（2006 年）大会の「多様な生徒に対応した世界史の授業展開」、第 48 回（2007 年）大会の「生徒の実態に即した世界史授業の工夫」、第 49 回（2008 年）大会の「生徒が主体的に生きる資質を培う教材研究」、第 51 回（2010 年）大会の「新たな視点で捉えた世界史の授業」など、「主体的」という言葉がキーワードとなり新たな教授方法や指導の観点について協議される一方で、第 44 回（2003 年）大会の「シラバスの作成と活用 - 新教育課程・完全学校週５日制実施、公立中高一貫教育校の設置等の課題を踏まえての提案 - 」、第 46 回（2005 年）大会の「観点別評価を取り入れた指導法の工夫」のようにそれまでの評価方法や規準を見直す試みも活発であった。なお、2006（平成 18）年秋には全国の高校にていわゆる「世界史未履修問題」が発覚した。高校における地理歴史科の内容の多さが生徒の負担になっているのではないかとの指摘が世間では多く飛び交ったが、そういった状況下で従来の歴史教育を変革させようとして「主体的」や「生徒の実態に即した」という文言が提案主題に登場していたのである。

他にも、第 40 回（1999 年）大会の「世界史における主題学習で歴史的思考力をいかに育成するか」、第 41 回（2000 年）大会の「現代に視点をおいた主題学習」、第 42 回（2001 年）大会の「モノを切り口とした歴史学習」など主題学習に関する議論が活発であったことにも目を向けたい。時代を追っての系統的学習が万能であり必要であるとの声を受けつつも、文化圏学習や主題学習にて新たな提案がなされていた。

５．2009（平成 21）年の第 50 回大会～2019（令和元）年の第 60 回大会

2009（平成 21）年に告示された高等学校学習指導要領も前回の内容を継承し、「生きる力」の育成を求めている。世界史Ａ，Ｂともに内容構成には改善が見られるものの、基本的な構成は前回通りで

ある。昨今の主題は実に様々な観点やアプローチからの協議が盛んに行われている。

例えば、第 56 回（2015 年）大会の「『今日の世界が直面する課題」について歴史的観点から探求する」、第 57 回（2016 年）大会の「歴史的思考力を育む授業および考査・評価のあり方を考える」、第 58 回（2017 年）大会の「（近現代）現代につながる課題を多面的に考察する」といった課題解決能力を養成する指導法が探究されている。他にも第 55 回（2014 年）大会の「学校と博物館 - 多様な連携 - 」、第 57 回（2016 年）大会の「博学連携で歴史的思考力を育成できるのか」、第 59 回（2018 年）大会の「博学連携の実践」のように新たなアプローチによって生徒の主体性を育むとともに、2018（平成 30）年３月告示の新学習指導要領で目指す資質・能力として掲げられている「『社会的な見方・考え方』を働かせた『思考力、判断力、表現力等』の育成」を実現させるための実践がなされている。

上記の新学習指導要領より地歴科目として歴史総合、地理総合、世界史探究、日本史探究が新設される。全歴研では第 53 回（2012 年）大会の「社会科科目相互の関連を活かした世界史学習の進め方」、第 58 回（2017 年）大会の「（前近代）地理的条件や日本史と関連付けて探究する」のように世界史の枠にとどまらず科目横断的な学習を試みている。また、第 59 回（2018 年）大会の「世界史探究に向けた実践」、第 60 回（2019 年）大会の「世界史探究が目指すこと」、「これからの新しい歴史学習の提案」のように新学習指導要領、新科目を見据えた協議が活発である。このように現在、世界史教育は大きな転換点を迎えている。

高校世界史教育を「不易と流行」という言葉で説明するなら、「不易」とは歴史教育者が求める理想であり、「流行」とは時代の要請によって変化する教授内容や教授方法である。分科会の提案主題をふりかえってみるとその時期ごとの学習指導要領等の影響をうけて提案主題の文言は変わっても、つまり「流行」が変化しても、歴史教育者は一貫して文字史料や絵画資料を読み解き、様々な歴史的事実や事象を統合して、生徒の歴史的思考力を育てようとしてきた。このことは「不易」である。平成 30 年度の文部科学省高等学校新教育課程中央説明会概要は「歴史総合では近現代の歴史の大きな変化を『近代化』、『国際秩序の変化や大衆化』、『グローバル化』と表し、生徒が課題意識をもって考察できるよう構成されている。」と説明している。新しい科目であるから新しいものが求められているのではなく、上記の「近代化」や「グローバル化」、「課題意識をもつ」など、まさしく全歴研が研究し続けてきたテーマが現在もなお重視されている。新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」を行うことが求められているが、その達成のためには生徒の思考を深める適切な問いが不可欠である。提案主題の変遷をたどることで、歴史教育者たちが 60 年の長きにわたって歴史教育の本質にせまる問いを立て続け白熱した協議が行われてきたことが伝わってきた。新学習指導要領が実施される今後においても、その時代ごとの「流行」を取り入れつつ「不易」を求める歴史教育は不変である。

（文責　藤井真州）

全歴研記念講演と史跡見学、海外研修の変遷について

これまでに行われてきた記念講演や史跡見学、海外研修の報告から、その当時の担当者の思いや時代の移り変わりを読み解いていきたい。

１．記念講演のテーマについて

詳細は年表を参照していただきたいが、60 回分の記念講演を振り返ってみたい。興味深いものが見えてくる。以下、気になった点を項目別にまとめてみた。

（１）記念講演と開催地の関連について

全歴研の大会はこれまで日本各地で開催されてきた。記念講演のテーマを見ていくと、「開催地らしさ」が反映されていることが多い。例えば、第３回（1962 年）福岡大会では「北九州の古代文化について」、第 17 回（1976 年）群馬大会では「東国の古代文化について」、第 33 回（1992 年）京都大会では「中世の京都 - 町衆と信長」というテーマで講演が行われている。また、史跡見学の行先も講演会のテーマと重なることが多い。第３回（福岡）大会では「筑紫地方古墳」巡りをしているし、第 17 回（群馬）では「岩宿及び東毛地方」を訪れている。このように、記念講演のテーマには「開催地らしさ」が反映されているし、史跡見学もそれに対応するコースが設定されている。

最も多く全歴研の大会が開催されている東京大会ではどのような記念講演を行っているのか調べてみると、第２回（1963 年）では「世界史的にみた日本の封建社会」、第 14 回（1973 年）では「古代国家の形成と朝鮮―６世紀の屯倉」、第 32 回（1991 年）では「変貌する現代ヨーロッパの歴史的意義」…というように、世界史的な内容や世界史的な視点から日本の歴史を捉えようという講演が多い傾向がある。第 36 回（1995 年）大会の「江戸の妖怪」や第 40 回（1999 年）の「江戸文化と現代」があるものの、「東京らしい」テーマはあまり多くない。

記念講演は大会ごとに講師を探して講演を依頼している。第３回（福岡）大会では九州大学教授の鏡山猛氏、第 17 回（群馬）大会では前群馬大学教授の尾崎喜左雄氏、第 33 回（京都）大会では神戸大学教授の熱田公氏がそれぞれ講演を行っている。東京以外の開催地では地元の大学、博物館の関係者に講師をお願いする場合が多く、自然と地域史中心の講演内容になる。東京は世界史の研究者が多く、講演内容のバランスを考えると、東京で開催される場合は世界史的なテーマが多くなる、という結果と言える。

（２）記念講演講師について

60 回に及ぶ記念講演の講演者を調べてみると実に多様な顔ぶれである。例えば、第５回（1964 年）東京大会の E.O.ライシャワー氏（駐日アメリカ大使）、第７回（1966 年）埼玉大会の三笠宮崇仁殿下、第 12 回（1971 年）東京大会の松本清張氏（作家）、第 38 回（1997 年）東京大会のピーター＝ミルワード氏（東京純心女子大学現代文化研究部長・上智大学名誉教授ルネサンス研究所長）は、特に著名な人物だろう。

第５回（1964 年）東京大会のライシャワー氏は東洋史の研究家であり、1961 年～66 年まで駐日米大使を務めていた。記念講演も「日本の歴史の特異性」という氏ならではの内容であった。1964 年といえば、３月に氏がアメリカ大使館門前で刺される、いわゆる「ライシャワー事件」が起こった年である。怪我と公務の合間を縫っての記念講演だった。このような背景があったため、氏の講演は大きな注目を集めたようだ。『全歴研二十五年のあゆみ』によれば、氏の講演を後日 NHK が教養特集で放送し、朝日ジャーナル誌（64 年９月６日号）はこの講演を全文掲載し、併せて東大助教授の井上光貞氏の感想を掲載し、「多大な反響を呼んだ」とある。

第７回（1966 年）埼玉大会の三笠宮崇仁殿下は、古代オリエント史の研究者の第一人者として知られている。『全歴研二十五年のあゆみ』によれば、殿下に講演していただきたいという要望が多く、こ

の第７回大会で念願がかなったとのことである。殿下の研究領域である「日本における古代オリエント研究の発達について」について講演を行っている。以下、『全歴研二十五年のあゆみ』から抜粋する。

―講師についても幸運であった。要望の多かった三笠宮さまにお願いすることができたからである。しかし舞台裏では、神経をすりへらしたこともお伝えしておきたい。警備について万全を期するということが、どれほどたいへんであるかということを実感した。講演に先だって、宮さまに昼の食事をさしあげたが、その席には県知事などにも出てもらい、話ははずんで和やかであった。東京女子大の先生としての宮さまは、学生がオリエントについてなんにも習ってきていないといって嘆かれた。そこで高校の教育課程や学習指導要領のことを申しあげ、この大会のテーマの「戦後史のとりあつかい」をめぐる討論を見ても、戦後史を教える時間をどのようにして産み出すかということに話題が集中するという状況ですと申しあげると、うなずいておられた。そのうちに宮さまの方から、建国記念の日についてどう思うかというご質問が出た。この問題について盛んに議論されておったことだから、一同顔を見あわせた。誰かがこれについては国民ぜんたいの納得のいく線で行くべきだと思うとお答えしたところ、宮さまもご自身のお考えを、歴史学者としてとしてお述べになった。現在の建国記念の日がきまったのはその後のことである。―

殿下に講演を依頼するという全歴研初の出来事であったため、舞台裏は様々な苦労があったようだ。これも全歴研の貴重な記録の一部である。

第 12 回（1971 年）東京大会の松本清張氏はノンフィクション、近現代史、推理と幅広いジャンルを手掛けたことで知られる小説家である。講演内容は「推理と取材」である。1970 年代は邪馬台国ブームが起こったが、氏は考古学研究の第一人者と対談するなど、熱心に取材を行っていた。この 12 回大会の講演も、前方後円墳の形態の解釈やその構築に動員された労働力について触れるなど、氏の取材力に基づいたものであった。

第 38 回（1997 年）東京大会のピーター＝ミルワード氏は、英語、キリスト教、イギリス文学、日英比較文化論など多方面の研究で知られている。記念講演は「アプローチ・ツー・ヒストリーーヨーロッパにおける貧困と清貧史－」である。

このように、錚々たる講師が記念講演を行っている。このようなことができるのも、歴代積み重ねてきた全歴研の活動が認められているからだと言えよう。

（３）史跡見学地について

次に、史跡見学の行先について探っていきたい。史跡見学は行程によって複数のコースが設けられていることが多い。大体 A コースと B コースの２つの行程があり、多少の例外はあるが、１日で回るのが A コース、１泊２日で回るのが B コースである。この宿泊を伴う B コースは、第 41 回（茨城）を最後になくなってしまった。２日間案内する担当者の負担が大きい、ということが、B コースがなくなった主な理由ということだが、２日間かけて各地の史跡に触れる時間は大変充実したものだったのではないだろうか。宿泊は伴わなくなったものの、B コースは１日で回るコースとして存続し、参加者はどちらかを選ぶようになっている。（１）でも少し触れたが、東京以外で開催の場合、講演テーマとも深く関連しながら、その地域ならではの史跡や博物館を巡っている。これは宿泊コースがあった時代も、なくなってからも大きな変化はない。東京が開催地の場合、宿泊があった時代は東京近郊（千葉、埼玉、神奈川）に向かう場合が多かったようだ。これも東京のアクセスの良さゆえに可能なことである。都内の１日コースは東京駅を起点に、都心部の江戸時代・明治時代の史跡・建造物を巡る場合が多い。都心部が中心となる。第 44 回（東京）以降、A・B コースに加えて世界史的な視点で都内を巡る C コースが度々登場するようになった。例えば、第 44 回の C コースは「東京で世界史を歩くー皇帝の夢・スルタンの夢」、第 50 回（東京）の C コースは「世界の紙と印刷の歴史を訪ねて」というテーマである。また、第 58 回（東京）のように A コースは日本史、B コースは世界史という例もある。東京が開催地の場合、記念講演は世界史的なテーマが多く「東京らしい」テーマが少ない、と（１）で述べたが、実は史跡見学で世界史コースを巡ると東京と世界のつながりが見えてくる。

（４）大会主題と記念講演の関連について

初期の頃の全歴研は大会主題が設定されておらず、主題が設定されるのは 19 回（1973 年）大分大会以降のことである。詳しくは（１）でも述べたが、記念講演の内容はその時に招聘する講師の専門分野によって内容が大きく変わるので、必ずしも大会主題と合致するわけではない。しかし、第 21 回（1980 年）東京大会の「歴史教育における宗教の取り扱い方」という大会主題に対して、記念講演は前東京大学教授の笠原一男氏による「日本人と宗教」というように大会主題に即した講演が行われている。この大会主題と記念講演の関連性は近年になるほど強まる傾向にある。

例えば、第 50 回（2009 年）東京大会の大会主題は「新たな歴史教育の創造をめざして - 国際社会に主体的に生きる自覚と資質をどう培うか - 」だが、記念講演は学習院大学長福井憲彦氏による「グローバル時代の歴史教育について」という内容だった。また、第 52 回（2011 年）宮崎大会の大会主題「21 世紀の歴史教育のあり方を問う - 知の伝達から知の創造へ - 」に対して、記念講演は東京が医学人文社会系研究科教授加藤陽子氏による「冷戦後に必要とされる歴史とは何か」だった。「21 世紀の教育」と「冷戦後に必要とされる歴史」は、やはり共通したテーマと言える。いずれの大会主題・記念講演も近代史とどうとらえていくか、という課題意識があることは明らかである。

また、「アジア／世界の中の日本」というテーマは再登場している点を指摘しておく。日本という国の歴史や位置づけを世界史の枠でとらえていこうという視点は特に初期の頃によく見られる（第２回・1961，５回・1965 年，８回・1967 年）。その後、このテーマはあまり取り上げられなくなったが、2000 年代以降再び登場するようになっている（第 48 回・2007 年，51 回・2010 年，55 回・2014 年）。こうしたテーマが再登場することも、「近現代史をどのように捉えていくか」という課題意識と無関係ではないだろう。

２．海外研修について

60 周年記念誌をまとめるにあたって、歴代の大会記録や研修報告の中でも最も当時の雰囲気が感じられたのは、海外研修報告だった。見学先を詳細に書いた報告書からも、海外研修に参加したメンバーの高揚した気持ちが伝わってくるようだ。海外研修の内容も時代と共に大きく変化している。今回は、勝手ながら研修の期間の長さに応じて３期に分類し、行程などを分析していきたい。

（１）第１期：1966～1977 年（悠々世界一周の旅）

海外研修報告が記念誌に掲載されるようになるのは第７回（1966 年）の記念誌からである。以来、実施されなかったことが１回だけあるが、第 17 回（1977 年）までほぼ毎年、海外研修が実施されている。行先は、中近東・欧州・アメリカであり、約 20 日かけて世界一周するコースとなっている。報告書の行程を調べてみると往路か復路のどちらかでエジプトに寄るのが定番である。1966 年に報告された第１回の研修報告の行程を見てみると、カイロ―アテネ―ローマ―ナポリ―ピサ―フィレンツェ―ミラノ―ウィーン―ハンブルク―アムステルダム―パリ―ロンドン―サンフランシスコ―ホノルル、となっている。第２回以降の研修報告では、欧州ではフランス・イギリス・オランダ・イタリアに立ち寄るのが定番になっているようだ。参加者たちはエジプトでピラミッドを見て何を感じたのだろうか。おそらく、２学期の授業で生徒に土産話をしたのだろう。資料集に載っている景色や建物をその目で実際に見るということは、社会科の教員にとって至福の時間であったことだろう。

（２）第２期：1981～1995 年（２週間ゆとりの旅）

1977 年以降４年間の空白期間を経て 1981～1995 年までの期間を第２期と設定したい。この期間は、約２週間（12 日～16 日）という日程で海外研修が行われている。第１期と第２期の間は空白期間があるが、どうやら成田空港の開設に伴う諸事情が関係しているようだ。逆に言えば、1977 年の海外研修は最後の羽田出発の海外研修ということになる。では、このような時期に行われた海外研修はどのように変化しただろうか。

第２期の特徴の一つ海外研修の行先に中国が登場したことだろう。行先に中国が登場するのは、1981 年の報告書である。フランクフルトから帰国の際にバーレーン、香港を経由して成田に戻っている。これは飛行機の乗り継ぎに立ち寄っただけのようで、おそらく見学時間のないまま成田に戻っている。その翌年、1982 年の報告書によると、成田空港から台北、香港を訪れてからシンガポールに向かっている。前年とは違い見学時間も取られているが、研修報告を読んでみると、この時の海外研修のメインはギリシャのようだ。この年の中国も「飛行機の乗り継ぎのついでに、少し立ち寄った」という扱いのようだ。中国メインの海外研修が行われたのはその翌年の 1983 年のことである。この時は 15 日かけて北京―太原―西安―洛陽―蘇州―上海を回っている。翌 1984 年もやはり中国に 14 日間の日程で研修に行っている。

日中共同声明によって両国間の国交が正常化したのが 1972 年、日中平和友好条約が締結されたのが 1978 年のことである。日本からの旅行者を受け入れる中国側の体制が整ったのは、ちょうどこの 1980 年代初めの頃である。まだ個人で中国国内を旅行するのは難しかった。また、NHK がシルクロードの特集を行い、中国人気が高まっていた。1980 年代の初めに中国が海外研修の行き先として選ばれるのは必然といえよう。

1985 年以降は欧州中心の研修に戻ったが、第２期の後半になると複数の国を訪れるのではなく、１つの国をじっくり２週間かけて回る、というスタイルが定着してくる。例えば、1990 年は西ドイツ、1992 年はトルコ、1994 年はフランス、1995 年はイタリアに行っている。1993 年の行先はフランドル（ベネルクス３国）なので、やはり移動距離はあまり長くない。第２期は第１期と比べて日程が約１週間短くなっているため、複数の国を回ろうとすると、どうしてもタイトなスケジュールになってしまう。１泊して、半日観光したら次の国へ…という行程はたくさんの国に行ける反面、１つの国の美術館や博物館をじっくり見ることはできない。それよりは２週間かけてゆっくりと１つの国を見て回りたい、ということなのだろう。このゆったり見て回るという方針は、1980 年代初めに行先として選ばれるようになった中国とも相性が良かったようだ。第２期（1981～1995 年）の間に、４回中国が研修先となっている。うち１回は韓国まで足を延ばしているものの、残り３回はすべて中国国内で完結している。広い国内各地に史跡があり、成田からの飛行時間も欧州に比べれば短くて済む。２週間かけて各地を見て回るのに最適なのだろう。

また、この第２期では 1990 年の西ドイツが印象的な行程となっている。ロンドン―ベルリン―ライプチヒ―エルフルト―カッセル―ケルン―ボン―ハイテルベルグ―アウグスブルク―ミュヘン―ジュネーブを 14 日間で回っている。「ベルリンの壁崩壊」は 1989 年 11 月 10 日（正式な解体作業は 1990 年６月から）なので、この年の参加者はまさに壁が解体される、その現場を目撃しているのではないだろうか。歴史の節目を目にするというのは社会科の教員としては得難い経験だっただろう。そういう意味で 1990 年の西ドイツ研修は非常に貴重な記録である。

（３）第３期：1997～現在（海外研修短縮期）

1995 年のイタリア研修のあと、1996 年は海外研修が実施されなかった。次に実施された 1997 年は「韓国歴史の旅」というタイトルの通り、行先は韓国である。日程はなんと５日間。第１回海外研修（1966 年）から約 30 年、日程行程は約四分の一になってしまった。しかし、翌年は「中央ヨーロッパ歴史の旅」ということで、10 日間の日程でワルシャワ市―クラクフ市―アウシュヴィッツ強制収容所―ヴロツクフ―プラハ市内…という海外研修が行われている。その後も 10 日から５日間という日程でほぼ毎年研修に行っている。行先は欧州から中国、韓国、ベトナムなどアジア圏が中心となっている。短い日程の中でも現地滞在時間を長く取ろうという配慮が感じられる。

各研修旅行に明確なテーマが掲げられるようになったのは、第２期の後半から第３期にかけてである。例えば、第２期のトルコ（1992 年）では「トルコ歴史紀行」、イタリア（1995 年）では「歴史そのものが世界遺産となる国、イタリア」というテーマがそれぞれ設定されている。この時期は第２期の後半にあたり、１つの国に滞在するという行程が採用されるようになった頃でもある。１つの国に

滞在することで、明確なテーマ設定がしやすくなったと考えられる。さて、第３期になると 1999 年の「シルクロード 10 日間の旅」や 2001 年の「“認識台湾”歴史の旅５日間」など、「○日間」という表記が現れる。

風向きが変わったのは 2005 年以降だろうか。この年は６日間の日程でチェコ・ハンガリ―に行く予定だったが、「参加人数が不足したため中止になった」と書かれている。翌 2006 年も海外研修は実施されず、2007 年に「韓国歴史の旅」ということで５日間の海外研修が復活している。この空白期間を挟む前は、10 日間、８日間という一週間以上の日程が組まれていたが、空白期間後は５日間、長くても６日間という一週間以内の日程になっている。2013 年のマラッカ・シンガポ―ル６日間を最後に、海外研修は行われていない。

以上、1966 年から 2013 年までの海外研修を３期に分けて見てきたが、図らずも「高校教員の夏季休業のあり方の変化」も見えてきた。現在では部活動の顧問ともなれば、20 日以上の海外研修などは夢のまた夢、である。しかし、海外研修が実施されなくなってしまったのは時間的な制約だけではない。海外研修の企画者の負担も大きいことはもちろん、海外旅行というものの変化が大きい。かつて、個人旅行は自由が利く半面、費用が高く気軽にはできないものであった。しかし、現在は安く気軽に個人旅行ができる時代になった。しかし、気軽な個人旅行が流行る現在だからこそ、明確なテーマを設定した海外研修の意義はより大きなものになっているのではないだろうか。約 50 年という海外研修の積み重ねは非常に重要なものである。1990 年の西ドイツ研修のような、世界情勢と連動した貴重な記録が示すように、このまま海外研修が絶えてしまうのはあまりに惜しい。新たな視点で多くの人が参加できる海外研修が行えることを願っている。（文責　佐久間　三春）

年　　表

全歴研研究大会のあゆみ

大会名	期日	会場 （開催地及び会場）	大会委員長	大会主題	シンポジウムテーマ （コーディネーター及びパネリスト）	分科会主題及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導助言者、 分科会1	分科会2	分科会3
1回 東京	昭和35年 (1960) 8.3～5	台東区 東京国立博物館	成田喜英（東京都歴史教育研究会委員長・東京都立青山高等学校長）	－	－	【主題】 歴史教育における小・中・高の関連について 【発表者】 佐藤武雄（京都市立堀川高） 【司会】 日下部寅次郎（東京都指導主事）・中村道雄（東京都立日比谷高）	【主題】 大学入試及び高校進学学力検査の諸問題 【発表者】 1　田中政喜（福岡県立筑紫丘高） 2　並河　茂（東京都渋谷区立広尾中） 【司会】 佐藤政次（東京都目黒区立第八中学校長）	【主題】 文化史・近代史の取り扱いについて 【発表者】 1　荒川　潤（東京都立上野高） 2　柴田勇三（静岡県立吉原高） 【司会】 大野英雄（東京都立井草高）
2回 東京	昭和36年 (1961) 8.20～22	渋谷区 東京都立青山高等学校	成田喜英（全歴研会長・東京都立青山高等学校長）	－	－	【主題】 小・中・高における歴史教育−特に中学における歴史教育を中心として− 【発表者】 佐藤政次（東京都目黒区立目黒第八中学校長） 【司会】 菅野二郎（東京都足立区立足立第一中）・鈴木貫孝（東京都早稲田高）・並河茂（東京都渋谷区立広尾中）	【主題】 新学習指導要領における日本史の取扱いについて 【発表者】 小坪　勉（福岡県立久留米高） 【司会】 金子文雄（福岡県立浮羽高）・荒川　潤（東京都立上野高）	【主題】 新学習指導要領における世界史の取扱いについて 【発表者】 吉田利雄（埼玉県立児玉高） 【司会】 矢代　登（埼玉県立浦和西高）・大野英雄（東京都立井草高）
3回 福岡	昭和37年 (1962) 8.7～9	福岡市 中村学園女子高等学校	田中政喜（福岡県高校社会科歴史研究部会長・県立筑紫丘高）	－	【主題】 小・中・高における「明治維新」の発展的取扱い 【発表者】 1　岩岡昭二郎（福岡学芸大附属福岡小） 2　刀根博愛（福岡県岡垣町立岡垣中） 3　長　洋一（福岡県立香椎高） 【司会】 矢代　登（埼玉県立春日部女子高）・佐々木止（福岡県福岡市立警固小）・三野　章（福岡学芸大附属福岡中）・平野博之（福岡県立三池高）	【主題】 小・中学校の歴史教材について−「明治維新」のような時代の転換点となる事件をどう扱うか 【発表者】 浅香勝輔（東京都台東区立上野中） 【司会】 三野　章（福岡学芸大附属福岡中）・佐々木止（福岡県福岡市警固小）・並河　茂（東京都渋谷区立広尾中）	【主題】 日本史における文化の取扱いについて 【発表者】 1　福田以久生（静岡県沼津市立高） 2　森口英世（静岡県立清水西高） 3　喜多竹義（佐賀県立武雄高） 【司会】 森田定治（福岡県立門司北高）・荒川　潤（東京都立上野高）	【主題】 世界史における主題とその展開について 【発表者】 1　ヨーロッパ世界はどのようにして成立したか　熊谷俊作（兵庫県立芦屋高） 2　帝国主義はどのようにして進展したか　佐伯義治（兵庫県立伊丹高） 【司会】 神志名新八（大分県立佐伯鶴城高）・大野英雄（東京都立井草高）
4回 奈良	昭和38年 (1963) 8.8～11	奈良市 奈良県公会堂	佐藤順治（奈良県歴史学会会長・奈良県立奈良高等学校長）	－	－	【主題】 社会科学習における郷土の取り扱い－歴史的学習を中心として－ 【発表者】 1　山本喜志雄（奈良県奈良市立飛鳥小） 2　堀井孝昭（奈良県桜井市立桜井中） 【司会】 坂本学（奈良県奈良市立飛鳥小）・扇田耕作（奈良県奈良市立三笠中）・稲葉　孝（東京都杉並区立神明中）	【主題】 天平文化とその背景 【発表者】 1　佐々木光雄（宮城県仙台第二高） 2　近田吉夫（福岡県立門司東高） 【司会】 小田基彦（奈良県天理高）・今田洋三（東京都立杉並高）	【主題】 第一次世界大戦の扱いかた 【発表者】 1　岡部建明（奈良県立奈良高） 2　沢井宝海（奈良県立吉野工高） 【司会】 米田理八（奈良県立桜井高）・佐伯義治（兵庫県立尼崎北高）
5回 東京	昭和39年 (1964) 8.7～10	千代田区 国立教育会館	成田喜英（東京都立新宿高等学校長）	－	－	【主題】 中学校の日本史の学習の中で世界史をどのように取り入れていったらよいか 【発表者】 1　近代民主主義の発達　稲葉　孝（東京都杉並区立神明中） 2　ヨーロッパの中世　石井武夫（東京都千代田区立麹町中） 【司会】 並河　茂（東京都渋谷区立松濤中）	【主題】 日本史における世界史との関連－主として、幕末、維新期の取扱い方について－ 【発表者】 塚原美村（山梨県立甲府第一高）・相川圭次（山梨県立甲府第一高） 【司会】 山本幸次（東京都立千歳高）・斎藤左文吾（山梨県立甲府南高）	【主題】 世界史Bにおける主題学習について－特に第一次世界大戦後を選ぶ場合－ 【発表者】 九里幾久雄（埼玉県立浦和第一女子高） 【司会】 吉田勝彦（埼玉県立浦和第一女子高）・浅川浩二（東京都立小松川高）
6回 兵庫	昭和40年 (1965) 8.5～7	神戸市 兵庫県庁・民生ホール・神戸山手女子短期大学	徳丸福蔵（兵庫県神戸市立須磨高等学校長）	－	－	【主題】 小中学校歴史教育における諸問題について 【発表者】 1　低学年社会科における歴史教育－スライドを利用して－　尾崎陸夫（兵庫県神戸市立灘西小） 2　郷土学習における歴史教材の取扱い　谷本吉範（兵庫県神戸市立東川崎小） 3　歴史教育の構造的展開法－古代国家の発展を事例に－　阡陌寿夫（兵庫県神戸市立中道小） 【司会】 中安　勇（兵庫県神戸市立名倉小）・辻　亨（兵庫県神戸市立東須雲小）	【主題】 日本史と世界史との関連－幕末・明治期における西洋文化の消化について－ 【発表者】 1　西川彰（奈良県立畝傍高） 2　米田理八（奈良県立桜井高） 【司会】 井上良信（兵庫県立宝塚高）・阪本藤彦（奈良県立奈良高）	【主題】 世界史における主題学習－とくに東西文化交流を事例として－ 【発表者】 山本　宏（鳥取県立鳥取東高） 【司会】 高多彬臣（鳥取県立倉吉西高）・宮崎真佐夫（兵庫県立尼崎北高）
7回 埼玉	昭和41年 (1966) 7.29～8.1	浦和市 県立埼玉会館	吉田金一（埼玉県立所沢高等学校長）	－	－	【主題】 学習内容の精選化について 【発表者】 1　小学校部会　天沼稔雄（埼玉県川里村立屈巣小） 2　中学校部会　金井俊策（埼玉県本庄市立本庄西中） 【司会】 1　金田之男（埼玉大付属小） 2　山口善雄（埼玉大付属中） 【記録】 1　猿口清（埼玉県浦和市立尾間木小） 2　小池幹衛（埼玉県熊谷市立大原中）	【主題】 日本史における戦後史のとりあつかいについて 【発表者】 落合美博（静岡県立静岡城北高）・森口英世（静岡県立清水西高） 【司会】 竹折直吉（静岡県立御殿場高）・宮島秀夫（埼玉県立戸田高） 【記録】菅沼一枝（埼玉県立浦和第一女子高）・大竹寿子（埼玉県立大宮西高）	【主題】 世界史における戦後史のとりあつかいについて 【発表者】 相沢一好（東京都立目黒高）・大江一道（東京都立上野高）・九里幾久雄（埼玉県立浦和第一女子高） 【司会】 浅川浩二（東京都立墨田川高）・河合　武（埼玉県立浦和西高） 【記録】松田雄一（埼玉県立春日部高）・松葉喜恵子（埼玉県立岩槻高）
8回 東京	昭和42年 (1967) 7.25～28	中央区 東京都勤労福祉会館	成田喜英（全歴研会長・前東京都立新宿高等学校長）	－	－	【主題】 中学・高校における歴史教育の一貫性について 【発表者】 吉野多門（東京都田無市立田無第三中） 【司会】 稲葉　孝（東京都杉並区立井草中）・台　靖（東京都立青山高） 【記録】 記載なし	【主題】 文化史資料の取り扱い方 【発表者】 1　鎌倉文化を例として　渡辺忠胤（東京都立国立高）・小俣盛男（東京都立国立高） 2　教科書にみる写真資料－鎌倉文化について－　松崎英一（福岡県立八女高） 【司会】 田中　充（東京都立江戸川高）・今田洋三（東京都立上野高）・近藤郁陵（福岡県立大濠高） 【記録】小林良子（東京都立杉並高）・萱原昌二（東京都立八潮高）	【主題】 世界史におけるアジア史の位置づけ 【発表者】 河合　武（埼玉県立浦和高）・新井　桂（埼玉県立小川高） 【司会】 大江一道（東京都立上野高）・吉田勝彦（埼玉県立浦和第一女子高） 【記録】相沢一好（東京都立目黒高）・菅野哲治（東京都立西高）
9回 山梨	昭和43年 (1968) 8.1～4	甲府市 山梨県民会館・県信ビル	平塚武（山梨県立韮崎高等学校長）	－	－	【主題】 社会科教育課程改訂に関する諸問題について 【発表者】 1　小学校社会科学習指導要領改訂の諸問題について　向山信雄（山梨県山梨市立加納岩小） 2　歴史分野はどう改訂され期待されるか　石田善男（山梨県甲府市立北中） 3　特に高校世界史に関する一私見　内野智司（埼玉県立川越女子高） 【司会】 黒木　隆（埼玉県立大宮高）・三枝善平（山梨県甲府市立富士川小） 【記録】笠井順彦（山梨県甲府市立富士川小）・中島捷夷（山梨県立増穂商高）	【主題】 明治史のとりあつかいについて 【発表者】 明治維新を取りあつかう場合　池上彰彦（東京都立九段高）・林　亮勝（東京都立明正高）・毛利和夫（東京都立小石川高） 【司会】 塚原美村（山梨県立甲府南高）・小林功（山梨県立都留高） 【記録】 記載なし	【主題】 世界史Bにおけるアジア近代史の取りあつかい方について 【発表者】 1　特に中国近代を中心として　八田政季（山梨県立甲府南高） 2　特に19世紀におけるイギリスの対策　佳田圭司（兵庫県立御影高） 【司会】 奥田逸郎（山梨県立甲府第一高）・中島規男（東京都立桜町高） 【記録】岡部禹雄（山梨県立韮崎高）・渡辺正俊（山梨県立石和高）
10回 東京	昭和44年 (1969) 7.31～8.3	千代田区 私学会館	井上速雄（東京都立九段高等学校長）	－	－	【主題】 新学習指導要領のもとで小・中学校の歴史の指導をどう進めたらよいか 【総括】 中村忠久（東京都新宿区立大久保中学校長） 【発表者】 1　真弓　矢（東京都杉並区立桃井第二小） 2　関　正就（東京都新宿区立大久保中） 【司会】 平井政一（富山県富山市立呉羽中）・立石昭人（東京都新宿区立西戸山小） 【記録】 小俣盛男（東京都立新宿高）・宇野順之助（東京都立鷺宮高）	【主題】 日本近代史像の再構成 【総括】 森　杉多（東京都立上野高等学校長）・宮沢嘉夫（東京都立白鷗高） 【発表者】 今田洋三（東京都立上野高） 【司会】 高井　進（富山県立富山高）・宮沢嘉夫（東京都立白鷗高）・古暮正雄（東京都立第三商高） 【記録】 田中公一（東京都立上野高）	【主題】 ヨーロッパ近代史の再検討 【総括】 鈴木貞三（東京都立西高等学校長） 【発表者】 岩田　明（埼玉県立寄居高） 【司会】広津和生（福岡県立北九州高）・染野孝吉（埼玉県立熊谷高） 【記録】 荒井　桂（埼玉県立川越高）・中村道雄（東京都立西高）

司会、記録者 分科会4	分科会5	記念講演者	史跡見学地	参加人数	海外研修報告
【主題】 新教育課程と歴史教育の諸問題 【発表者】 成田喜英（東京都立青山高等学校長） 【司会】 徳丸福蔵（兵庫県神戸市立須磨高等学校長）・堀井　清（東京都立千歳高等学校長）	—	【講演】 外国の歴史教育の状況について 【講師】 東京学芸大学教授　小沢栄一 【講演】 床の間芸術の意義とその変遷 【講師】 国立文化財研究所所長　田中　一松	「鹿島・香取方面」(8.4～5) 上野公園－潮来（泊）－鹿島神宮－伊能忠敬旧宅－香取神宮－東京	323名	－
—	—	【講演】 世界史的にみた日本の封建社会 【講師】 東北大学教授　豊田武	「鎌倉・横浜方面」(8.22) 東京都立青山高校－横浜－片瀬（江の島）－鎌倉－極楽寺－覚園寺－称名寺・金沢文庫－横浜－三渓園－渋谷 【講師】八幡義生（国宝史蹟研究会会長）	256名	－
—	—	【講演】 北九州の古代文化について 【講師】 九州大学教授　鏡山猛	「筑紫地方古墳」(8.7) 竹原古墳 「太宰府見学」(8.8) 太宰府 「筑後地方史蹟見学および福岡市及付近見学」(8.9) 「九州一周・半周」(8.10～15) 福岡－長崎－雲仙（泊）－島原－熊本－阿蘇－別府（泊）－臼杵－延岡－宮崎（泊）－西都原－青島－霧島（泊）－桜島－鹿児島－指宿（泊）－熊本－久留米－福岡	約500名	－
—	—	【講演】 奈良の仏像 【講師】 国立奈良文化財研究所所長・文学博士　小林剛	Aコース「吉野方面」(8.10～11) 奈良－当麻寺－栄山寺－蔵王堂－吉永神社－如意輪寺－後醍醐天皇陵－竹林坊（泊）－吉野－宮滝－丹生川上中社－森野薬草園－室生寺－奈良 Bコース「飛鳥方面」(8.10) 奈良－南阪寺（条里制）－今井－大和歴史館－石舞台－飛鳥寺－多武峯－奈良 Cコース「奈良市内」(8.10) 奈良－薬師寺－唐招提寺－法隆寺・中宮寺－奈良	約530名	－
—	—	【講演】 日本の歴史の特異性 【講師】 駐日アメリカ大使　E・O・ライシャワー	Aコース「静岡・山梨方面」(8.8～10) 東京－久能山－登呂－竜華寺－身延山（泊）－梅平－新府城址－甲府－恵林寺－東京 【講師】武井正教（東京都立新宿高） Bコース「都内見学」(8.9) 寛永寺－東洋文化研究所－湯島聖堂－六義園－清澄庭園 【講師】江上波夫（東洋文化研究所所長）	約500名	－
—	—	【講演】 東西文化の交渉について 【講師】 京都大学人文科学研究所教授　会田雄次	Aコース「神戸市内」(8.5) 神戸港－六甲山 Bコース「鶴林寺・姫路方面」(8.7) 【講師】加藤得二（姫路城修理現場主任・前文部技官）	約400名	－
—	—	【講演】 日本における古代オリエント研究の発達について 【講師　】三笠宮崇仁	「秩父屋台囃子・盆栽村」(7.29) 「埼玉県内見学」(7.31) 【講師】塩入亮忠（喜多院住職） 浦和－川越－吉見－熊谷－行田 Aコース「秩父方面」(8.1) 行田古墳－三峰山 Bコース「水戸方面」(8.1) 野田－成田－香取－鹿島－水戸	約500名	21日間(7.31～8.20) 「中近東・欧州・アメリカ」 カイロ－アテネ－ローマ－ナポリ－ピサ－フィレンツェ－ミラノ－ウィーン－ハンブルク－アムステルダム－パリ－ロンドン－サンフランシスコ－ホノルル
—	—	【講演】 世界史の中におけるアジア史の位置づけ 【講師】 前東京大学教授　三上次男 【講演】 教育課程改訂について 【講師】 教育課程審議会専門委員・お茶の水女子大学教授　尾鍋輝彦	Aコース「成田・加曽利貝塚」(7.27～28) 東京駅－佐倉市東勝寺－成田山新勝寺－芝山仁王尊－埴輪博物館－芝山古墳－加曽利貝塚－金鈴塚古墳－證誠寺－神野寺－マザー牧場（泊）－金谷港－久里浜－ペリー上陸記念碑－横須賀市博物館－記念艦三笠－追浜夏島－称名寺・金沢文庫－神奈川条約調印所跡－神奈川県立博物館－品川駅 Bコース「都内見学」(7.27) 明治大学考古学陳列館－宮内庁書陵部・楽部－大蔵集古館－日本経緯度原点標識－喜多流能舞台－大円寺	約400名	22日間(7.27～8.17) 「欧州・中近東」 アムステルダム－ロンドン－ミュンヘン－パリ－マドリード－フィレンツェ－ローマ－アテネ－イスタンブール－イェルサレム－カイロ
—	—	【講演】 日本近代化に関する諸問題について 【講師】 東京大学教授　小西四郎	「甲府市内」(8.1) 甲府城－武田神社－甲府市内－善光寺 Aコース「長野県」(8.3～4) 県民会館－竜王－新府城址－台ケ原－国界橋－高島城－諏訪下社－塩尻峠－松本城－明科－善光寺－豊野－湯田中（泊）－松代－典厩寺－川中島古戦場－上田城－小諸城 Bコース「河口湖方面」(8.3) 県民会館－石和－日下部－放光寺・恵林寺・向岳寺－大善寺市之蔵－下黒駒－御坂峠－河口湖－富士浅間神社－御師屋敷－谷村－大川駅	387名	22日間(8.5～26) 「中近東・欧州」 テヘラン－カイロ－アテネ－ローマ－フィレンツェ－ミラノ－ミュンヘン－ウィーン－パリ－マドリード－ロンドン－アムステルダム
—	—	【演題】 近代史へのアプローチ 【講師】 東京大学助教授　芳賀　徹 【演題】 歴史学と現代 【講師】 東京大学教授　堀米庸三	【総括】平井正士（東京都立千歳高等学校長） Aコース「北関東見学コース」(8.2～3) 新宿－古河城址－下野薬師寺跡－竜興寺・道鏡塚－下野高田専修寺－益子西明寺－那須国造碑－侍塚古墳－塩原温泉（泊）－今市－例幣使街道－足利鑁阿寺・足利学校－世良田長楽寺・東照宮－東京 【担当】近藤常夫（東京都立千歳高）・人見春雄（東京都立文京高）・川口　博（東京都立向丘高） 【記録】山本幸次（東京都立千歳高）・毛利和夫（東京都立小石川高） Bコース「東京都内一日」(8．2) 国立博物館前・講堂（講演）・寒洋館－東照宮・清水堂・秋色桜・西郷隆盛銅像・彰義隊墓・両大師・寛永寺－笹の雪－千住回向院－浄関寺－浅草寺・浅草神社・伝法院庭園－長命寺－三囲神社－清澄庭園－東京駅 【講師】西山松之助（東京教育大学教授）・杉山二郎（国立博物館文部技官）・林　亮勝（大正大学講師） 【担当】林　亮勝（大正大）・新甫貴爾（東京都立青山高） 【記録】小林信三（東京都立千歳高）・赤津　貞（東京都立杉並高）	417名	23日間(8.6～8.28) 「中近東から欧州へ」 テヘラン－シラーズ－ペイルー－カイロ－アテネ－ローマ－フィレンツェ－ミラノ－ミュンヘン－ウィーン－パリ－マドリード－ロンドン－アムステルダム (41名参加) 【担当】美山進（福岡県立明善高） 【記録】平沢実（東京都立小山台高）・間山寿男（東京都府中市立第一中学校長）ほか10名

大会名	期日	会場 （開催地及び会場）	大会委員長	大会主題	シンポジウムテーマ （コーディネーター及びパネリスト）	分科会主題及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導助言者、		
						分科会1	分科会2	分科会3
11回 富山	昭和45年 （1970） 7.28～31	富山県富山市 富山県民会館	蜷川彰夫（富山県立雄峰高等学校長）	－	－	【主題】歴史的な見方・考え方を深めるための指導過程をどのようにすればよいか 【総括】橋本俊正（富山県富山市立大泉中学校長）・小西信三（富山県庄川町立庄川小学校長） 【発表者】 1　野口秀夫（富山県富山市立広田小） 2　松浦泰重（富山大学教育学部付属中） 【司会】古石宣隆（富山県小矢部市立石動中学校教諭）・石金勇三（富山県富山市立三郷小） 【記録】安川映徹（富山県富山市立豊田小）・石井義雄（富山県富山市立大泉中）・志村　勲（富山県富山市立堀川小）・堤　弘康（富山県富山市立広田小）・小又文夫（富山県富山市立五番町小）	【主題】新しい歴史像の構成―伝統と進歩― 【総括】安川　実（富山県立雄山高等学校長）・高井進（富山県立富山高） 【発表者】 1　江上幹夫（富山県立上市高） 2　天野行成（富山県立伏木高） 3　戦後史をどのように指導するか　吉岡一男（富城県仙台高） 4　新しい歴史像の構成―伝統と進歩(近代史に焦点をおいて)―　黒川陵英（山梨県立日川高） 【司会】松永公英（富山県立礪波高）・金野　正（宮城県築館女子高） 【記録】武岳亮英（富山県立富山工高）・米原　寛（富山県立富山工高）・金尾秀隆（富山県立富山東高）・細川健太郎（富山県立高岡高）・豊田是正（富山県立新湊高）・西川　弘（富山県立富山高）・河合久則（富山県立福野高）・白岩浮雄（富山県立氷見高）・石岡敬夫（富山県立福光高）	【主題】近・現代史におけるナショナリズムの諸問題 【総括】森丘　実（富山県立魚津高副校長）・中川聰作（富山県立富山中部高） 【発表者】 1　松岡　享（富山県立富山高）・辻　純雄（富山県立礪波高） 2　19世紀におけるナショナリズムの扱い―ドイツと中国の場合―　西川　浩（静岡県立掛川西高） 3　広津和生（福岡県立北九州高） 【司会】中川聰作（富山県立富山中部高）・大塚保（福岡県立戸畑高）・石田徳行（静岡県立掛川西高） 【記録】斉藤敏雄（富山県立富山工高）・酒井幸一（富山県立桜井高）・飯田宗映（富山県立高岡高）・西野正彬（富山県立大沢野工高）・松岡　茂（富山県立桜井高）・原田　宏（富山県立高岡商高）・大窪　隆（富山県立礪波高）・皆月弘行（富山県立高岡高）・大畑　年（富山県立新川女子高）・永井宗聖（富山県立入善高）・松原利喜三郎（富山県立福野高）・五十嵐茂男（富山県立上市高）
12回 東京	昭和46年 （1971） 8.3～6	千代田区 日本都市センター	鈴木貞三（東京都立西高等学校長）	－	－	【主題】児童・生徒の興味関心を高めるための指導はどうしたらよいか 【総括】中村忠久（東京都新宿区立大久保中学校長） 【発表者】 1　小学6年の歴史学習における人物の扱いを中心として　寺師信之（東京都大田区立蒲谷小） 2　中学校における歴史学習の指導について　梅本重臣（東京都港区立港南中） 3　中学校における思考力を高める具体的方法について　竹田英生（東京都新宿区立牛込第三中） 【司会】太田裕良（東京都小金井市立東中）・真弓矢（東京都杉並区立桃井第三小） 【記録】清水竜光（東京都新宿区立大久保中）・並河茂（東京都板橋区立中台中）	【主題】古代史の学習のなかで「文化の形成と発展」をどう指導するか―郷土資料の活用を重視して― 【総括】荒川　潤（東京都立一橋高等学校長） 【発表者】 郷土資料の活用を重視して　杉島平晴（奈良県立生駒高） 【司会者】中村春寿（奈良県立奈良高）・古暮正雄（東京都立第三商高）・渡辺忠胤（東京都立国立高）・池上彰彦（東京都立九段高） 【記録】大畑正一（東京都立文京高）・藤波智源（奈良県立奈良高）・中谷宇二郎（奈良県立大宇陀高）・池上彰彦（東京都立九段高）・藤波智源（奈良県立奈良高）・渡辺忠胤（東京都立国立高）	【主題】アジアの近代化をどのように考えるか 【総括】藤黒正明（東京都立向丘高等学校長） 【発表者】 1「高校学習指導要領」および現行「世界史B」教科書における「アジアの近代化」の取り扱いについて　赤松儀彦（東京都立田園調布高） 2　人物を主題学習上で扱う場合の問題点　鈴木健一（東京都立石神井高） 【司会】望月照和（東京都立八潮高）・高谷　功（宮城県仙台高） 【記録】亀岡良平（東京都立文京高）・塩田徹（東京都立文京高）・目賀田嘉夫（東京都立白鷗高）
13回 仙台	昭和47年 （1972） 8.3～6	仙台市 宮城県民会館 仙台市 勾当台会館	大竹金弥（宮城県仙台第一高等学校長）	－	－	【主題】古代の東北をどう教えるか 【発表者】 1　古代の東北をどう教えるか―小学校6年の歴史学習における地域教材の活用を中心として―　吉田晉（宮城県仙台市立木町通小） 2　古代の東北をどう教えるか―中学校の歴史学習を中心として―小松卯一（宮城県仙台市立台原中） 3　古代の東北をどう教えるか―小中高一貫して―　斎藤俊郎（宮城県岩出山高） 【司会】清水　宏（宮城教育大付属小）・大宮亀久男（宮城県仙台市立岩切中） 【記録】丸山文昭（宮城県仙台市立中田中）・小島茂夫（宮城県仙台市立荒町小）	【主題】幕藩体制の展開をどう教えるか―地方史を歴史の流れにどう位置づけるか― 【発表者】 高倉　淳（宮城県白石高）・石垣　宏（宮城県石巻高） 【司会】斎藤鋭雄（宮城県宮城第一女子高）・富樫繁之（宮城県仙台女子高） 【記録】山崎勝弘（宮城県白石女子高）・桜井伸孝（宮城県涌谷高）	【主題】近代から現代への移行期をどう教えるか 【発表者】 1　近代から現代への移行期をどう教えるか―1898年の世界を通して―　渡辺義之（宮城県加美農高） 2　帝国主義と第一次世界大戦　佐野督郎（宮城県岩出山高） 3　ジョセフ・チェンバレンを主題学習で扱う場合　高橋守雄（宮城県立第三女子高） 4　主題学習「孫文」　加藤正春（東京都立杉並高） 【司会】台　靖（東京都立青山高）・佐藤英樹（宮城県仙台第二高） 【記録】小西敬二（宮城県古川高）・山田弘志（宮城県古川高）・松本三弥（宮城県名取高）
14回 東京	昭和48年 （1973） 7.31～8.3	千代田区 日本都市センター	森　杉多（東京都立練馬高等学校長）	－	－	【主題】歴史教育における小・中・高の一貫性をどのようにとらえるか―人物の取り扱いを中心に― 【発表者】 1　歴史学習における人物の扱いについて　神門　蔚（東京都世田谷区立玉川小） 2　小・中の関連と人物学習について　大森晴美（東京都田無市立第一中） 3　小・中・高の一貫性を考慮しながら、歴史教育はどのようにすすめたらよいか―人物の扱いを中心として―　太田　公（東京都新宿区立東戸山中） 4　高校日本史教育の独自性は何か―特に人物の取扱いをめぐって―　池上彰彦（東京都立九段高） 【司会】清水竜光（東京都新宿区立大久保中）・佐藤　勇（東京都千代田区立一橋中） 【記録】鈴木光治（東京都世田谷区立弦巻小）・佐藤道男（東京都立玉日市高）・中村公敬（東京都新宿区立牛込第三中）	【主題】文化を総合的に学習させるには、どのようにしたらよいか―身近な資料の活用と学習指導案の構成― 【発表者】 1　水野　一（岐阜県立岐阜北高） 2　渡辺平良（栃木県立宇都宮東高） 【司会】鈴木英夫（岐阜県立岐阜北高）・桜沢利夫（栃木県立宇都宮高）・林道卯一郎（東京都立富士高） 【記録】古暮正雄（東京都立第三商高）・岩本武寿（東京都立墨田川高）・佐藤　仁（東京都立上野高）・今田洋三（東京都立上野高）・斎藤光司（東京都立九段高）・三浦五郎（東京都立千歳丘高）・山田利夫（東京都立青山高）	【主題】文化圏学習をどのように指導すればよいか 【発表者】 1「東アジア文化圏」の指導について　亀岡良平（東京都立文京高） 2　東ヨーロッパ文化圏の取り扱いについての試案　赤松儀彦（東京都立田園調布高） 3　西欧文化圏の展開　穂積達郎（宮城県白石女子高） 【司会】小林新三（東京都立千歳高）・中村道雄（東京都立西高）・毛利菊夫（宮城県仙台第三高） 【記録】斎藤源三郎（東京都立紅葉川高）・小関辰巳（東京都立目黒高）・目賀田嘉夫（東京都立白鷗高）・川島次郎（東京都立青山高）・小長井重雄（東京都立明正高）・南本　宏（東京都立深川高）
15回 神奈川	昭和49年 （1974） 8.3～5	箱根町 箱根高原ホテル	手島益次郎（神奈川県高等学校教科研究会歴史分科会長・神奈川県立横須賀高）	－	－	【主題】小中高を通じて、児童・生徒の歴史に関する意識やイメージと結びつけながら、地域の特性に適応しつつ内容の精選をどのように考えるか 【発表者】 1　歴史的な見方・考え方を育てる歴史学習―小中高を通じての事例研究「開国を通して」―　有馬純律（神奈川県横浜市立いちょう小） 2　小・高の関連をふまえた中学校社会科歴史的分野の指導―「鉄砲の伝来」の学習を通して―　窪田弥一（東京都台東区立忍岡中） 3　歴史学習(日本史)のあり方をめぐって―高校からみた小中高の関連―　金井忠雄（東京都立小松川高） 4　中・高の一貫性を考慮しながらの内容の精選―とくに「ヨーロッパ人の来航をめぐる世界史」との関連を中心にして―　石井武夫（都立白鷗高） 【司会】竹田英生（東京都府中市立第二中）・金子省治（神奈川県栄光学園高） 【記録】中村公敬（東京都新宿区立牛込第三中）・太田　公（東京都文京区立第十中）	【主題】限られた時間数の中で、日本史学習はどのような視点で精選を行なって進めたらよいか 【発表者】 1　ありのままふだん着の授業実践例　宮内正勝（埼玉県立浦和第一女子高） 2　レポート学習の一例―歴史的思考力を育てる指導―　井上隆男（神奈川県鎌倉学園高） 3　商業高校での日本史の指導　渡辺智都子（東京都立第三商高） 【司会】遠藤勢津夫（神奈川県立西湘高）・古暮正雄（東京都立第三商高） 【記録】小沢明夫（神奈川県立柏陽高）・北村幹雄（神奈川県立港北高）	【主題】精選を行なう反面、日本史に関してどのように内容を深めた指導を行なったらよいか 【発表者】 1　地域の身近な歴史事象を教材資料として　江竜喜之（滋賀県立長浜北高） 2　鎌倉や神奈川の郷土資料を用いて　内海恒雄（神奈川県立湘南高） 【司会】小森武三郎（神奈川県立横浜緑ヶ丘高）・毛利和夫（東京都立西高） 【記録】加藤禎三（東京都立大森高）・笠原昌二（東京都立八潮高）

司会、記録者 分科会4	分科会5	記念講演者	史跡見学地	参加人数	海外研修報告
―	―	【演題】 日本の山岳信仰―とくに立山の場合― 【講師】 富山大学教授　高瀬重雄 【演題】 ヨーロッパ史の虚像と実像 【講師】 東京大学助教授　木村尚三郎	【総主任】斉藤道保(富山県立井波高等学校長) Aコース「室堂・芦峅・宇奈月・黒部峡谷」(7.30～31) 富山ー千寿ヶ原ー美女平ー室堂ー美女平ー千寿ヶ原ー芦峅寺ー宇奈月(泊)ー鐘釣ー欅平ー宇奈月駅 【担当】 武岳亮英(富山県立富山工業高)・奥田淳爾(富山県立泊高)・真正威(富山県立雄峰高) 【講師】五十嵐精一(富山県社会教育課) Bコース「大日岳・立山・黒部湖」(7.30～31) 富山ー芦峅寺ー千寿ヶ原ー美女平ー室堂ー大日岳ー剣御前(泊)ー大汝山ー雄山ー東ーの越ー大観峰ー黒四ダムー扇沢ー信濃大町 【担当】伊藤　等(富山県立雄峰高)・鈴木範子(富山県立雄峰高)・山上了信(富山県富山市立楡原中) 【講師】佐伯立光(立山町役場総務課) Cコース「富山・高岡・井波方面」(7.30) 富山ー浮田家ー広貫堂ー伏木勝興寺ー二上山万葉ラインー氷見海岸ー高岡老子製作所(銅器)ー井底瑯泉寺(木彫)ー栃榁野ー富山 【担当】千秋謙治(富山県富山市立井波中)・成田武浩(富山県立井波高)・平尾信磨(富山県富山市立三成中)・伊藤曜覧(富山県立雄峰高) 【講師】吉岡英明(高岡市教育センター)	503名	―
―	―	【演題】 古代史と私―日本古代史の再検討をテーマとする― 【講師】 作家　松本清張	【総括】平川正士(東京都立南多摩高等学校長) Aコース「千葉県(上総・下総)方面」(8. 5～6) 御茶ノ水駅・聖橋ー笠森寺ー大原幽学遺跡ー常世田薬師ーヤマサ醤油ー(泊)ー伊能忠敬遺跡ー観福寺ー滑河観音ー竜角寺ー東京駅 【担当】川口　博(東京都立南多摩高)・赤津　良(東京都立杉並高)・毛利和夫(東京都立西高)・蒲田辰之(東京都立南多摩高) 【記録】宮沢嘉夫(都立白鵬高)・山内雅四(都立南多摩高) Bコース「東京都内(旧江戸城とその周辺)」(8.5) 東京駅丸ノ内口ー和田倉門ー皇居桔梗門前ー大手門ー東御苑・同心番所・旧本丸・天守跡・汐見坂・旧二の丸(庭園)・北桔橋門など―内堀(一周)ー半蔵門ー桜田門ー祝田橋ー内濠通りー坂下門ー大手門ー平川門ー科学技術館ー神田ー聖橋ー御茶ノ水駅ー後楽園ー國學院大學(考古学資料室・大学図書館[久我家文書])ー渋谷駅 【担当】沢井景之助(東京都立小山台高)・中村匡男(東京都立南高)・中島規男(東京都立桜町高)・宇野頃之介(東京都立小山台高)・茅原昌二(東京都立八潮高)・滝沢　順(東京都立大泉高) 【講師】樋口清行(國學院大学教授)・山本幸次(都立千歳高)	417名	21日間(8.7～8.27) 「エジプトから欧州へ」 カイローアテネーローマーナポリーフィレンツェーピサーフィレンツェ-ミラノ-フランクフルトーチューリッヒ-ルツェルン-ミュンヘン-ライン下りーマインツ-コブレンツ-フランクフルト-パリーロンドン-アムステルダム(43名参加) 【記録】鈴木弘子(東京都城右高)・蜂須賀真人(愛知県聖霊学園)ほか19名
―	―	【演題】 日本史上の東北地方 【講師】 東北大学教授　高橋富雄 【演題】 ワイマール体制の精神状況 【講師】 東北大学教授　宮田光雄	Aコース(8.5) 仙台ー大崎八幡神社ー青葉城跡ー仙台市立博物館ー国分寺跡ー多賀城跡・壺の碑ー多賀城廃寺ー瑞巌寺ー[船]ー塩釜港ー塩釜神社ー仙台 Bコース(8.5～6) 仙台ー多賀城(陳列室・壺の碑・廃寺)ー塩釜港ー平泉(高館)ー金鶏荘・新鈴(愛隣館[泊])ー中尊寺ー観自在王院跡ー無量光院跡ー毛越寺ー岩出山(有備館)ー仙台	577名	21日間(8.8～8.28) 【行程は前年発表の要項による】 「古代から近代まで　欧州一周」 アテネーローマーナポリーフィレンツェーピサーフィレンツェーヴェネツィアーインスブルクーチューリヒーフランクフルトーライン下りーフランクフルトーベルリンーハンブルグーロンドンーパリーロアール地方ーパリーアムステルダム(35名参加)
―	―	【演題】 古代国家の形成と朝鮮―6世紀の屯倉― 【講師】 東京大学教授　井上光貞	【総括】小倉　寛(東京都立深沢高等学校教頭)・山本幸次(東京都立千歳高) Aコース「武蔵野(深大寺・国分寺)方面」(8.2) 新宿駅西口ー深大寺ー武蔵国分寺跡ー正福寺ー平林寺ー新宿駅西口 【講師】矢島仁吉(獨協大学教授)・　大川　清(国士舘大学助教授) 【担当】渡辺忠胤(東京都立多摩高等学校教頭)・川口　浩(東京都立南多摩高)・赤津　貞(東京都立杉並高)・佐々木虔一(東京都立東高) Bコース「鎌倉(一泊二日)」(8.2～3) 鎌倉駅ー段葛ー鶴岡八幡宮ー国宝館ー大蔵幕府跡ー頼朝墓ー覚園寺ー鎌倉宮ー杉本寺ー亀ヶ谷ー化粧坂ー銭洗弁天ー寿福寺ー光明寺(泊)ー称名寺ー金沢文庫ー極楽寺ー東慶寺ー円覚寺ー大船駅 【講師】安田三郎(鎌倉国宝館)・小倉　寛(東京都立深沢高等学校教頭) 【担当】小倉　寛(東京都立深沢高等学校教頭)・沢井景之助(東京都立小山台高)・宇野頃之介(東京都立小山台高)・加藤槙三(東京都立大森高)・中村匡男(東京都立深沢高)	379名	24日間(8.4～8.27) 「中近東・欧州」 カイローアレキサンドリアーペイルートーイスタンブールーローマーナポリーマドリッドートレドーミュンヘン-パパリア地方ーパリーロアール地方ーパリ(ルーブル美術館)ーロンドンーコペンハーゲン(41名参加)
【主題】 限られた時間数の中で、世界史の指導はどのような視点で精選を行って進めたらよいか 【発表者】 1　精選についての私見　渡辺正俊(山梨県立甲府南高) 2　世界史授業の展開にあたっての私見と実践　大沢知来(神奈川県立西湘高) 3　世界史授業内容の精選化　塩田　徹(東京都立日比谷高) 【司会】 寺沢精哲(神奈川県立光陵高)・亀岡良平(東京都立清瀬高) 【記録】 赤松儀彦(東京都立田園調布高)・中村道雄(東京都立西高)	【主題】 精選を行なう反面、世界史に関してどのように内容を深めた指導を行なったらよいか 【発表者】 1　世界史におけるサブ・テーマ学習について　大下専一・桜井正雄(静岡県立清水南高) 2　イスラム文化圏学習の一実践授業　中島正徳(神奈川県立多摩高) 3　深化のために「選択世界史」をどのように実施するか　宇野沢伸和(東京都立国立高) 【司会】 桜井義英(神奈川県立横浜緑ヶ丘高)・桑島良平(東京都立国立高) 【記録】 山本正俊(神奈川県立逗子高)・岸川誠利(神奈川県立追浜高)	【演題】 歴史小説を書きながら 【講師】 作家　永井路子	Aコース「箱根周辺」(8.4～5) 金場ー深良用水ー金場(泊)ー芦ノ湖スカイラインー箱根峠ー箱根考古館ー箱根関所跡・関所資料館ー旧東海道杉並木ー精進ヶ池石仏群ー万巻上人墓ー箱根神社ー(昼食)ー箱根新道ー草雲寺ー小田原城天守ー小田原駅 【担当】稲葉　博(神奈川県立小田原城内高)・片子沢千代松(神奈川県関東学園高)・池田米造(神奈川県立旭丘高)・川口　博(神奈川県立南多摩高) 【記録】稲葉　博(神奈川県立小田原城内高) Bコース「中伊豆・静岡方面」(8.4～5) 金場ー箱根神社ー箱根関所跡ー伊豆長岡温泉(泊)ー願成就院ー江川邸・韮山町立博物館ー反射炉ー田子の浦港ー興津清見寺ー天王山遺跡ー(昼食)ー久能山東照宮ー登呂遺跡ー臨済寺ー静岡駅 【担当】落合美博(静岡県立城北高)・中田正之(静岡県立沼津東高)・西岡昭夫(静岡県立三島高)・手島芙真(静岡県立清水西高)・杉山満(静岡県清水市立商業高)・森口英生(静岡県立静岡工業高)・倉員保海(東京都立立川高) 【記録】武田　修(東京都麹町学園女子高)	336名	22日間(8.8～8.29) 「中近東・欧州をめぐる」 アテネーイスタンブールーローマーナポリーローマーフィレンツェ-ミラノ-インターラーケンーチューリヒートレドーマドリッドーロンドンーパリーロアール地方ーパリ(ルーブル美術館)ーコペンハーゲンーハンブルグーリューベック(44名参加)

大会名	期日	会場 （開催地及び会場）	大会委員長	大会主題	シンポジウムテーマ （コーディネーター及びパネリスト）	分科会主題及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導助言者、 分科会1	分科会2	分科会3
16回 東京	昭和50年 （1975） 7.30～8.2	千代田区 国立教育会館	鈴木貞三（全歴研会長・前東京都立戸山高等学校長）	－	－	【主題】小中高の関連を考慮しながら、それぞれの段階で歴史学習の指導をどのように進めるか 【総括】清水龍光(東京都文京区立第六中) 【発表者】 1　効果的に資料を活用し、自分の考えを深めていく子どもの育成－歴史的内容の学習を通して－　石毛隆夫(東京都品川区立上神明小)・谷川昭三(東京都豊島区立巣鴨小) 2　教材の精選と深化について－幕末の政治過程の扱いを通して－　林　巌(東京都世田谷区立烏山中) 3　歴史的思考力を高めるための内容の精選－特に幕藩体制の動揺のうち「新しい学問」を中心として－　斉藤一美(東京都大田区立馬込中) 4　小中高の関連をふまえての歴史学習の進め方　宇野順之助(東京都立小山台高) 【司会】大森晴美(東京都田無市立第一中)・窪田彌一（東京都台東区立忍岡中） 【記録】太田　公(東京都文京区立第十中)・黒崎キクヨ(東京都杉並区立松渓中)	【主題】学習内容の精選と深化をふまえ、日本史学習における生徒の興味・関心をおこさせるには、どのようにしたらよいか 【総括】古松　彰(東京都立九段高等学校教頭) 【発表者】 1　問題意識をもって、自主的に学ぶことをめざして　北村幹雄（神奈川県立港北高） 2　歴史を見つめる眼を開かせるには　金井忠雄（東京都立小松川高） 3　日本史に学習意欲をおこさせるいくつかのこころみ　斎藤俊郎（宮城県大河原商高） 【司会】栗山　繁（東京都立葛飾野高）・吉岡一男（宮城県仙台高） 【記録】沢井景之助(東京都立小山台高)・五十嵐和敬(東京都立日比谷高)・斎藤光司(東京都立九段高)・角田勝武(東京都立九段高)・池上彰彦(東京都立九段高)・渡辺智都子(東京都立第三商高)	【主題】学習内容の精選と深化をふまえ、日本史学習の中で近現代史をどのように取り扱ったらよいか 【総括】中薗　崇(東京都立武蔵高等学校教頭) 【発表者】 1　近現代史学習の問題点をふまえて　荒井克博（富山県立上市高） 2　大正期の指導に際しどのように教材を選び配列するか　大森義宏（東京都立竹早高） 【司会】宇都宮　勇（東京都立日比谷高）・高井　進（富山県立富山高） 【記録】春田隆義(東京都立国分寺高)・古谷一郎(東京都立一橋高)・田中公一(東京都立三田高)・内山栄哉（東京都立城南高）・加藤祐三(東京都立大森高)
17回 群馬	昭和51年 （1976） 7.26～29	草津町 草津温泉ホテルホワイトタウン	五十嵐富夫（前群馬県立太田女子高等学校長）	－	－	【主題】改訂教育課程において小中高の関連を考慮しながら、社会科における歴史分野をどう位置づけるか 【総括】高山吉重(群馬県立万場高等学校長) 【提案】 1　50年度討論会をふまえて　八木啓次（群馬県立高崎工高） 2　中学校歴史的分野「貴族のおとろえと武士の進出」を中心として　串田智夫（群馬県高崎市立南八幡中） 3　50年度の討論会をふまえて　野口和子（お茶の水女子大学文教育学部附属高） 【司会】大市恒夫（群馬県立桐生南高）・渡辺忠胤(東京都立多摩高等学校教頭) 【記録】井上浩一(群馬県立境高)・倉員保海(東京都立立川高)	【主題】関連教科との連携を考慮しながら、日本史の学習指導の内容をどのように精選するか 【総括】工藤三寿男(群馬県立館林高等学校教頭) 【提案】 1「鎌倉文化」の授業展開を例に　今井郁男（群馬県立桐生女子高） 2　主題学習による日本史・選択学習を実践して　小暮公男（東京都立永山高） 【司会】西村幹夫(群馬県立富岡高)・林道卯一郎（東京都立武蔵村山高） 【記録】大崎　進(群馬県立前橋東商高)・萱原昌二（東京都立高島高）	【主題】日本史の学習指導の深化のために、資料（史料・体験学習・視聴覚教材など）をどう扱うか 【総括】池田秀夫(群馬県立盲学校長) 【発表者】 1　身近な史料の活用－「多胡碑」の利用－　大沢玄之七（群馬県立伊勢崎東高） 2　近代史特講、文化史特講での例　吉田宗茂（東京都立練馬高） 【司会】渋谷　浩(群馬県立利根農林高)・勝股通剛(東京都立城北高) 【記録】今井英雄(群馬県立中央高)・滝沢　順(東京都立大泉高)・渋谷　浩(群馬県立利根農林高)
18回 東京	昭和52年 （1977） 7.28～29	千代田区 国立教育会館	荒川　潤（全歴研会長・東京都立江北高等学校長）	－	－	【主題】小中高の歴史教育の一貫性を考慮し、発達段階に応じて指導内容をどう精選するか 【発表者】 1　小学校6年の「歴史的内容領域」では、何を、どこまで深めるか　目賀田八郎(東京都文京区立窪町小)・藤原直之(東京学芸大付属小金井小)・稲葉謙蔵(東京都北区立堀船小)・落合静男(東京都新宿区立市谷小)・小野正俊(東京都新宿区立四谷第五小) 2　日本国憲法の成立－戦後史の一環として－　関根正男(東京都中野区立第九中) 3　高校の立場から　中村匡男(東京都都立玉川高) 【司会】宮沢嘉夫（東京都立足立高）・渡辺邦雄(東京都練馬区立大泉学園中) 【記録】宇野順之助(東京都立小山台高)	【主題】日本文化の総合学習を一層充実するために、日本史の内容構成をどうするか 【発表者】 1　高校日本史学習における文化の扱い方　菱刈隆永（東京都立千歳高） 2　日本文化の総合学習を一層充実するために、日本史の内容をどう工夫するか－民俗文化の学習の視点－　河上一雄（東京都立富士高） 【司会】鈴木　明（東京都立墨田川高） 【記録】真中幹夫(東京都立足立高)・小暮公男(東京都立永山高)	【主題】日本史の指導において、地方の文化の学習を充実するにはどうしたらよいか 【発表者】 1　遠州国学の学習を通して　高田岩男（東京都立深川高） 2　グループ研究による地方文化の学習を試みて　佐藤満洋（大分県立佐賀関高） 【司会】元木光雄（東京都立大附属高） 【記録】吉田宗茂(東京都立練馬高)・三条和男(東京都立武蔵村山高)
19回 大分	昭和53年 （1978） 7.31～8.2 ※九歴研第7回大会と合同	別府市 ホテル清風	藤原正敦（大分県立雄城台高等学校長、九州高等学校歴史教育研究協議会長）	人間づくりを目指す歴史教育 －新教育課程と主体的・自発的な歴史学習のあり方－	人間づくりを目指す歴史教育-新教育課程と主体的・自発的な歴史学習のあり方- 【提案】高村鉄太郎(大分大附属小)・槙島隆靖(大分県大分市立碩田中)・首藤哲明(大分県立臼杵高)・佐藤哲哉(愛媛県立東温高)・菱刈隆永(東京都立千歳高等学校教頭)・渡辺正俊(山梨県立河口湖高) 【司会】木許正生(大分県教委指導主事)・中薗　崇(東京都立練馬高等学校長) 【助言】佐藤照雄(文部省教科調査官)・星村平和(文部省教科調査官) 【記録】大間一男(東京都立田園調布高)・滝沢　順(東京都立大泉高)・山添博司(大分県立別府鶴見丘高)・佐藤公治(大分県立大分東高)・金井忠雄(東京都立小松川高)・林道卯一郎(東京都立武蔵村山高)	【主題】教材の構成とその取扱いについて-近現代史を素材として小・中・高の一貫性を考える- 【提案】 1「戦争への道」の実践から-近・現代史を素材として、小・中・高の一貫性を考える-　佐藤一行（大分大学附属小） 2　教材の構成とその取扱いについて-近・現代史を素材として、小・中・高の一貫性を考える-　渡辺達也（大分県中津市立緑ヶ丘中） 3　満州事変をどう扱うか-高校の場合-　木村清治（東京都立足立高） 【司会】首藤哲明（大分県立臼杵高）・高橋明広（東京都立北野高） 【記録】野尻晃弘（大分県立佐伯鶴城高）・浜小路悦生（大分県立別府青山高）	【主題】日本史における主題学習について－テーマとその展開－ 【提案】 1　織田信長の統一事業　中野　翠（鹿児島県立錦江湾高） 2　杉田玄白　菅満津江（福岡県立筑紫丘高） 【司会】三重野勝人（大分県立大分東高）・林道卯一郎（東京都立武蔵村山高） 【記録】加茂全弘（大分県立別府青山高）・泥谷道男（大分県立森高）	【主題】地方史の研究成果の活用について－日本史学習を深めるために－ 【発表者】 1　日向における小藩分立体制確立期を事例として　佐藤郁夫(宮崎県立小林商高) 2　豊後中世史を例として薬　政博(大分県教委指導主事) 【司会】吉田豊治(大分県立別府鶴見丘高)・生沢英太郎(兵庫県立西宮高) 【記録】矢口孝芳(大分県立国東高)・阿南悦子(大分県立大分上野丘高)
20回 東京	昭和54年 （1979） 7.30～8.2	千代田区 国立教育会館	丸山外史（東京都立東大和高等学校長）	新しい歴史教育を目指して	新教育課程と歴史教育 【分科会報告・提案】各分科会司会者1名ずつ 【司会】中薗　崇(東京都立練馬高等学校長)・宮沢嘉夫(東京都立足立高等学校教頭) 【助言】佐藤照雄(文部省教科調査官)・星村平和(文部省教科調査官) 【記録】中田基臣(東京都立足立東高)・駒井　真(東京都立足立西高)・山中　豊(東京都立瀧江高)	【主題】小・中・高の歴史教育の一貫性を考慮し、新指導要領に即し、歴史学習の指導をどのようにすすめたらよいか。 【提案】 1　第6学年の歴史的内容領域で歴史上の人物を中心として時代の景観を捉えさせる指導計画の工夫　目賀田八郎(東京都文京区立窪町小)・小野正俊(東京都日野市立第七小) 2　中学校における歴史学習への意欲を高める指導の実践－特に人物学習、郷土学習を中心として－　土井　進(東京都文京区立第五中) 3　ルネサンスから市民革命までの流れ－小・中・高の一貫性と学習内容の精選を考える－木内　巌(東京都立八潮高) 【司会】関根正男(東京都中野区立第九中)・小宮進(東京都立新宿高) 【記録】松尾孝子(東京都千代田区立西神田小)・宇野順之助(東京都立小山台高)・野口英男(東京都立昭和高)	【主題】日本史教育における文化の総合的学習を充実させるためにはどのようにしたらよいか。 【提案】 1「文化」をどう理解したらよいか　今田洋三（東京都立上野高） 2　文化の総合的学習について－律令国家の形成・発展期を事例として－　萱原昌二（東京都立高島高） 【司会】滝沢　順(東京都立大泉高)・奥山英男(東京都立三鷹高) 【記録】小暮公男(東京都立明正高)・佐藤道男(東京都立永山高)	【主題】日本史教育において、地域社会の歴史と文化の学習をどのように取り入れ、発展させていったらよいか。 【発表者】 1　日本史教育において，地域社会の歴史と文化の学習をどのように取り入れ，発展させていったらよいか。米原　寛（富山県立富山中部高） 2　私の古代史実践－奈良時代の武蔵と足立－　木村清治(東京都立足立高) 【司会】安蔵復也（東京都立富士高）・河上一雄（東京都立富士高） 【記録】吉田宗茂（東京都立練馬高）

司会、記録者		記念講演者	史跡見学地	参加人数	海外研修報告
分科会4	分科会5				
【主題】限られた時間数の中で世界史の学習はどのように進めるか―アジア史を中心に― 【総括】丸山外史(東京都立小山台高等学校教頭) 【発表者】 1　世界史構成の新しい視点　矢沢　明(埼玉県立寄居高) 2　世界史の構成と精選化への努力　小宮　進(東京都立新宿高) 【司会】中島正徳(神奈川県立多摩高)・倉員保海(東京都立立川高) 【記録】井関幸子(東京都立武蔵高)・水間　純(東京都立雪谷高)・斎藤源三郎(東京都立紅葉川高)・村木逸子(東京都立九段高)・鈴木智夫(東京都立九段高)・長谷川弘之(東京都立狛江高)	限られた時間数の中で世界史の学習はどのように進めるか―ヨーロッパ史を中心に― 【発表者】 1　文献史料の取り扱いを中心として　榛澤俊雄(埼玉県立寄居高) 2　精選の視点と方法　石田好徳(千葉県立匠瑳高) 【司会】宇野沢伸和(東京都立国立高)・木村　卓(千葉県立千葉女子高) 【記録】佐藤周造(東京都立小山台高)・赤松儀彦(東京都立田園調布高)・塩田　徹(東京都立日比谷高)・桑島良平(東京立国立高)・小沢郁郎(東京都立府中高)・中村道雄(東京都立西高)	【演題】 遊牧国家と渡来人 【講師】 東京大学教授　護　雅夫	Aコース「川崎・横浜方面」(8.1) 川崎―川崎大師平間寺―川崎宿―鶴見総持寺―生麦事件の碑―神奈川宿(成仏寺[ペポン等宿所]・慶雲寺[フランス領事館]・清滝寺[イギリス領事館])・鉄道開通記念碑・日刊新聞発祥地―重慶飯店(昼食)―神奈川運上所跡・横浜町会所跡・日米和親条約調印地・海岸教会(日本基督公教会発祥地)―外人墓地―三渓園―横浜 【講師】木村邦雄(川崎市立高等学校)・子沢千代松(神奈川県関東学院高等学校) 【担当】中村匡男(東京都立玉川高)・小倉　寛(東京都立深沢高等学校教頭) 【記録】林道郎一郎(東京都立武蔵村山高) Bコース「群馬方面」(8.1～2) 浅草―(東武伊勢崎線)―館林―善導寺(榊原康政墓)―雲竜寺(田中正造廟)―茂林寺(文福茶釜)―(昼食)―長楽寺(新田氏墓)・東照宮―満徳寺(縁切寺)―岩宿遺跡・赤城人類文化研究所―伊香保観山荘(泊)―観音塚古墳―多胡碑―高崎 【担当】山本拳次(東京都立千歳高)・鈴木　明(東京都立秋川高舎監長) 【記録】井上健郎(群馬県立高崎女子高)	421名	23日間(8.4～8.26) 「欧州一周」 カイロ―ローマ―ピサ―フィレンツェ―ヴェネツィア―コルタナタンペツィオードロミテ渓谷―インスブルク―ミュンヘン―ウィーン―プラハ―ロンドン―マドリッド―トレド―マドリッド―パリ―アムステルダム(43名参加)
【主題】 関連教科との連携を考慮しながら、世界史の学習指導の内容をどのように精選するか 【総括】 横山 浩(群馬県立板倉高等学校長) 【発表者】 1　地理・倫社との連携　田中　吉(群馬県立藤岡女子高) 2　世界史の進度と倫社　赤松儀彦(東京都立田園調布高) 【司会】 松井正樹(群馬県立富岡高)・中村道雄(東京都立西高) 【記録】 清水健二(群馬県立伊勢崎東高)・浅川浩二(東京都立芝商業高等学校教頭)	【主題】 世界史の学習指導の深化のために、資料(史料・体験学習・視聴覚教材など)をどう取扱うか 【総括】 田島正平(群馬県立富岡高等学校長) 【発表者】 1　特に授業計画及び進度との関連について　井上健郎(群馬県立高崎女子高) 2　課題学習と主題学習　中島正徳(神奈川県立多摩高) 【司会】 丑丸幾三(群馬県立渋川高)・阪本藤彦(奈良県立北大和高) 【記録】 今井克一(群馬県立太田商高)・台　靖(東京都立青山高)	【演題】 東国の古代文化 【講師】 前群馬大学教授　尾崎喜左雄	【総括】井上健郎(群馬県立高崎女子高) Aコース「碓氷関・安中・富岡方面」(7.28～29) 草津―鬼押出―坂本宿―碓氷関―妙義山麓(泊)―中山道杉並木―安中教会―富岡製糸場・富岡高校(昼食)―高崎 【講師】五十嵐富夫(群馬県高等学校教育研究会歴史部会顧問)・橋爪　聡(群馬県立富岡高等学校) 【担当】西村幹夫(群馬県立富岡高)・松井正樹(群馬県立富岡高) 【記録】大間一男(東京都立田園調布高) Bコース「岩宿及び粟毛方面」(7.28～29) 草津―鬼押出―坂本宿―碓氷関―妙義山麓(泊)―総社宝塔山古墳―山王廻寺―岩宿遺跡―桐生(昼食)―鑁阿寺―足利学校―足利駅 【講師】松島栄二―(前橋市教育委員会)・相沢忠洋(赤城人類文化研究所)・工藤三寿男(群馬県立館林南高等学校)・岡田立真(群馬県立大泉高等学校) 【担当】大市恒夫(群馬県立桐生南校) 【記録】金井忠雄(東京都立小松川高)	304名	21日間(8.1～8.21) 「ソ連から欧州へ」 モスクワ―レニングラード―モスクワ―コペンハーゲン―ハンブルグ―ウィーン―アテネ―ローマ―太陽街道―ナポリ―フィレンツェ―ジュネーブ―ドーバー海峡―ロンドン―コペンハーゲン(17名参加) 【記録】石井武夫(東京都立白鷗高)
【主題】 現代社会の形成の歴史的過程の理解を容易にするため、世界史の学習内容をどう理解したらよいか 【発表者】 桑島良平(東京都立国立高) 【司会】 加藤正春(東京都立八潮高)・八木啓次(群馬県立高崎工高) 【記録】 米村直子(東京都立高島高)	【主題】 世界史の指導において、文化圏学習を充実するにはどうしたらよいか 【発表者】 1　教育課程の改訂と「文化圏学習」 目賀田嘉夫(東京都立白鷗高) 2　文化圏学習について　川崎　寛(大分県立大分上野丘高) 【司会】 台　靖(東京都立青山高) 【記録】 小関辰己(東京都立目黒高)	【演題】 禅と現代 【講師】 鉄舟会師家・高歩院住職　大森曹玄	Aコース「都内見学」(7.30) 皇居桔梗門前―皇居(新宮殿・東御苑)―東京芸術大学資料館―寛永寺 【講師】泉　宏尚(東京芸術大学芸術史料館)・浦井正明(寛永寺執事) 【担当】赤津　貞(東京都立大森高等学校教頭)・近藤　梓(東京都立江北高)・斉藤光司(東京都立九段高)・木内　敏(東京都立八潮高)・山　英男(東京都立三鷹高)・ 【記録】石井秀夫(東京都立高島高)・萱原昌二(東京都立高島高) Bコース「筑波・霞陸太田・水戸方面」(7.30～31) 上野駅―筑波研究学園都市―筑波山神社―新治廃寺―西念寺―笠間稲荷―(泊)―西山荘―瑞竜山―水戸城跡・弘道館―茨城県歴史館―偕楽園―水戸駅 【講師】渡辺忠雄(東京都立多摩高)・荒川　潤(全国歴史教育研究協議会会長)・久野勝弥(茨城県立水戸第二高)・寺門守男(茨城県立太田第一高)・江原忠昭(茨城県立水戸第一高) 【担当】山本拳次(東京都立千歳高)・渡辺忠胤(東京都立多摩高等学校教頭)・川口　博(東京都立北高等学校教頭)・亀岡良平(東京都立清瀬高)・広川誠(東京都立北高)・永浜先義(東京都立松原高)・金井忠雄(東京都立小松川高) 【記録】滝沢　順(東京都立大泉高)	384名	20日間(7.30～8.18) 「欧州大陸を南から北へ」 アテネ―ローマ―ナポリ―ローマ(バチカン)―フィレンツェ―ベネツィア―ウィーン―マドリッド―コルドバ―グラナダ―マラガ―パリ―ロンドン―ベルリン―コペンハーゲン(34名参加) 【記録】遠藤隆二(東京都立足立西高)
【主題】 文化圏学習の効果的取り扱いについて―現代世界形成との関連において― 【発表者】 1　文化圏学習について―現代世界形成との関連において―　湖崎正浩(熊本県立阿蘇高) 2　イスラム文化圏の成立と発展について　森　正紀(佐賀県立太良高) 3　文化圏学習―教材の精選・構造化について―吉田純雄(大分県立津久見高) 【司会】 加来野友貞(大分県立大分舞鶴高)・桑島良平(東京都立国立高) 【記録】 清原　徹(大分県立日田三隈商高)・飯沼基司(大分県別府市立別府商高)	【主題】 世界史における史料の精選と活用について―歴史的思考力の育成をはかるために― 【発表者】 1　資料精選の基本的なあり方について　前田陽二(長崎県活水高) 2　思い切った教材の精選で学力格差を克服する試み　亀岡良平(東京都立清瀬高) 【司会】 阿部近一郎(大分県立佐伯鶴城高)・渡辺正俊(山梨県立河口湖高) 【記録】 今永　修(大分県立中津南高)・岩尾康晴(大分県立雄城台高)	【演題】 海舟とその時代 【講師】 お茶の水女子大学教授　勝部真長	【史跡見学講話】 国東六郷満山文化と宇佐神宮 【講師】中野幡能(大分県立芸術短大教授) 「国東めぐり」(8.1～2) 別府―熊野磨崖仏―真木大堂―富貴寺―豊後高田(泊)―応暦寺―無動寺―天念寺―長安寺―宇佐神宮―福沢諭吉生家―自性寺大雅堂―中津駅	466名	―
【主題】 世界史教育において，文化圏学習をどのようにすすめていったらよいか。 【発表者】 1　世界史教育において，文化圏学習をどのようにすすめていったらよいか。増田克彦(東京都立国分寺高) 2　世界史教育において，文化圏学習をどのようにすすめていったらよいか―インド文化圏学習を中心として―　遠藤隆二(東京都立足立西高) 【司会】 那須貞美(東京都立久留米西高)・米村直子(東京都立高島高) 【記録】 赤松儀彦(東京都立駒場高)・長谷川弘之(東京都立狛江高)	【主題】 新しい世界史教育法とくに方法論について。 【発表者】 1　思考力を育てながら学習方法を習得できる世界史学習　岩沢重雄(栃木県立今市工高) 2　世界史における人物学習の試み―フランス革命とナポレオン時代に関して―　櫛井征四郎(岩手県立盛岡第一高) 3　グループの発表学習を中心に―プリント学習と問答学習とを組み合わせた世界史の授業実践例―　飯田國雄(東京都立白鷗高) 【司会】 芳賀秀明(東京都立野津田高)・桑島良平(東京都立国立高) 【記録】 村木逸子(東京都立九段高)・藤本貴久(東京都立片倉高)	【演題】 歴史教育と民俗学 【講師】 国学院大学名誉教授　樋口清之	Aコース「皇居・都内見学」(8.1) 皇居東御苑―国立公文書館―千鳥ヶ淵戦没者墓苑―内濠周辺―英国大使館―半蔵門―三宅坂―最高裁判所―桜田門―湯島聖堂―東京大学総合資料館―伝通院―サンシャイン60・巣鴨拘置所跡 Bコース「川越・埼玉古墳・秩父方面」(8.1～2) 川越市・喜多院・東照宮―行田市・さきたま風土記の丘・埼玉古墳群・資料館―長瀞・養浩亭(泊)―吉田町・椋神社―加藤織平墓―小鹿野町―音楽寺―金昌寺―秩父市民俗博物館―西武秩父駅	407名	―

大会名	期日	会場 （開催地及び会場）	大会委員長	大会主題	シンポジウムテーマ （コーディネーター及びパネリスト）	分科会主題及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導助言者、 分科会1	分科会2	分科会3
21回 東京	昭和55年 (1980) 7.28～30	千代田区 国立教育会館	荒川　潤（東京都立両国高等学校長）	歴史教育における宗教の取り扱い方	1　大学入試をめぐって 【提案】 村上栄一（兵庫県立神戸高）・菅井茂（宮城県仙台向山高） 【司会】 目賀田嘉夫（東京都立北園高等学校教頭） 2　新教育課程と歴史教育 【パネリスト】 笠原昌二（東京都立高島高）・滝沢順（東京都立大泉高） 【司会】 渡辺忠胤（東京都立忠生高校長） 【助言】 佐藤照雄（文部省視学官）・星村平和（兵庫教育大助教授） 【記録】 滝本幸子（東京都立芝商高）・法隆康一（東京都立東村山高）・早渕昭秀（東京都立大附属高）・唐沢勇（東京都立大森東高）	【主題】歴史学習における仏教の取り扱い 【提案】 1 「一遍上人の旅」－絵伝を通して仏教・世相・風俗・生活を考える－　長田健介（東京都中野区立谷戸小） 2　鎌倉時代における仏教の取り扱いについて－小中高の関連性、一貫性から考察した中学校の取り扱い－　加藤　悟（東京都杉並区立荻窪中）・赤松　環（愛媛県立宇和島南高） 【司会】 関根正男（東京都中野区立第九中）・池上彰彦（東京都立九段高） 【記録】 足立知子（東京都練馬区立石神井中）・内山栄哉（東京都立城南高）	【主題】 近代社会とキリスト教 【提案】 1　明治前期におけるキリスト教の役割と性格－民権運動・民衆宗教とも関連させて－　佐々木虔一（東京都立東高）・長峰重久（東京都立東高） 2　キリスト教と国家権力の対立－信教の自由の保障を中心として－　川さゆり（東京都立江戸川高） 【司会】 黒川陸英（山梨県立吉田高等学校教頭）・宇野頃之助（東京都立小山台高）・吉田宗茂（東京都立練馬高） 【記録】 松本　馨（東京都立松原高）・福士発夫（東京都立府中西高）	【主題】 民間信仰と生活文化 【発表者】 1　江戸後期の民主文化を扱って－民衆文化見直しの視点－　鈴木幸彦（岩手県立宮古高） 2　農村の生活と六甲山系の雨乞い　田辺真人（兵庫県立御影高） 【司会】 小野寺正人（宮城県河南高）・田中五郎（東京都立練馬高）・河上一雄（東京都立富士高） 【記録】小暮公男（東京都立明正高）・木村清治（東京都立足立高）
22回 岩手	昭和56年 (1981) 7.31～8.3	岩手県 岩手県民会館・盛岡市総合福祉センター・岩手県水産会館・岩手県自治会館	金子富雄（岩手県立盛岡養護学校長）	現代を生きるための歴史教育を求めて	高校における歴史教育と大学入試 【提案】 1　歴史教育と大学入試をめぐる諸問題－共通一次試験（世界史）を中心に－　高橋司男（岩手県立一関第一高） 2　高校における歴史教育と大学入試について　河上一雄（東京都立富士高） 【司会】林道卯一郎（東京都立大島高等学校教頭）・鈴木直（岩手県教委指導主事）	【主題】小・中・高の一貫性を考慮した郷土史学習は，どのようにすすめたらよいか。 【提案】 1　小学校第6学年社会科歴史教材の中に、地域の歴史的素材をどのように取り入れるか。 村上　勉（岩手県盛岡市立仙北小） 2　地域素材と社会科学集－志波城のもつ意味－　千葉明伸（岩手県盛岡市立黒石野中） 3　日本列島における人類文化の発生－とくに、岩手県湯田町大台野遺跡の研究と小・中・高の一貫性を考慮した郷土の歴史学習－菊地強一（岩手県立釜石南高）・阿部竹彦（岩手県立水沢高）・新田康夫（岩手県前沢町立前沢中）・菅原　寛（岩手県北上市立二子小） 4　小・中・高の関連性を考えた地域学習の指導について　大谷　忠（東京都立八潮高） 【司会】 佐瀬寿朗（岩手県盛岡市立仁王小）・吉田宗茂（東京都立練馬高） 【記録】 田中　力（岩手県向中野学園）・鎌田次彦（岩手県向中野学園）	【主題】日本史の指導において，地域学習及び生活文化をどう扱ったらよいか。 【提案】 1　古代東北の蝦夷について　金崎　洋（岩手県立宮古北高） 2　地域学習の実践例について－近世の秋田－　竹内一朔（秋田県立秋田高） 【司会】 金井忠雄（東京都立小松川高）・桑島　平（岩手県立黒沢尻北高） 【記録】小井田芳蔵（岩手県立平館高）・佐々木秀美（岩手県岩手高）	【主題】生徒の多様化に対応する日本史教育はどうあればよいか。 【発表者】 1　生徒の多様化に対応する日本史教育は，どうすればよいか。 鈴木　宏（岩手県立盛岡第三高） 2　日本史学習への地域史教材導入の試み　大木　茂（栃木県立茂木高） 【司会】 古川幹夫（岩手県立沼宮内高）・安蔵復也（東京都立富士高） 【記録】 井上恒三郎（岩手県立盛岡北高）・村上和彦（岩手県立盛岡北高）
23回 東京	昭和57年 (1982) 7.26～29	国立教育会館	友野正雄（前都立大泉高等学校長）	歴史教育における文化交流の取扱い方	「文化交流の取扱いをめぐる「現代社会」と歴史教育との関連」 【提案】 1　日本史の立場から見た『現代社会』の文化交流の取扱い方とその問題点　宮内正勝（埼玉県立春日部高）・河上一雄（東京都立富士高） 2　文化交流の取扱いをめぐる「現代社会」と歴史教育の関連　小宮　進（東京都立新宿高） 3　文化交流の取扱いをめぐる『現代社会』と歴史教育の関連　宇野沢伸和（東京都立国立高） 【司会】笠原昌二（東京都立高島高）・亀岡良平（東京都立清瀬高）	【主題】文化交流に果した人物をどう取扱うか。 【提案】 1　文化交流に果たした人物をどのように扱うか　西端茂（東京都練馬区立開進第三小） 2　遣唐使の取り扱いについて　足立知子（東京都練馬区立上石神井中） 3　文化交流に果たした人物をどう取扱うか－山上憶良の場合－　守屋兼（千葉県立市川東高） 【司会】 関根正雄（東京都中野区立第九中）・木村清治（東京都立足立高） 【記録】岡部　瞳（東京都杉並区立天沼中）・内山栄哉（東京都立豊島高）	【主題】日本文化の国際交流をどう取扱うか。 【提案】 1　武蔵の渡来人－地域社会における外来文化の受容－　黒木　喬（東京都立北多摩高） 2　幕末・明治初期の文化の国際的興隆－横浜を舞台に－　北村幹雄（神奈川県立港南台高） 3　江戸後期、明治前期における西欧文化の受容－多摩地方の資料発掘を軸にして－　沼　謙吉（神奈川県立城山高） 【司会】安蔵復也（東京都立富士高）・田中五郎（東京都立三田高） 【記録】 渡辺良胤（東京都立小川高）・菊地照夫（東京都立神津高）	【主題】日本国内における文化交流をどう取扱うか。 【発表者】 1　日本国内における文化交流をどう取扱うか－国学の成立と展開－　高田岩男（東京都立深川高） 2　江戸時代後期の庶民の旅　須山英治（神奈川県立瀬谷高） 【司会】 小暮公男（東京都立明正高）・佐藤道男（東京都立永山高） 【記録】 那須貞美（東京都立荻窪高）・遠藤隆二（東京都立江北高）
24回 東京	昭和58年 (1983) 7.27～31	国立教育会館	加藤正春（全歴研会長・東京都立練馬高等学校長）	歴史教育の新しい視点を求めて	歴史教育の新しい視点を求めて 【提案】 各分科会の司会 【司会】 安蔵復也（東京都立富士高）・木内巌（東京都立八潮高）・田中五郎（東京都立三田高） 【記録】 寒竹洋子（東京都立足立新田高）・並木裕美（東京都立足立東高）	【主題】近世の文化財学習を通して生徒の主体的な学習活動をどう育てるか。 【提案】 1　地域にある文化財を活用して、見童を自発的に活動させる歴史的内容領域の指導の工夫　香山絹恵（東京都文京区立林町小）・小倉ゆき（東京都文京区立窪町小）・中里京子（東京都文京区立金富小）・目賀田八郎（東京都文京区立誠之小） 2　近世の文化財学習を通して生徒の主体的な学習活動をどう育てるか　岩岡哲夫（東京都杉並区立松溪中） 3　地域の文化財を活用した江戸時代の学習　菊地照夫（東京都立神津高） 【司会】 関根正男（東京都中野区立第九中）・河上一雄（東京都立富士高） 【記録】 足立知子（東京都練馬区立上石神井中）・松本好弘（東京都立西高）	【主題】近代史において近隣諸国との関係をどう取扱うか。 【提案】 1　アジアの民衆に対し、日本は何をしたか－15年戦争の場合－　石井　喬（神奈川県立富岡高） 2　近代史における近隣諸国との関係　宮内正勝（埼玉県立春日部高） 3　外国世界史教科書に現れた日本の近代化－日本と近隣諸国との関係から－　渡辺正俊（山梨県立富士河口湖高） 4　近代史において近隣諸国との関係をどう取扱うか－「韓国併合」を中心に－　岩崎信夫（東京都立青山高） 【司会】 笠原昌二（東京都立京橋高等学校教頭）・金井忠雄（東京都立小松川高） 【記録】 佐藤洋史（東京都立八王子東高）・山田しのぶ（東京都立向島商高）	【主題】地域学習を通して生徒の主体的な学習活動をどう育てるか。 【発表者】 1　地域学習を通して生徒の主体的な学習活動をどのように育てるか　則武　節（岐阜県立羽島高） 2　学校教育における「地域学習」－文化財学習を中心として「地域学習」を通して生徒の主体的学習をどう育てるか－　磯部博平（静岡県立清水南高） 3　縄文時代の社会と文化－地域教材（スライド等）を使っての試み－　加藤公明（千葉県立千葉北高） 【司会】 長谷川裕次（千葉県教育センター）・長沢直臣（東京都立府中西高） 【記録】 石島克彦（東京都立新宿高）・若菜初（東京都立向丘高）
25回 岐阜	昭和59年 (1984) 7.25～28	岐阜市民会館・岐阜県立婦人生活会館	後藤勝（岐阜県立関高等学校長）	歴史教育の課題と方向	新教育課程における歴史教育のあり方 【提案】 後藤節正（岐阜県立加茂高）・朝倉敏（岐阜県済美女子高）・松浦　勇（岐阜県立岐阜北高） 【司会】 森瀬晃吉（岐阜県立海津北高）・小島駿男（岐阜県立各務原西高）・梅田修身（岐阜県立岐阜商高） 【記録】近藤俊二（岐阜県立大垣工高）・小森泰道（岐阜県立関高）	【主題】地域素材を生かし児童・生徒の歴史に対する興味・関心をどう高めるか 【提案】 1　地域素材を生かし児童・生徒の歴史に対する興味・関心をどう高めるか－単元うつりかわる社会「江馬蘭斎と蘭学」を通して－　柏　和子（岐阜県大垣市立大垣東小） 2　地域の民衆の生き方を教材化することを通して、生徒に人間の真実にふれさせ、時代相をより実感を持って捉えさせていくことを願って－郡上一揆を、どのように教材化し、学習させていったか－　今津利治（岐阜県岐阜市立長良中） 3　地域素材を生かし児童・生徒の歴史に対する興味・関心をどう高めるか　上嶋善治（岐阜県立恵那高） 【司会】 杉原重明（岐阜県墨俣町立墨俣小）・大平橋夫（岐阜県岐阜市立長良中）・長瀬　仁（岐阜県鶯谷女子高） 【記録】 高橋哲男（岐阜県揖斐郡揖斐川町立北方小学校）・小牧　寿（岐阜県岐阜市立陽南中）・富田敏（岐阜県立岐阜農林高）	【主題】地域学習を通して生徒の歴史に対する興味・関心をどう高めるか 【提案】 1　地域学習を通して生徒の歴史に対する興味・関心をどう高めるか。－岐阜県郡上郡の場合－　白石博男（岐阜県立郡上北高） 2　地域学習を通して生徒の歴史に対する興味・関心をどう高めるか。－地域素材「野麦峠と飛彈の女工達」－　稲葉春雄（岐阜県立吉城高） 3　日本史における地域の生活文化の教材化について　中山正秋（愛知県立瀬戸北高） 【司会】 三島　昌（岐阜県立高山高）・浅見恒行（愛知県立南陽高） 【記録】 坂口浩之（岐阜県立益田南高）・高橋教雄（岐阜県立郡上高）	【主題】近現代史の学習を通して生徒の歴史認識をどう育てるか 【発表者】 1　近現代史の学習を通して生徒の歴史認識をどう育てるのか　所　史隆（岐阜県立岐山高） 2　近現代史の学習を通して生徒の歴史認識をどう育てるか－地域の民衆史を軸にした授業実践－　細江金男（岐阜県立岐阜監川高） 3　主題学習の試み　近代日本とアジア－とくに中国・朝鮮との関係史－　別所興一（愛知県立成章高） 【司会】 古田邦明（岐阜県立恵那農高）・長田敬幸（神奈川県立瀬谷西高） 【記録】 加藤善朗（岐阜県立八百津高）・土方二三男（岐阜県立各務原東高）
26回 兵庫	昭和60年 (1985) 7.31～8.2	宝塚市 宝塚グランドホテル	永野正勝（兵庫県高等学校教育研究会歴史部会長・兵庫県立北須磨高等学校長）	歴史教育の課題と方向	歴史教育の課題と方向 【提案】 宮崎和夫（兵庫県神戸市立楠高）・村上栄一（兵庫県立神戸高）・武田信一（兵庫県立三原高）・大仁　洋（兵庫県立芦屋高）・山極徳之（兵庫県立尼崎北高） 【司会】 田村善太（兵庫県立加古川南高）・平都　修（兵庫県立加古川東高） 【助言者】 佐藤照雄（静岡大学教授）・星村平和（兵庫教育大教授） 【記録】 森脇正文（兵庫県立生野高）・木田季久（兵庫県立志知高）	【主題】歴史教育における小・中・高の一貫性を図るために、どのような指導をするか－鎖国を例として－ 【提案】石畝美三（兵庫県神戸市立神出小）・遠藤裕一（兵庫県神戸市立星和台小）・油谷健夫（兵庫県立須磨高） 【司会】日高敬了（兵庫県神戸市立諏訪山小）・徳弘荊夫（兵庫県神戸市立本庄中）・宮崎和夫（兵庫県神戸市立楠高） 【記録】 詫間正章（兵庫県神戸市立菅の台小）・太田謙作（兵庫県神戸市立神戸中）・高田　功（兵庫県神戸市立須磨高）	【主題】日本史の授業における「地域社会の歴史と文化」をどのように指導するか 【提案】 1　日本史学習と地域紙の接点　広岡俊二（兵庫県立東灘高） 2　地域の敵視と文化を教材化する試み　兼本雄三（兵庫県立加古川北高） 【司会】 村上栄一（兵庫県立神戸高）・川浪昌之（兵庫県立加古川南高） 【記録】 治田　晟（兵庫県立高砂高）	【主題】日本史の授業で東アジア文化圏の中の日本文化をどのように指導するか 【発表者】 1　地域文化と東アジア文化圏の接点を求めて－地域紙から日本史へ、日本史から東アジア史へ－　岩井忠彦（兵庫県立伊和高） 2　東アジア文化圏の中の日本文化をどのように指導するか－飛鳥文化を中心として－　蒲生眞紗雄（東京都立武蔵高） 【司会】 山本幸信（兵庫県立長田高）・武田信一（兵庫県立三原高） 【記録】 水田全一（兵庫県姫路市立琴丘高）・大道秀樹（兵庫県姫路市立琴丘高）

司会、記録者 分科会4	分科会5	記念講演者	史跡見学地	参加人数	海外研修報告
【主題】 世界史教育における宗教の扱い方－ヨーロッパ－ 【発表者】 1　世界史教育における宗教の扱い方－ヨーロッパ－宗教と国家-ルターとヘンリー8世－村松　明（東京都立昭和高） 2　ヨーロッパ史における教会と国家－中世西ヨーロッパを中心として－　植井　明（東京都立豊島高） 【司会】 宇野沢伸和（東京都立国立高）・木内　厳（東京都立八潮高） 【記録】 米村直子（東京都立高島高）・石井武夫（東京都立白鷗高）	【主題】 世界史教育における宗教の扱い方－アジア－ 【発表者】 1　歴史教育における宗教の取り扱いについて－イスラーム文化圏におけるー考察－石坂正継（山梨県立身延高） 2　世界史教育におけるキリスト教の扱い方－中国の場合を中心として－吉田寛（東京学芸大附属高） 3　世界市場におけるイスラム教の取り扱い方　亀岡良平（東京都立清瀬高） 【司会】中島規男（東京都立成瀬高）・増田克彦（東京都立国分寺高） 【記録】小関辰巳（東京都立目黒高）・小宮　進（東京都立新宿校）	【演題】 日本人と宗教 【講師】 前東京大学教授　笠原一男	Aコース「都内見学」(7.30) ニコライ堂－明治大学考古学陳列館・刑事博物館－国立国会図書館－増上寺－サレジオ教会－イスラム寺院－立正佼成会大聖堂 Bコース「日光方面」(7.29～30) 東武浅草駅－東武日光駅－(泊)－中禅寺湖畔・立木観音－二荒山神社中宮祠－華厳滝－下野三十三箇所大一番清滝観音－東照宮・徳川家康廟所・輪王寺・大猷院・慈眼堂天海僧正墓－日光例幣使街道杉並木－大谷崖堂仏－宇都宮駅	429名	—
【主題】世界史学習において，19世紀をどのような視点に立って指導すればよいか。 【発表者】 1　世界史教育において19世紀をどのような視点でとらえるか－特に東アジア史・南アジア史を中心として－　島貫謙次（岩手県立大東高） 2　19世紀の世界の一断面－18・19世紀のカリブ海域（西インド諸島）の検討－　水村光男（東京都立新宿高） 3　19世紀のヨーロッパとアジアー中国の反植民化と抵抗－　川辺寛子（東京都立八王子東高） 【司会】 菅原　孝（岩手県立岩泉高）・大熊圭祐（岡山県立岡山芳泉高） 【記録】 小野寺昭吾（岩手県立黒沢尻北高）・大橋進（岩手県立釜石南高）	【主題】世界史指導における資料の選択および活用はどうあればよいか 【発表者】 1　世界史指導における資料の選択および活用はどうあればよいのか－史料利用の指導事例を整理し，イラン文化圏の学習を考える－　川井功（岩手県立高田高） 2　「絵で見る」世界史課題研究－生徒の多様化に対応した－指導－　川原　宗（宮城県工高） 【司会】 増子恭一（岩手県立盛岡第三高）・小宮　進（東京都立新宿高） 【記録】 高橋満（岩手県立久慈高）・及川宗享（岩手県立福岡工高）	【演題】「胆沢城から平泉へ」 【講師】岩手大学名誉教授・岩手県立博物館長　板橋源	Aコース「盛岡・花巻・水沢・平泉」(8.2～3) 盛岡駅－啄木記念館－原敬記念館－花巻（宮沢賢治・羅須地人協会・鹿踊り）－猫谷地古墳群－胆沢城跡－高野長英記念館・齋藤実記念館－厳美渓－（泊）－平泉（毛越寺・観自在王院跡・無量光院跡・中尊寺） Bコース「盛岡・遠野・陸中海岸」(8.2～3) 盛岡駅－原敬記念館－大迫－遠野市立博物館・南部曲がり家－釜石－橋野高炉跡－大槌－山田－浄土ヶ浜－宮古（泊）－鳥ノ越－北山崎－田野畑郷土資料館－岩泉・竜泉洞－早坂高原－啄木記念館－盛岡駅	333名	12日間(12.26～1.6) 「アメリカ合衆国・欧州」 ニューヨーク－ロンドン－マドリリード－トレド－コルルトバ－グラナダ－セベリアー－リスボン－パリ－マルセイユ－フランクフルト 【記録】 稲垣良太（愛知県立西尾東高）
【主題】世界史の学習において「文化の交流」をどう取扱うか－古代・中世を中心に－ 【発表者】 1　世界史の学習において、『文化の交流』をどう取扱うか　新目隆（東京都立調布南高） 2　世界史の学習において「文化の交流」をどう取扱うか－8世紀の世界の授業より－　鳥山孟郎（東京都立稲城高） 【司会】 増田克彦（東京都立国分寺高）・水村光男（東京都立新宿高） 【記録】 佐藤　徹（東京都立大泉北高）・古賀謙一（東京都立府中西高）	【主題】世界史の学習において「文化の交流」をどう取扱うか－近・現代史を中心に－ 【発表者】 1　明末・清初の文化の流入について　日下部公昭（東京都立青梅東高） 2　世界史の学習において文化の交流をどう扱うか－主として近・現代を中心として－　中島正徳（神奈川県立多摩高） 【司会】 米村直子（東京都立高島高）・桑島良平（東京都立国立高） 【記録】 川辺寛子（東京都立八王子東高）・山崎茂（東京都立八王子東高）	【演題】辺境としての日本文化 【講師】東京大学教授　芳賀徹	Aコース「東京都内」(7.28) 東京駅－お台場－東禅寺－伊皿子貝塚－済海寺－善福寺－光林寺－外交史料館－汐留駅 Bコース「山梨・静岡方面」(7.28～29) 新宿駅－富士山北口本宮浅間神社－富士山五合目-鳴沢氷穴－青木ヶ原樹海－精進湖－身延山久遠寺（泊）－本栖湖－朝霧高原－曽我兄弟仇討伝承地－白糸滝－大石寺－富士宮本宮浅間大社－富士駅－東京駅	309名	16日間(7.31～8.15) 「地中海から中欧へ」 アテネ－ミケーネ－ペロポネソス半島－クレタ島－ロードス島－イズミール－ベルガマートロイ－チャナカレ－イスタンブール－ベオグラード－ウィーン－チューリヒ－ロンドン 【記録】 芝田一雄（神奈川県立横須賀大津高）・野口治子（東京家政大学附女子中）
【主題】世界史上の転換期をどのように取扱うか－主として古代・中世－ 【発表者】 1　世界史上の転換期をどのように取扱うか－主として古代・中世－　清水睦夫（大阪府同志社香里高） 2　世界史上の転換期をどのように取扱うか－地中海文明からヨーロッパ文明へ－　河内雅雄（神奈川県立瀬谷高） 【司会】 平群　修（兵庫県立加古川東高）・亀岡良平（東京都立清瀬高） 【記録】 飯田国男（東京都立小山台高）・渡辺修司（東京都立日比谷高）	【主題】世界史上の転換期をどのように取扱うか－主として近・現代－ 【発表者】 1　世界史上の転換期をどのように取扱うか－主として近・現代－　乾征夫（兵庫県立神戸高） 2　世界史上の転換期をどのように取扱うか－主として近・現代－宇野沢伸和（東京都立国立高） 【司会】 勝野　勉（岐阜県立岐阜高）・中村充一（東京都桐朋女子高） 【記録】 平塚　裕（茨城県立笠間高）・大沢和夫（東京都立狛江高）	【演題】歴史的興味・関心を深める歴史教育 【講師】作家　陳舜臣	Aコース「横浜市内」(7.30) 東京駅－本覚寺－掃部山－三殿台遺跡－三溪園－外人墓地－港の見える丘－中華義荘－ペボン館－開港資料館 Bコース「千葉方面」(7.30～31) 東京駅－加曽利貝塚・千葉市立加曽利貝塚博物館－国立歴史民俗博物館－蕉兵衛渡し－宗吾霊堂－龍角寺古墳群・千葉県立房総風土記の丘資料館－伊能忠敬記念館－千葉県立大利根博物館－潮来（泊）－大原幽学遺跡－干潟八万石－伊藤左千夫生家・成東町立民俗資料館－九十九里町立いわし博物館－笠森寺－上総国分寺・国分尼寺址－千葉駅	419名	15日間(8.12～15) 「中国・華北から華中へ」 北京－大同－大原－洛陽－蘇州－上海 【記録】 水村光男（東京都立新宿高）
【主題】世界の一体化の学習を通して生徒の国際的歴史認識をどう育てるか－ヨーロッパ－ 【発表者】 1　1848年革命－東欧の民族解放運動－　伊佐治正昭（岐阜県立岐阜東高） 2　フランス革命を世界史的視点からとらえる授業　大竹克昌（岐阜県立岐阜高） 3　『中学社会・歴史的分野』の教科書における「世界史用語」について　愛知県立高等学校・社会化グループ研究「世界史」研究班・近藤武敬（愛知県立昭和高） 【司会】 瀬戸昭三（岐阜県立羽島高）・佐藤徹（東京都立大泉高） 【記録】 伊藤伯和（岐阜県立土岐北高）・柘植　香（岐阜県立恵那北高）	【主題】世界の一体化の学習を通して生徒の国際的歴史認識をどう育てるか－アジア・アフリカ－ 【発表者】 1　世界史教育とアジア・インドーイギリス東インド会社の動向を中心として－　西脇明美（岐阜県立多治見北高） 2　資料と作業的な学習を取り入れた授業－中国を中心に－　小川徳水（岐阜県立各務原高） 3　世界の一体化の学習を通して生徒の国際的歴史認識をどう育てるかーアジア・アフリカ－　梶原勝（兵庫県立姫路西高） 【司会】 大前匡昭（岐阜県立大垣東高）・山極徳之（兵庫県立伊丹高） 【記録】 渡辺孝之（岐阜県立羽島北高）・箕浦敦子（岐阜県立岐陽高）	【演題】関国美濃と匠丁の国飛彈-律令体制下の岐阜県とその特色- 【講師】岐阜大学教育学部長　野村忠夫	Aコース「大垣・関ヶ原・養老方面」(7.27) 岐阜駅－美濃国分寺・大垣市歴史民俗資料館－南宮神社－不破関跡・不破関資料館－関ヶ原古戦場－笹尾山古戦場－養老寺・養老の滝－輪中堤－岐阜羽鳥駅－岐阜駅 Bコース「関・美濃・郡上・高山方面」(7.27～28) 岐阜－関市(金子孫六日本刀鍛錬場)－美濃市－郡上郡－長滝白山神社－蛭ヶ高原－牧戸－飛騨の里－高山市（泊）－高山市内見学－下呂－美濃太田・名古屋	※記載なし	14日間(8.2～15) 「中国・華北と華南」 北京首都空港(故宮)－ (コース別行動) 長城－居庸関－十三陵参道－定陵－全聚徳・周口店－盧溝橋 西安－大雁塔－茂陵博物館－永泰公主墓－乾陵－始皇帝陵－半坡博物館－鐘楼 【2日間2つのコースに分かれて行動。 河南省博物館－殷代遺跡－二・七記念塔－龍門石窟－白馬寺－宋陵－杜甫故里・袁世凱墓－鉄塔－龍亭－禹王台－相国寺などを見学し、合流】 黄河遊覧区－鄭州－上海－杭州－西湖－-六和塔－魯迅記念館－蘭亭－東湖－禹陵－秋瑾故居－紹興－上海 【記録】 増田克彦（東京都立国分寺高）
【主題】世界史における文化圏学習をどのように指導するか 【発表者】 1　世界史における文化圏学習をどのように理解するか　住田圭司（兵庫県立御影高） 2　世界史における文化圏学習をどのように指導するか－OHPの活用を中心とした文化圏学習の実践的展開－仲元貞夫（兵庫県立姫路東高） 【司会】 梶原　勝（兵庫県立姫路西高）・大仁　洋（兵庫県立芦屋高） 【記録】 池野忠利（兵庫県立生野高）・石井清治（兵庫県立浜坂高）	【主題】世界史において世界の一体化を理解するために主題学習をどのように指導するか 【発表者】 1「世界の一体化」を理解するための主題学習をどのおように指導するか－ヴァイキング（ノルマン人）の活動を中心として－延藤十九雄（兵庫県立長田高） 2　商業革命と生活様式の変容　丸山　博（東京都立成瀬高） 【司会】山極徳之（兵庫県立尼崎北高）・野中貞宏（兵庫県立尼崎稲園高） 【記録】稲岡正信（兵庫県立加古川東高）・西尾孝昌（兵庫県立和田山商業高）	【演題】東アジアと古代の日本 【講師】京都大学教授　上田正昭	Aコース(8.1) 吹田市－万博記念公園－国立民族学博物館－新大阪駅 Bコース(8.1～2) 六甲山－山田(箱木千年)－細川－浄土寺－姫路市(泊)－姫路城－兵庫県立歴史博物館	400名	15日間(8.3～17) 「南欧」 ロンドン－リスボン－ポルトガル－セヴィリャ－アルカサル－ヘレスートレモリノス－マラガ－グラナダ－コルトバ－オルガズートレド－マドリード－アムステルダム－ライデン－ハーグ－デルフト－ロッテルダム－アムステルダム－パリ 【記録】 川島充（東京都立富士高）

大会名	期日	会場 （開催地及び会場）	大会委員長	大会主題	シンポジウムテーマ （コーディネーター及びパネリスト）	分科会主題及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導助言者、 分科会1	分科会2	分科会3
27回 東京	昭和61年 (1986) 7.29～31	千代田区 国立教育会館	渡辺忠胤（東京都歴史教育研究会長・東京都立南多摩高等学校長）	国際理解のための歴史教育	国際理解のための歴史教育 【提案】 若杉　隆（東京都杉並区済美教育研究所）・長沢直臣（東京都立北高）・河上一雄（東京都立富士高）・木下康彦（東京学芸大学附高）・桑島良平（東京都立戸山高） 【司会】 沢井景之助（東京都立荻窪高等学校教頭）・安蔵復也（東京都立小石川高） 【助言者】 佐藤照雄（静岡大教授） 【記録】 佐藤政章（東京都立高島高）・戸川　点（東京都立練馬高）	【主題】自国文化の理解をすすめるために，学習指導法をいかに工夫するか 【提案】 1・2　小中高一貫をめざした小学校歴史的内容領域の学習指導のあり方－正倉院御物を素材として－ 鈴木義昭（東京都大田区立東六郷小）・押尾賢一（東京都足立区立本木東小）・関口修司（東京都文京区立誠之小）・飯島睦子（東京都千代田区立今川中） 3　大仏開眼供養への道　中嶋三雄（東京都立青井高） 4　自国文化の理解を一層進めるために、学習指導法をいかに工夫するか　鈴木義昭（東京都大田区東六郷小）・押尾賢一（足立区立本大東小）・飯島睦子（東京都千代田区今川中）・中嶋三雄（東京都立青井高） 【司会】 若杉　隆（東京都杉並区立久我山小） 【記録】 中里京子（東京都文京区立金富小）・増田礼子（東京都練馬区開進第二小）	【主題】日本史の授業において東アジア文化圏の中の日本文化をどのように指導するか。－日本と世界－ 【提案】 1　東アジア文化圏の中の日本文化をどのように学習するか－中国文化と日本－　石原道明（茨城県立水戸第一高） 2　東アジア文化圏の中の日本文化をどのように指導するか－"元寇"についての一実践－　木下まゆみ（東京都立小石川高） 【司会】 長沢直臣（東京都立北高）・木村清治（東京都立足立高） 【記録】 浅野　治（東京都立富士高）・井口桂子（東京都日体桜華女子高）	【主題】日本史の授業において国際化の進む中で日本をどのように構成するか。 【発表者】 1　（討議？） 2　国際化のすすむなかで、日本史をどのように構成するか－現代の日本と世界－赤羽根行雄（東京都立多摩高） 【提案】 小川信雄（千葉県立船橋高）・赤羽根行雄（東京都立多摩高） 【司会】 河上一雄（東京都立富士高）・横山正治（筑波大学附属高） 【記録】 横尾国和（東京都立羽村高）・佐野和子（東京都新宿区四谷第三小）
28回 神奈川	昭和62年 (1987) 7.29～31	横浜市 横浜市開港記念館・神奈川県立博物館	長田敬幸（神奈川県立瀬谷西高）	国際化時代の歴史教育	国際化時代の歴史教育 【提案】 各分科会の司会者 【司会】 後藤正吉（神奈川県鎌倉学園高）・小林克則（神奈川県立厚木北高） 【記録】 山口清隆（神奈川県立寛政高）・飯山　修（神奈川県京浜女子商高）	【主題】 地域史素材をいかした歴史教育の実践はどのようにしたらよいか（近代） 【発表者】 1　郷土史料を活用した文明開化の扱いについて 鎌倉歴史研究会　本郷貞行（神奈川県横浜市立白根小）・郡司常雄（神奈川県川崎市立西高津中）・北村幹雄（神奈川県立ひばりが丘高） 2　小学校社会科歴史単元での「開国」の扱いについて－「井伊直弼と横浜開港」の実践を例に－　後藤良治（神奈川県横浜市立桜岡小） 3　横浜開港　馬渕宣充（神奈川県横浜市立みたけ台中） 【司会】 土井　進（東京都北区立飛鳥中）・原　誠（神奈川県厚木市立戸室小） 【記録】 浦山和博（神奈川県立白山高）・岩崎孝和（神奈川県立川崎南高）	【主題】 国際的視野の中で地域史の素材をどのように活用するか 【発表者】 1　朝鮮通信使の来日と三浦郡の農漁民　金子武文（神奈川県横須賀市立工高） 2　「黒船来航」をどう教えるか　奥田晴樹（神奈川県立湘南高） 3　国際的視野の中で，地域史の素材をどのように活用するか「近世の新田開発－富士北麓の開発について」宮下悦俊（山梨県立富士河口湖高） 【司会】 根田信隆（神奈川県立川和高）・須山英治（神奈川県立湘南台高） 【記録】 柏木操男（神奈川県立五嶺ヶ台高）・白川里敏（神奈川県立新磯高）	【主題】 国際社会における近現代史をどのように扱うか 【発表者】 1　愛甲郡自由党と大阪事件　川島敏郎（神奈川県立厚木高） 2　軍都相模原の形成－陸軍士官学校の相模原移転と用地買収反対闘争－　岡田敏樹（神奈川県立松陽高） 3　戦後国際政治・経済と日本　福士堯夫（東京都立武蔵高） 【司会】 井上東亜（神奈川県立大井高）・小池清志（神奈川県立大船高） 【記録】 芝　正人（神奈川県立大井高）・坂井久能（神奈川県立横浜立野高）
29回 東京	昭和63年 (1988) 7.27～29	千代田区 東京国立教育会館	岡野敬生（東京都立大泉高等学校長）	現代の課題と歴史教育－歴史の実像を求めて－	現代の課題と歴史教育 【提案】 各分科会報告者 【司会】 横山正治（筑波大学附属高）・桑島良平（東京都立戸山高） 【記録】 千田捷照（東京都立東大和高）・榎本方雄（東京都立永山高）	【主題】 歴史の実像にせまる活き活きとした歴史学習の指導法をいかに工夫するか 【発表者】 1　正倉院御物を素材を用いた小中高一貫の授業 久保田福美（東京都杉並区立第十小）・山本智則（東京都北区立桜田中）・渡辺良胤（東京都立豊多摩高） 【司会】 若杉隆（東京都杉並区立高井戸小）・長沢直臣（東京都立北高） 【記録】 増田礼子（東京都文京区立誠之小）・岡田美緒子（東京都文京区立誠之小）	【主題】 地域学習を通じて歴史認識をどう育てるか 【発表者】 1　将門伝説と神田明神　樋口州男（東京都立忍岡高） 2　授業を通じて感じた地域史学習の問題点とその解決の視点授業実践－千住宿を通してみた江戸時代－と郷土博物館の利用実践　岩本一美（東京都立江北高） 3　地域教材を活用した江戸・明治時代の学習－西ヶ原一里塚、吉宗と飛鳥山、陸奥宗光と旧古河庭園、渋沢栄一と王子製紙－　土井　進（東京都北区立飛鳥中） 【司会】 木村清治（東京都立荒川商業高）・加藤直道（東京都立江北高） 【記録】 木下まゆみ（東京都立富士高）・横尾國和（東京都立羽村高）	【主題】 日本史学習を通じて国際認識をどう育てるか 【発表者】 1　国家を超える視点の必要性－マリア・ルス号事件と大江卓－　関屋真司（東京都立桜水商高） 2　地域と世界を結ぶ指導の試み－川崎の沖縄県出身の女工－　飯盛善夫（神奈川県立多摩高） 【司会】 蒲生真紗雄（東京都立上野高）・赤羽根行雄（東京都立多摩高） 【記録】 磯山進（東京都立成瀬高）・矢島恒之（東京都立城東高）
30回 東京	平成元年 (1989) 7.24～26	江東区 江東区文化センター	岡野敬生（東京都立大泉高等学校長）	現代の課題と歴史教育	－	【主題】 小・中・高の歴史教育を通じて歴史意識をどう育てるか 【発表者】 1　小学校の社会科教育における歴史意識の育成 佐藤正志（東京都渋谷区立長谷戸小） 2　日本の伝統文化の理解を深める授業の工夫－「能」の「国際性を中心として－　笠原吉廣（東京都台東区立上野中） 3　高校世界史教育における「教材」研究の位置と課題－ヒットラー・ユーゲントを中心に－　西牟田哲哉（東京都立江戸川高） 【司会】 松田秀男（東京都三鷹市立北野小）・宇野沢伸和（東京都立富士高） 【記録】 内野秀夫（東京都三鷹市立第三小）・仮屋園巌（東京都立片倉高）	【主題】 地域史の学習を通じて歴史意識をどう育てるか 【発表者】 1　地域の文化財の教材化－葛西城址を教えて－ 加藤　健（東京都立瀧江高） 2「在村蘭学」の研究成果を導入した授業の展開 菊池　卓（栃木県立足利女子高） 【司会】 福士堯夫（東京都立武蔵高）・後藤正吉（神奈川県鎌倉学園高） 【記録】 渡辺良胤（東京都立豊多摩高）・木下まゆみ（東京都立富士高）	【主題】 時代の転換期の学習を通じて歴史意識をどう育てるか 【発表者】 1　鎌倉幕府の本質をどう教えるか－"生徒たちの誤った理解を突き崩す授業"の試み－　三浦隆光（東京都立大泉学園高） 2　宝暦治水と薩摩藩　木村清治（東京都立荒川商高） 【司会】 横尾國和（東京都立青山高）・北村幹雄（神奈川県立ひばりヶ丘高） 【記録】 澤井豊之助（東京都立戸山高等学校教頭）・土屋　隆（東京都立小平高）
31回 群馬	平成2年 (1990) 8.3～5	水上町 水上館	樋口良夫（群馬県立渋川女子高等学校長）	現代の課題と歴史教育－歴史意識の育成をめざして－	【提案】 各分科会報告者（各分科会司会者） 【司会】 今井都男（群馬県立藤岡女子高等学校教頭）・正田安司（群馬県立大間々高等学校教頭） 【記録】 田村浩一（群馬県立前橋高）	【主題】 小・中・高の歴史教育を通じて歴史意識をどう育てるか 【発表者】 1　一人一人の歴史意識を育てる指導のあり方－追及方法の選択を援助する歴史学習はげみカードの導入を通して－　碓井正明（群馬県多野郡新町立新町第一小） 2　高等学校の授業における歴史意識の育成－国風文化を中心とする授業実践例－　羽鳥進一（群馬県立高崎女子高） 【司会】 八木啓次（群馬県立みやま養護学校）・新井久幸（群馬県渋川市立渋川北小）・安井正之（群馬県立桐生高） 【記録】 井上浩一（群馬県立前橋女子高等学校教頭）・渋谷正章（群馬県立吾妻高）	【主題】 地域史の学習を通じて歴史意識をどう育てるか 【発表者】 1　中世社会における下野　江田郁夫（群馬県立鹿沼高） 2　古墳時代の群馬と埋蔵文化財について　秋池武（群馬県教育委員会文化財保護課係長） 【司会】 大沢亥之七（群馬県立桐生高）・山本昭弘（群馬県立高崎高） 【記録】 今泉　洋（群馬県立下仁田高）・大河原紀子（群馬県立桐生西高）	【主題】 時代の転換期の学習を通じて歴史意識をどう育てるか 【発表者】 1　江戸時代初期の儒学をめぐる二・三の問題　永井博（茨城県立茎崎高） 2　日清・日露戦争と群馬県　宮崎俊弥（群馬県立大間々高） 【司会】 富田祥男（群馬県立高崎東高）・西村幹夫（群馬県立前橋女子高） 【記録】 井之浦和男（群馬県立渋川高）・大橋典子（群馬県立館林女子高）
32回 東京	平成3年 (1991) 7.29～8.1	中野区 中野区立中野文化センター	林道卯一郎（東京都立国立高校長）	時代の変化と歴史教育－歴史意識の育成をめざして－	－	【主題】 小・中・高を通してどのような教材をもちいて歴史学習を展開するか 【発表者】 1　人物教材を中心とした社会科学習のあり方と実践－福沢諭吉を通して－ 横田美登里（東京都練馬区立豊玉小）・川村　聡（東京都練馬区立豊玉第二小） 2　生活文化を教材にした学習についての提言－技術史教材の取り扱いについて－ 細谷美明（東京都江戸川区立松江第四中） 【司会】 渡辺良胤（東京都立豊多摩高）・富士道正尋（東京都府中市立第七中） 【記録】 屋部喜美子（東京都北区立滝野川第六小）・鈴木陸志（東京都北区滝野川第二小）	【主題】 自国理解を一層すすめる生活文化学習をどう展開するか 【発表者】 1　地域の古文書による「生活文化」の教材化　重政文三郎（東京都立忠生高） 2　地域の生活文化の主題学習　「道と生活」を テーマとして　川原尚子（埼玉県立伊奈学園総合高） 3　日本史を自分の歴史としてどう捉えるか　大津忠男（茨城県立水戸桜ノ牧高） 【司会】 勝部純明（東京都立高島高）・増田弘邦（東京都立農林高） 【記録】 横尾國和（東京都立青山高）・戸谷広子（東京都立石神井高）	【主題】世界史的視野にたって日本史学習をどう進めるか 【発表者】 1　近代の日本人のアジア観の形成について－主に、日清・日露戦争を通じて－　磯山　進（東京都立日野台高） 2　環日本海国際環境を視野に入れた地域史学習－北陸を中心に－　木越隆三（石川県立金沢錦丘高） 3　鉄道政策からみた近代史の学習について 高橋　哲（千葉県渋谷教育学園幕張高） 【司会】 牧内利之（東京都立高島高）・岩崎信夫（東京都立日黒高） 【記録】 中家　健（東京都立大泉学園高）・川瀬　徹（東京都立向丘高）

司会、記録者 分科会4	分科会5	記念講演者	史跡見学地	参加人数	海外研修報告
【主題】世界史の授業で近代史以前の同時代史をどのように構成するか。 【発表者】 1（討議？） 2 近代以前の同時代史をどのように構成するか－民族移動と中世の開幕－ 奥保喜（東京都立国分寺高） 3 近代以前の同時代史をどのように構成するか－「タタールの平和」と13世紀の世界－鈴木孝（神奈川県立綾瀬高） 【司会】 木下康彦（東京学芸大学附高）	【主題】世界史の授業で現代史をどのように構成するか。 【発表者】 1 戦後日本と東南アジア－賠償・経済協力－ 福士堯夫（東京都立武蔵高） 2 現代史の構想（教材化にあたって） 現代史を考える会 【司会】 桑島良平（東京都立戸山高）	【演題】西洋中世の下層民について 【講師】一橋大学教授 阿部謹也	Aコース 「都内見学」（7.31）昭和史を歩く Bコース 「都内見学」（7.30～31）皇居と江戸の庭園めぐり ※詳細な行程の記載なし	420名	16日間（8.4～19） 「地中海諸国」 デュッセルドルフ－パリ（ヴェルサイユ宮殿・ルーブル美術館）ミラノ－ヴェローナ－パドヴァ－ヴェネツィア－キョジア－ラヴェンナ－サン＝マリノ共和国－フィレンツェ－ピサ－シエナ－アッシジ－ローマ・ヴァチカン市国－ポンペイ－エルコラーノ－ブリンディシ－パトラ－コリンソス－コリンソス遺跡－ミケーネ－アテネ－ピレウス港－エギナ島－ポロス島－イドラ島－アテネ 【記録】安藤恵子（神奈川県大西学園高）
【主題】 国際理解のために人物をどのように教材化するか 【発表者】 1 顔真卿とその時代 岡田健（神奈川県立根岸高） 2 ルネッサンス期のイタリア人マキャヴェリ 堀部宏人（神奈川県立鎌倉高） 3 ファン・ボイ・チャウ－東南アジアの民族運動－ 三谷昇（群馬県立高崎女子高） 4 ルドルフ・ヘス－アウシュビッツ収容所長の証言－ 橋本秀人（神奈川県立富岡高） 【司会】 渡辺和雄（神奈川県立伊志田高）・鈴木孝（神奈川県立綾瀬高） 【記録】 小山 望（神奈川県立岡津高）・松本謙一（神奈川県立水取沢高）	【主題】 現代史の指導内容を、どのように教材化するか 【発表者】 1 ソ連史をどう教えるか－ソ連史からみた現代史－ 佐藤 徹（東京都立大泉高） 2 東ヨーロッパの共産化と冷戦 水谷重美（神奈川県立綾瀬西高） 3イスラム世界」の見方からアプローチする現代史 鳳巻 浩（神奈川県立多摩高） 4 現代文化の諸問題 後藤孝幸（神奈川県立大楠高） 【司会】 和智匡雄（神奈川県立綾瀬高）・早川英昭（神奈川県立藤沢西高） 【記録】石橋 功（神奈川県立東金沢高）・生駒 進（神奈川県立瀬谷高）	【演題】 日本近代国家形成の国際的・国内的条件 【講師】 横浜市立大学名誉教授 遠山茂樹	Aコース「鎌倉」（7.31） 正宗工房－異荒神－今小路発掘現場－八坂神社－寿福寺（伝北条政子・源実朝の墓）－英勝寺（桃山風の仏殿・祠堂）－鎌倉国宝館－鶴岡八幡宮（宝物殿）－丸山稲荷－建長寺（仏殿・庭園） Bコース「北相模」（7.31） 日向薬師（宝物殿）－大山寺（鉄造不動明王）－阿天利神社－洞昌院（太田道灌の墓）－上杉館－三宮比々多神社（狛犬）	427名	16日間（8.4～19） 「河西巡廊と西夏の旅」 上海市内（玉仏寺）－蘭州（甘粛省博物館・白塔山・五泉公園）－武威（大雲寺・雲台寺・海蔵寺・文廟・武威博物館・羅什塔）－張掖（大仏寺・木塔寺）－酒泉（酒泉公園・酒泉博物館）－敦煌（嘉峪関・鳴沙山・莫高窟）－炳霊寺－中衛－銀川－西夏王陵－南関清真寺－北京（天安門広場・故宮博物院）－天青山（17名参加） 【記録】天野さゆり（東京都立井草高）
【主題】 同時代の諸文化圏学習の指導内容をどのように構成するか 【発表者】 1 世界史における西ヨーロッパ中心主義－東欧スラブ文化圏は異端の世界か？－ 清水睦夫（大阪府同志社香里高） 2 世界史における長期16世紀の扱い方－ヨーロッパと中国－ 外月 誠（東京都立深沢高） 3 世界史的認識の見直しによる教材の再構成 川原 崇（宮城県第二女子高） 【司会】 奥 保喜（東京都立国分寺高）・横田浩二（東京都立戸山高） 【記録】 佐藤政章（東京都立高島高）・戸谷広子（東京都立石神井高）	【主題】 近現代史学習の指導をどのように構成するか 【発表者】 1 世界史の授業（過去）と生徒（現在）との対話－戦争と平和の問題を身近な問題として肥えさせるための授業－ 村野一臣（東京都立北多摩高） 2 現代史の授業を振り返る 石倉 修（東京都立大泉学園高） 【司会】 小暮通夫（東京都立北多摩高）・日下部公昭（東京都立田無高） 【記録】 村松 明（東京都立立川高）・杉山智子（東京都立福生高）	【演題】 江戸文化の特色 【講師】 東京教育大学名誉教授 西山松之助 前日実施 【特別企画】 歌舞伎鑑賞（7月26日） 歌舞伎座 通し狂言「義経千本桜」 鮓屋の場、吉野山道行の場、川連法眼館の場	Aコース「忠臣蔵を歩く」（7.29） 丸ビル前－銀行倶楽部（伝奏屋敷）－東京国立博物館－平河門－田村邸跡－吉良邸跡－回向院－深川江戸資料館－永代橋－浅野邸跡－木挽町（森田座・山村座跡）－泉岳寺－細川邸跡－東京駅 Bコース「千葉方面」（7.29～30） 丸ビル前－国立歴史民俗博物館－房総風土記の丘（龍角寺古墳群・岩屋古墳・古民家、旧学習院初等科正堂）－龍角寺－芝山はにわ博物館－成田市内（泊）－成田山新勝寺－伊能忠敬旧宅－観福寺（伊能忠敬墓）－香取神宮－東京駅 【記録】 佐々木虔一（東京都立墨田川高）・茂泉吉則（東京都立南葛飾高）	327名	15日間（8.1～15） 「東欧歴史の旅－東西文化の接点とハプスブルク家の栄光の跡を訪ねて－」 イスタンブール市内（聖ソフィア寺院・トプカプ宮・グランドバザール）－ソフィア（聖ソフィア聖堂・リラの僧院）－ベオグラード（チトー廟）－ザグレブ（聖マルコ教会・聖ステファン教会）－ブダペスト（マーチャーシ教会・ブダ王宮）－ウィーン（シェーンブルン宮殿・ベルベデーレ宮殿）－ブラチスラバ城－ブラハ（プラハ城・シナゴーグ・カレルシュタイン城）（17名参加） 【記録】 宇野沢伸和（東京都立富士高）・日下部公昭（東京都立田無高）
【主題】 同時代の諸地域の学習を通じて歴史意識をどう育てるか 【発表者】 1 インディアンの側からみた米国史－「イシ＝最後の野生インディアン」を通して－ 三上秀一（東京都立日野台高） 2 アフリカからみた14世紀の世界 小暮通夫（東京都立北多摩高） 【司会】 日下部公昭（東京都立第五商高）・矢島恒之（東京都立城東高） 【記録】 村木逸子（東京都立小平高）・杉山智子（東京都立福生高）	【主題】 世界史上の転換期（近現代）の学習を通じて歴史意識をどう育てるか 【発表者】 1 フランス革命を通じて自分自身の生き方を考えさせる授業 石間 元（東京都立志村高） 2 「民衆」の側からみたファシズム（ナチス）－生徒の政治意識・社会認識を問うことを目指して－ 甲野信夫（東京都立向丘高） 【司会】 村松明（東京都立立川高）・後藤孝幸（神奈川県立綾瀬高） 【記録】 中島規男（東京都立小山台高等学校教頭）・赤城 毅（東京都立八王子北高）	【演題】 考古学からみた現代社会 【講師】 古代オリエント博物館長・東京大学名誉教授 江上波夫	Aコース「明治大正期の東京（建築物を中心として）」（7.26） 丸ビル前－日本銀行本店・貨幣博物館－慶応大学図書館・三田演説館・三井倶楽部－東京大学赤門・明治新聞雑誌文庫・菊坂周辺の景観－上野駅 Bコース「多摩の民権運動の歴史・風土を訪ねて」（7.26～28） 新宿駅西口－東京経済大学－聖マリア教会（「先覚の碑」）－安養寺（困民党の碑・塩野倉之助墓）－五日市（憲法草案の碑）－深沢家土蔵・深沢権八墓－五日市市郷土館－「自由」の車人形－立川市内（泊）－東京都埋蔵文化財センター－小島資料館－町田市立自由民権資料館－新宿駅	270名	14日間（8.16～8.29） 「イタリアルネッサンスとフランス革命200年の舞台を訪ねて」 ロンドン（大英博物館・バッキンガム宮殿）－ローマ（ヴァティカン美術館・サン＝ピエトロ聖堂・市内見学）－アッシジ（聖フランチェスコ寺院）－シエナ（市庁舎）－フィレンツェ（ヴェッキオ橋・ウフィツィ美術館）－ラヴェンナ－ヴェネツィア（サン＝マルコ広場・ドゥカーレ宮・ため息橋）－ミラノ（スフォルツェスコ城・スカラ座）－ニース－モナコ－マルセイユ－アルル－アヴィニョン－パリ（ノートルダム・凱旋門・ヴェルサイユ宮殿）（23名参加） 【記録】 日下部公昭（東京都立第五商高）
【主題】 同時代の諸地域の学習を通じて歴史意識をどう育てるか 【発表者】 1 伝統概念の再検討 関野豊（群馬県立太田高） 2 パレスチナ問題－イスラエル建国を中心として－ 松木謙一（神奈川県立大船高） 【司会】 大熊哲雄（群馬県立西邑楽高）・植原政明（群馬県立伊勢崎東高） 【記録】 斉藤敏明（群馬県立太田東高）・茂木サチ子（群馬県立太田女子高）	【主題】 世界史上の転換期（近現代）の学習を通じて歴史意識をどう育てるか 【発表者】 1 大韓帝国期の近代化 塚本延之（群馬県立高崎北高） 2 フランス革命の授業－民衆史の観点から－ 阪口克郎（千葉県立検見川高） 【司会】 三谷 昇（群馬県立高崎女子高）・清水信二（群馬県立前橋東高） 【記録】 山田 覚（群馬県立伊勢崎工高）・黒沢隆一（群馬県立富岡高）	【演題】 中世東国史上における上野の位置と役割 【講師】 東京都立大学教授 峰岸純夫	Aコース「西毛方面」（8.4～5） 水上館－伊香保（蘆花記念館・ハワイ記念館・伊香保関所）－（泊）－妙義神社－貴前神社－富岡製糸工場－高崎駅東口 【記録】 鹿沢定市（群馬県立吾妻高） Bコース「東毛方面」（8.4～5） 水上館－岩宿遺跡－（泊）－長楽寺・東照宮・東毛歴史資料館－天神山・女体山古墳－鍜冶寺寺・足利学校－足利駅 【記録】 正田安司（群馬県立大間々高）	298名	14日間（8.15～8.28） 「中世ドイツと宗教改革の舞台」 ベルリン（ベルリンの壁）－ポツダム（サン・スーシー宮殿・ツエツィーリエンホフ宮殿）－ベルリン市内（国会議事堂・ブランデンブルグ門）－ウィッテンベルグ（ルターの家）－ライプツイヒ（聖トマス教会・バッハ像）－ワイマール（ゲーテの家）－エルフルト（アウグスチン教会）－アイゼナッハ（ワルトブルグ城）－マールブルク－カッセル－ハールメン－ミュンスター－ケルン（大聖堂）－コブレンツ－リュ－ハイデルベルグ－ローテンブルグ－ネルトリンゲン－アウグスブルク（フッガーハウス）－ノイシュバン・シュタイン城－ミュンヘン－ジュネーブ（宗教改革記念碑・ガット本部）－アルプス観光（モンブラン）（19名参加） 【記録】 長澤直臣（東京都立北高）・亀鶴雅之（東京都立小松川高）
【主題】 諸地域の特性をふまえ世界史学習をどう展開するか 【発表者】 1 古代朝鮮の生活と文化－高句麗の古墳壁画のスライドを使った授業－ 長谷川賢（東京都立駒場高） 2 スペイン中世史の再検討 野村昌幸（東京都立北園高） 【司会】 豊田岩男（東京都立上野高） 【記録】 遠藤紳一郎（東京都立広尾高）	【主題】 同時代史上の諸問題をふまえ世界史学習をどう進めるか 【発表者】 1－1 「17・18世紀の世界」－中国とヨーロッパ：茶貿易・シノワリスム（その1）－ 村松 明（東京都立立川高） 1－2 「17・18世紀の世界」－中国とヨーロッパ：茶貿易・シノワリスム（その2）－ 村木逸子（東京都立小平高） 2 ソ連現代史の諸問題 石橋 功（神奈川県立東金沢高） 【司会】 後藤孝幸（神奈川県立湘南高）・後藤健生（東京都立葛西南高） 【記録】 小杉隆一（神奈川県立厚木商業高）・小林和夫（神奈川県拽真女学校高等部）	【演題】 変貌する現代ヨーロッパの歴史的意義 【講師】 東京大学名誉教授 木村尚三郎	Aコース「江戸史跡見学と隅田川下り」（7.31） 東京駅－将門首塚－湯島聖堂－神田明神－東照宮－上野寛永寺－浅草－浅草寺－伝法院庭園－吾妻橋（水上バス・隅田川下り）－浜離宮恩賜庭園－東京駅（解散） 【記録】 松井吉昭（東京都立東高）・會田康範（東京都立東高） Bコース「多摩の史跡と文化財を訪ねて」（7.31～8.1） 立川駅－朝鮮大学校博物館－玉川上水－武蔵国分寺－深大寺－府中市（大国魂神社）－善明寺－高幡不動尊－善済寺－御岳神社－（泊）－玉堂美術館－吉川英治記念館－塩船観音－徳蔵寺－正福寺－西国分寺（解散） 【記録】 篠田明典（岐阜県立岐山高）	253名	13日間（8.3～8.15） 「中国・北朝鮮歴史の旅」 北京（天安門・故宮－Aコース明の十三陵・万里の長城、Bコース盧溝橋・周口店）－平壌市内（万寿台・主体思想塔）－開城市内（南大門・善竹橋・表忠碑）－板門店－王陵・高麗博物館－平壌市内見学（産院・高等学校・託児所・平壌サーカス団・地下鉄・主体思想塔）－瀋陽市内見学（遼寧省博物館・故宮・柳条湖事件現場・北陵公園）－集安市内（好太王碑・将軍塚・五号墓、現地研究者と懇談）－鴨緑江遊覧－大連市内（労虎遊公園・中山広場・旧満鉄本社）－大連港 【記録】 塚本延之（群馬県立高崎北高）・三木健詞（東京都立白鵬高）

大会名	期日	会場 （開催地及び会場）	大会委員長	大会主題	シンポジウムテーマ （コーディネーター及びパネリスト）	分科会主題及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導助言者、 分科会1	分科会2	分科会3
33回 京都	平成4年 (1992) 7.26～29	京都市 西陣織会館・成安女子高等学校	進藤盛隆（京都府成安女子高）	現代に生きる歴史教育	－	【主題】 小・中・高において京都の歴史をどう教材化しているか 【発表者】 1　小学校において京都の歴史をどう展開するか　天下統一への道　織田信長　村上繁樹（京都府京都市立生祥小） 2　身近な史跡に関する調査・研究による主体的学習の工夫　飯田敏弘（京都府京都市立西賀茂中） 3　高校日本史において京都の歴史をどう展開するか　吉田明（京都府京都市立西京商業高） 【司会】 西川弘幸（京都府京都市立塔南高） 【記録】 山内敏輝（京都府京都市立日吉ヶ丘高）・深尾敏一（京都府京都市立西京商高） 【助言者】 川崎晃一（京都教育大学助教授）	【主題】 多様な生徒の興味関心を高める指導法は、どうあるべきか 【発表者】 1　漫画を使った日本史授業　川口敬二（京都府立須知高） 2　実物教材を使った日本史授業　八田哲郎（京都府立西宇治高） 3　いかに攻めるか日本史１年間　永井友昭（京都府立久美浜高） 4　日本史に興味を持たせるための人物史学習　高橋正敏（秋田県立秋田高） 【司会】 椙谷重吾（京都府立峰山高） 【記録】 下村和平（京都府立北桑田高）・丸山貞（京都府洛星高） 【助言者】 鈴木健一（近畿大学教授）	【主題】 教育活動に近現代史をどう位置づけるか 【発表者】 1　十五年戦争史を教えるためのハードウェア　藤田雅之（京都府立山城高） 2　八幡市中ノ山墓地の戦死者調査　谷口公祥（京都府立八幡高） 3　生徒の班発表による十五年戦争史　吉田英紀（京都府立命館高） 【司会】 田中桃代（京都府立八幡高） 【記録】 中川逸也（京都府立洛西高）・辻上博（京都府立鴨沂高） 【助言者】 木坂順一郎（龍谷大学教授）
34回 新潟	平成5年 (1993) 8.3～6	長岡市 ハイブ長岡（長岡産業交流会館）	山田寛悟（新潟県立新潟向陽高）	環日本海文化圏の形成と歴史教育－その課題と実践－	－	【主題】 小・中・高において新潟の歴史をどのように教材化するか 【発表者】 1　身近な地域教材－魚沼の明治維新－　佐藤吉宏（新潟県広神村立広神東小） 2「歴史事象を身近にとらえさせるために」－馬高縄文人の自作ビデオの教材化－　小森ケン子（新潟県小千谷市立小千谷中） 3　地域と視点とした明治期社会の指導－上越地方におけるワイン製造を素材として－　市村清貴（新潟県立三条東高） 【司会】 荻野正博（新潟県立新発田高）・古澤正（新潟県中郷村立岡沢小） 【記録】 半間喜浩（新潟県小千谷市立小千谷小）・小日向一枝（新潟県立安田高）	【主題】 小・中・高において歴史の一貫性をいかに推進するか 【発表者】 1　地域を通して歴史事象を主体的に追及する単元の在り方－「戊辰戦争と河井継之助」の実践から－　広井克行（新潟県長岡市立新町小） 2　現代世界の諸問題と異文化理解を軸とした年間指導計画の作成と「戦後補償問題」での実践　金沢清司（新潟県十日町市立南中） 3　発達段階に応じた日本史教育を－『日本神話』の教材化とその問題点－　伊藤雅一（新潟県立五泉高） 4　中高の歴史教育をいかに結びつけるか－日本史の場合－　富田義道（東京都中村中高） 【司会】 西潟　昇（新潟県立黒埼高）・本間則久（新潟県立新潟西高） 【記録】 高島　徹（新潟県立新津南高）・田巻義元（新潟県立与板高）	【主題】 日本史教育を活性化するには、どうしたらよいか 【発表者】 1　地域教材を生かした日本史教育　藤原圭（新潟県立新潟西高） 2　生徒が興味を持つ日本史教材　横山真一（新潟県立長岡農高） 3　中世日本海水運－絵図と絵巻の背景をめぐって－　松井吉昭（東京都立東高） 【司会】 木村宗文（新潟県立新潟中央高）・羽二生寛興（新潟県立西越高） 【記録】 大塚敏夫（新潟県立新潟向陽高）・余湖明彦（新潟県立新発田高）
35回 和歌山	平成6年 (1994) 8.1～3	紀伊勝浦町 ホテル浦島	鍜地秀和（和歌山県立箕島高）	熊野・くろしお文化圏の形成と展開－歴史教育における課題と実践－	－	【主題】 小・中・高において歴史教育の一貫性 【発表者】 1　子どもの歴史認識を育てる社会科学習－地域素材の教材化を核にした学習－　木村安男（和歌山県和歌山市立四箇郷小） 2　わかる授業のひと工夫－学ばせたいものを学びたいものへと－　速水盛康（和歌山県古座町古座川町組合立古座中） 3　子どもの人権意識の啓発をはかる歴史カリキュラム構成－金沢嘉市の場合－　喜多嶋伸幸（和歌山県立向陽高） 【司会】 森脇善彦（和歌山県立笹田高）・米田寛昭（和歌山県立橋本高） 【記録】 岡　泰宏（和歌山県立紀北工高）・貴志　薫（和歌山県立粉河高）	【主題】 日本史教育における地域史学習をいかに指導すればよいか（前近代） 【発表者】 1　日本史教育への地域史教材の導入事例－南部高校での「古代の南部」の学習－　阪本敏行（和歌山県立熊野高） 2　地域史学習の事例－紀伊国の古代交通路を中心として－　長谷正紀（和歌山県近畿大学附属和歌山高） 3　地域史学習の中に国際化の観点をどう取り入れるか－東京・多摩地方を中心に－　仙田直人（東京都立小平西高） 【司会】 神谷良久（和歌山県立向陽高）・山入桂吾（和歌山県立和歌山第二工高） 【記録】 磯本文夫（和歌山県立青陵高）・岸山芳史（和歌山県立和歌山西高）	【主題】 日本史教育における地域史学習をいかに指導すればよいか（近現代） 【発表者】 1　地域史学習の試み－東京都東部　荒川と足立区の歴史を例として－　金澤利明（東京都立足立西高） 2　未来をみとおすまちづくり－和歌山県白浜町のまちづくり運動を教材にして－　榎本清司（和歌山県立田辺高）・田所鎖平（和歌山県立田辺商高） 3　レディ・ワシントン号と串本　坪野賀一郎（和歌山県立串本高） 【司会】 藤本憲親（和歌山県立南紀高）・道明　照（和歌山県立田辺商高） 【記録】 石垣義朗（和歌山県立御坊商工高）・伊藤幸代（和歌山県立御坊商工高）
36回 東京	平成7年 (1995) 7.31～8.3	千代田区 国立教育会館・虎ノ門ホール 墨田区 東京都江戸東京博物館	奥山英男（東京都立新宿高等学校長）	新しい歴史教育を求めて－生徒の学習意欲をいかに育てるか－	【報告） 1　日本史「A」教科書と大学入試について　宮部精一（東京都立多摩高） 2　世界史「教科書の内容分析」と「大学入試との関連」について　今泉　博（東京都立狛江高） 【司会】 須貝徳成（東京都立松ヶ谷高）・前田達見（東京都立志村高）・牧内利之（東京都立高島高） 【記録】 磯山　進（東京都立羽田高等学校教頭）・宮本久也（東京都立上野忍岡高）	【主題】 身近な地域の生活文化をどう取り扱うか 【発表者】 1　地域の生活文化を探る－地域の人や地域に残されたものから歴史を探る小学生の学習活動－　佐野和子（東京都新宿区立西戸山小） 2　江戸の庶民の旅と信仰－富士講と富士詣を通して－　関　裕幸（東京都豊島区立千早中） 3　江戸の民俗芸能－江戸時代後期の文化－里神楽－　川瀬　徹（東京都立戸山高） 【司会】 樋口秀司（東京都大島町立第二中学校教頭）・勝部純明（東京都立八丈高等学校教頭） 【記録】 佐藤政章（東京都立北高）・小林　誠（東京都葛飾区立桜道中）・藤木正国（東京都立水多摩高）	【主題】 日本史Aにおける内容の構成とその実践をどのようにすすめるか 【発表者】 1　日本史Aにおける地域教材の位置づけ－近代史導入の実践事例：「幕末期小田原藩の内愛外患への対応」－　梶　輝行（神奈川県立相模大野高） 2「日本史A」の構成上の特色と授業展開について　遠山孝典（東京都立新宿山吹高） 【司会】 加藤　健（東京都立蔵前工高）・宮本久也（東京都立上野忍岡高） 【記録】 竹内秀一（東京都立志村高）・吉田洋子（東京都立志村高）	【主題】 日本史学習における生活文化の取り扱いをいかにすすめるか 【発表者】 1　荏園の四季－中世農民の生活と祭礼をカレンダーに－　今野日出晴（東京都立新宿高） 2　東京における大正－昭和初期の生活文化－ある俸給生活者の一日－　山中　豊（東京都立城東高） 【司会】 金澤利明（東京都立足立西高）・戸川　点（東京都立忍岡高） 【記録】 亀岡良平（東京都立向丘商高）・末次紳一郎（東京都立日野高）
37回 千葉	平成8年 (1996) 7.24～26	千葉市 千葉中央ツインビル2号館	長谷川祐次（千葉県立薬園台高等学校長）	新しい歴史教育の創造－地域・民衆からみた歴史像－	－	【主題】 生徒が主体的に取り組む学習方法の追求 【発表者】 1　自ら意欲的に学び取る社会科学習の在り方－体験的な学習活動を取り入れた地域学習を通して－　秋葉一洋（千葉県夷隅郡岬町立古沢小） 2　社会科における形成的評価の具体化に関する研究－特に社会(歴史)認識の形成過程における評価のあり方－　小林弘治（千葉県八千代市立阿蘇中） 3　絵画史料を使った日本史の授業　楳澤和夫（千葉県立津田沼高） 【司会】 越川芳雄（千葉県立千葉東高）・秋葉幹人（千葉県立若松高） 【記録】 高木曜子（千葉県立千葉商高）・鈴木　宏（千葉県立幕張総合高）	【主題】 地域史からみた日本の歴史－地域教材の活用－ 【発表者】 1　大崎台遺跡を教材にした授業－身近に存在する資料から弥生時代の人々の生活を探る－　安部康弘（千葉県立佐倉南高） 2　房総の自由民権研究と授業partⅡ－歩き続けて・教え続けて・考え続けて－　佐久間耕治（千葉県立大原高） 3　安房からみる戦争への道－ワシントン体制から日中15年戦争－　愛沢伸雄（千葉県立安房南高）・荻原岳信（千葉県立安房高） 【司会】 舘石　亮（千葉県立京葉高）・小関準一（千葉県立姉崎高） 【記録】 島飼孝父（千葉県立原緑高）・仲野公史（千葉県立市原高）	【主題】 日本近現代史の授業実践と課題 【発表者】 1　近代日本の歩みと戦争－15年戦争を中心に－　宇野勝子（千葉県日出学園高） 2　神奈川県下の学徒勤労動員－若い世代に戦争をどう伝えていくのか－　笹谷幸司（神奈川県立相模原高） 3　絵画史料から考える文明開化の授業　若杉　温（千葉県史料研究財団研究員） 【司会】 平井良夫（千葉県立柏高）・堀越健樹（千葉県立柏中央高） 【記録】 矢作　享（千葉県立東葛飾高）・小林　純（千葉県松戸市立松戸高）

司会、記録者 分科会4	 分科会5	記念講演者	史跡見学地	参加人数	海外研修報告
【主題】 近現代史学習の指導をどのように構成するか 【発表者】 1 歴史における民族意識をどうとらえるかードイツ・ファシズムの展開を中心としてー　印牧定彦（京都府京都市立堀川高） 2 近現代史学習での視聴覚教材　村上英明（京都府京都市立紫野高） 3 疑問と教具を中心にすえた世界史授業　森口等（京都府立宇治高） 4 戦間期ヨーロッパをいかに教えるかー1930年代の大国外交を中心にー　遠藤紳一郎（東京都立広尾高） 【司会】 藤田欽也（京都府立西舞鶴高） 【記録】 都築　学（京都府立鳥羽高）・西岸秀文（京都府立洛北高） 【助言者】 田中耕治（兵庫教育大学教授）	【主題】 国際理解教育・平和教育の世界史（現代史）にどう生かすか 【発表者】 1 国際関係論　特にシュミレーション&ゲーミングによる現代史学習　恩田　徹（京都府京都市立塔南高） 2 近現代史学習と国際理解ー生徒の反応とその課題ー　西岡尚也（京都府立園部高） 3 近現代史教育におけるアジアの位置　越田　稜（東京都学習院高等科） 【司会】 松見禎紀（京都府立加悦谷高） 【記録】 西村和洋（京都府立西乙訓高）・平野香里（京都府立南丹高） 【助言者】 関　寛治（立命館大学）	【演題】 中世の京都ー町衆と信長とー 【講師】 神戸大学教授　熱田公 【演題】 推理と取材 【講師】 作家　山村美紗	洛中コース 「町衆の心意気を今に伝える京の町なみ」（7.30～31） 東本願寺(渉成園)ー三十三間堂ー京都府文化博物館ー六角堂ー頂法寺ー池坊会館ー光照院ー相国寺ー承天閣美術館ー大光明寺ー瑞春院ー上御霊神社ー嵐山(鵜飼)ー(泊)ー叡昌山本法寺ー宝鏡寺（人形寺）ー涅槃会館ー裏千家センター茶道資料館ー楽美術館ー二条城ー二条陣屋ー西本願寺ー壬生（前川旧邸・壬生寺・八木邸） 【担当】 石神一興（京都府東山高）・折戸章夫（京都府立向陽高） 【記録】 折戸章夫（京都府立向陽高） 洛東コース 「院政期の残照と桃山美術をたずねて」（7.30～31） 豊国神社ー三十三間堂ー養源院ー智積院ー京都国立博物館ー六波羅蜜寺ー六道珍皇寺ー建仁寺ー両足院ー久昌院ー八坂神社ー(泊)ー東本願寺(渉成園)ー島原角屋ー東寺ー観智院ー西本願寺ー城南宮ーー楽寿院ー京都駅 北山コース（7.29～31） 金戒光明寺ー真如堂ー寂光院ー三千院ー慈照寺（銀閣・東求堂）ー大徳寺ー今宮神社ー貴船神社ー鞍馬山・鞍馬寺ー岩倉(実相院・岩倉具視旧宅)ー高麗美術館ー上賀茂神社 【担当】 中井秀樹（京都府立山城高） 【記録】 中井秀樹（京都府立山城高） 高瀬川界隈コース（7.29） 旅館「大和屋」(旧料亭「吉田屋」)ー山紫水明処(頼山陽旧邸)ー丸太町橋ー旅館「松菊園」(木戸孝允旧邸)ー舎密局址ー善通寺ーー之船入ー志士寓居址ー酢屋(坂本竜馬寓居址)ー土佐藩邸址ー瑞泉寺 【担当】 石神一興（京都府東山高） 【担当】 石神一興（京都府東山高）	380名	12日間（8.6～8.17） 「トルコ歴史紀行」 イスタンブールーアンカラ（アナトリア考古学博物館・アタチュルク廟）ーボガズカレ（ボガズキョイ遺跡）ーカッパドキア（ギョレメ・カイマクル地下都市・ザルベ村・ユルギュップウチヒサール）ーコンヤーパムッカレ（綿の城・ヒエラポリス遺跡）ーエフェソスーベルガモン遺跡・トロイ遺跡ーイスタンブール（ブルーモスク（スルタンアフメットジャーミー）・アヤソフィア・トプカプ宮殿・ボスポラス海峡・軍事博物館(29名参加) 【記録】 宮野聡（東京都立練馬高）・滝澤秀一（東京都立東大和南高）
【主題】 世界史教育を活性化にするにはどうしたらよいか 【発表者】 1 近現代史学習ー日本の台湾支配を教材化する試みー　片岡克教（新潟県立長岡高） 2 レジスタンスの展開と冷戦の開始ーポーランド・ギリシャの場合ー　石田レイ子（新潟県立新潟中央高） 3 壬辰倭乱以後の東アジア　田口　睦子（東京都立立川高） 【司会】 滝沢　繁（新潟県立小千谷高）・熊谷秀則（新潟県立三条高） 【記録】 藤沢健一（新潟県立新潟南高）・竹内公英（新潟県立新潟北高）	【主題】 小・中・高　歴史教育における近現代史学習をいかに推進するか 【発表者】 1 地域の素材を生かした15年戦争の学習への取り組みー「永く続いた戦争と平丸の暮らし」の実践からー　小山雅広（新潟県上越市立高志小） 2 ディベート的手法を用いた歴史教育の推進ー鎖国は日本にとって悲劇であったかー　八木一志（新潟県松代町立松代中） 3 近現代学習の前提ーアジアとヨーロッパの地位の逆転とはー　徳永和夫（新潟県立文書館） 【司会】 菅瀬亮司(新潟県立新潟江南高)・前沢正人(新潟県長岡市立長岡北中)・西潟　昇(新潟県立黒埼高) 【記録】 松井美明（新潟大学教育学部付属長岡中）・加藤健児（新潟県立十日町高）	【演題】 山本五十六の無念 【講師】 作家　半藤一利 【演題】 越後の古代ー八幡林遺跡の発見から 【講師】 新潟大学教授　小林昌二	Aコース「城下町の歴史をたずねて」（8.4） 山本五十六公園ー日本互尊社ー如是蔵博物館ー新潟県立長岡高校記念資料館ー長岡郷土資料館 【担当】 稲川明雄（長岡市史編纂室長補佐）・金子達（新潟県立新潟西高） Bコース「越後の歴史をもとめて」（8.4～5） 北方文化博物館ー岩室温泉（泊）ー弥彦神社ー和島村良寛記念館ー八幡林遺跡ー小千谷慈眼寺ー堀之内築場ー西福寺・開山堂ー鈴木牧之記念館 【担当】 和島村教育委員会職員 Cコース「越後・佐渡の歴史にロマンをもとめて」（8.4～6） 北方文化博物館ー岩室温泉（泊）ー佐渡金山ー尖閣湾ー佐渡博物館ー相川（泊）ー真野御陵ー国分寺跡・妙宣寺ー両津博物館 【担当】 児玉信雄（新潟県立佐渡高）・小菅徹（新潟県立佐渡高）・石瀬佳弘（新潟県沢根小学校校長） 【記録】 本間恂一（新潟県立西川竹園高）	300名	13日間（8.7～8.19） 「フランドル（ベネルクス3か国）歴史の旅」 アムステルダム（アンネ＝フランクの家・国立ゴッホ美術館）ー北ホーランド州ーデ＝ハール城ーユトレヒト（ドム塔）ーレイデンーハーグ（平和宮・マドローダム）ーデルフトーキンデルダイク（風車群）ーロッテルダム（エラスムス大学記念図書館・ユーロポート）ーアントワープ（ノートルダム大聖堂・ルーベンスの家）ーマーストリヒト（マルクト広場・地獄の門）ールクセンブルク（アドルフ橋・ノートルダム教会）ーラボー＝サンタンヌ城ーブルージュ（マルクト広場・聖血礼拝堂・ノートルダム教会・サン＝サルヴァドール大聖堂）ーガン（聖バーフ教会）ーブリュッセル（サン＝ミッシェル大聖堂・ノートルダム＝デュ＝サブロン教会）ーワーテルロー(22名参加) 【記録】 土岐祐子（東京都恵泉女学園高）・水村光男（東京都立日比谷高）
【主題】 世界史教育を通じて国際的歴史認識をどのように育成するか（前近代） 【発表者】 1 18世紀末、極東を取り巻く国際情勢と合衆国のアジア進出ーレディ・ワシントン号の串本寄港ー　稲生淳（和歌山県立新宮商高） 2 15～16世紀のヨーロッパ世界ーレオナルド＝ダ＝ヴィンチの生涯を通じて　古田宏文（和歌山県近畿大附属和歌山高） 3 トンでもない差別の歴史ーブタについてー　川口英一（神奈川県立小田原高） 【司会】 大橋淳夫（和歌山県立耐久高）・立野淑郎（和歌山県立日野高） 【記録】 市瀬賢二（和歌山県立南部高）・森下裕（和歌山県立熊野高）	【主題】 世界史教育を通じて国際的歴史認識をどのように育成するか（近現代） 【発表者】 1 世界史における革命学習ー1848年ウィーン革命を事例としてー　田城賢司（和歌山県立田辺高） 2 アジア的国際化の意義についてー欧米との接触によるアジアの近代化をどうとらえるかー　山路　滋（和歌山県下津町立下津女子高） 3 中華帝国の変容ー西欧の衝撃と洋務運動ー　日下部公昭（筑波大学附属高） 【司会】 遠藤元彦（和歌山県立向陽高）・弓倉弘年（和歌山県立和歌山北高） 【記録】 岡本俊史（和歌山県立和歌山高）・米田容子（和歌山県立桐蔭高）	【演題】 絵図による荘園史の試み 【講師】 和歌山大学教授　小山靖憲 【演題】 近世紀州漁民の他国出漁について 【講師】 古座町教育長・日本民俗学会員　山出泰助	Aコース「捕鯨と那智信仰の歴史を求めて」（8.2） 太地くじら博物館ー那智の滝ー那智大社ー青岸渡寺ー熊野古道ー紀伊勝浦駅ー新宮駅 【記録】 金澤利明（東京都立足立西高） Bコース「熊野詣と南方熊楠の足跡を訪ねて」（8.2～3） 新宮（鳩ぽっぽの歌碑・徐福墓）ー熊野速玉大社（佐藤晴夫記念館）ー熊野本宮大社ー湯峯温泉（泊）ー熊野古道・継桜王子・瀧尻王子ー南方熊楠記念館ー南方熊楠旧居ー天神崎ー闘鶏神社ー紀伊田辺駅 【記録】 赤羽根行雄（東京都立国立高） Cコース「古代・中世のロマンを求めて」（8.3） 粉河寺ー宝来山神社・宝来山神願寺ー慈尊院ー万年山慈氏寺・丹生官省符神社ー隅田八幡神社ー橋本駅 【記録】 藤枝文忠（東京都京北高）	307名	14日間（8.5～8.18） 「フランス周遊歴史の旅」 ニース（マティス美術館）ーマルセイユーエクス・アン・プロヴァンス（ミラボー通り・サン・ソブール大聖堂）ーアルル（ローマ時代の円形闘技場）ーフォンビエイユ村（ドーデの風車小屋）ーサン・レミーレ・ボーの村（奇岩地帯の城塞跡）ーアビニョン（教皇庁）ーアビニヨン・ニーム（ローマの大水道橋：ポン・デュ・ガール・フォンテーヌ庭園）ーカルカソンヌーツールーズ（キャピトル・ジャコバン修道院・サンセルナン寺院）ーボルドー（サン・タンドレ大聖堂・カンコンス広場）ーロワール（アンボワーズ城・ブロワ城・シュノンソー城）ーモン・サン・ミシェルーカーンーバイユー（バイユーのタピストリー・ノートルダム寺院）ーオンフルールールーアン（ノートルダム寺院・ジャンヌ・ダルクの処刑された古市場広場）ーパリ 【記録】 町田恵美（東京都立稲城高）
【主題】 世界史Aにおける内容の構成とその実践をどのようにすすめるか 【発表者】 1 世界史Aでの「中国史」メモー教える際に把握しておきたい「歴史的特質」とはー　佐藤雅信（神奈川県立港南台高） 2 「世界史A」における戦後史の取り扱いについてー「冷戦」、特にドイツ問題を中心にー　遠藤紳一郎（東京都立広尾高） 【司会】 長　雅洋（東京都立武蔵村山高）・住吉貴之（東京都立三田高）・宮本秀樹（東京都立東大和高） 【記録】 田口睦子（東京都立立川高）・桑名信介（東京都立荻窪高）	【主題】 新しい世界史像をめざす教材開発と授業実践 【発表者】 1 「世界史もの事典」をつくりながら考えたこと　佐々木巧（東京都立向丘高） 2 茶と砂糖の語る世界史ーモノからながめた世界史の試みー　粕谷栄一郎（東京都立明正高） 【司会】 日下部公昭（筑波大学附属高）・野村昌幸（東京都立大泉学園高） 【記録】 杉山智子（東京都立国際高）・難波伸一（東京都立片倉高）	【演題】 江戸の妖怪 【講師】 常民文化研究所所長・神奈川大学教授　宮田登	Aコース「秩父事件を訪ねて」（8.2） 都内ー吉田町椋神社ー龍勢会館・清泉時ー加藤織平墓・土蔵ー井上伝蔵屋敷跡・墓ー音楽寺ー秩父民俗資料館ー秩父市立民俗資料館ー西武秩父駅ー都内 【記録】 杉本發（桐朋学園桐朋研究所） Bコース「川越、さきたま、富岡、岩宿、足利をたずねて」（8.2～3） 都内ー川越（喜多院、蔵造り資料館・川越城跡）ー埼玉古墳群ー富岡製糸場跡ー伊香保温泉（泊）ー岩宿遺跡ー足利学校、鑁阿寺ー都内 【記録】 石神一興（京都府東山高）	不明	14日間（8.5～8.18） 「歴史そのものが世界遺産となる国、イタリア」 パレルモ（ノルマン宮殿・カタコンベ）ーアグリジェント（ユノー神殿・コンコルディアの神殿）ーカターニャ（ドゥオーモ広場）ーカプリ島ーグロッタ・アズルラーアナカプリーポンペイーカタコンベ＝ローマ市ーローマ（サン＝ピエトロ大聖堂・凱旋門・コロッセオ）ーフィレンツェ（ウッフィシィ美術館）ーキージ・サラーチーニ丘・カンポ広場ーボローニャ（サン・ペトロニオ聖堂・サント・ステファノ教会）ーラヴェンナ（テオドリック霊廟・ダンテの墓）ーフェラーラ（エステ城）ーパドヴァ（スクロヴェーニ聖堂）ーヴェネツィア（サン＝マルコ広場・ドゥカーレ宮殿・ため息橋・サン・マルコ寺院・ムラーノ島）ーヴェローナーミラノ（スフォルツェスコ城） 【記録】 亀岡良平（東京都立向島商業高等学校校長）
【主題】 新しい世界史像をめざす授業実践 【発表者】 1 ヨーロッパの海か、イスラームの海かー「大航海」時代前後のインド洋世界をめぐってー　石垣雄市(千葉県立千葉高) 2 現代・近代そして人類史を考える視点は？ー世界史を洗い直す作業が求められているー　牧野孝治(千葉県立泉高) 3 戦後の世界史をどう構想するか　鈴木顕定(千葉県立小金高) 【司会】 石井一司(千葉県立君津高)・笹原郁子(千葉県立上総高) 【記録】 濱名孝和(千葉県立上総高)・鈴木延人(千葉県立木更津東高)	【主題】 世界史教育における近現代史の授業実践と課題 【発表者】 1 パレスティナからみた世界史　廣川みどり(千葉県立市原八幡高) 2 人権尊重の視点からみたソ連・東欧史ー秘密文書・新証言等をもとにしてー　難波伸一(東京都立片倉高) 3 世界史の中の「満州国」ー近現代史授業の1つの試みとしてー　渡辺和雄(神奈川県立伊志田高) 【司会】 松井康夫(千葉県立鎌ヶ谷西高)・土屋徳郎(千葉県立八千代高) 【記録】 上田　浄(千葉県立市川工高)・白井正秋(千葉県立国分高)	【演題】 大昔と現代 【講師】 国立歴史民俗博物館副館長　佐原　真	Aコース「古代集落の景観から房総の原点を考える」(7.25) ①千葉文化センターー加曽利貝塚・博物館ー荒屋敷貝塚ー貝塚トンネル 【担当】 宍倉昭一郎(千葉県立千葉高) 【記録】 高橋将文(千葉県立磯部高)・大村裕(千葉県立薬園台高) ②千葉文化センターー加曽利貝塚・博物館 【担当】 宍倉昭一郎(千葉県立千葉高) 【記録】 高橋将文(千葉県立磯部高)・高崎芳美(千葉県立袖ヶ浦高) Bコース「安房にアジア太平洋戦争の傷跡をさぐる」(7.25～26) 千葉文化センターー菱川師宣記念館ー安房博物館ーホテル富崎館(泊、資料展示「東京湾要塞地帯と本土決戦体制」「芸妓からみた戦時下の館山」)ー館山海軍砲術学校跡地ー「赤山」地下要塞跡ー地下壕「戦闘指揮所」跡・「噫従軍慰安婦」石碑ー洲ノ崎海軍航空隊射撃場跡ー安房南高校・「ひかり野資料室見学」ーロケット特攻機「桜花」発射基地跡ー岩井袋水中特攻基地跡ー勝山駅 【担当】 愛沢伸雄(千葉県立安房南高) 【記録】 水島聡(千葉県立長狭高) Cコース「利根川の川風にふかれながら、江戸の創造力をさぐる」(7.25～26) 千葉文化センターー香取神社ー佐原市内(伊能忠敬旧宅・町並)ー潮来(泊)ー川口堰ーヒゲタ醤油工場ー飯沼観音・円福寺ー君が浜・犬吠埼ー外川港ー飯岡ー干潟八万石ー大原幽学旧宅ー成田駅・京成成田駅 【担当】 石橋幹次(千葉県立銚子高) 【記録】 浅野隆(千葉県立白里高)	不明	ー

大会名	期日	会場 （開催地及び会場）	大会委員長	大会主題	シンポジウムテーマ （コーディネーター及びパネリスト）	分科会主題及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導助言者、 分科会1	分科会2	分科会3
38回 東京	平成9年 (1997) 7.29～31	墨田区 江戸東京博物館	亀岡良平(東京都立南多摩高等学校長)	生きる力を育む歴史教育を求めて－国際社会に生きる資質をいかに育むか－	シンポジウム【全体協議】 【主題】これからの歴史教育をいかにすすめるか 【パネラー】 木下康彦(岐阜大学教授)・蒲生眞紗雄(東京都立上野高)・村松明(東京都立小平南高) 【コーディネーター】 仙田直人(東京都立小平西高) 【記録】黒田比佐雄（東京都立白鵬高等学校教頭）・木村清治（東京都立永福高等学校教頭）	【主題】 発達段階に対応し、近現代史をどう取り扱うか 【発表者】 1 人物の働きを中心にして歴史的事象の意味を考える力を育てる指導の在り方 小杉則義(東京都千代田区立お茶の水小) 2 近現代史において人物学習をどう扱うか 関 裕幸(東京都北区立堀船中) 3 博覧会の時代－その社会的・歴史的意義－ 金澤利明(東京都立両国高) 【司会】 赤羽根行雄(東京都立国立高)・遠山孝典(東京都立新宿山吹高) 【記録】 安斎正則(東京都世田谷区立弦巻中)・粕谷栄一郎(東京都立晴海総合高)	【主題】 日本史Aの学習において、近現代史をどう取り扱うか 【発表者】 1 日本史Aについてのアンケートとその分析 竹内秀一(東京都立両国高) 2 日本史Aの学習の実態とその課題 宮部精一(東京都立多摩高) 3 日本史Aの学習における文化史の取り扱いについて 児玉祥一(神奈川県立厚木高) 【司会】 藤本正国(東京都立北多摩高)・高橋正一郎(神奈川県立相模原高) 【記録】 上田 茂(千葉県立船橋高)・山中 豊(東京都立晴海総合高)	【主題】 戦後史学習の実態とその学習をいかにすすめるか 【発表者】 1 戦後史学習にかかわる諸課題 中里裕司(東京都立東高) 2 近代化遺産に焦点をあてた地域史の主題学習 鈴木一弘(茨城県立日立第一高) 3 日本軍政下のシンガポールにおける民間交流 糸井一郎(東京都立八王子北高) 【司会】 鵜飼敦之(東京都立第五商高)・名越時照(茨城県立水戸第三高) 【記録】 富田 任(茨城県立多賀高)・河合 敦(東京都立紅葉川高)
39回 沖縄	平成10年 (1998) 7.28～30	那覇市 パシフィックホテル沖縄	津嘉山るり子(沖縄県立与勝高等学校長)	生きる力を育む歴史教育を求めて－歴史教育を通して国際性をどう育てるか－	－	【主題】 歴史教育を通して国際平和を希求する心をどう育てるか 【発表者】 1 生き生きと児童を育てる社会科授業の創造 新垣 誠(沖縄県知念村立知念小) 2 ウチナー文化を中心とした平和教育の実践 伊良波剛(琉球大学教育学部附中) 3 沖縄戦から15年戦争へ－<その日>で学ぶ一つの試み－ 平良宗潤(沖縄県立糸満高) 【司会】 新城俊昭(沖縄県立陽明高) 【記録】 石垣 忍(沖縄県立石川高)・安谷屋剛夫(沖縄県立浦添高)	【主題】 地域教材で日本史の授業をどう実践したか 【発表者】 1 地域史を学ぶ意味をどう考えるか 立木貴文(長崎県立長崎南高) 2 地域史学習の試み－地域史教材のビデオを作成して－ 甲斐典明(宮崎県立延岡東高) 3 大交易時代の琉球王国－初めて琉球史を実践して－ 加藤 健(東京都立蔵前工高) 【司会】 安里陽子(沖縄県立南部農林高) 【記録】 山田義尚(沖縄県立北中城高)	【主題】 近現代史で国際平和・国際理解の授業をどう実践したか 【発表者】 1 十五年戦争の見直し 宮崎正則(佐賀県立鹿島高) 2 幕末・維新期の日本的な国際理解－肥後藩の開明的思想家横井小楠の場合－ 堤 克彦(熊本県立菊池高) 3 沖縄の平和教育に「加害者的視点」を導入する試み－「平和の礎」「従軍慰安婦」「霧社事件」－ 照屋信治(沖縄県立翔南高) 【司会】 平良泰一(沖縄県立向陽高) 【記録】 津留一郎(沖縄県立首里東高)
40回 東京	平成11年 (1999) 7.28～30	墨田区 江戸東京博物館	増田克彦(東京都立狛江高等学校長)	生きる力を育む歴史教育を求めて	分科会1 【主題】 新学習指導要領をふまえて生きる力を育む歴史教育はどうあるべきか(大会参加者全員参加によるパネルディスカッション) 【発表者】 澤田純二(東京都千代田区立番町小)・関裕幸(東京都北区立堀船中)・蒲生眞紗雄(東京都立上野高)・野村真幸(東京都立立川高) 【司会】 金澤利明(東京都立両国高) 【記録】 宮部精一(東京都立多摩高)・佐藤文泰(東京都立桜町高)・桑名信介(東京都立荻窪高)	－	【主題】 歴史的な見方・考え方を育成する主題学習をいかに実践するか 【発表者】 1 絵画資料を用いた授業実践－討論式授業の意義を考える－ 柄澤守(千葉県立船橋芝山高) 2 生徒の研究発表にもとづく「比較文化」の授業 金田喜明(東京都立国際高) 3 コンピュータを駆使した日本史の授業－江戸時代における漁業資源の保護 越後三面川を例として－ 石黒保憲(東京都立淵江高) 【司会】 吉田洋子(東京都立桜水商高)・河合 敦(東京都立紅葉川高) 【記録】 鈴木純平(東京都立広尾高)・清水 進(東京都立志村高)	【主題】 多様化する生徒にいかに歴史的思考力を持たせるか 【発表者】 1 19世紀後半、日本人のアジア観 田中暁龍(東京都立小平西高) 2 身近な日露戦争－『征露丸』と牛肉の大和煮－ 矢野慎一(神奈川県立金井高) 3 太平洋戦争における戦時下の国民生活 学徒勤労動員－音を使った日本史の授業－ 飯山昌幸(東京都立羽村高) 【司会】 児玉祥一(神奈川県立厚木高)・竹内秀一(東京都立両国高) 【記録】 鹿子木由紀夫(東京都立高島高)・岡田明(東京都立松原高)
41回 茨城	平成12年 (2000) 8.2～4	ひたちなか市 ホテルクリスタルパレス	石原道明(茨城県立鉾田第二高等学校長)	新しい世紀の歴史教育を求めて－新学習指導要領をふまえて多様化する生徒にどのように対応するか－	－	【主題】 歴史嫌いをつくらないために－生きた教材づくり－ 【発表者】 1 自ら考え判断する力を育てる社会科の学習指導の在り方 小貫孝浩(茨城県稲敷郡美浦村立大谷小) 2 生徒一人一人が自ら考え主体的に取り組む歴史学習指導の在り方 中島賢幸(茨城県つくば市立谷田部中) 3 コンピュータを使った授業展開 大月理香(茨城県立牛久栄進高) 【司会】 深谷 祐(茨城県立岩瀬高)・小室明久(茨城県立岩瀬高) 【記録】 川内孝雄(茨城県立水戸第三高)・谷部淳一(茨城県茨城高)	【主題】 地域史からみた日本の歴史－地域教材の活用－ 【発表者】 1 金砂合戦と鎌倉幕府の成立 宮内教男(茨城県立太田第一高) 2 三山時代から琉球王国統一へ 宮本和明(茨城県常総学院高) 3 神奈川県足柄地方の中世城館 武井 勝(神奈川県立大井高) 【司会】 柳橋正雄(茨城県立多賀高)・秋葉和洋(茨城県立水海道第一高) 【記録】 栗田武志(茨城県立笠間高)・有賀和成(茨城県立牛久栄進高)	【主題】 身近な生活から見た日本史学習－生活文化史からのアプローチ－ 【発表者】 1 台所からの視点－生活用具から見た近現代史－ 前田雅一(茨城県立歴史館主席研究員) 2 トイレ考古学入門－古代・中世・近世のトイレを考える－ 中島博司(茨城県立土浦第一高) 3 桶・樽文化の視点－生活文化の教材化試論－ 小川 浩(千葉県立東葛飾高) 【司会】 佐藤 誠(茨城県立水海道第二高)・大津忠男(茨城県立土浦第一高) 【記録】 坂本雅彦(茨城県立大宮高)・柚木 太(茨城県茗渓学園高)
42回 神奈川	平成13年 (2001) 7.30～8.1	横浜市 神奈川大学	川島敏郎(神奈川県立七里ヶ浜高)	21世紀を拓く歴史教育－多文化共生の時代を生きる－	－	【主題】 総合的な学習にむけて 【発表者】 1 教科学習を核とした学習の総合化を探る 宮坂優子(神奈川県横浜市立山元小) 2 総合学習をデザインする 古川正人(神奈川県横浜市立原中) 3 「真実は一つ、の答。」…－総合的な学習学習への手がかりを求めて－ 川口英一(神奈川県立川崎高) 4 合同パネルディスカッション 総合学習の光と陰 【司会】 後藤孝幸(神奈川県立釜利谷高)・白川重敏(神奈川県立上溝高) 【記録】 林 三郎(神奈川県立野庭高)・風間 洋(神奈川県鎌倉学園高)	【主題】 地域に『学ぶ』－小学校・中学校の教育実践から－ 【発表者】 1 初めて社会科と出会う子ども達とともに 松原 知(神奈川県茅ヶ崎市立浜須賀小) 2 My town Yokosuka－素敵な街を創ろう－ 高木 尚(神奈川県横須賀市立上の台中) 3 地域から学び、地域から広がる学習－小・中学校での社会科学習からみえるもの－ 堀口和也(神奈川県川崎市立南菅中) 4 合同パネルディスカッション 総合学習の光と陰 【司会】 伊東光弘(神奈川県立栄生高)・堀部宏人(神奈川県立大清水高) 【記録】 小杉隆一(神奈川県立大和高)・大久保敏朗(神奈川県立厚木高)	【主題】 地域学習における多文化共生－西洋文明との出会いを介して－ 【発表者】 1 近世の地方文人と在村文化 會田康範(東京都学習院高等科) 2 建築からみた近代史－横浜と西洋館－ 木村芳幸(神奈川県立横須賀工高) 3 戦時下箱根の外国人 矢野慎一(神奈川県立金井高) 4 食パン・あんパン・乾パン－あの三四郎も食べた？「横浜のパン」のあゆみ－ 新谷 桂(神奈川県立港南台高) 【司会】 高橋正一郎(神奈川県立相模原高)・杉田恵子(神奈川県立水取沢高) 【記録】 笹谷幸司(神奈川県立綾瀬西高)・鈴木 晃(神奈川県立栗原高)

司会、記録者		記念講演者	史跡見学地	参加人数	海外研修報告
分科会4	分科会5				
【主題】 世界史Aの学習において、国際的視野の育成をいかにすすめるか 【発表者】 1 世界史Aについてのアンケートとその分析 鳥山孟郎(東京都立新宿高) 2 帝国主義開始期の世界と日本 三木健詞(東京都立玉川高) 3 国際都市敦煌ー8世紀の世界アジアの一都市にみる国際社会ー 谷 憲(栃木県立宇都宮北高) 【司会】 野村昌幸(東京都立立川高)・永岡正美(栃木県立宇都宮北高) 【記録】 福島滋嗣(東京都立大山高)・座間晴美(神奈川県立川崎高)	【主題】 21世紀に向けての課題をどのように取り扱うか 【発表者】 1 国連における居住環境への取り組み 前田達見(東京都立志村高) 2 生涯学習に向けて自ら学ぶ世界史 風間睦子(東京都立立川高) 3 主体性を育む世界史−主題学習による授業工夫− 小板橋又久(東京都立武蔵高) 【司会】 今泉 博(東京都立両国高)・石井一司(千葉県立勇津高)・遠藤紳一郎(東京都立広尾高) 【記録】 松家直子(東京都立北多摩高)・山田美保(東京都立大泉学園高)	【演題】 アプローチ・ツー・ヒストリーーヨーロッパにおける貧困と清貧史ー 【講師】 東京純心女子大学現代文化研究部長、上智大学名誉教授ルネサンス研究所長 ピーター・ミルワード	Aコース「江戸情緒を訪ねて」(7.31) 浜松町駅ー芝・芝海岸(旧芝離宮恩賜庭園・増上寺・旧浜離宮恩賜庭園)ー水上バス(隅田川遡上)ー浅草(浅草寺)ー上野(寛永寺)ー白山(六義園・小石川植物園・小石川後楽園)ー本郷・神田(湯島聖堂・昌平坂学問所跡)ー御茶ノ水駅 【担当】 宮部精一(東京都立戸山高) 【記録】 小暮正利(東京都立南多摩高等学校教頭) Bコース「幕末・明治維新の政治外交史を歩く」(7.31) 板橋駅ー近藤勇墓ー松月院(高島秋帆顕彰碑)ー板橋区立郷土資料館ー小塚原(回向院・延命寺・小塚原刑場跡)ー円通寺(黒門・彰義隊士墓)ー寛永寺(慶喜謹慎の間)ー外交史料館ー東禅寺(英国公使館跡)ー善福寺(米国公使館跡)ー光林寺(ヒュースケン墓)ーレインボーブリッジー台場ー東京テレポート駅 【担当】 牧内利之(東京都立飛鳥高) 【記録】 山崎麻衣子(東京都目白学園中高)	不明	5日間(8.15〜19) 「韓国歴史の旅」 江華島(草芝鎮)ーソウルー漢陽(景福宮・国立民俗博物館)ー水原城ー温陽ー天安(独立記念館)ー公州(国立博物館・宋山里古墳群)ー扶余(遺構定林寺址・扶余国立博物館)ー慶州(吐含山・石窟庵・仏国寺・大陵苑・古墳公園・天馬塚・国立慶州博物館)ー皇竜寺址・通度寺ー釜山(竜頭山公園)ー金海(首露王妃許后陵・朝市)(30名参加) 【記録】 竹内秀一(東京都立両国高)他4名
【主題】 近現代史で国際平和・国際理解の授業をどう実践したか 【発表者】 1 韓国修学旅行の取り組み 穴井秀岳(大分県立大分豊府高) 2 市民革命をどう捉えるか 石橋 功(神奈川県立氷取沢高) 3 主題探求による世界史の授業展開ー地域教材の世界史Aへの活用をとおしてー 内西昭文(鹿児島県立加世田高) 【司会】 久場政彦(沖縄県立首里高) 【記録】 比嘉均(沖縄県立読谷高)	ー	【演題】 米軍統治下の沖縄 【講師】 沖縄県立芸術大学教授・沖縄県公文書館館長 宮城悦二郎	Aコース「沖縄の歴史文化半日コース」(7.29) 上護国寺ー明倫堂ー崇元寺ー沖縄県立博物館ー首里城公園ーペリー上陸碑文 Bコース「本島南部の戦跡半日コース」(7.29) 第32軍司令部跡ー糸数壕ー平和公園(韓国人慰霊の塔・平和の礎・平和祈念資料館)ーひめゆりの塔(資料館) Cコース「本島中北部1泊2日コース」(7.29〜30) 那覇市泊(ペリー上陸地)ー宜野湾市嘉数高台(普天間基地)ー旧コザ市ー名護市辺野古の海上ヘリポート計画地ー(泊)ー読谷村のチビチリガマー象のオリー安保の見える丘(嘉手納飛行場)ー甘藷発祥の地ー首里城公園ー那覇市空港 Dコース「石垣・竹富(八重山)1泊2日コース」(7.29〜30) 石垣空港ー宮良殿内ー桃林寺ー唐人墓ー川平湾ーホテルー竹富島・石垣島 【担当】 喜屋武尚子(沖縄県立中部商高)・山城広光(沖縄県立普天間高)・前城盛雄(沖縄県総務部平和推進課)・山川寿賀子(沖縄県文化振興会公文書館)・小野マサ子(沖縄県立具志川高)・玉津博克(沖縄県立八重山高)・糸数長章(沖縄県立八重山高) 【記録】 津野良信(沖縄県立那覇国際高)・山城広光(沖縄県立普天間高)・糸数長章(沖縄県立八重山高)	不明	10日間(8.5〜14) 「中央ヨーロッパ歴史の旅」 ワルシャワ市内(ワジェンキ公園・ワジェンキ宮殿・旧市街・1944ワルシャワ蜂起記念碑)ークラクフ市内ーアウシュヴィッツ強制収容所ーヴロツクフ市内ープラハ市内ーカルルシュテイン城ーコノピシュチェ城ープラハ市内(プラハ城・聖ヴィート教会・旧王宮・黄金小路・カレル橋・旧市庁舎・天文時計)ーテレジーン強制収容所ープラハ市内ーターボル市内(コトノフ城・キリストの変容教会・フス運動博物館・地下道・ジシカ広場)ーウィーン市内(シェーンブルン宮殿・王宮・聖シュテファン大聖堂・カプツィーナ教会)(10名参加) 【記録】 佐藤義弘(東京都立淵江高)・矢島恒之(東京都立両国高)
【主題】 世界史における主題学習で歴史的思考力をいかに育成するか 【発表者】 1 近代都市公園史ーその成立から現在、及び将来に至る様相ー 清水篤(東京都立園芸高) 2 世界史において身近な素材をどのように取り扱うかー絹織物業の世界史ー 住吉貴之(東京都立三田高) 3 サハラ以南のアフリカ文化史 上田隆之(東京都立武蔵高) 【司会】 岡田健(神奈川県立新羽高)・関野豊(群馬県立太田高) 【記録】 長雅 洋(東京都立武蔵村山高)・佐々木巧(東京都立飛鳥高)	【主題】 21世紀の新しい世界史像をどのように構成するか 【発表者】 1 近代世界システムの成立と中国 杉山 登(神奈川県逗子開成中高) 2 総体で捉える世界史の展開ー第二次世界大戦後史を事例にしてー 野口正暢(群馬県立館林女子高) 3 新学習指導要領にどのように対応するか 粕谷栄一郎(東京都立晴海総合高) 【司会】 卯月 誠(東京都立立川高)・杉山智子(東京都立国際高) 【記録】 福嶋滋嗣(東京都立大山高)・山田美保(東京都立大泉学園高)	【演題】 江戸文化と現代 【講師】 江戸東京博物館館長、立正大学教授 竹内誠	Aコース「江戸・東京の金融史を巡る」(7.30) 池袋駅ー造幣局東京支局ー渋沢資料館ー印刷局記念館(お札と切手の博物館)ー日本橋(第一国立銀行跡・蠣殻銀座跡・秤座跡)ー日本銀行(本店・貨幣博物館)ー東京駅 【担当】 仙田直人(東京都立第五商業高等学校教頭)・金澤利明(東京都立両国高)・竹内秀一(東京都立両国高) 【記録】 近重正大(茨城県立水戸桜ノ牧高) Bコース「忠臣蔵ゆかりの地を探る」(7.30) 両国駅ー松坂町公園(吉良邸跡)ー回向院ー両国橋・大高源五句碑ーー之橋ー万年橋ー乳熊家跡ー永代橋ー稲荷橋ー浅野家上屋敷跡ー築地本願寺(間新六墓)ー仙台上屋敷跡(旧新橋駅跡)ー金杉橋ー水野邸跡ー御田八幡宮ー泉岳寺ー細川屋敷跡(大石ら自刃の地)ー品川駅 【担当】 赤羽根行雄(東京都立羽田高等学校教頭)・河合敦(東京都立紅葉川高)・宮部精一(東京都立多摩高) 【記録】 根本雄一郎(茨城県立日立北高)	不明	10日間(8.1〜10) 「シルクロード10日間の旅」 北京ー西安ー華清池ー兵馬俑坑博物館ー半坡遺跡博物館ー碑林博物館ー陝西省博物館ー大雁塔ー西の城門ー茂陵ー咸陽−-敦煌市内ー莫高窟ー鳴沙山ー莫高窟ー陽関ー玉門関ートルファンーベゼクリク千仏洞ー高昌古城ーアスタナ古墳ー火焔山ーカレーズー交河古城ー天山山脈ーウルムチー紅山公園ーバザールー新疆ウイグル自治区ー天壇公園ー故宮ー明の十三陵ー万里の長城(周口店・盧溝橋)ー天安門ー中国歴史博物館(11名参加) 【記録】 花光隆至(北海道函館大学付属有斗高)・矢島恒之(東京都立両国高)
【主題】 現代に視点をおいた主題学習 【発表者】 1 フランスに於ける国民国家の成立とマイノリティとしてのユダヤ人 安藤昌俊(茨城県立土浦第一高) 2 オスマン帝国から始める諸民族問題へのアプローチ 濱田伴子(茨城県立土浦湖北高) 3 東南アジアの華僑・華人 太田竜一(茨城県立猿島高) 【司会】 助川敏郎(茨城県立那珂湊第一高)・船生宏司(茨城県茨城キリスト教学園高) 【記録】 二宮嘉人(茨城県立日立第二高)・橘川栄作(茨城県立水戸第一高)	【主題】『わかりやすい授業とは何か』−生徒の実態に応じた授業展開− 【発表者】 1 三世紀のローマ帝国 稲田敬一(茨城県立水戸第一高) 2「馬上の奴隷」はなぜ支配者になれたのか 小川浩之(茨城県立境高) 3 中国史における科挙の役割ー科挙と皇帝独裁の関係ー 近藤高広(茨城県立土浦第二高) 【司会】 秋本光徳(茨城県立緑岡高)・赤羽根芳彰(茨城県立水戸桜ノ牧高) 【記録】 竹江信之(茨城県立境高)・佐野正道(茨城県立土浦湖北高)	【演題】 明治維新の学び方ー風説留・摺物(瓦版)・錦絵を介してー 【講師】 東京大学史料編纂所教授(前所長) 宮地正人	Aコース「水戸徳川家ゆかりの地を訪ねて」(8.3) 弘道館ー茨城県立歴史館ー偕楽園ー千波湖畔(光圀像、斉昭・慶喜父子像)ー水戸駅ークリスタルパレス 【担当】 深津澄世(茨城県立大子第一高)・石川芳樹(茨城県立太田第二高)・土子完(茨城県立鉾田第二高) 【記録】 畑田幹衛(茨城県立鉾田第二高) Bコース「常陸・みちのくの歴史と美を求めて」(8.3〜4) 弘道館ー(泊)ー北茨城市としやま月浜の湯ー野口雨情生家ー六角堂(五浦美術文化研究所)ー大津浜(イギリス人上陸地)ー天心記念五浦美術館ー風船爆弾打上げ跡ー勿来関ー白水阿弥陀堂ーいわき湯本駅ー勝田駅ークリスタルパレス 【担当】 橋崎伸一(茨城県茨城キリスト教学園高)・富田任(茨城県立多賀高)・根本雄一郎(茨城県立日立北高)・鈴木一弘(茨城県立水戸第一高) 【記録】 船生宏司(茨城県茨城キリスト教学園高) Cコース「常陸ゆかりの人物を訪ねてー光圀・斉昭・親鸞ー」(8.3〜4) 西山荘ー瑞竜山(水戸徳川墓所)ー正宗寺ー(泊)ー弘道館ー茨城県立歴史館ー偕楽園ー西念寺ー浅野家家老大石家旧宅跡ー県立陶芸美術館ー水戸駅ークリスタルパレス 【担当】 佐藤義久(茨城県立那珂高等学校教頭)・黒羽信夫(茨城県立佐竹高)・近重正大(茨城県立水戸桜ノ牧高)・生駒忠夫(茨城県立下館第二高) 【記録】 大内晃(茨城県立並木高)	不明	ー
【主題】 東と西をつなぐもの 【発表者】 1 国境ー自国史と他国史をつなぐものー 塚原直人(東京都立松原高) 2 イスラームの街づくりと住民 古川寛紀(神奈川県立上郷高) 3 トルコ民族意識の変化について 智野豊彦(神奈川県横浜市立戸塚高) 4 近代アジアから見た西洋政治思想・制度 杉山登(神奈川県逗子開成中高) 【司会】 澤野 理(神奈川県立新城高)・中島耀子(神奈川県横浜中華学院高) 【記録】 座間晴美(神奈川県立川崎高)・人見栄一(神奈川県立岸根高)	【主題】 モノを切り口とした歴史学習 【発表者】 1 シーボルトは日本をどうみていたかーシーボルト・コレクションを中心にー 柳橋正雄(茨城県立多賀高) 2 電信・電話と情報の世界史 小島 正(神奈川県立厚木東高) 3「本土決戦」の教材化にむけて 香川芳文(神奈川県立高浜高) 4 兵器から見た戦争の実像 根岸洋史(神奈川県立平塚農高) 【司会】 渡辺和雄(神奈川県立茅ヶ崎北陵高)・武井勝(神奈川県立藤沢西高) 【記録】 荒川 宏(神奈川県立光陵高)・小林克史(神奈川県立山北高)	【演題】 歴史家たちの二十世紀 【講師】 国立西洋美術館長 樺山紘一	Aコース「鎌倉時代の興亡を歩く」(8.1) 鎌倉駅時計広場ー寿福寺ー浄光明寺ー鶴岡八幡宮ー宝戒寺・東勝寺跡ー大蔵幕府跡・法華堂跡ー鎌倉宮ー永福寺跡ー鎌倉駅 【担当】 三橋景子(神奈川県高木学園女子高)・加藤敬(神奈川県横浜市立港高) Bコース「バスで巡る横浜」(8.1) 桜木町ワシントンホテル前ー大桟橋展望台ー県立歴史博物館ー港の見える丘公園・山手地区散策ー県立金沢文庫・称名寺ー金沢文庫駅 【担当】 坂井久能(神奈川県立神奈川総合高)・木村芳幸(神奈川県立横須賀高)・岩崎孝和(神奈川県立田奈高) 【記録】 岩崎孝和(神奈川県立田奈高) Cコース「ヨコハマ・ライトアップ近代建築」(7.31) 横浜公演噴水前ー横浜地方裁判所刑事庁舎ー三井横浜ビルー横浜市情報文化センターー神奈川県庁本庁舎ー横浜開港記念館ー関内駅 【担当】 坂井久能(神奈川県立神奈川総合高)・木村芳幸(神奈川県立横須賀高)・岩崎孝和(神奈川県立田奈高) 【記録】 小林克史(神奈川県立山北高)	不明	5日間(8.15〜19) 「“認識台湾”歴史の旅5日間」 台南(延平郡王祠・孔子廟・赤嵌楼・大関帝廟・大天后宮)ー台南・安平古堡・億載金城ー北港媽祖廟ー嘉義ー台中(歴史民俗公園・民族文物館・龍山寺・天后宮)ー台北(忠烈祠・国立故宮博物院・龍山寺・中正紀念堂・総統府・国立歴史博物館)(32名参加) 【記録】 河合敦(東京都立紅葉川高)他2名

大会名	期日	会場 （開催地及び会場）	大会委員長	大会主題	シンポジウムテーマ （コーディネーター及びパネリスト）	分科会主題及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導助言者、 分科会1	分科会2	分科会3
43回 東京	平成14年 (2002) 7.31～8.2	墨田区 江戸東京博物館	磯山進(東京都立竹早高等学校長)	21世紀に生きる歴史教育の創造－豊かな歴史意識の育成をめざして－	分科会１ 【主題】 資料活用による歴史学習のねらい--小・中・高の連続と非連続について-(大会参加者全員参加によるシンポジウム) 【発表者】 佐藤門太(東京都東村山市立南台小)・関　裕幸(東京都足立区立西新井中)・中里裕司(東京都立日比谷高) 【コーディネーター】 蒲生眞紗雄(東京都立国際高) 【記録】 山下弘之(東京都立田無高)・小牧克枝(東京都立足立新田高)・鈴木加津矢(東京都立調布北高)・進藤正勝(東京都立狛江高)	－	【主題】 歴史的思考力を育む地域史学習の新たな試み 【発表者】 １　人と川の環境史　松井吉昭(東京都立江北高) ２　歴史教育の中の水俣病－現代におけるその意義－　武井弘一(東京都学芸大学附属高大泉校舎) ３　高校日本史における博物館等との連携について　上原一孝(埼玉県立上尾東高) 【司会】 柴田英男(東京都立小平西高等学校教頭)・鞠飼敦之(東京都立武蔵高) 【記録】 鹿子木由紀夫(東京都立高島高)・青木　健(東京都立久留米西高)	【主題】 国際環境の変化を捉えて歴史的な見方・考え方をいかに育むか 【発表者】 １　日本の鋼が中国に与えた影響　河合　敦(東京都立紅葉川高) ２　来日イギリス人が見た近代日本　尾澤　聡(東京都立町田工高) ３　堤上で御を組んだ女性視察官－上溝高女のカルチャーショック－　白川重敏(神奈川県立川崎高) 【司会】 木村清治(東京都立永福高等学校教頭)・牧内利之(東京都立飛鳥高) 【記録】 外山至生(東京都立昭和高)・本杉宏志(東京都立町田高)
44回 東京	平成15年 (2003) 7.30～8.1	墨田区 江戸東京博物館	黒田比左雄(東京都立芸術高等学校長)	21世紀に生きる歴史教育の創造－グローバル化時代に生きる－	分科会１ 【主題】 小・中・高それぞれの特色と課題－江戸時代の教育実践を中心として－ 【発表者】 横田稔(東京都渋谷区立中幡小)・加藤徳夫(東京都板橋区立赤塚第三中)・宮部精一(東京都立戸山高) 【コーディネーター】 川瀬　徹(東京都立三宅高) 【記録】 外山至生(東京都立昭和高)・田中暁龍(東京都立神津高)	－	【主題】 多面的・多角的視野にたった主題学習の展開 【発表者】 １「女性史」の教材化を踏まえた日本史学習の工夫－「日本の歴史における女性の地位の変遷」(主題学習)を通して－　本杉宏志(東京都立町田高) ２　身近な遺跡を教材化する　佐藤　誠(茨城県立水海道第二高) ３「世界文化史」における地域との接点　武田新太郎(奈良県立高取高) ４　斑鳩高校歴史文化コースにおける仏教美術の授業展開　津浦和久(奈良県立斑鳩高) 【司会】 加藤　健(東京都立小石川高)・牧内利之(東京都立神代高) 【記録】 吉野領剛(東京都立足立東高)・高野修一(東京都立八王子東高)	【主題】 グローバルな視野にたった近現代史学習の展開 【発表者】 １　日朝関係の転回－近世から近代へ、善隣友好関係の崩壊－　森晋一郎(東京都立九段高) ２　明治期の観光・ホテルを題材とした学習について　児玉祥一(神奈川県立上鶴間高) ３　板倉　中の対外論－対外強硬論者の流転と帰結－　上田　浄(千葉県立市川北高) 【司会】 松井吉昭(東京都立江北高)・中家　健(東京都立小石川高) 【記録】 河合　敦(東京都立紅葉川高)・安田正和(東京都立玉川高)
45回 群馬	平成16年 (2004) 7.28～30	伊香保町 ホテル天坊	三谷昇(群馬県立館林高等学校長)	21世紀に生きる歴史教育の課題－生徒の主体性を高める授業実践－	分科会１ 【主題】 21世紀に生きる歴史教育の課題－生徒の主体性を高める授業実践－ 【発表者】 須賀克也(群馬県立藤岡工高)・手島仁(群馬県立歴史博物館)・杉山智子(東京都立新島高)・中家　健(東京都立小石川高) 【コーディネーター】 澁谷正章(群馬県立高崎高)・櫻井泰輔(群馬県立高崎高)・原澤典子(群馬県立洪川女子高) 【記録】 田村哲也(群馬県立伊勢崎工高)・大塚貴弘(群馬県立館林女子高)・小鳥弘行(群馬県立板倉高)・田村浩一(群馬県立高崎東高)	－	【主題】 地域教材を生かした授業実践 【発表者】 １　地域の文化財を活用した歴史授業の実践－沼田城・名胡桃城を中心とする調べ学習をとおして－　諸田康成(群馬県立沼田女子高) ２　地域教材を生かした戦争学習－前橋の戦争史跡を通して－　坪内陽祐(群馬県前橋市立前橋高) ３　地域資料の教材化と活用の課題－学習資料集「資料で探る茨城の歴史」の作成を通して－　生駒忠夫(茨城県立下館第二高) 【司会】 神庭真二郎(群馬県立前橋高)・山口良寛(群馬県立太田西女子高) 【記録】 齊藤隆之(群馬県立前橋東高)・渡辺三郎(群馬県立高崎北高)・居上康和(群馬県立高崎北高)	【主題】 近現代史の授業の課題 【発表者】 １　群馬県下の戦争遺跡　菊池　実(群馬県埋蔵文化財調査事業団) ２　横浜港と貿易の発展－教材のデジタル化とその授業実践－　新谷　桂(神奈川県立港南台高) ３　千葉県の戦争遺跡から見えてくるもの　各務　敬(千葉県立長生高) 【司会】 関口荘右(群馬県立桐生西高)・関口功一(群馬県立勢多農高) 【記録】 三浦茂三郎(群馬県立前橋南高)・矢島　豊(群馬県立西邑楽高)
46回 東京	平成17年 (2005) 7.27～28	墨田区 東京都立江戸東京博物館	村岡薫(東京都立江北高等学校長)	新たな歴史教育の創造をめざして－新学習指導要領をふまえた指導上の課題－	分科会１ 【主題】資料を通して育てる歴史的思考力－資料をよみ、いかにふれるか－ 【発表者】永田益豊(東京都青梅市立青梅第一小)・関　裕幸(東京都足立区立西新井中)　田中暁龍(東京都立神津高) 【コーディネーター】金澤利明(東京都立小石川高等学校副校長) 【記録】中山　光(東京都立新宿高)・関眞規子(東京都中野区立第四中)・	－	【主題】歴史の見方・考え方をより深く身につけるための主題学習の展開 【発表者】 １　紙の歴史　濱田淮一(東京都立板橋高) ２　考える授業の展開　近重正大(茨城県立水戸桜ノ牧高) ３　近世から循環型農業として続く三富新田の教材化　韮塚雄一(埼玉県立児玉高) 【司会】 森晋一郎(東京都立九段高)・外山至生(東京都立立川高) 【記録】 佐向　顕(東京都立大泉高)・江藤徹(東京都立桐ヶ丘高)	【主題】身近な生活からみた近現代史学習の展開 【発表者】 １　お魚カルタから見る近代日本　南　和男(東京都立羽村高) ２　幕末名主日記に見られる社会情勢－地域史料(文書)を活用しての授業－　岩崎孝和(神奈川県立元石川高) ３　自由民権運動と地域における民衆の生活　佐久間耕治(千葉県立安房南高) 【司会】 本杉宏志(東京都立町田高)・吉野領剛(東京都立足立東高) 【記録】 弘田隆彦(東京都立町田高)・山田浮也(東京都立足立新田高)
47回 栃木	平成18年 (2006) 7.26～28	日光市 鬼怒川温泉ホテルニュー岡部	鈴木健一(栃木県立学悠館高等学校長)	『生きる力』をはぐくむ歴史教育の創造	分科会１ 【主題】歴史への興味・関心を高め、歴史的思考力を育てる授業 【発表者】瀧田浩二(栃木県真岡市立真岡西小)・川島啓(栃木県小山市立小山第三小)・小栗英樹(栃木県宇都宮大学教育学部附属中)・奥山雄宏(栃木県下野市立南河内中)・青木茂実(栃木県立宇都宮高) 【コーディネーター】松本一夫(栃木県立文書館) 【記録】月井剛(栃木県立宇都宮清陵高)・石田和紀(栃木県立上三川高)・橋本哲史(栃木県立田沼高)	－	【主題】地域教材を活用した授業実践 【発表者】 １「たばこ」から学ぶ茂木の歴史－たばこと真岡線から茂木を考える－　國井弘紀(栃木県立茂木高) ２　東照宮と杉並木から学ぶ日光の歴史と文化　水沼良浩(栃木県作新学院高) ３　発見された青年画家藤田嗣治の書簡を読む－1910年代の『青春』とそのコンテクスト－　杉山芳寛(千葉県立船橋高) 【司会】 川田純之(栃木県立宇都宮女子高)・斎藤弘(栃木県立学悠館高) 【記録】 高橋史郎(栃木県作新学院高)・中島正己(栃木県作新学院高)・森嶋秀一(栃木県立博物館)	【主題】歴史的見方を引き出す授業づくり 【発表者】 １　遷都を題材に、歴史的事象を多面的・多角的に考察させる指導の工夫　山本訓志(栃木県立文書館) ２　異なる立場・時代の資料から歴史的事象を考えさせる指導の工夫－承久の乱を題材に－　津布楽一樹(栃木県立足利女子高) ３　戦時下の箱根　矢野慎一(神奈川県立六ツ川高) 【司会】 江田郁夫(栃木県立宇都宮北高)・磯貝　厚(栃木県立小山高) 【記録】 田村真弓(栃木県立高根沢高)・馬籠和哉(栃木県立黒磯南高)

司会、記録者 分科会4	分科会5	記念講演者	史跡見学地	参加人数	海外研修報告
【主題】 シラバス・授業進度表の作成と活用－新しい世界史A・Bの視点を取り入れた授業の取り組み－ 【発表者】 1 オリエンテーション「なぜシラバス・授業進度表を問題にするのか」 前田達見(東京都立野津田高) 2 歴史的思考力を育むことを目指した発表学習の取り組み 杉山智子(東京都立新島高) 3 「授業の設計図」としてのシラバス 松岡孝(東京都立八丈高) 4 地域・民族から見た世界史像をいかに構築するか 仮屋園巌(東京都立松が谷高) 【司会】 前田達見(東京都立野津田高)・難波伸一(東京都立足立新田高) 【記録】 風間睦子(東京都立桐ヶ丘高)・粕谷栄一郎(東京都立晴海総合高)・山田美保(東京都立大泉学園高)	【主題】 パネルディスカッション「21世紀の世界史像の創造を目指して－我々は世界史をどう教えるか－」 【発表者】 田尻信壹(東京都筑波大学附属高)・今泉 博(東京都立両国高)・石橋 功(神奈川県立外語短大付属高) 【司会】 遠藤紳一郎(東京都立飛鳥高) 【コメンテーター】 原田智仁(兵庫教育大学教授・文部科学省教科調査官) 【記録】 佐々木巧(東京都立飛鳥高)・藤野明彦(東京都立国分寺高)	【演題】 徳川幕府と平戸蘭英商館 【講師】 東京大学史料編纂所教授 山本博文	Aコース「東京の百年物語－日本の近代を考える」(8.2) 岩崎邸－泉鞠プリズン跡－東京国立近代美術館工芸館－憲政資料館－東京都立日比谷高校星陵会館－市ヶ谷記念館－第一生命館－明治生命館－東京駅 【担当】 羽根行雄(東京都立日比谷高等学校教頭)・仙田直人(東京都立昭和高等学校教頭)・中里裕司(東京都立日比谷高)・中家健(東京都立小石川高)・宮部精一(東京都立戸山高) 【記録】 佐瀬千賀良(東京都立芸術高) Bコース「懐かしさを探る町－千住・柴又」(8.2) 浄閑寺－円通寺－荒川ふるさと文化館－素盞雄神社－回向院・小塚原刑場跡－矢切の渡し－柴又帝釈天－帝釈天周辺－柴又八幡神社－葛飾区郷土と天文の博物館－両国駅 【担当】 木村清治(東京都立永福高等学校教頭)・竹内秀一(東京都立小石川工業高等学校教頭)・加藤健(東京都立小石川高)・松井吉昭(東京都立江北高)・牧内利之(東京都立飛鳥高) 【記録】 大島弘尚(神奈川県栄光学園高)	345名	7日間(8.12～18) 「中国東北地方の史跡を巡る7日間」 大連(大連市第23中学校・大連港・中山広場・旧南満州鉄道株式会社本社跡・旧日本人住宅街・老虎灘公園)－ハルビン(陸軍第731部隊罪証陳列館・松花江防洪紀念塔・中央大街・ハルビン駅)－長春(旧長春ヤマトホテル・偽皇宮陳列館・長春電影宮・南湖公園)－瀋陽(蒸気機車陳列館・東陵公園・瀋陽故宮博物院・北陵・張学良旧居陳列館・遼寧省博物館・九一八事変博物館)－大連－旅順(東鶏冠山北堡塁・203高地・水師営会見所)－旧大連本願寺－旧ロシア人街－星海公園－大連自然博物館(31名参加) 【担当】 豊田岩男(東京都立成瀬高等学校長)・齋藤八重子(東京都立城南高等学校長) 【記録】 尾澤聰(東京都立町田工高)他3名
【主題】 シラバスの作成と活用－新教育課程・完全学校週5日制実施、公立中高一貫教育校の設置等の課題を踏まえての提案－ 【発表者】 1 アンケートから見た、高校における世界史学習の実態と提言 杉浦理花(東京都立深川商高)・佐々木巧(東京都立飛鳥高) 2 シラバス作成の意義－他教科・他科目との連携－ 山田美保(東京都立大泉学園高)・風間睦子(東京都立福生高) 3 中高一貫教育校における歴史教育の状況と連携のあり方 上田隆之(東京都立武蔵高)・日下部公昭(筑波大学附属高) 4 中高一貫教育における世界史カリキュラム 平野和由(東京大学教育学部附属中等) 【司会】 杉山智子(東京都立新島高)・仮屋園巌(東京都立松が谷高) 【記録】 海上尚美(東京都立水元高)・門松加代子(東京都立南野高)	【主題】 新しい世界史教育の視点 【発表者】 1 多文化時代の世界史教育－地域から見た世界史の可能性－ 山本清之(大阪府大阪市立此花総合高) 2 新世界システム論に基づいた世界史構築 桑田政長(国立淡路青年の家専門職員) 3 ヒストリー・リテラシー教育の試み 安達一紀(兵庫県立香寺高) 【司会】 遠藤紳一郎(東京都立飛鳥高)・粕谷栄一郎(東京都立晴海総合高) 【記録】 扇澤美加(東京都立青山高)・塚原直人(東京都立青山高)・福嶋滋嗣(東京都立大山高)	【演題】 ペルシア戦争からイラク戦争まで-歴史的思考ということ- 【講師】 東京大学大学院総合文化研究科教授 山内昌之	Aコース「江戸開府400年の跡を訪ねて」(8.1) 神田明神・湯島聖堂－宮内庁書陵部－九段会館－上野恩賜公園－将軍首塚－増上寺－旧新橋停車場跡 【担当】 赤羽根行雄(東京都立日比谷高等学校教頭)・加藤健(東京都立小石川高) 【記録】 荻原正次(群馬県立館林高) Bコース「多摩・新撰組のふるさとを歩く」(8.1) 龍源寺－近藤勇生家－石田寺－土方歳三資料館－高幡不動尊－小島資料館－町田駅 【担当】 仙田直人(東京都立昭和高等学校教頭)・河合敦(東京都立紅葉川高) 【記録】 杉山智子(東京都立新島高) Cコース「東京で世界史を歩く－皇帝の夢・スルタンの夢」(8.1) 日比谷公園－出光美術館－南青山ゲリックー東京ジャーミィ 【担当】 前田達見(東京都立羽田工業高等学校教頭)・風間睦子(東京都立福生高)・門松加代子(東京都立南野高) 【記録】 小林克則(神奈川県立湘南高)	331名	8日間(8.12～19) 「ベトナム研修旅行－日本・ベトナム国交樹立30周年記念－」 中央郵便局－クチ－統一教会－歴史博物館－戦争証跡博物館－ベンタイン市場－ゴックスーン－チャム彫刻博物館－ハン市場－ミーソン遺跡－ホイアンビーチリゾート－ホイアン旧市街－ハイヴァン峠－ランコー村－フエ－阮朝王宮－カイディン帝廟－ミンマン帝廟－ファンボイチャウ記念館－フエ－民族学博物館－ホアンキエム湖－水上人形劇－ホーチミン廟－一柱寺－文廟－パチャン－ハノイ自然科学大学(13名参加) 【担当】 齋藤八重子(東京都立城南高等学校長)・小澤拓美(東京都立小金井北高等学校長)・豊田岩男(東京都立成瀬高等学校長) 【記録】 中村良二(千葉県県立千葉商高)
【主題】 生徒の主体的な学習を推進する指導法の工夫－生徒による授業活用を通して－ 【実践発表】 1 生徒による授業評価を生かした授業実践 佐瀬千賀良(東京都立芸術高) 2 授業評価を活用した授業実践 粕谷栄一郎(東京都立晴海総合高) 【パネリスト】 1 世界史の授業評価に基づいた授業改善への道 渡邉誠一郎(東京都立日比谷高) 2 生徒による授業評価の実施と活用 佐々木巧(東京都立飛鳥高) 3 生徒による授業評価を行ってみて 外月 誠(東京都立立川高) 4 初めての授業評価－試行錯誤の報告－ 田中秀樹(東京都立南葛飾高) 【コーディネーター】 風間睦子(東京都立福生高) 【司会】 横関素衛(群馬県立太田高)・石井信行(群馬県立伊勢崎東高) 【記録】 浅海紀子(群馬県立下仁田高)・富田文子(群馬県立富岡東高)	【主題】 新しい視点を取り入れた世界史教育の実践 【発表者】 1 歴史の中の「戦争」-近代史における戦争・国家・市民- 飯塚勇一(群馬県立富岡高) 2 学習者(現在)と歴史(過去)をつなぐ授業 長岡将之(群馬県立下仁田高) 3 世界史学習における音楽教材の活用 大久保敏朗(神奈川県立厚木高) 【司会】 安達淳(群馬県立桐生高)・富田一仁(群馬県立前橋南高) 【記録】 茂木真(群馬県太田市立商高)・野口正暢(群馬県立太田高)	【演題】 龍と大鯰－地震の歴史を読み解く－ 【講師】 群馬県立歴史博物館長 黒田日出男	Aコース「岩宿遺跡と新田荘を訪ねて」(7.30) 岩宿遺跡・笠懸野岩宿文化資料館－金山城跡・新田神社－大光院－長楽寺－世良田東照宮－真言院井戸－東毛歴史博物館－緑切寺満徳寺資料館－徳川東照宮－伝新田義重の墓－熊谷駅 【担当】 関口荘右(群馬県立桐生西高)・山口良寛(群馬県立太田西女子高) 【記録】 山口良寛(群馬県立太田西女子高) Bコース「西上州に古風と生糸の里を訪ねて」(7.30) 日本絹の里博物館－かみつけの里博物館と古墳群－北谷遺跡－富岡製糸場－高崎駅 【担当】 久保田顕一(群馬県立渋川女子高)・中川春雄(群馬県立藤岡高)・小池利平(群馬県立桐生南高) 【記録】 中川春雄(群馬県立藤岡高)	240名	6日間(8.4～9) 「モンゴル研修旅行6日間」 ウランバートル－カラコルム－カラコルム遺跡(エルデニ・ゾー寺院・万安宮跡の亀石)－ブルド(砂丘)－ブルド－ウランバートル市内(ボグドハーン宮殿博物館・ザイコン・トルゴイ・スフバートル広場・ガンダン寺・自然史博物館・民族歴史博物館・ダンバダルジャー日本人墓地・第57小学校)－国立ドラマ劇場(14名参加) 【記録】 中根利和(東京都立豊多摩高)・宮部精一(東京都立戸山高)
【主題】観点別評価を取り入れた指導法の工夫 【発表者】 1 五感に訴える授業の試み 三好喜輝(東京都立大崎高) 2 現代社会の理解を深めるための指導の工夫 古賀 卓(東京都立国際高) 3 思考・判断能力を育む授業実践－「イスラーム世界の成立」の単元の授業を例として－ 塚原直人(東京都立青山高) 【コメンテーター】 原田智仁(兵庫教育大学教授)・木下慶彦(中部学院大学教授) 【司会】 風間睦子(東京都立福生高校) 【コーディネーター】 杉山智子(東京都立新島高) 【記録】 杉浦理花(東京都立墨田工高)・粕谷栄一郎(東京都立玉川高)・田中秀樹(東京都立墨田工高)・松岡 孝(東京都立八丈島高)・津野雄彦(東京都立飛鳥高)	【主題】多様な指導法を取り入れた授業展開 【発表者】 1 時計の発達と近代史 清水 篤(東京都立駒場高) 2 高等学校「世界史」の「主題を設定し追求する」学習の教材開発 森 才三(広島大学付属福山中・高) 3 建物から考える歴史－視聴覚教材の使用・基本となる歴史用語を考える－ 木村芳幸(神奈川県立柏陽高)、松木謙一(神奈川県立柏陽高) 【司会】 卯月 誠(東京都立立川高)・佐々木巧(東京都立千早高) 【記録】 田島 力(東京都立駒場高)・大見真由美(東京都立高島高)・常田宗彰(東京都立小石川高)	【講演】 桜は今で紅葉は昔！？ 時を報せる樹木たち 【講師】 東京工業大学大学院教授 山室恭子	Aコース「将門伝説探勝の旅」(7.29) 茨城県岩井(国王神社・延命院[将門胴塚]・鳥広山[営所跡]等)－関宿－千葉県関宿・野田(関宿城博物館)－東京都内(茅場町神社・神田明神・将門首塚)－東京駅 【担当】 仙田直人(東京都立昭和高等学校副校長)・宮部精一(東京都立戸山高)・河合敦(東京都立白鷗高) Bコース「東京の原始・古代を探る」(7.29) 品川区立歴史館－大森貝塚－明治大学博物館－東京大学総合研究博物館－水月ホテル鴎外荘－弥生二丁目遺跡(東大工学部)－茂呂遺跡－中里遺跡－北区飛鳥山博物館－東京駅 【担当】 竹内秀一(東京都立小石川工業高等学校副校長)・加藤健(東京都立小石川高)・中里裕司(東京都立日比谷高) Cコース「東京で世界を歩く－日露戦争終結100年と東京国立博物館－」 日露国境確定碑－乃木神社・乃木邸-外務省外交史料館－日比谷公園(車窓)－東京復活大聖堂(ニコライ堂)－東京国立博物館・東洋館 【担当】 前田達美(東京都立羽田工業高等学校副校長)・門松加代子(東京都立野津田高)・風間睦子(東京都立福生高)・日下部公昭(筑波大学付属高)	不明	－
【主題】歴史的思考力を育成する指導法の工夫 【発表者】 1 「イスラーム世界の形成と拡大」における歴史的思考力を育む授業の試み 宇津木修一(栃木県立宇都宮東高) 2 円仁から遣唐使・東アジア世界へ－地域を素材にした世界史学習－ 長裕之(栃木県立壬生高) 3 イスラーム史－自分で使った教科書と現在の教科書の違い－ 智野豊彦(神奈川県横浜市立東高) 【司会】 鹿倉ゆり(栃木県立真岡女子高)・赤坂賀一(栃木県立小山南高) 【記録】 磯 仁(栃木県立那須清峰高)・作佐部芳明(栃木県立さくら清修高)	【主題】多様な生徒に対応した世界史の授業展開 【発表者】 1 映像教材を取り入れた授業展開界 白土享伸(栃木県立石橋高) 2 世界史の中の日本－日宋貿易を題材に－ 粕谷知之(栃木県立足利高) 3 世界史から何を学ぶか－あり方生き方を考える世界史学習のスメー 秋本光徳(茨城県立土浦第一高) 【司会】 志村千春(栃木県立鹿沼高)・小野敏夫(栃木県立那須拓陽高) 【記録】 日野直敏(栃木県立宇都宮東高)・佐藤千恵子(栃木県立宇都宮白楊高)	【講演】 村人のみた江戸時代 【講師】 元筑波大学教授 田中圭一	A日光・足尾コース(7.28)「近代産業発展の歴史を訪ねる－20世紀初頭の先端技術への挑戦－」 鬼怒川温泉－田母沢御用邸記念館－松本村－足尾精錬所跡・龍蔵寺－古河橋・間藤発電所跡－－中国人殉難烈士慰霊塔－小滝選鉱所跡・中才浄水場－足尾歴史館・足尾銅山観光－掛水倶楽部－古河電工日光事業所－東武日光駅・日光駅・鬼怒川温泉 【担当】 入江吉晴(栃木県立足利工)・石崎利男(栃木県立栃木女子高)・吉川悦男(栃木県立足利女子高) B那須野が原コース「那須野が原開拓の歴史を訪ねる－渡来人から首都機能移転まで－」(7.28) 鬼怒川温泉－塩原者知鳥沢道－那須野が原公園展望台・那須野が原博物館・下侍塚古墳－那須塩原駅 【担当】槌本洋一(栃木県立黒磯高)・鎗木理広(栃木県立烏山高)・木村友典(栃木県立那須高)	不明	－

大会名	期日	会場 （開催地及び会場）	大会委員長	大会主題	シンポジウムテーマ （コーディネーター及びパネリスト）	分科会主題及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導助言者、 分科会1	分科会2	分科会3
48回 宮城	平成19年 （2007） 7.25～27	仙台市 ホテルメトロポリタン 仙台	大橋俊夫（宮城県泉松陵高等学校長）	生徒の実態に即した魅力ある歴史教育にどう取り組むかー学び、考える場としての授業の工夫ー	分科会1 【主題】小・中・高の歴史教育の相互理解に向けて 【発表者】 前川武則（宮城県仙台市立郡山小） 菅原裕樹（宮城県仙台市立第一中） 玉田賢司（宮城県古川黎明高） 【コーディネーター】 石井正樹（宮城県仙台高等学校長） 【記録】 木皿直幸（宮城県角田高）・白旗崇敬（宮城県志津川高）	ー	【主題】生徒の自発性を促す授業展開と評価の工夫 【発表者】 1　話し合い活動による仙台米騒動　津谷泰公（宮城県仙台市立南中山中） 2　聖徳太子がへーこいたーつぎは歴史授業からの脱出ー　郷同哲章（長野県明科高等学校長） 3　評価材料の精選と評価の実際　三宅裕之（宮城県宮城野高） 【司会】 佐藤哲郎（宮城県仙台西高）、加藤明子（宮城県第一女子高） 【記録】 石田香織（宮城県塩竃女子高）、鈴木亜由子（宮城県気仙沼養護）	【主題】歴史研究に裏打ちされた授業 【発表者】 1　支倉常長とインド洋世界ー国宝・慶長遣欧使節関係資料にいるアプローチー　佐々木和博（宮城県仙台図南萩陵高） 2　江戸時代の砂糖生産についてー池上幸豊を例としてー　鍵和田武彦（神奈川県立相武台高） 3「北地跋渉」を語り継ぐー亘理伊達氏の例を中心にー　米田和由（宮城県名取北高） 【司会】 片平保裕（宮城県迫桜高）・黒澤　弘（宮城県泉館山高） 【記録】小林　治（宮城県蔵王高）・吉田実(宮城県東北生活大学文化大学高）
49回 東京	平成20年 （2008） 7.30～31	墨田区 東京都立江戸東京博物館	勝部純明（東京都立国分寺高等学校長）	新たな歴史教育の創造をめざしてー国際社会に主体的に生きる資質をどう培うかー	分科会1 【主題】小・中・高連携の歴史教育の在り方ー小中一貫教育、中高一貫教育のいまとこれからー 【発表者】楠　暁（東京都品川区立日野学園）・橋爪美奈子（東京都品川区立日野学園）・鈴木純平（東京都立白鷗高附属中）・小板橋又久（東京都立武蔵高等学校附属中） 【コーディネーター】金澤利明（東京都立大崎高等学校副校長） 【記録】太田尾智之（東京都立昭和高）・小野崎尊和（東京都立蒲田高）	ー	【主題】生徒が歴史的見方・考え方を身に付けたり主体的な学習を行ったりする主題学習の展開 【発表者】 1　近現代における都立桐ヶ丘高校周辺の土地利用と人々の生活の移り変わりー東京都立桐ヶ丘高校「チャレンジ・スクール」での実践報告ー　江藤　徹（東京都立小石川高） 2　困民党が呼びかけた打ちこわしに参加しますか？ー秩父事件を考えるー　柄澤守（千葉県習志野市立習志野高） 3　幕末・維新期における地域の変容ー武蔵国北多摩郡を中心としてー　加藤　健（東京都立清瀬高） 【司会】中家　健（東京都立小石川高）・倉澤俊仁（東京都立上野高） 【記録】合田尚樹（東京都立第四商高）・横川和則（東京都立南葛飾高）	【主題】世界の中の日本の視点を生かした近現代史学習の進め方 【発表者】 1　太平洋戦争にいたる日米関係　山田淳也（東京都立六本木高） 2　シベリア出兵と日本　早川秀昭（神奈川県栄光学園中・高） 3　1920年代の日本ートータルな時代観と多面的な「世界の中の日本の視点」を目指してー　上田隆之（東京都立新宿高） 【司会】 金澤利明（東京都立大崎高等学校副校長）・今井啓介（東京都立深沢高） 【記録】 古川泰代（東京都立町田高）・黒田千代（東京都立荻窪高）
50回 東京	平成21年 （2009） 7.29～30	港区 慶應義塾大学三田キャンパス	勝部純明（東京都立国分寺高等学校長）	新たな歴史教育の創造をめざしてー国際社会に主体的に生きる自覚と資質をどう培うかー	新学習指導要領の考え方ーこれからの歴史教育の在り方についてー 【司会】 川瀬　徹(東京都立府中高等学校副校長） 【パネリスト】中尾敏朗(文部科学省教科調査官)・土屋武志(愛知教育大学教授)・田尻信壹(富山大学教授)・宮部精一（東京都立新宿高）・小林克則(専修大学講師・前神奈川県立厚木商高） 【記録】金澤利明(東京都立大崎高等学校副校長）・浦部利明(東京都立大江戸高等学校副校長）	分科会1 【主題】小・中・高「様々な資料を活用して歴史的な見方・考え方をどう育てるか 【発表者】 (小)児童に時代や人物の印象を持たせる学習指導の工夫　多胡精一（東京都足立区立千住双葉小）・若林廣美（東京都台東区立石浜小） (中)生徒の学習意欲を喚起する授業作り　杉浦元一（東京都杉並区立和田中） (高)資料活用の工夫-生徒の多様なニーズにどう応えるか-吉野領剛（東京都立町田高） 【司会】関裕幸（東京都立小石川中等）・江藤　徹（東京都立小石川高） 【記録】大田尾智之（東京都立昭和高）・島津　聡（東京都立府中特別支援）	【主題】様々な資料を活用して生徒が主体的に考察を進める主題学習の展開 【発表者】 1　歌枕で知られる宮城野原に位置する仙台育英学園高等学校の立地を活かした地域学習ー学校設定教科・地域学習講座の実践事例『宮城野原の史跡～変わりゆく仙台駅東口方面～』ー　渡邊泰伸（前宮城県仙台育英学園高） 2　秩父事件ー人権の視点からー　中川敬司（徳島県立辻高） 3　絵画史・資料から考える中世後期の社会と文化(信仰・風俗)ー「清水寺参詣曼荼羅」を中心にー　松井吉昭（東京都立向丘高） 【司会】 加藤　健（東京都立清瀬高）・山田淳也（東京都立六本木高） 【記録】 古川泰代（東京都立町田高）・野田友紀（東京都立大森高）	【主題】資料を活用して世界の中の日本の視点を生かした近現代史学習の進め方 【発表者】 1『世界の中の日本』の視点を育成する近現代史の学習指導ー第3学年『日本史B』における『四大公害訴訟』の学習指導を通じてー　石井　裕（茨城県立石岡第一高） 2『有栖川宮記念厚生資金』の教材化　矢野慎一（神奈川県立柏陽高） 3　農民兵士たちはいかに日露戦争を戦ったかー地域資料から読み解く日露戦争の実態ー　河合　敦（東京都立白鷗高） 【司会】 今井啓介（東京都立深沢高）・高野修一（東京都立八王子東高） 【記録】 小野崎尊和（東京都立蒲田高）・山本武蔵（東京都立練馬高）
51回 岡山	平成22年 （2010） 7.28～29	岡山市 アークホテル岡山 ピュアリティまきび	西澤幸司（岡山県立岡山芳泉高等学校長）	現代の視点に立ち、過去と未来をつなぐ歴史教育の創造をめざして	分科会1 【主題】 歴史教育の小・中・高一貫性を問う 【コーディネーター】 猪木晴二（岡山県立蒜山高等学校長） 【発表者】 山田秀和（岡山大学大学院教育学研究科准教授）・佐藤陽子（岡山県倉敷市立精思高）・西中明彦（岡山県岡山市立岡輝中）・江原知博（岡山県岡山市立吉備小） 【記録】 貝原謙二（岡山県立岡山芳泉高）・杉田直樹（岡山県立岡山芳泉高）・槙本大伸（岡山県立瀬戸高） 【補助】下川和恵（岡山県立井原高）・門田剛毅（岡山県山陽女子高）・小松原基弘（岡山県立邑久高）	ー	【主題】 地域を見すえて新たな日本史像を示す 【発表者】 1　歴史の『現場』に立つ日本史授業の実践ー「崇徳上皇と讃岐」を中心にー　山本秀夫（香川県立高松工芸高） 2　中世の荘園制の展開ー備中国新見荘を事例にー　辰田芳雄（岡山県立岡山朝日高） 3　吉備と古代遺跡の歴史教育ー造山古墳の時代を授業教材にー　古市秀治（岡山県立岡山城東高） 【司会】 河合康浩（岡山県立総社高）・八田眞（岡山県立烏城高） 【記録】 小橋国広（岡山県立玉野光南高）・國光康弘（岡山県立倉敷天城高）・阪谷誠（岡山県立倉敷南高） 【補助】 松本　亨（岡山県岡山市立岡山後楽館高）・藤井宏昌（岡山県岡山高）・尾崎聡（岡山理科大学附属高）	【主題】 今とつながり今にこだわる日本史授業 【発表者】 1　現代につながる地域の生活文化ー科目「地域研究」の取り組みー　中村浩一（岐阜県立益田清風高） 2　日本史A「現代からの探求」についての授業展開の工夫-環境問題を中心にー　前田能成（岡山県立岡山一宮高） 3　みんなのおもひでー教科「むかし」の実践ー　宮田拓（岡山県立高松農高） 【司会】 速水章人（岡山県立玉野高）・松本浩和（岡山県清心女子高） 【記録】 太田正浩（岡山県立倉敷古城池高）・磯永二（岡山県立総社高）・古屋高之（岡山県立高梁高） 【補助】 桃木正規（岡山県立倉敷工高）・杉山勝彦（岡山県立水島工高）・山内陣（岡山県明誠学院）
52回 宮崎	平成23年 （2011） 7.27～28	宮崎市 ニューウェルシティ 宮崎	佐藤則夫（宮崎県立延岡高等学校長）	21世紀の歴史教育のあり方を問うー地の伝達から知の創造へー	分科会1 【主題】子どもが自ら解釈を築く授業を目指して 【発表者】 1　地域の産業学習から歴史の見方にふれる　東坂将秀（宮崎県延岡市立南小） 2　社会について考え続ける中学校歴史学習の創造　三樹浩二（宮崎県延岡市立岡富中） 3　高等学校日本史Bの授業開発　中野耕一郎（宮崎県立宮崎南高） 4　思考力・判断力を育成する歴史学習の指導事例ー中学校歴史的分野古代史の場合ー　児玉康弘（新潟大学教育学部教授） 【コーディネーター】吉村功太郎（宮崎大学大学院教育学研究科准教授） 【記録】渡辺幸（宮崎県立宮崎南高）ー・日高和子（宮崎県立宮崎南高） 【補助】浅井清・佐々木未応・黒木誠司・代継忍・沼口将之（宮崎県立宮崎南高）	ー	【主題】地域教材を活用し、つながりを重視した歴史研究 【発表者】 1　古地図に見る日本人の世界観　荒平英敏（佐賀県立三養基高） 2「地域性」と「交流」を重視して歴史ー海と大分と倭寇とー　岡　義弘（大分県立津久見高） 3　近世前期における幕府と西北九州との関わり　加藤　健（東京都立石神井高） 【司会】 国分義弘（宮崎県立宮崎東高）・和田ちほ（宮崎県立都農高） 【記録】吉本道夫（宮崎県立宮崎五ヶ瀬中等）・前田邦秀（宮崎県聖心ウルスラ学園高） 【補助】 工藤裕司（宮崎県立宮崎東高）・伊豆惠太郎（宮崎県日章学園高）・中川美貴子（宮崎県立宮崎大宮高）	【主題】生徒が主体的に知を創造するための授業実践 【発表者】 1　理解を深める「考える日本史」 室屋隆司（熊本県立東陵高） 2　生徒に解釈させる歴史授業の構成ー小単元「中世の借金事情」の場合ー　粟谷好子（広島大学附属中・高） 3　生徒が自ら解釈を築く日本史授業を目指してー日英同盟・開戦前日露交渉と小村寿太郎ー　河野直志（宮崎県立延岡高）・牧野亮司（宮崎県立高鍋高） 【司会】 上村浩立（宮崎県立佐土原高）・牧野亮司（宮崎県立高鍋高） 【記録】 堀之内亮人（宮崎県立高千穂高）・松浦正徳（宮崎県立延岡ととろ聴覚支援） 【補助】 河野弘行（宮崎県立宮崎大宮高）・嶋内茂史（宮崎県日章学園）・豊増龍一郎（宮崎県日章学園）

司会、記録者 分科会4	分科会5	記念講演者	史跡見学地	参加人数	海外研修報告
【主題】生徒の実態に即した世界史授業の工夫 【発表者】 1 「5秒で書ける世界地図」を使った世界史の授業ー授業開きで「ジョン万次郎」をテーマにー　周藤新太郎（千葉県立柏高） 2 ドイツってどこ？ー基礎学力の不足した生徒の実態に即した授業の工夫ー　佐々木和哉（岩手県立水沢高） 3 「確かな学力」の獲得に向けてーここ数年の試みからー　穂積　暁（宮城県仙台向山高） 【司会】 初田昌一（宮城県名取北高）・樋口史明（宮城県白石高） 【記録】 中川昭治（宮城県第三女子高）・大橋達（宮城県仙台南高）	【主題】世界・史（グローバルヒストリー）の探究 【発表者】 1 世界史における〈帝国〉についての一考察ー帝国とは何か、そのモデル化・類型化、そして現代史的解釈の試みー　佐々木達哉（宮城県尚絅学院女子中・高） 2 世界を一周した石巻若宮丸の船頭たち　髙島邦俊（宮城県名取高） 3 古代マヤ文明の精神文化　多々良穣（宮城県東北学院榴ヶ岡高） 【司会】 峯村茂樹（宮城県第二女子高）・山本 博（宮城県仙台第一高） 【記録】 中村 浮（宮城県佐沼高）・齋藤公子（宮城県鹿島台商高）	【講演】 東アジアの中の平泉 【講師】 東北芸術工科大学教授・東北大学名誉教授　入間田宣夫	Aコース（7.27）「2万年前から辿る仙台の歴史」 宿舎ー地底の森ミュージアム（富沢遺跡保存館）ー縄文の森広場ー仙台城趾ー大崎八幡宮ー仙台東照宮ー陸奥国分寺跡ー仙台駅前 Bコース（7.27）「みやぎ東北、そして世界へ」 宿舎ー仙台市博物館ー宮城県慶長使節ミュージアムー松島瑞巌寺（陽伝院）ー多賀城政庁跡・東北歴史博物館ー仙台駅 【担当】 大橋俊夫（宮城県泉松陵高等学校長）、渡邊泰伸（宮城県仙台育英学園高）、岩見和泰（宮城県宮城広瀬高）、菊地雅之（宮城県石巻高）、吾妻俊典（宮城県名取高）、松崎浮一（宮城県別府高）、茂木好光（宮城県石巻市立女子高）、岩手正浩（宮城県黒川高）	不明	5日間（8.2～8.6） 「韓国歴史の旅」 仁川空港（仁川上陸作戦記念館・マッカーサー銅像）ー江華島（支石墓群・広城堡）ーソウル（海剛陶磁器美術館・芳美洞百済古墳群・石村洞百済初期古墳群）ー扶余（国立扶余博物館・定林寺址・扶蘇山）ー大邱（友鹿里鹿洞書院［沙也可の資料館］ー海印寺（八万大蔵経板殿）・経営（復元亀甲船・忠烈洞・李舜臣銅像）ー釜山（龍頭公園・富山浦倭館跡）ーチャガル市場ー釜山空港
【主題】視聴覚教材を用いた授業実践 【発表者】 1 考える世界史を目指してー生徒の発表学習を通して豊かな学力を育てる試みー　角田展子（東京都立町田高） 2 博物館資料を用いた授業例ー"みんぱっぐ"を中心にー　海上尚美（東京都立一橋高） 3 視聴覚教材を使用した授業の工夫ー思考をうながす教材の利用ー　近藤泉子（東京都立忍岡高） 【司会】 塚原直人（東京都立青山高）・仮屋園巌（東京都立新宿高） 【記録】 光森佐和子（東京都立美原高）・濱野勇介（東京都立桐ヶ丘高）	【主題】生徒が主体的に生きる資質を培う教材研究 【発表者】 1 非欧米・被支配者にとっての近代　澤野　理（神奈川県立川崎工高） 2 自学自習を軸とした学習指導・支援の在り方ー12時間の世界史ー　泉川正人（栃木県立小山高） 3 理系生徒のための世界史A　杉浦理花（東京都立墨田川高） 【司会】 粕屋栄一郎（東京都立世田谷総合高）・佐々木巧（東京都立千早高） 【記録】 小弱久美子（東京都立豊多摩高）・伊藤陸則（東京都立北特別支援）	【講演】 日本の中世についてー時期区分と時代の流れ 【講師】 放送大学教授・東京大学名誉教授　五味文彦	A風林火山コース（8.1） 新宿駅ー風林火山跡ー武田神社ー信玄館・恵林寺ーメルシャンワイン勝沼ワイナリーー大善寺（車窓）ー有馬晴信旧居跡ー新宿駅西口 【担当】 宮部精一（東京都立新宿高）・太田尾智之（東京都立昭和高） B幕末歴史散策コース（8.1） 品川駅ー品川区立台場小学校（御殿山品川台場跡）ー東禅寺（英国公使館跡）ー田町（西郷南州・勝海舟会見の跡）ー品川台場ー豆腐（二重橋・桜田門）ー九段（靖国神社・練兵館跡）ー小伝馬町・十思公園（伝馬町牢屋跡・吉田松陰終焉の地）ー上野公園（西郷像・彰義隊士墓・両大師）ー今戸神社・浅草寺 【担当】 河合　敦（東京都立白鵬高）・古川泰代（東京都立町田高）	不明	5日間（8.2～8.6） 「台湾四百年　歴史の旅」 台北ー台南（延平郡王祠・飛虎将軍廟・孔子廟・鄭氏祖廟・赤嵌楼・宝覧寺）ー台中（鹿港龍山寺・九曲港・天后宮）ー台北（国父記念館・忠烈祠・故宮博物館・国立歴史博物館・台湾総督府） 【記録】 太田尾智之（東京都立昭和高）
【主題】 資料を活用して世界史の大きな枠組みと流れを深めるには 【発表者】 1 農耕民を圧倒せよー遊牧社会の成立から遊牧国家の誕生までー　棚沢文貴（千葉県立国分高） 2 コインから読み解くアジアの植民地化・反植民地化ー単元を通してのテーマ学習の試みー　塚原直人（東京都立青山高） 3 『世界遺産』で見る世界史ー歴史的遺構としての『世界遺産』ー　高木　潤（岡山県立矢掛高） 【司会】 鬚澤美加（東京都立青山高）・粕谷栄一郎（東京都立世田谷総合高） 【記録】 山田美保（東京都立深川高）・大木匡尚（東京都立永山高）	【主題】「現代社会と人類の諸課題を追求する世界史Aの学習」 【発表者】 1 「歴史的事象について、絵画資料の読み解きを通して考察させる授業　大森浮子（栃木県立真岡高） 2 「常設国際司法裁判所長　阿達峰一郎ー郷土史から世界史へー　高橋徹（山形県立山形南高） 3 「世界史Aで戦後史をどのように扱うか」 西浜吉晴（神奈川県立大和高） 【司会】 卯月　誠（東京都立山崎高）・住吉貴之（東京都立大島国際海洋高） 【記録】 桑名信介（東京都立戸山高）・金森亜希子（東京都立田無高）	【特別分科会】 慶應義塾大学文学部東洋史研究室発表　日中戦争とイスラームー日中戦争期における日本のイスラーム認識を中心としてー 【講師】慶應義塾大学教授　坂本　勉・東京大学教授　羽田　正 【記念講演】 グローバル時代の歴史教育について 【講師】 学習院大学長　福井憲彦	Aコース「東京の近代建築めぐりーコンドルと4人の弟子たちー」（7.31） 三田駅ー清泉女子大学（旧島津公爵邸）ー日本水準原点標庫ー旧法務省本館ー日本銀行本店ー三井本館ー旧古河邸ー旧岩崎邸ー東京国立博物館表慶館ー上野公園（近代建築） 【担当】中里裕司（東京都立日比谷高）・古川泰代（東京都立町田高） 【記録】大西孝明（東京都立稔ヶ丘高） Bコース 「常総の史跡見学」（7.31） 【担当】 江藤徹（東京都立小石川高）・佐々木虔一（東京都立江北高） Cコース「世界の紙と印刷の歴史を訪ねて」（7.31） 東京駅ー印刷図書館ー印刷博物館ー東書文庫（東京書籍株式会社附設教科書図書館）ー洋紙発祥の地碑ー渋沢資料館ー紙の博物館ー東京駅 【担当】 海上尚美（東京都立一橋高）・大島寛子（東京都立江北高） 【記録】 角田展子（東京都立町田高）	不明	5日間（8.18～8.22） 「サハリン歴史探訪」 ユジノサハリンスクーホルムスク（旧日本製紙工場跡地・戦争記念碑・展望台）ーユジノサハリンスク（レーニン広場・栄光広場・ガガーリン公園）ーティモスコエー北緯50度線ースミルノフ（日本関連記念館）ーポロナイスク（旧王子製紙）ーユジノサハリンスク（展望台・樺太神社・自由市場散策）ーコルサコフ（歴史博物館・旧拓殖銀行・旧王子製紙大泊工場） 【記録】 小弱久美子（東京都立豊多摩高）
【主題】 新たな視点で捉えた世界史の授業 【発表者】 1 新しい世界史の視点とは？　石橋功（神奈川県立藤沢総合高） 2 生徒の質問、疑問を活かした世界史Aの授業実践ー知識から広がる世界史ー　前田竜一（岡山県立勝山高） 3 主題学習「ヨーロッパ中世都市」から読み取る地方自治の伝統ー日本における「道州制」議論を展望してー　森川　悟（岡山県立岡山芳泉高） 【司会】 渡辺克則（岡山県立勝間田高）・山本達也（岡山県立瀬戸高） 【記録】 赤城一朗（岡山県立玉野光南高）・石井正美（岡山県立高梁高）・本元寛久（岡山県立新見高） 【補助】 鈴木祐子（岡山県立倉敷鷲羽高）・田中彰彦（岡山県立林野高）・花岡仁美（岡山県倉敷翠松高）	【主題】 近現代史から学ぶ国際理解のための世界史授業 【発表者】 1 神戸異人街から始める近代ユーラシア交流の学習　岸本次司（鳥取県立鳥取西高） 2 東西冷戦時代の軍拡競争による今日的な課題について－多角的な思考力を育てる授業工夫ー　桐野　武（岡山県立岡山操山高） 3 オスマン帝国の動揺期を理解するためにー世界史AにおけるアプローチーＡ　大本　圭（岡山県立岡山大安寺高） 【司会】 田邊昌幸（岡山県立井原高）・和気史弥（岡山県立笠岡高） 【記録】 長安都正（岡山県立岡山一宮高）・藤井清志（岡山県立総社高）・祇園祐司（岡山県立蒜山高） 【補助】日下耕輔（岡山県立西大寺高）・下野眞（岡山県立津山工高）・横井俊樹（岡山県立落合高）	【講演】 アジアと日本の近代ー国民国家と帝国への視点 【講師】 京都大学人文科学研究所教授　山室信一	A岡山東部コース「備前岡山の匠と文化の足跡を訪ねて」 【担当】次田元文（岡山県立東岡山工業高） B（岡山西部）コース「古代から現代へ　岡山の歴史絵巻をたどる旅」 【担当】秋山亮（岡山県立新見高）、横山伸一郎（岡山県立岡山芳泉高）、内池英樹（玉野市教育委員会）	287名	5日間（8.18～8.22） 「中国山東省史跡巡りー孔子・孟子の故地を訪ねて－」 青島ー淄博（管仲墓・殉馬抗・斉国城壁・晏嬰墓・斉国古城博物館前市場・周村・城子崖博物館）ー鄒城（尼山夫子洞・孔廟・孔府・孔林・周公廟・孟林・孟廟・孟府）ー青島ー威海（劉公島・中国甲午戦争博物館・北洋海軍提督署）ー青島（信号山公園・デーリッヒ記念碑・迎賓館・ドイツ監獄・小青島） 【記録】 江藤徹（東京都立小石川高）
【主題】内容知から世界史授業を創造する 【発表者】 1 海外旅行見聞による世界史学習への効果　川副華代子（長崎県立佐世保南高） 2 唐代貴族階と門下省の関係について　小島昌吾（鹿児島県立鶴丸高） 3 世界史教育における絵画教材発掘の可能性ー帝国書院［世界史しおり］『世界史芸術鑑定団』を担当してー　今林常美（福岡県立東筑高） 【司会】 河野彰（宮崎県立本庄高）・末永幸二（宮崎県立都農高） 【記録】 酒井修（宮崎県立高千穂高）・森　拓也（宮崎県立延岡星雲高） 【補助】 竹村茂紀・山崎　隆・又江原充（宮崎県日向学院高）・山本靖彦（宮崎県宮崎日本大学高）	【主題】内容知から世界史授業を創造する 【発表者】 1 デジタルメディアプレーヤー（DMP）を活用した教材の提示　當間文隆（沖縄県立那覇国際高） 2 歴史的思考力を育む指導の工夫ー授業ノートを通じてー　赤坂賢一（栃木県立小山南高） 3 生徒自ら解釈を築く世界史授業を目指してー主題学習「17世紀の『オリジナルノート』をつくろう」の実践を通してー　竹元賢一郎（宮崎県立宮崎大宮高）・岩切和美（宮崎県立高鍋商高）・木場康典（宮崎県立延岡高） 【司会】 山口浩一（宮崎県立宮崎東高）・高橋幸彦（宮崎県立高鍋農高） 【記録】 宮崎修子（宮崎県立五ヶ瀬中等）・川畑寛記（宮崎県立延岡青朋高）・矢野直樹（宮崎県立都農高） 【補助】 横山英樹（宮崎県立宮崎東高）・矢野直樹（宮崎県立都農高）・飯山博一（宮崎県立宮崎東高）	【講演】冷戦後に必要とされる歴史とは何か 【講師】 東京大学大学院人文社会系研究科教授　加藤陽子	A（宮崎県西部・都城地区）コース（7.29）「都城島津の歴史をめぐる」 宮崎駅ー上原勇作銅像・都城県庁跡（車窓）ー都城歴史資料館・財部彪銅像ー都城島津邸・島津伝承館ーー開之尾の滝ー宮崎駅 【担当】 長友道彦（宮崎県立都農高等学校教頭）・佐々木未応（宮崎県立宮崎南高）・松下俊一・濱俊博・酒井隆治・甲斐靖浩（宮崎県立都城泉ヶ丘高）・別府志朗・黒木広志・市原洋平・穴井善也（宮城県立城西高）・川内純一（宮崎県立・都城商高） B（宮崎県南部・日南）コース「九州の小京都飫肥と鵜戸をめぐる」（7.29） 飫肥（小村記念館）ー雨章館、歴史史料館ー松尾の丸ー振徳堂（飫肥藩校）ー油津堀川運河周辺ー鵜戸神宮ー宮崎空港・宮崎駅 【担当】 高崎広一郎（宮崎県立城西高）・原弘毅（宮崎県立日南原徳高）・日高康嗣・丸尾直樹（宮崎県立日南高）・三原正弘・宗像大道（宮崎県立福島高）・黒木健二（宮崎県立宮崎農業高）・岩切澄人・佐藤智文・谷口剛実（宮崎県日南学園） C（宮崎県中部・西部・宮崎地区）コース「西都原・県都をめぐる」（7.29） 宮崎駅ー佐土原町ー西都原考古博物館ー石井記念友愛社（石井十次資料館ほか）ー高城跡ー平和台公園ー宮崎駅 【担当】 後藤徹一（宮崎県立門川高等学校教頭）・遠田辰芳・黒木太一・菅竜朗（宮崎県立妻高）・岩元健二（宮崎県立西都商業高）・藤元正・後藤宏隆・岩元芳博・園山信一（宮崎県立宮崎北高）	250名	5日間（8.17～8.21） 中国東北地方「「王道楽土"のあとを訪ねて」 成田空港ー大連空港・旅順要塞跡ー旅順刑務所ー白玉山・旅順駅ー203高地ー旧大連大和ホテルー大連駅ーハルビン駅ー伊藤博文暗殺現場跡ー旧東清鉄道職員宿舎（満鉄宿舎）ー旧満鉄支社・満鉄倶楽部ー旧ハルビン第一ホテルー旧大和ホテルー聖ソフィア大聖堂ー中央大街ー松花江ー防洪勝利記念館ー自由市場・ハルビン駅ー長春駅ー偽満皇宮ー偽満州国務院ー旧満州国会議事堂ー長春駅から瀋陽駅ー張作霖爆殺事件現場跡ー瀋陽鉄路局ー瀋陽故宮ー超学良旧居陳列館ー北陵公園ー九・一八事変博物館ー瀋陽ー大連駅ー中山広場ー大連港ー大連空港 【記録】 島津　聡（東京都立桜町高）

大会名	期日	会場 （開催地及び会場）	大会委員長	大会主題	シンポジウムテーマ （コーディネーター及びパネリスト）	分科会主題及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導助言者、 分科会1	分科会2	分科会3
53回 東京	平成24年 (2012) 8.1～2	新宿区 早稲田大学国際会議場	竹内秀一（東京都立石神井高等学校長）	新たな歴史教育の視点を求めて－「社会科」科目間相互の関連と情報・資料の活用を考える－	分科会1 【主題】小中学校の地域学習と東京都独自の日本史科目「江戸から東京へ」との接続－小中学校一貫の歴史学習で身につけること－ 【発表者】 1　小学校における地域学習－地域社会に対する誇りと愛情を育む－　木村陽子（東京都町田市立成瀬台小） 2　身近な地域の歴史を調べる学習－文京区の地蔵信仰－　入子彰子（東京都文京区音羽中） 3　地域歴史統合科目としての「江戸から東京へ」の課題と可能性－1年間の先行実施における授業開発・実践を通じて－　大木　匡尚（東京都立農業高） 4　小学校の地域学習と日本史独自科目「江戸から東京へ」との接続　外山至生（東京都立武蔵高） 【コーディネーター】川瀬　徹（東京都立武蔵高等学校副校長） 【記録】豊田基裕（東京都立北豊島工高）	－	【主題】生徒が歴史的な見方・考え方を身につけたり、主体的な学習を行ったりする主題学習の展開 【発表者】 1　モノから考える朝鮮出兵　古川泰代（東京都立町田高） 2　持続発展教育を視野に入れた日本史主題学習　北村　拓（東京都立戸山高） 3　絵図で歩く備中松山－城下町の特色を学ぶ授業実践－川添賢一（岡山県立高梁高） 【司会】加藤　建（東京都立石神井高）・今井啓介（東京都立深沢高） 【記録】野田友紀（東京都立大森高）・山本武蔵（東京都立砂川高）	【主題】世界の中の日本の視点を生かした近現代史学習の進め方 【発表者】 1　関東大震災を「世界の中の日本」の視点でとらえる学習指導－東日本大震災との関わりに着目して－　武藤正人（東京都立小山台高） 2　戦後史をどのようにとらえるか－『鉄腕アトム』と『ゴジラ』の教材化－　太田尾智之（東京都立武蔵丘高） 3　世界とつながる近代産業－地域教材の活用、足尾・日光－　内木　裕（栃木県立石橋高） 【司会】本杉宏志（東京都立青山高）・高野修一（東京都立八王子東高） 【記録】島津　聡（東京都立桜町高）・赤羽健太郎（東京都立荒川工高）
54回 神奈川	平成25年 (2013) 7.31～8.1	横浜市 ワークピア横浜	岡田健（神奈川県立菅高等学校長）	日本の近代史をどう教えるか	分科会1 【主題】 日本の近代史をどう教えるか 【発表者】 1 「小学校における日本の近代史」 赤羽博明（神奈川県横浜市立立野小） 2 「近代民主主義」とは何かを考える授業－大日本帝国憲法と議会の始まり－　篠田直樹（神奈川県横浜市立大綱中） 3　日清・日露戦争　矢野慎一（神奈川県立柏陽高） 4　日本の近代史をどう教えるか－「文明開化」の授業を入り口として－　成田龍一（日本女子大学人間社会学部教授） 【コーディネーター】 児玉祥一（同志社大学グローバル地域文化学部准教授） 【記録】 須藤智夫（神奈川県立光陵高）・齋藤兆生（神奈川県横浜富士見丘学園中等）	－	【主題】様々な地域資料をどう授業に取り込むか 【発表者】 1　県独自科目『郷土史かながわ』における言語活動を取り入れた地域史学習の実践　野嵜菜緒（神奈川県立上溝高） 2　古代から中世の横浜北部を学ぶ－授業の通史展開のなかで「地域の歴史」を考える－　長島一浩（神奈川県立元石川高） 3　地域資料から戦争のリアリティをさぐる　西形久司（愛知県東海高校） 【共同研究者】 斉藤一晴（明治大学） 【司会】 新谷　桂（神奈川県立湘南高）・鍵和田武彦（神奈川県立相模向陽館高） 【記録】 永井　淳（神奈川県立鶴見高）・箴島勇貴（神奈川県立麻生高）	【主題】 生徒の思考力・判断力をどのように育てるか 【発表者】 1　多様な資料を活用し、思考・判断・表現の力を育む授業の創造　渡辺研悟（神奈川県柏陽高） 2　シチズンシップ教育を意識した日本史教育－沖縄修学旅行事前学習を題材として－　黒崎洋介（神奈川県立湘南台高） 3　歴史の「常識」を問い直す教材研究－日露戦争後の内政と外交－　吉橋淳（宮城県立佐沼高） 4「再考・歴史的思考力」 大串潤児（信州大学人文学部准教授） 【司会】中田稔（神奈川県立茅ヶ崎）・白川重敏（神奈川県立生田高） 【記録】風間洋（神奈川県鎌倉学園高）・高橋俊介（神奈川県立座間総合高）
55回 大阪	平成26年 (2014) 7.30～31	大阪市 大阪国際交流センター	山田勝治（大阪府立佐野高等学校長）	連携－新たな歴史教育の模索－	分科会1 【主題】連携－教室にとらわれない歴史 【発表者】 1　歴史を生きる力に－歴史教育と歴史研究の連携－　塩崎悠輝（日本学術振興会特別研究員・早稲田大学） 2　テレビの歴史番組が伝える（べきっ？）「歴史」　荻野昌樹（NHK大阪放送局制作部歴史班チーフディレクター） 3　博物館における社会連携　加藤俊吾（大坂歴史博物館） 【コーディネーター】 嶋中明彦（大阪府立清水谷高） 【司会】 矢部正明（大阪府関西大学中・高） 【記録】 大村一人（大阪府立芦間高）・関　香（大阪府立佐野特別支援）	－	【主題】「開かれる歴史風景-教科・科目の壁を越えて」 【発表者】 1　朝鮮開国から日清・日露戦争に至る道－世界史と日本史の壁を越えて－　古澤美穂（兵庫県松蔭中・高） 2　ロックで学ぶ『現代社会』⇔『世界史』 大坂秀樹（岡山県立玉野高） 3　国語科と歴史科の接点　梅田　徹（大阪府大阪市立都島第二工業） 【司会】 友草有美子（大阪府立高津高）・菱川　綾（大阪府立夕陽丘高） 【記録】 土井啓瑛・小西真里奈（大阪府立夕陽丘高）	【主題】つなげ合う教育の在り方－異校種の生徒に対する教師の眼差し－ 【発表者】 1　一人ひとりを見つめ、ともに学ぶ社会科教育（歴史教育）の在り方　川口由美子（大阪府大阪市立咲くやこの花中） 2　教職課程を有する大学との高大連携事業の試み－大阪市立高等学校教育研究会社会科部会の研究発表会を通して－　柴田洋一（大阪府大阪市立扇町総合高） 3　地域歴史遺産の保全・活用における中学社会・高校地歴科教員の役割　河島　真（神戸大学大学院人文学研究科） 【司会】 八木俊樹（大阪府大阪市立生野工高）・文珠友也（大阪府大阪市立東高） 【記録】 小林俊介（大阪府大阪市立生野工高）・新留建一（大阪府大阪市立咲くやこの花高）
56回 東京	平成27年 (2015) 7.29～30	東京都 東京大学伊藤国際学術研究センター	川瀬徹（東京都立武蔵村山高等学校長）	国際社会に生きる資質を養う歴史教育を求めて	分科会1 【主題】世界の一体化が進む中、なぜ歴史を学び、どのように歴史を学ぶのか 【発表者】 1　世界の一体化が進む中、なぜ歴史を学び、どのように歴史を学ぶのか　嵐　元秀（東京都練馬区立仲町小） 2　中・高一貫校での歴史の学び　外山至生（東京都立武蔵高附属中） 3　高校世界史の現場から　塚原直人（東京都立立川国際中等） 4　国際バカロレア・ディプロマプログラム　青木一真（東京都立国際高） 5　金井光太朗（東京外国語大学大学院総合国際学研究科教授） 【コーディネーター】 中家　健（東京都立小石川中等） 【記録】大舘一基（東京都立大森高）・赤池達朗（東京都立大森高）	－	【主題】近現代の日本について国際環境と関連づけて考察する 【発表者】 1　世界の教科書から見る第一次世界大戦－日本・ドイツ・ロシア－異なる立場を考える－　谷田尚樹（東京都立戸山高） 2　絹の道－糸貿易と近代化－　鳥羽顕司（東京都立富士森高） 3　身近な地域から学ぶ第一次世界大戦－習志野俘虜収容所を教材に－　渡辺哲郎（千葉県日本大学習志野高） 【司会・記録】 豊田基裕（東京都立田園調布高）・中村　修（東京都立石神井高）	【主題】「世界の中の日本」について多面的・多角的に研究する 【発表者】 1 「東京オリンピック」を通して近代日本を考える学習指導　武藤正人（東京都立日野高） 2 「江戸から東京へ」を活用した日本史の授業実践　佐々木彬人（東京都立羽村高） 3　県独自教材「世界と日本」を活用した実践　大久孔明（兵庫県立兵庫工高） 【司会・記録】 江藤徹（東京都立多摩科学技術高）・太田尾智之（東京都立武蔵丘高）
57回 埼玉	平成28年 (2016) 7.27～28	浦和市 浦和コミュニティセンター	島村圭一（埼玉県立岩槻北陵高等学校長）	歴史的思考力をどう育成するか	分科会1 【主題】歴史的思考力をどう育成するか－現状、育成のための取組、そして評価－ 【発表者】 1　永松靖典（元埼玉県立川越女子高等学校長） 2　土屋武志（愛知教育大学教授） 3　中尾敏朗（群馬大学准教授） 4　千明　勉（さいたま市教委） 【コーディネーター】下山　忍（東北福祉大学教授・前埼玉県立越谷北高長） 【記録】記載なし	【主題】歴史的思考力の育成に向けての小・中・高の連携－主体的な学習活動の実践を通して－ 【発表者】 1　自分の思いや考えを表現できる子どもの育成－世界に歩み出した日本を事例に－　高橋一也（埼玉県加須市立礼羽小） 2　因果関係の記述における歴史的思考力の育成－日清・日露戦争を事例に－　山田浩照（埼玉県加須市立大利根中） 3　日露戦争と列強　水村晃輔（埼玉県立川越高） 【コーディネーター】大谷礼子（埼玉県立川越特別支援学校長） 【記録】細田未来（埼玉県立坂戸高）・青野彩（埼玉県立上尾鷹の台高）	【主題】生徒の主体的な学習活動を通していかに歴史的思考力を育成するか 【発表者】 1　地域教材をいかして歴史的思考力を育む－日本海を行き交う人・モノ・文化を通して－　新木隆浩（富山県立高岡南高） 2　なぜ室町時代に下克上が起きたのか　井上　肇（埼玉県立三郷工業技術高） 3　埼玉県立文書館史料を活用した「歴史の論述」授業　なぞのフランス王国にせまる－文書館職員になって考えよう－　福島　厳（埼玉県立越谷高） 【記録】飯塚友基（埼玉県立南陵高）・小島千晶（埼玉県立南陵高）	【主題】(日世合同）多面的・多角的アプローチから歴史的思考力を育てる歴史学習 【発表者】 1 「秩父事件」を授業でどう扱うか－民衆運動と現代を考える－　大澤謙司（埼玉県立小川高） 2　戦争は軍部の暴走で引き起こされたのか－満州事変の背景を考える－　大熊俊之（埼玉県立不動岡高） 3　歴史的解釈に対する教員のあるべき立ち位置－ワシントン会議を題材にした知識構成型ジグソー法の授業実践を通して－　下川　隆（埼玉県立浦和第一女子高） 【記録】多田万里子（埼玉県立熊谷西高）・小栗正人（埼玉県立川越西高）

司会、記録者 分科会4	分科会5	記念講演者	史跡見学地	参加人数	海外研修報告
【主題】社会科科目相互の関連を活かした世界史学習の進め方 【発表者】 1 捕鯨をめぐるアメリカの歴史と文化－社会科教育の視点から－ 真柴晶彦（東京都立小山台高） 2 現代社会における国際連合学習と世界史学習の連携について 松本直樹（東京都立翔陽高） 3 論述力を高める世界史の指導 太田竜一（茨城県立土浦第一高） 【司会】 郊月 誠（東京都立神代高）・近藤泉子（東京都立忍岡高） 【記録】 千葉由美子（東京都立つばさ総合高）・齋藤真美（東京都立南国高）	【主題】情報・資料を活用した授業展開の工夫 【発表者】 1 ICT機器を活用した授業実践 鈴木高志（東京都立小平高） 2 諷刺画「カリカチュア」から覗いた世界－19世紀のヨーロッパを中心に－ 山川志保（東京学芸大学附属高） 3 ユネスコ世界遺産を古代マヤ文明－生徒の興味を引き出すアプローチ－ 多々良穣（宮城県東北学院榴ヶ岡高） 【司会】 粕谷栄一郎（東京都立世田谷総合高）・角田展子（東京都立青山高） 【記録】 大畠寛子（東京都立白鴎高）・白田雪絵（東京都立大崎高）	【講演】 世界史教育のありかたをめぐる諸論点と今後の展望 【講師】 お茶の水女子大学教授 岸本美緒	Aコース「多摩新選組のふるさとをたどる」(8.3) （参加人数の関係で中止） 【担当】 島津聡（東京都立桜町高）・河合敦（東京都立白鴎高） Bコース「江戸・東京 震災・戦災からの復興の足跡をたずねて」(8.3) 江戸東京博物館（講演）－東京都慰霊堂・震災復興記念館－旧安田庭園－回向院－霊厳寺・平和観音－富岡八幡宮－東京大空襲・戦災資料センター－東京都立第五福竜丸展示館 【担当】 豊田基裕（東京都立北豊島工高）・大西孝明（東京都立稔ヶ丘高） Cコース「8時間世界一周」(8.3) 三屋駅－東京外国語大学－東洋文庫－古代オリエント博物館－池袋駅 【担当】 海上尚美（東京都立浅草高）・白田雪絵（東京都立大崎高）・風間睦子（東京都立国分寺高）	300名	－
【主題】近代世界システム論をどう授業に取り組むか 【発表者】 1近代世界システムの成立－いわゆる「大航海時代」をどうとらえるか－ 鈴木健司（神奈川県立七里ヶ浜高） 2 近代システムの展開 福本 淳（神奈川県栄光学園中・高） 3 近代世界システム論とアジア－「近世」に焦点をあてて－ 大西信行（東京都中央大学杉並高） 4 「近世」の世界システムをどう考えるか 中村武司（弘前大学人文学部准教授） 【司会】 智野聖彦（神奈川県横浜市立みなと総合高）・石川 優（神奈川県立荏田高） 【記録】 佐藤靖彦（神奈川県立保土ヶ谷高）・山田与史明（神奈川県日本大学中・高）	【主題】「中央ユーラシア史をどう教えるか」 【発表者】 1古代ユーラシアの遊牧帝国と人・モノ 神田基成（神奈川県鎌倉学園中・高） 2 萩教はどのように伝わったか－生徒に中世のネットワークを知ってもらうために－ 柴泰 登（神奈川県桐蔭学園高） 3 教科書における中央ユーラシアの扱い 真木康彦（東京都城北中・高） 【共同研究者】 杉山清彦（東京大学） 【司会】 杉山 登（神奈川県逗子開成中・高）・越藤邦夫（神奈川県立藤沢総合高） 【記録】 白鳥 裕（神奈川県立横須賀高）・中山拓憲（神奈川県立神奈川工高）	【講演】 高大連携でつくる新しい歴史教育 【講師】 大阪大学大学院文学部研究科教授 桃木至朗	Aコース「開港横浜と外国人－光と影（開港と関東大震災）－」(8.2) 桜木町駅－新港埠頭・赤レンガ倉庫・横浜税関（車窓）－開港資料館（日米和親条約締結の地・道上所跡・外国郵便発祥の地・「象の鼻」）－山下公園－元町・山手（石川代官屋敷・ジェラール水屋敷・エリスマン邸・外国人墓地）－中華義荘「南京墓地」－神奈川埋蔵文化センター－根岸・本牧・関内（車窓）－横浜駅 【担当】 山田彰彦（神奈川県立茅ヶ崎高等学校長）・阿部功嗣（神奈川県川崎市立川崎総合科学高） Bコース「バスで巡る箱根周辺地域の史跡」(8.2) 小田原駅－石垣山－富士屋ホテル－箱根神社－箱根関所資料館・箱根関所跡－小田原駅 【担当】 真壁広道（神奈川県小田原城北工業高等学校長）・鍵和田武彦（神奈川県立相模向陽館高）	273名	6日間(8.20～8.25) 「クアラルンプール・マラッカ・シンガポールの旅－異文化を知り、異文化に触れる－」 クアラルンプール－カンポン・パチタン村－パーム林・ゴム林・ココナッツ林－Tanah Merah Site "C" School－カンポン・パチタン(ホームステイ体験)－マラッカ市内（フランシスコ＝ザビエル教会・マラッカ運河・オランダ広場・キリスト教会・セントポールの丘とセントポール教会跡－サンチャゴ砦－ジョンカー・ストリート－青雲亭）－シンガポール市内（アラブストリート・リトルインディアナ・チャイナタウン・ライオン公園アジア文明博物館・国立博物館）－チャンギ国際空港－クアラルンプール空港 【記録】 原田亮太（東京都立荒川商業高）
【主題】学校と博物館 - 多様な連携 - 【発表者】 1 学校設定科目「考古学入門」における博物館と学校の連携 畠井 浩（大阪府立今宮高） 2 歴博資料からの「発見」を授業へ－南蛮貿易と海域アジアの授業を例に－ 宮崎亮太（大阪府関西大学中・高） 3 高等学校と大阪府立弥生文化博物館との連携促進 山本清（大阪府立弥生文化博物館） 【助言者】吉村健（大阪府立茨木高） 【司会】 白江人智（大阪府立富田林高）・内田正俊（大阪府立たまがわ高等支援） 【記録】 石坂美枝（大阪府立センター附属高）・奥田麻希（大阪府立豊中高）	【主題】歴史への多様なアプローチ 【発表者】 1 ジェンダーの視点から読み解く「民衆を導く自由の女神」 斉藤優子（大阪府立花園高） 2 16世紀東アジア海域世界の授業 浅野典夫（大阪府立狭山高） 3 映画「もののけ姫」を通して学ぶ多元的な日本のすがた 佐藤雄子（京都府同志社国際中・高） 【司会】 笹川裕史（大阪教育大学附属高天王寺校舎）・小代肇子（大阪府立かわち野高） 【記録】 田中愛子（大阪市立咲くやこの花高）・広川智千（大阪府立花園高）	【講演】 1930年代のアジア国際秩序 - 大阪から考える世界史 - 【講師】 大阪大学大学院文学研究科教授 秋田茂	北コース「古代・近世・大大阪の時代をめぐる」(8.1) 大阪歴史博物館－難波宮跡公園－適塾－旧桜宮公会堂－今城塚古代歴史館・史跡今城塚古墳－新大阪駅 南コース「古代から見える大阪」(8.1) 大阪歴史博物館－通天閣・あべのハルカス・四天王寺（車窓）－境市役所展望台（大仙陵古墳・百舌鳥古墳群）－大阪府立弥生文化博物館・池上曽根遺跡－新大阪駅 【担当】 村川義典（大阪府立池田高）・仲谷和泰（大阪府立登美丘高）・小川未来（大阪府立島本高）・関書（大阪府立佐野支援学校高等部）	325名	－
【主題】近現代世界の特質と社会の変容について考察する 【発表者】 1 近現代の諸思想をどう教えるか 土屋斎嘉（東京都立武蔵丘高） 2「日露戦争の原因」についての授業 黒木俊輔（千葉県立船橋古和釜高） 3世界の中の横浜中華街 福本淳（神奈川県栄光学高） 【司会・記録】 野村昌幸（東京都立小山台高）・大木健（東京都立科学技術高）	【主題】「今日の世界が直面する課題」について歴史的観点から探求する 【発表者】 1 ミュージアムを授業に－－であう・たのしむ・つながる－ 海上尚美（東京都立浅草高） 2 定時制高校における「学び直し」と「生きる力」 大倉由尚（東京都立浅草高）・白田雪絵（東京都立大崎高）・武井祐輔（東京都立桐ヶ丘高）・佐藤慎也（東京都立小金井工高）・原田亮太（東京都立永山高） 3 日米の高校生の描画を活用した授業づくり 吉岡大輔（東京都立竹早高） 【司会・記録】 郊月誠（東京都立神代高）・三藤正義（東京都立福生高）	【講演】 歴史学研究と歴史教育をつなぐ－江戸時代を中心に－ 【講師】 学習院大学教授 高埜利彦	Aコース「徳川将軍家を巡る」 上野・東京文化会館前－谷中墓地（徳川慶喜墓）－増上寺（旧徳川家霊廟）－浅草寺－竇永寺（旧徳川家霊廟・葵の間）－上野駅 【担当】 丸山優介（東京都立三鷹中等） 【記録】 大西孝明（三重県立伊賀白鳳高）・武井祐輔（東京都立桐ヶ丘高） Bコース「近現代政治史の舞台を巡る」 東京駅八重洲口－九段会館－靖国神社－防衛省（正門・儀仗広場・市ヶ谷記念館・厚生機見学・屋外ヘリ展示場・メモリアルゾーン）－迎賓館－聖徳記念絵画館－法務省旧本館・資料展示室－明治生命館－旧東京府庁－東京駅丸の内口駅舎 【担当】 島津聡（東京都立桜町高）・高野祥一（都東京都立白鷗高） 【記録】 吉川美紀（東京都立園芸高）	292名	－
【主題】歴史的思考力を育む授業および考査・評価のあり方を考える 【発表者】 1 アイヒマンを巡る問題－「凡庸な悪を問う」－ 近藤隆行（埼玉県立越谷北高） 2 東大の入試問題を利用したジグソー法 青木美智留（埼玉県立松山高） 3 知識偏重からの脱却 藤本和哉（筑波大学附属高） 【記録】金間聖幸（埼玉県立浦和東高）・稲葉和信（埼玉県立戸田翔陽高）	【主題】博学連携で歴史的思考力を育成できるのか 【発表者】 1 学校資料を活用した博学連携とアクティブラーニング 會田康範（東京都学習院高等科） 2 埼玉県立文書館所蔵の史料の活用実践と課題 磯部友喜（埼玉県立蕨高） 3 もう一つの博学連携 埋蔵文化財行政と学校教育－体験学習の課題と新たな方向性－ 山田精一（群馬県立桐生高） 【記録】 三宅邦隆（埼玉県立浦和高）・高田叡志（埼玉県本庄東高） 【コメンテーター】山本哲也（新潟県立歴史博物館）・新井浩文（埼玉県立文書館）	【講演】 考古学からみた邪馬台国 【講師】 国立民族博物館名誉教授 白石太一郎	北部コース「授業のネタになる埴玉の文化財巡り」(7.30) 吹上駅－埼玉古墳群（さきたま史跡の博物館）－妻沼聖天－旧日本煉瓦製造施設（ホフマン窯）－渋沢記念館－尾高惇忠生家－渋沢栄一生家－熊谷駅 【担当】韮塚雄一（埼玉県立鴻巣高等学校長）・多田真理子・藤井伸泰・高橋朝彦（埼玉県立熊谷西高）・逸見峻介（埼玉県立蕨高） 西部コース「城下町川越の史跡および鉄道博物館見学」(7.30) さいたま新都心駅－川越市立博物館－川越城跡(本丸御殿・川越城中ノ門堀跡)－川越市街(川越市蔵造り資料館・蔵の街)－鉄道博物館－大宮駅 【担当】 青野博由（埼玉県立川越女子高）・永松靖典（埼玉県立所沢北高）・野口孝（埼玉県立川越女史高）・新井真里奈（埼玉県立日高高）・川田清隆（埼玉県さいたま市立浦和南高等学校教頭）	292名	－

大会名	期日	会場 （開催地及び会場）	大会委員長	大会主題	シンポジウムテーマ （コーディネーター及びパネリスト）	分科会主題及び発表者の氏名（所属）、発表主題、指導助言者、 分科会1	分科会2	分科会3
58回 東京	平成29年 （2017） 7.26～28	中野区 なかのZEROホール 西館	金澤利明（東京都立杉並高等学校長）	歴史教育の今後の在り方を考える－今からそしてここから新しい歴史学習が始まる－	分科会１ 【主題】新学習指導要領と歴史総合に期待するもの－これからの歴史教育を考える（思考・判断・表現力の育成）－ 【発表者】 1　小倉勝登（東京学芸大学附属小金井小） 2　関　裕幸（東京都小石川中等） 3　青木一真（東京都立国際高） 4　中村尚史（東京大学社会科学研究所教授） 【コーディネーター】太田尾智之（東京都立大泉高） 【記録】 加藤　健（東京都立墨田川高）	－	【主題】新たな手法で行う歴史授業 【発表者】 1　ICTタブレットを活用した教育旅行事後学習実践 丸山優介（東京都立三鷹中等） 2　プレゼンテーションと相互評価による日本史学習 島津　聡（東京都立八王子東高） 3　日常的なAL型授業実践の成果と課題－井伊直弼の人物評価・満州事変等－　佐藤慎也（東京都立小金井工業高） 【司会】 吉田洋子（東京都立豊島高）・大舘一基（東京都立大森高） 【記録】 吉川美紀（東京都立園芸高）	【主題】我が国の歴史の展開を総合的に広く深く探究する 【発表者】 1　歴史的思考力を育む授業を目指す－巡検・考査・アクティブラーニング－　小村田達也（宮城県泉館山高） 2　地域教材（東京都大田区）を生かす実践－新田開発と六郷用水－　豊田基裕（東京都立田園調布高） 3　浮世絵から多角的に考える江戸時代の文化と都市としての江戸の特異性　中村　修（東京都立石神井高） 【司会】 高野祥一（東京都立白鵬高）・武藤正人（東京都立日野高） 【記録】 赤迫さやか（都立足立工高）
59回 兵庫	平成30年 （2018） 7.25～28	神戸市 神戸ラッセホール	藤木原洋（兵庫県立明石高等学校長）	新科目"歴史総合"にどう向き合うか	分科会１ 【主題】新科目"歴史総合"にどう向き合うか 【総括】 石川照子（兵庫県立西宮香風高等学校長） 【パネリスト】 矢景裕子（兵庫県立芦屋高） 奥村　暁（神戸大附属中等） 井上昌善（愛媛大学講師） 桃木至朗（大阪大学教授） 【コーディネーター】 梅津正美（鳴門教育大学教授） 【記録】 前田　健（兵庫県立神戸北高）・宮崎　暁（兵庫県立神戸北高）・森田育史（神戸大学附属中等）・木下宏史（神戸大学附属中等）	－	【主題】歴史総合に向けた実践 【総括】 渋谷義人（兵庫県立出石高等学校長）・安田博貴（兵庫県立神戸高塚高） 【提案者】 1　ヒストリー・リテラシーを高める発問　安達一紀（兵庫県立姫路南高） 2　『歴史総合』と『深い学び』－問いではじまり、資料を読み解く歴史教育－　川島啓一（京都府同志社中・高） 3　「歴史総合」の研究実践の成果と課題　水嶋　正稔（兵庫県立出石高等学校教頭） 【コメンテーター】 松田吉郎（兵庫教育大学名誉教授） 【司会】 木下宏史（神戸大附属中等） 【記録】 土居亜貴子（兵庫県立御影高）・南野里奈（兵庫県立播磨南高）・森田育志（神戸大附属中等）	【主題】日本史探究に向けた実践 【総括】 片岡正光（兵庫県立淡川高等学校長）・小川卓也（兵庫県立阪神昆陽高） 【提案者】 1　歴史を学び、歴史から学ぶ探究型授業の実践－「諸資料を活用」し、「変化・転換・画期」をとらえる学びに向けて－　金谷　鈴（兵庫県立御影高） 2　「鈴木商店」で学ぶ大戦景気－世界と日本をつなぐ地域教材活用の試み－　齋藤尚文（兵庫県立芦屋高） 3　時代の切れ目を考える学習－院政期－　藤井伸泰（埼玉県立熊谷西高） 【コメンテーター】 河島　真（神戸大学准教授） 【司会】 得能弘一（兵庫県立御影高） 【記録】 岡田倫尚（兵庫県立西宮北高）・吉田英明（兵庫県立西宮香風高）・早山　徹（兵庫県立明石城西高）
60回 東京	令和元年 （2019） 7.24～27	中野区 中野サンプラザ	金澤利明（東京都立杉並高等学校長）	新しい歴史教育の創造を目指して－転換期の歴史教育の在り方－	分科会１ 【主題】新しい歴史教育への展望 【パネリスト】 中村尚史（東京大学社会科学研究所教授） 関眞規子（東京都文京区立第六中） 中家健（東京都立小石川中等） 角田晨子（東京都立青山高） 【コーディネーター】太田尾智之（東京都立大泉高） 【記録】佐藤慎也（東京都立大泉高附属中）・藤井真州（東京都立荒川商高）	－	【主題】新科目歴史総合では何を教えるか 【提案者】 1　身近なものから歴史を考える－「横浜商業学校顕彰碑」の教材化－　智野豊彦（神奈川県横浜市立横浜商） 2　第一次世界大戦－その性格と惨禍－　大木健（東京都立科学技術高） 3　定時制課程における「歴史総合」を見据えた試行錯誤　大舘一基（東京都立大山高） 【司会】加藤健（東京都立墨田川高）・島津聡（東京都立八王子東高） 【記録】赤池達朗（東京都立東高）	【主題】日本史探究が目指すこと 【提案者】 1　ふたつの立憲制の比較と日本法制史の変遷について－入試の論述問題を素材に思考力を育む試み－上田隆之（東京都立国立高） 2　これまでの実践を「探究」につなげるには　武藤正人（東京都立日野高） 3　限られた授業時数の中で「問いを立てさせる」工夫　北村　拓（東京都立日野台高） 【司会】中村修（東京都立石神井高）・細川貴之（東京都立田柄高） 【記録】古川泰代（東京都立町田総合高）

司会、記録者		記念講演者	史跡見学地	参加人数	海外研修報告
分科会4	分科会5				
【主題】(前近代)地理的条件や日本史と関連付けて探究する 【発表者】 1 ヨーロッパ封建社会の崩壊で、なぜ国王だけが生き残ることができたのか。－協調学習"知識構成型ジグソー法"を用いた実践報告－ 金間聖幸(埼玉県立浦和東高) 2 鉄砲伝来のルーツから考える世界の一体化と日本－日本史と関連付けたテーマで、手軽に実践できるAL型世界史授業の一例－ 鈴木智和(東京都立工芸高) 3 アフリカ大陸の歴史から先入観や偏見について考察する 八木橋朋弥(東京都立立川高) 【司会】 塚原直人(東京都立立川国際中等)・卯月誠(東京都立神代高) 【記録】 白田雪絵(東京都立大崎高)	【主題】現代につながる課題を多面的に考察する 【発表者】 1 両世界大戦間のドイツ 大木 健(東京都立科学技術高) 2 アメリカ独立戦争とその後の課題－現代との関連から－ 横田成洋(東京都立新宿高) 3 定時制高校におけるAL型授業の実践 吉弘雄飛(東京都立五日市高) 【司会】 海上昂美(東京都立浅草高)・土屋斎嘉(東京都立武蔵丘高) 【記録】 栗田恵(東京都立稔ヶ丘高)	【講演】 印刷文化への/からの旅 印刷文化の成り立ちをとおして、ヨーロッパ史とアジア・日本史の特異性を見出し、歴史における両者の交流と比較の視点をさぐる 【講師】 印刷博物館館長 樺山紘一	Aコース「江戸の庭園を巡る」(7.29) 東京駅－浜離宮－イタリア大使館(伊予松山藩中屋敷)－皇居周辺－清澄庭園・霊厳寺－向島百花園－六義園(柳沢吉保下屋敷)－小石川後楽園(水戸徳川上屋敷) Bコース「東京グローバル散歩『聖地巡礼』－キリスト教の足あとー」(7.29) 品川駅－カトリック高輪教会－明治学院歴史資料館－元和キリシタン遺跡－聖路加国際大聖ルカ礼拝堂－築地明石町－聖書考古資料館・明治大学博物館－ニコライ堂・印刷博物館－上智大学－東京駅 【担当】 金澤利明(東京都立杉並高等学校長)・川瀬徹(東京都立東村山高等学校長)・高野修一(東京都立国分寺高等学校副校長)・杉山智子(東京都立田柄高等学校副校長)・大館一基(東京都立大森高)・高野祥一(東京都立白鴎高)・江藤徹(東京都立清瀬高)・佐藤慎也(東京都立小金井工高)	262名	―
【主題】世界史探究に向けた実践 【総括】 村上慶光(兵庫県立西脇高等学校長)・山下彰彦(兵庫県立東播磨工高) 【提案者】 1 世界史学習の内容と結果をどのように結びつけるか－大学入試論述問題を利用したグループワーク実践報告－ 岸永 亮輔 (兵庫県白陵高) 2 「暗記科目」から「思考力を育む科目」へ－「欧米における近代国民国家の発展」を教材として－ 土井裕之(兵庫県灘高) 3 「問い」で組み立てる「世界史探究」授業試案－「世界史用語精選案」をふまえて「明清および同時代の東・東南アジア史」を例に－ 矢部正明(大阪府関西大学中・高) 【コメンテーター】 藤原健剛(甲南大学特任教授) 【司会】 笠松 弘(兵庫県立須磨友が丘高) 【記録】 鳴瀬 雄(兵庫県立長田商高)・ 岩本和也(兵庫県立須磨友が丘高)・佐々木秋人(兵庫県立三木東高)	【主題】博学連携の実践 【総括】 陶山 浩(兵庫県立相生高等学校教頭)・大久孔明(兵庫県立神戸高) 【提案者】 1 「考古学者のように考える」高校日本史授業実践－県立考古博物館とのコラボ授業－ 植山正彦(兵庫県立加古川北高) 2 ミュージアム資料を活用した学びによる学習者の変容－歴史系新科目を見据えて日本史Bの実践から考える－ 宮崎亮太(大阪府関西大中・高) 3 学校と博物館の連携について－連携授業を中心に－ 立野 亮(兵庫県神戸市立上野中) 4 文化財の新しい捉え方と学校 三原慎吾(大学入試センター) 【コメンテーター】 山中 馨(神戸市立博物館) 【司会】 黒河潤二(兵庫県東洋大附属姫路高) 【記録】 岡本 潮(兵庫県立山崎高)・白澤佳奈(兵庫県尼崎市立尼崎高)・柴垣博典(兵庫県立豊岡高)・東田卓也(兵庫県立農業高)	【講演】 兵庫の城から見た歴史 【講師】 奈良大学教授 千田 嘉博	Aコース 神戸地区(7.28) 神戸モスク－神戸海洋博物館－海外移住と文化の交流センター－酒蔵－賀川豊彦記念館 【担当・記録】 山下彰彦(兵庫県立東播磨工高)・上田義人(兵庫県立御影高)・兼松泰照(兵庫県立高砂南高)・白坂材(兵庫県立神戸工高)・前田浩人(兵庫県立明石高)・藤後康典(兵庫県立北須磨高) Bコース 姫路地区(7.28) 姫路城下町の見学－姫路城－県立博物館－酒蔵－姫路城下町 【担当・記録】 藤本慎司・村松由行(兵庫県立赤穂)・磯合幹男(兵庫県立姫路西高)・大野純子(兵庫県立福崎高)・畔田豊年・宇野徹(兵庫県立龍野高)・黒河潤二(兵庫県東洋大学付属姫路高)	262名	―
【主題】世界史探究が目指すこと 【提案者】 1 生徒が感じた疑問・質問を問いにして活用する授業－世界史の授業を通じた質問づくりを考える－ 及川俊浩(宮城県聖ドミニコ学院高) 2 歴史学習と概念的理解－国際バカロレアの実践から世界史探究へ－ 青木一真(東京都立国際高) 3 受験指導と両立させる資料読解力、思考力・判断力・表現力を育成する世界史授業の工夫 塚原直人(東京都立立川国際中等) 【司会】大木匡尚(東京都立府中高)・風間睦子(東京都立目野台高) 【記録】佐久間三春(東京都立国際高)	【主題】これからの新しい歴史学習の提案 【提案者】 1 多様な考えを引き出し、共有し合う日本史Aにおけるアクティブ・ラーニング型授業 田中駿一(東京都立南多摩中等) 2 生徒の問いづくりを促す授業の開発と評価－定時制課程における世界史Aの実践を通して－ 相川浩昭(東京都立荻窪高)・池尻良平(東京大学大学院情報学環特任講師) 3 高校って何するところ？－博物館の教育支援機能を軸に考えてみる－ 海上尚美(東京都立浅草高) 【司会】江藤徹(東京都立清瀬高)・吉川美紀(東京都立園芸高) 【記録】黒田千代(東京都立豊島高)	【講演】平成から令和へ－いま天皇制を考える－ 【講師】放送大学教授 原 武史	Aコース「嘉納治五郎とオリンピックレガシー」(7.26) 復興記念館－旧東京高等師範学校－講道館・柔道資料室－代々木公園－マラソン折り返し地点－駒沢オリンピック公園・東京オリンピックギャラリー－東京駅 【担当】江藤徹(東京都立清瀬高)・中村修(東京都立石神井高) Bコース「船とバスでめぐる大江戸観光」(7.26) 日本橋－東京クルーズ－皇居周辺－すみだ北斎美術館－向島百花園－横十間川・神明橋－東京駅 【担当】細川貴之(東京都立田柄高)・島津聡(東京都立八王子東高)	296名	―

【題字　太田尾　千絵】

【表紙デザイン　東京都立日野高等学校　谷村美咲・太田空良】

日本と世界、様々なものを含めながら 60 年という区切りをイメージしてデザインしました。動乱の中でも脈々と受け継がれたものを感じていただけたら幸いです。

【裏表紙・中表紙デザイン　国際高校　中本沙理】

裏表紙

The image of this creation is ″travelling″. It expresses that we’re travelling through time with various events now and then I want you to feel the charms of the、unknown history by this picture painted illusion which is far from the reality.

（この作品のイメージは″旅″です。私達が、今までもこれからも様々な出来事と共に時間を旅していることを表現しています。また、現実とはかけ離れた幻想を描くことで、歴史の未知なる魅力を感じてほしいと思っています。）

中表紙

This creation expresses the boundless future and length of the history. After reading this book, I want you to take the current of history all in by this back cover.

（この作品は、未来の果てしなさと歴史の膨大さを表現しています。また、本書を読み終わった後、この裏表紙を見て、歴史の迫力の余韻にも浸ってほしいなと思います。）